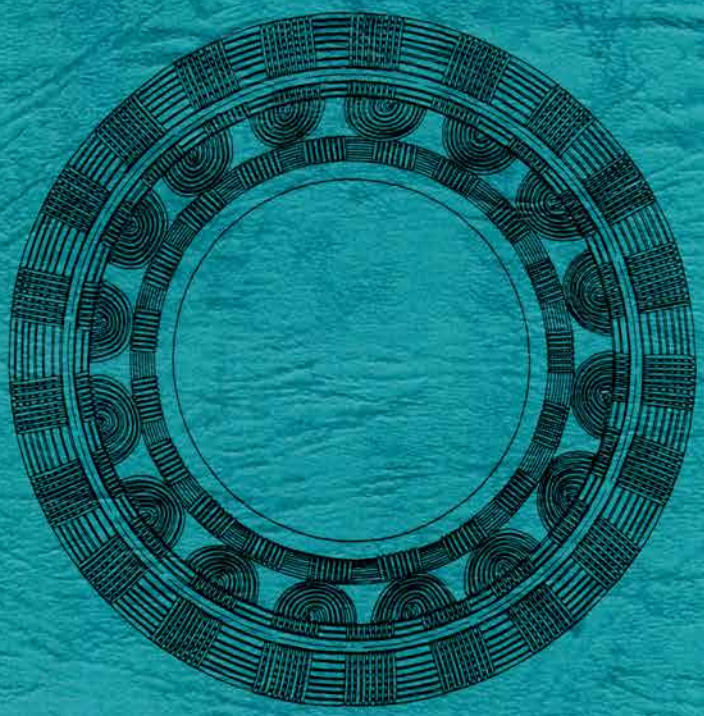
金沢市戸水B遺跡

金沢西部地区土地区画整理事業にかかる

埋蔵文化財発掘調査報告書



1994

石川県立埋蔵文化財センター

金沢市戸水Ｂ遺跡

金沢西部地区土地区画整理事業にかかる

埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９４

石川県立埋蔵文化財センター

戸水B遺跡周辺航空写真（平成３年５月撮影）

戸水B遺跡近景（平成３年５月撮影）

根がらみ木柱根（第６次調査）

土器の出土（第７次調査　３）

土器の出土（第７次調査　117）

例　　言

1、本書は、石川県金沢市戸水町及び藤江北4丁目地内に所在する戸水B遺跡の第6次から第9次までの発掘調査報告書である。

2、第6次～第9次の発掘調査は、すべて金沢西部地区土地区画整理事業に係るもので、各調査の調査期間と調査面積は以下のとおりである。

第6次調査　平成元年6月～8月　1,850㎡

第7次調査　平成元年11月～12月　800㎡

第8次調査　平成2年5月　200㎡

第9次調査　平成3年4月～5月　1,300㎡

3、本報告の発掘調査はいずれも石川県土木部都市計画課（金沢西部開発室（平成3年度より金沢西部開発事務所））の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。各調査の調査担当及びそれを補佐した職員・調査補助員は以下のとおりである。

第6次調査　調査担当：栃木英道、中屋克彦

第7次調査　調査担当：松山和彦、中屋克彦　補佐：福島正実、北野博司、安　英樹

第8次調査　調査担当：中屋克彦

第9次調査　調査担当：中屋克彦　補佐：柿田祐司

調査補助員として現地調査では大藤雅男、田畑　弘、北野裕保、室内作業では宮下栄仁、中村繁和、田畑　弘の協力を得た。そのほか室内整理作業で吉田麗子、村田保子の援助を得た。また、第9次調査には石川県立埋蔵文化財センター長期研修生の竹中義博（志雄町）も調査に参加した。

4、発掘調査と報告書の刊行にあたっては、石川県土木部都市計画課、金沢西部開発室（現金沢西部開発事務所）、石川県立金沢西高等学校、㈳石川県埋蔵文化財保存協会、㈱加賀建設の協力を得た。

5、本遺跡出土遺物の整理作業は、平成3～4年の2ケ年にわたり、主に（社）石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。（担当－岡本　晃、浅井勝郎、小野澄江、末富しげ子、前田すみ子、中村真弓、浅野豊子、横山そのみ、黒田和子、尾田裕子、松田智恵子、竹内弘美）

遺物の写真撮影は田畑、中屋が行った。石器の石質鑑定には小島和夫先生の協力を得た。

6、第6次調査で出土した木柱根については、平成3～4年の2ケ年にわたり、（財）元興寺文化財研究所に委託してPEG含浸処理法にて保存処理を実施した。

7、第6次調査で出土した木製遺物については、金沢大学教養部の鈴木三男助教授に樹種の鑑定を依頼し、玉稿を頂いた。さらに、北陸学院短期大学の小林正史助教授には出土土器の容量並びにおこげについて観察していただき、玉稿を頂いた。

8、本報告書の執筆分担は目次に記したとおりである。

9、本報告書の編集は中屋が行った。

10、本報告書の挿図等の扱いは下記のとおりである。

(1) 挿図中の方位は原則として磁北である。

(2) 挿図中の水平基準の数値は海抜高（単位m）である。

(3) 調査区全体図・遺構平面図・遺構断面図の遺構記号は次のとおりである。

ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝　　ＳＸ：その他の遺構

(4) 挿図中の縮尺については、原則としてスケールを付し、表題末にも明示した。

(5) 出土土器観察表の表記法については、本文中（第３章）に記した。また、同表中の備考欄の数字は、遺物整理途中の実測番号である。

(6) 木器観察表中で使用した略号は次のとおりである。

Ｌ：長さ　　Ｗ：幅　　φ：径　　Ｈ：厚さ　　Ｄ：深さ

(7) 写真図版中の遺物番号は、挿図中の番号と同一である。

(8) 写真図版の土器は概ね1/5・1/10で撮影されているが、統一はしていない。

11、本調査の出土遺物・記録資料等は、一括して石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

金沢市戸水B遺跡

（金沢西部地区土地区画整理事業にかかる埋蔵文化財発掘調査）

目　　次

第1章　位置と環境

第1節　地理的環境……（中屋克彦）　1

第2節　歴史的環境……（中屋）　2

第2章　調査の経緯と経過

第1節　戸水B遺跡の既往の調査……（栃木英道）　9

第2節　調査に至る経緯……（中屋）　14

第3節　調査の経過……（中屋）　15

第3章　第6次調査

第1節　調査の概要……（中屋）　19

第2節　「根がらみ」構造について……（中屋）　19

第3節　出土土器の観察……（中屋）　22

第4節　弥生土器の分類……（中屋）　23

第4章　第7・8次調査

第1節　遺構と出土遺物……（中屋）　50

第2節　石器……（松山和彦）　51

第5章　第9次調査

第1節　遺構と出土遺物……（中屋）　99

第6章　関連調査

第1節　金沢市戸水B遺跡出土木製品の樹種……111

金沢大学教養部助教授　鈴木三男

第2節　弥生時代の甕の器形と製作技術による作り分け……114

－戸水B遺跡を中心として－

北陸学院短期大学助教授　小林正史

第7章　戸水B式土器と戸水B遺跡（まとめにかえて）

第1節　はじめに……（中屋）……152

第2節　戸水B式土器群……（中屋）……152

第3節　戸水B遺跡出土土器の検討……（中屋）……153

第4節　他の遺跡との比較検討……（中屋）……156

第5節　おわりに……（中屋）……159

挿図目次

第１図　戸水Ｂ遺跡の位置……1
第２図　周辺の遺跡……3
第３図　戸水Ｂ遺跡　調査区位置図……12
第４図　根がらみの類例１……20
第５図　根がらみの類例２……21
第６図　弥生土器の分類１……25
第７図　弥生土器の分類２……26
第８図　第６次調査　平面図……27
第９図　平地式建物跡　平面図……28
第10図　平地式建物跡　柱穴内柱根出土状況……29
第11図　第６次調査　Ｌ－６調査区　平面図……30
第12図　第６次調査　遺構平面図・断面図……31
第13図　第６次調査　遺構断面図（SD－603）……32
第14図　第６次調査　遺構断面図……33
第15図　第６次調査　出土土器（１）……34
第16図　第６次調査　出土土器（２）(SD－601・603)……35
第17図　第６次調査　出土土器（３）(SD－601・603)……36
第18図　第６次調査　出土土器（４）(SD－601・603)……37
第19図　第６次調査　出土土器（５）(SD－601・603)……38
第20図　第６次調査　出土土器（６）(SD－604)……39
第21図　第６次調査　出土土器（７）……40
第22図　平地式建物跡　柱穴出土木柱根・枕木（Pit－３）……41
第23図　平地式建物跡　柱穴出土木製品（Pit－２・Pit－５）……42
第24図　平地式建物跡　柱穴出土木柱根・枕木（Pit－６）……43
第25図　第６次調査　出土石製品……44
第26図　第７・８次調査　平面図……53
第27図　第７次調査　南調査区平面図（１）……54
第28図　第７次調査　南調査区平面図（２）……55
第29図　第７次調査　南調査区平面図（３）……56
第30図　第７次調査　南調査区平面図（４）……57
第31図　第７次調査　遺構図（１）……58
第32図　第７次調査　遺構図（２）……59
第33図　第７・８次調査　遺構図……60
第34図　第８次調査　遺構図……61
第35図　第７次調査　出土土器（１）……62

第36図　第７次調査　出土土器（２）(SK－706) ……63
第37図　第７次調査　出土土器（３）……64
第38図　第７次調査　出土土器（４）(SK－712) ……65
第39図　第７次調査　出土土器（５）(SK－714) ……66
第40図　第７次調査　出土土器（６）……67
第41図　第７次調査　出土土器（７）(SK－717) ……68
第42図　第７次調査　出土土器（８）(SD－701P－１) ……69
第43図　第７次調査　出土土器（９）(SD－701) ……70
第44図　第７次調査　出土土器（10）(SD－701) ……71
第45図　第７次調査　出土土器（11）(SD－701) ……72
第46図　第７次調査　出土土器（12）(SD－701) ……73
第47図　第７次調査　出土土器（13）(SD－701P－２) ……74
第48図　第７次調査　出土土器（14）(SD－701) ……75
第49図　第７次調査　出土土器（15）(SD－701) ……76
第50図　第７次調査　出土土器（16）(SD－704) ……77
第51図　第７次調査　出土土器（17）……78
第52図　第７次調査　出土土器（18）(SD－707) ……79
第53図　第７次調査　出土土器（19）(SD－708) ……80
第54図　第７次調査　出土土器（20）(SD－708) ……81
第55図　第７次調査　出土木製品（１）……82
第56図　第７次調査　出土木製品（２）……83
第57図　第７次調査　出土石製品……84
第58図　第８次調査　出土土器（１）・石製品……85
第59図　第８次調査　出土土器（２）……86
第60図　石製品（１）……87
第61図　石製品（２）……88
第62図　戸水Ｂ遺跡出土の竪杵 ……99
第63図　第９次調査　中央トレンチ平面図・遺構断面図 ……101
第64図　第９次調査　西トレンチ平面図・遺構断面図 ……102
第65図　第９次調査　西トレンチ　環濠・SX－901平面図・断面図 ……103
第66図　第９次調査　出土土器（１）(環濠) ……104
第67図　第９次調査　出土土器（２）(SX－901・SD－906) ……105
第68図　第９次調査　出土木製品（環濠）……106
第69図　第９次調査　出土石製品（１）……107
第70図　第９次調査　出土石製品（２）……108
第71図　戸水Ｂ遺跡出土土器……155

表 目 次

第１表　戸水Ｂ遺跡周辺の遺跡地名表 …… 4
第２表　第６次調査遺構一覧表……45
第３表　第６次調査出土土器観察表……46
第４表　第６次調査出土木製品観察表……49
第５表　第６次調査出土石器一覧表……52
第６表　第７・８次調査出土石器属性表……89
第７表　第９次調査出土石器属性表……90
第８表　第７次調査遺構一覧表……91
第９表　第８次調査遺構一覧表……98
第10表　第７・８次調査出土土器観察表 ……109
第11表　第７次調査出土土木製品観察表 ……109
第12表　第９次調査遺構一覧表 ……110
第13表　第９次調査出土土器観察表 ……112
第14表　第９次調査出土土木製品観察表 ……110
第15表　遺構新古関係表 ……154
第16表　各遺跡並行関係１ ……156
第17表　系統別出土土器数（壺＆甕） ……157
第18表　系統別出土土器数（壺＆甕）グラフ ……157
第19表　各遺跡並行関係２ ……158

図版目次

巻頭図版１　戸水Ｂ遺跡周辺航空写真(平成３年５月撮影)、戸水Ｂ遺跡近景(平成３年５月撮影)

巻頭図版２　根がらみ木柱根（第６次調査)、土器の出土（第７次調査　３)、
土器の出土（第７次調査　117)

図版１（第６次調査）　SK－601、SK－601土器（２）出土状況

図版２（第６次調査）　SK－601完掘状況、平地式建物跡（北から）

図版３（第６次調査）　平地式建物跡（南から）
平地式建物柱穴 Pit－３根がらみ木柱根出土状況

図版４（第６次調査）　平地式建物柱穴 Pit－３根がらみ木柱根、同組み合せ部拡大

図版５（第６次調査）　平地式建物柱穴 Pit－２根がらみ木柱根
平地式建物柱穴 Pit－５根がらみ木柱根

図版６（第６次調査）　平地式建物柱穴 Pit－６根がらみ木柱根、同組み合せ部拡大

図版７（第６次調査）　西14調査区完掘状況、Ｌ６調査区完掘状況

図版８（第７次調査）　SD－701土器出土状況、SD－701土器（66）出土状況

図版９（第７次調査）　西調査区発掘作業風景（南から)、南調査区完掘状況（西から）

図版10（第７次調査）　SK－704土器（３）出土状況、同拡大

図版11（第７次調査）　SD－708土器（117）出土状況、SK－712

図版12（第７次調査）　SK－714、西調査区完掘状況（北から）

図版13（第７次調査）　調査区遠景

図版14（第８次調査）　調査区完掘状況（南から)、SK－804土器出土状況

図版15（第９次調査）　第７次調査西調査区・第８次調査区・第９次調査中トレンチ位置関係、
東トレンチ

図版16（第９次調査）　中トレンチ遺構検出状況（北から)、中トレンチ完掘状況（東から）

図版17（第９次調査）　西トレンチ環濠付近（西から)、SX－901木製品出土状況

図版18（第９次調査）　西トレンチ発掘作業風景（北から)、西トレンチ完掘状況（南から）

図版19（第６次調査）　出土土器１

図版20（第７次調査）　出土土器２（土坑）

図版21（第７次調査）　出土土器３（土坑）

図版22（第７次調査）　出土土器４（SD－701）

図版23（第７次調査）　出土土器５（SD－701）

図版24（第７次調査）　出土土器６（溝）

図版25（出土土器・石器）　土器：第８・９次　石器：第６～９次

図版26（第６次調査）　根がらみ木柱根（１）

図版27（第６次調査）　根がらみ木柱根（２）

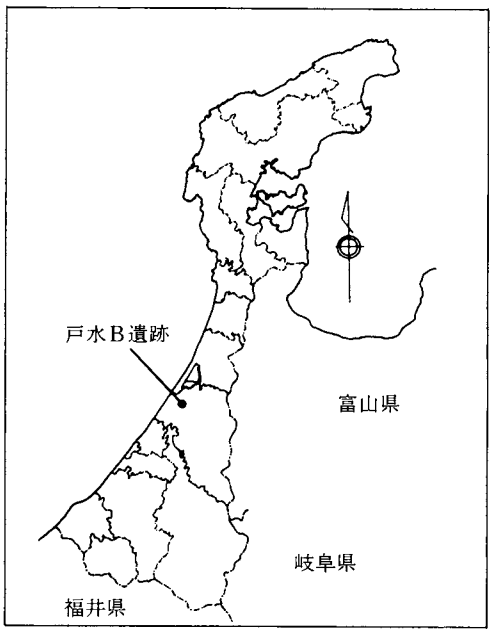
注：図版の遺物に付した番号は、挿図版の番号と同じ

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境

戸水Ｂ遺跡は、金沢市の市街地から北西方約５km の、戸水町と藤江北４丁目にまたがって位置する弥生時代中期後半の集落遺跡である。

金沢市は、石川県の県都として能登半島の付け根に位置し、西方には日本海を臨む。北は河北郡内灘町と津幡町に、南は松任市と石川郡野々市町・鶴来町・河内村・吉野谷村とそれぞれ接している。また東は隣県の富山県と接する。面積約4,200平方kmを測り、人口は約44万人（昭和60年10月現在）を数える北陸の中核都市である。



第１図　　戸水Ｂ遺跡の位置

日本海を臨む海岸線は、遠浅の砂浜が続き、全国的にも知られる内灘砂丘が形成されている。その後背地にあたる平野部は、市内を流れる浅野川と犀川によって形成された、複合扇状地である。過去に幾度も氾濫し、洪水を起こしたこの二つの河川も、今では改修が進み、古都金沢の顔として静かなせせらぎを見せている。

海岸線から10km前後までは、標高が10mに満たない沖積平野が広がっている。とりわけ市街地より北西方は、浅野川・金腐川が河口近くで天井川となっていることも手伝って、低湿な地域になっている。

こうした低湿地の一角に、この戸水Ｂ遺跡は立地する。現在この周辺は、見渡す限り平坦な土地となっており、開発著しい金沢市にあっていまだ田園風景をとどめているところである。しかしながら最近の遺跡発掘調査や、土地の老人などの話から、現在見られるこの平坦な土地も、明治の耕地整理以前には小河川が複雑に入り組んだ、変化に富んだ地形であったようである。現在までに発見されている遺跡の多くは、この複雑な地形の微高地上に立地している。当遺跡に隣接する石川県工業試験場が建っている辺りも、以前は麻畑を営む小丘であったという。戸水Ｂ遺跡の中枢部は石川県立金沢西高等学校の敷地で、盛り土による保存がなされていると言われているが、もしかすると中枢部はこの丘の上にあったのかも知れない。

周辺の耕地整理は全国に先駆けて実施された。それまでは田の中に高低があり、水の入らないところは畑として散在し、畦のない田も見られたようである。小字名で「たかだ・たかやま・たかみ」などが残っているのは、当時の名残であろう。耕地整理の折りには大阪からトロッコを借り受けるなどして、かなり大規模に地形の改変がなされたようである。残念ながらこのとき破壊されてしまった遺跡も、少なくないようである。破壊を免れた遺跡にあっても地面が削られ、包含層は残っていないものが多く、わずか数cmの深さとなった竪穴住居址が検出されることも少なくない。それにも関わらず、周辺は県下有数の遺跡密集地域である。水利のよい低湿な地域での水田耕作を背景に、主に弥生時代から近世まで連綿と暮らした人々の足跡がそこに残されている。

第2節　歴史的環境

金沢平野は犀川－伏見川を境として北部平野と南部平野に二分される。本遺跡は北部平野の南よりの犀川右岸に立地する。

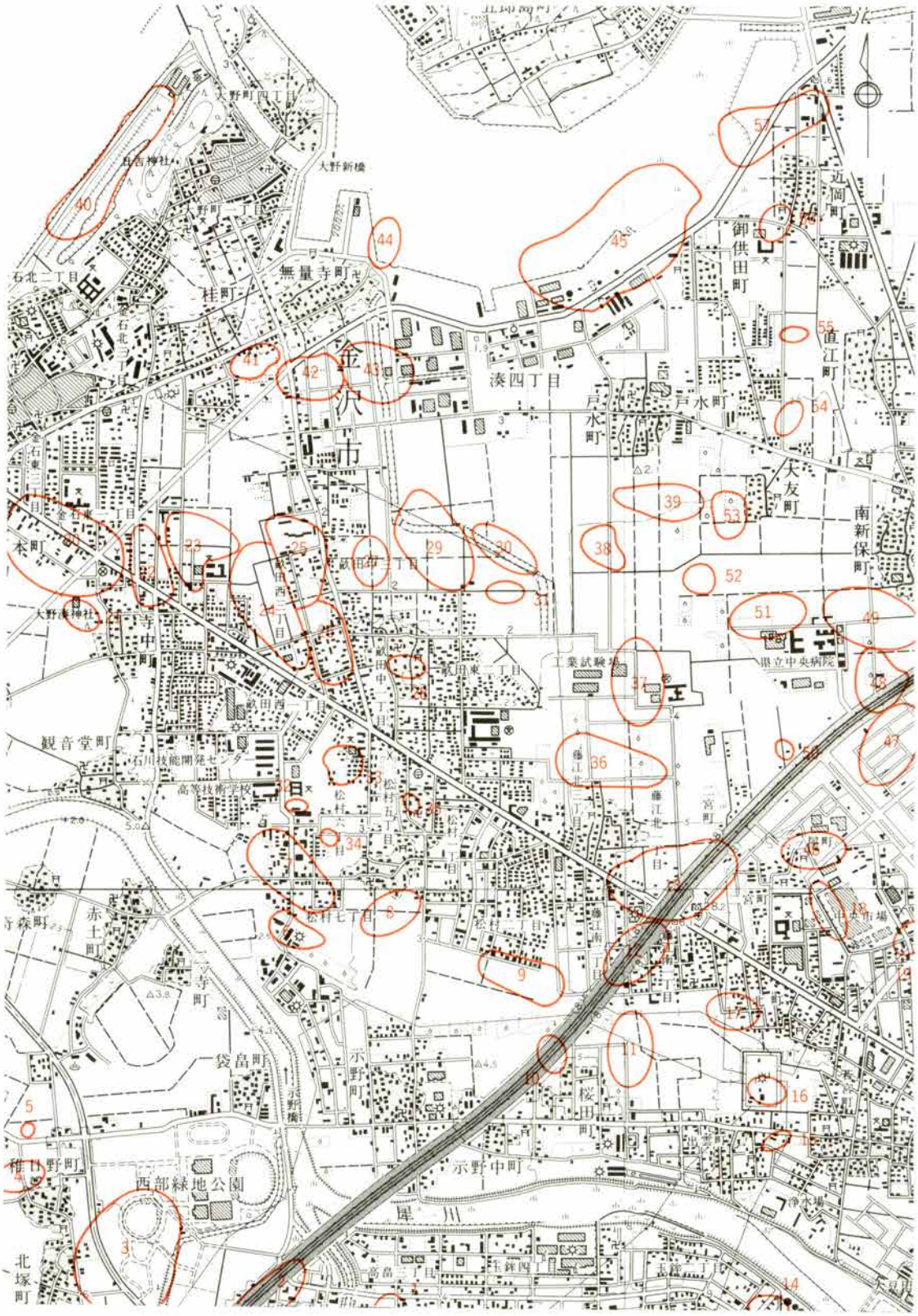
この北部平野では、現在までのところ縄文時代中期にまでさかのぼる遺跡は確認されておらず、縄文時代後期の遺跡が最も古い段階のものである。近いものでは南西方約3kmに北塚A遺跡(3)が存在する。同遺跡は縄文時代中期後葉～後期前葉にかけて営まれた集落跡である。この北塚A遺跡も犀川－伏見川ラインを越えた南にあたり、中屋遺跡、御経塚遺跡、新保本町チカモリ遺跡が鼎立する一大文化圏の一部と考える方が自然であろう。この他南方約1.5kmに北町遺跡(17)、南東方約1.5kmに西念クボ遺跡(19)、東方約0.5kmに二ツ屋町遺跡(50)、北方約2.5kmに近岡遺跡(57)、西方約1.5kmに畝田遺跡(25)、北西方約2kmに寺中B遺跡(23)、西方約1.5kmに松村A遺跡(7)と松村B遺跡(8)などが存在しているが、いずれの遺跡も縄文時代については実態が明らかになっていない散布地の遺跡である。

弥生時代に入ると遺構を伴う遺跡が増えてくる。現在の大野庄用水を挟んで南に隣接する藤江C遺跡(36)では、平成2年度に実施された第1次調査で、くるみやどんぐりなどの堅果類を貯えた、貯蔵穴が検出されている[1]。この貯蔵穴は出土した土器から、北陸における弥生時代の最も早い段階に属する遺構であると考えられる。この他、東方約0.5kmの二ツ屋町遺跡(50)でも、平成元年度の調査で柴山出村式の土器が出土している。さらに東方約1kmの南新保三枚田遺跡(48)や北方約1.5kmの戸水C遺跡(45)では、遠賀川系の土器が出土している。

北西方約2kmには加賀地域における弥生時代中期前葉（畿内Ⅲ様式併行期前半）の標識遺跡である寺中B遺跡(23)が存在する。昭和49年に実施された第2次調査では周溝を有する平地式建物跡が検出されている[2]。戸水B遺跡でも第6次調査で1棟が確認されているものである[3]。畿内第Ⅲ様式併行期後半の遺物を出土した遺跡としては、北西方約1.5kmに畝田遺跡(25)、東方約1kmに西念・南新保遺跡(47)が存在する。特に西念・南新保遺跡は昭和55年度から平成元年度までに8次にわたる発掘調査が実施され、方形周溝墓群や焼失竪穴住居などが検出されたり、重圏文鏡や大量の木器・土器が出土している。同遺跡は周辺地域における拠点的集落と位置付けられ得るもので、いわゆる戸水B式土器も出土しており、戸水B遺跡との関連の点でも注目される[4]。

ここまでがほぼ戸水B遺跡以前の遺跡である。戸水B遺跡は、弥生時代中期末のほぼ一時期におさまる遺跡である。これに対し周囲の遺跡の多くは、いくつかの時期あるいはいくつかの時代にまたがる複合遺跡である。それらの遺跡とあり方と比較した場合、戸水B遺跡の特異性が注目される。

戸水B遺跡以降の遺跡としては、南方約1.5kmに平成2年度の発掘調査で従来の法仏式期よりも古相を示す土器群が出土した、桜田・示野中遺跡(10)が存在する[5]。ここでも周溝を有する平地式建物が6棟検出されている。同遺跡では他に管玉の未製品や剝片が多数出土しており、玉造りとの関係が注目される。中期に続き西念・南新保遺跡(47)では、7次（昭和63年度）と8次（平成元年度）の調査で掘立柱建物群や焼失家屋の竪穴住居などが検出され、弥生時代後期の集落構



第2図　周辺の遺跡（S＝1/25,000）

第1表　戸水B遺跡周辺の遺跡地名表

No.	遺跡No.	名　　称	所　在　地	種別	現　　状	時　　代	出　　土　　品	備　　考
1	01082	高畠遺跡	金沢市高畠	集落跡	田・宅地	弥生・古墳	弥生土器、鉄製工具、土師器、石釧、管玉	1972、73年市教委発掘調査
2	01084	古府クルビ遺跡	金沢市古府	集落跡	宅地・道路	弥生～平安	弥生土器、土師器、須恵器、銅鏡、石製、紡錘車	1972、74、82、83年調査団市教委発掘調査
3	01088	北塚遺跡	金沢市北塚町	集落跡	田・宅地・公園	縄文・弥生平安・中世	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器	1972、73、75、79、83、84、93年市教委県教委、県埋文センター発掘調査
4	01089	稚日野遺跡	金沢市稚日野町	散布地	田	縄文・古墳	打製石斧、須恵器、勾玉	
5	01090	御館前遺跡	金沢市専光寺町	散布地	田	不詳		
6	01095	松村どのまえ遺跡	金沢市松村	散布地	田・宅地	弥生	弥生土器、石鏃	
7	01096	松村A遺跡	金沢市松村	散布地	田	縄文・古墳中世	縄文土器、打製石斧、磨製石斧、石鏃、土師器、井戸枠	
8	01097	松村B遺跡	金沢市松村	散布地	田・宅地	縄文・弥生近世	縄文土器、弥生土器、石斧、石鏃、陶磁器	
9	01098	松村高見遺跡	金沢市松村	散布地	田	弥生	弥生土器、石斧、管玉管玉未製品	
10	01099	桜田・示野中遺跡	金沢市桜田町示野中町	集落跡	田・道路・宅地	弥生・平安	弥生土器、土師器、須恵器、玉類	1969、90年調査団、市教委発掘調査
11	01100	出雲じいさまだ遺跡	金沢市出雲町	散布地	田	平安	須恵器	
12	01101	藤江A遺跡	金沢市藤江	集落跡	道路・宅地田	奈良・平安	須恵器、土師器	1969年調査団発掘調査
13	01102	藤江B遺跡	金沢市藤江	集落跡	道路・宅地田	弥生～平安	弥生土器、打製石斧、土師器、須恵器、木器	1970、79、80、90年県教委・調査団、県埋文センター市教委発掘調査
14	01197	玉鉾B遺跡	金沢市玉鉾	散布地	田・宅地	奈良・平安	須恵器、土師器	
15	01198	若宮遺跡	金沢市若宮町	散布地	田	室町	珠洲焼、灯明皿	
16	01199	薬師堂遺跡	金沢市薬師堂町	散布地	変電所敷地	古墳	土師器	
17	01200	北町遺跡	金沢市北町	散布地	田・畑	縄文	打製石斧	
18	01201	二口六丁A遺跡	金沢市二口町	集落跡	工場・市場	弥生・古墳	弥生土器、土師器	1978年市教委発掘調査
19	01202	西念クボ遺跡	金沢市西念町	散布地	田・宅地	縄文・古墳		
20	01256	金石本町遺跡	金沢市金石本町	集落跡	田・宅地	弥生～平安	土師器、須恵器、墨書土器	1979、80、96、88年県埋文センター発掘調査
21	01257	寺中御台場遺跡	金沢市寺中町	堡跡	社地・田	江戸		
22	01258	寺中遺跡	金沢市寺中町	散布地	田	弥生	弥生土器、磨製石斧、石鏃、砥石、勾玉、管玉未製品	1974、75年市教委発掘調査
23	01259	寺中B遺跡	金沢市寺中町	集落跡	田	縄文～平安	弥生土器、打製石斧、石鏃、土師器、須恵器	1979、80、88～91年県埋文センター、市教委発掘調査
24	01260	畝田・寺中遺跡	金沢市畝田西	散布地	田	古墳～中世	土師器、須恵器	1982年市教委発掘調査
25	01261	畝田遺跡	金沢市畝田	集落跡	田・宅地	縄文～平安	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、磨製石斧、木器、鍬、石錘、井筒	1985～87、89年県埋文センター、市教委発掘調査
26	01262	畝田大徳川遺跡	金沢市畝田	散布地	田・河川	奈良～室町	土師器、須恵器、中世陶器、下駄、井筒	大徳川改修工事により発見
27	01263	畝田B遺跡	金沢市畝田	散布地	田	弥生～平安	石鏃、弥生土器、土師器、須恵器	
28	01264	畝田御台場遺跡	金沢市畝田	堡跡	宅地	江戸		
29	01265	畝田C遺跡	金沢市畝田	散布地	田	弥生～平安	弥生土器、石鏃、扁平片刃石斧、土師器、須恵器	
30	01266	畝田・無量寺遺跡	金沢市畝田無量寺	集落跡	田	弥生・奈良平安	石鏃、弥生土器、土師器、須恵器	1981、82年市教委発掘調査

31	01267	畝田ナベタ遺跡	金沢市畝田	集落跡	田	奈良・平安		1984年市教委発掘調査
32	01268	観音堂遺跡	金沢市観音堂	散布地	校地・宅地	不詳		
33	01269	松村西の城遺跡	金沢市松村	散布地	田・宅地	古墳・平安	土師器、須恵器	
34	01270	松村平田遺跡	金沢市松村	散布地	田・宅地	弥生	弥生土器、石斧、石鏃	
35	01271	松村寺の前遺跡	金沢市松村	墳墓	宅地	室町	五輪塔（空輪部）	
36	01272	藤江Ｃ遺跡	金沢市藤江	集落跡	田・畑	弥生～中世	弥生土器、土師器、須恵器、石器、木器	1990～92年県埋文センター発掘調査
	01273	藤江Ｃ古墳群	金沢市藤江	古墳	田・畑	古墳	土師器	前方後方墳・方墳各１基、1990、91県埋文センター発掘調査
37	01274	戸水Ｂ遺跡	金沢市戸水町藤江	集落跡	田・校地	弥生～平安	弥生土器、砥石、炭化米、須恵器、土師器、木器、石器	1974、81、88～91年県埋文センター発掘調査
38	01275	戸水大西遺跡	金沢市戸水町	集落跡	田	奈良・平安	須恵器、土師器、木簡斎串	1992年市教委発掘調査
39	01276	戸水ホコダ遺跡	金沢市戸水町	集落跡	田	奈良・平安	須恵器、土師器	1991年市教委発掘調査
40	01277	金石北遺跡	金沢市金石北	散布地	田	不詳	土師器	
41	01278	桂遺跡	金沢市桂町	散布地	田	弥生・古墳中世	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、砥石	1981年県埋文センター発掘調査
42	01279	無量寺Ｂ遺跡	金沢市無量寺	集落跡	田・宅地	弥生・古墳	弥生土器、双頭龍文鏡銅鏃	1976、82、83、85年市教委発掘調査
43	01280	無量寺遺跡	金沢市無量寺	散布地	田・宅地	古墳・中世	土師器、珠洲焼、越前焼、漆器、石臼	1980、81年市教委発掘調査
44	01281	無量寺金沢港遺跡	金沢市無量寺	散布地	金沢港	縄文～古墳	縄文土器、弥生土器、土師器	
45	01282	戸水Ｃ遺跡	金沢市戸水町御供田町	集落跡	金沢港・荒蕪地	縄文～中世	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世陶器、木器、井戸枠	1975、76、79～82、90、91年県教委、県埋文センター発掘調査
	01283	戸水Ｃ古墳群	金沢市戸水町御供田町	古墳	金沢港・荒蕪地	古墳	土師器	方墳10基、前方後方墳２基1982、90、91年県埋文センター発掘調査
46	01284	二口六丁Ｂ遺跡	金沢市二口町	集落跡	宅地	弥生・古墳	弥生土器、土師器、木器	1978、82～84年市教委発掘調査
47	01286	西念・南新保遺跡	金沢市西念町南新保町	集落跡	田	弥生～平安	弥生土器、土師器、鏡須恵器、石斧、石包丁	1980、81、84～89年市教委発掘調査
48	01287	南新保三枚田遺跡	金沢市南新保町	集落跡	田・宅地	弥生・古墳	弥生土器、土師器、須恵器、管玉、打製石斧	1981、82年市教委発掘調査
49	01290	南新保Ｃ遺跡	金沢市南新保町	散布地	田・畑	古墳	土師器	
50	01291	二ツ屋町遺跡	金沢市二ツ屋町	散布地	田	弥生・平安	弥生土器、土師器、須恵器	1989年県埋文センター発掘調査
51	01292	南新保Ｅ遺跡	金沢市南新保町	散布地	田	不詳		
52	01293	大友Ｂ遺跡	金沢市大友町	散布地	田	不詳		
53	01294	大友Ｃ遺跡	金沢市大友町	散布地	田	不詳		
54	01295	大友Ａ遺跡	金沢市大友町	散布地	田・道路	奈良・平安	土師器、須恵器	1982年市教委発掘調査
55	01296	近岡カンタンボ遺跡	金沢市近岡町	散布地	田・宅地	弥生～奈良	弥生土器、土師器、須恵器	1983年市教委発掘調査
56	01297	近岡ナカシマ遺跡	金沢市近岡町	散布地	田・宅地・校地	弥生・奈良平安	弥生土器、土師器、須恵器、木製農具	1984年市教委発掘調査
57	01298	近岡遺跡	金沢市近岡町	集落跡	造成地・宅地	縄文～古墳平安・中世	縄文土器、磨製石斧、打製石斧、石冠、石剣弥生土器、木器、人形須恵器、木簡、陶磁器	1981、83年市教委、県埋文センター発掘調査

成が確認された。寺中B遺跡(23)では平成元年度の発掘調査でさらに1棟の平地式建物が検出され、弥生時代後期を中心とした土器も多く出土している[6]。さらに北方約0.5kmには土地区画整理事業に係る平成3年度の発掘調査で弥生時代後期の土器が多数検出された戸水ホコダ遺跡(39)が所在する。この発掘調査は平成4年度以降も継続して実施され、大きな成果が期待される。この他弥生時代の遺跡としては南方約0.7kmに藤江B遺跡(13)、北東方約1.2kmに近岡カンタンボ遺跡(55)、北西方約0.8kmに畝田C遺跡(29)と畝田・無量寺遺跡(30)、その先約1.6kmに無量寺金沢港遺跡(44)、西方約1kmに松村平田遺跡 (34)、南西方約1.4kmに松村どのまえ遺跡(6)、南方約1kmに松村高見遺跡(9)、さらにその先犀川を越えた約2.2kmには古府クルビ遺跡(2)が存在する。これらのほとんどは散布地の遺跡であり、弥生時代に関しては実態がはっきりとしていないものが多い。

古墳時代の遺跡では、まず隣の藤江C遺跡(36)が挙げられる。平成2年度から始まった発掘調査で、河道跡から大量の古墳時代前期の土器が出土したほか、かなり削平はされているものの竪穴住居跡や布掘りの掘立柱建物跡などが検出されている。さらに墳丘が削平された小型の前方後方墳と方墳がそれぞれ1基ずつ検出されている。この藤江C遺跡も土地区画整理によりその大半が発掘調査対象範囲に含まれている。今後の調査で大きな成果が得られるであろう。平成2年度と3年度には戸水C遺跡(45)の発掘調査も行われた。この調査では、全長24mの前方後方墳の他、方墳6基以上が検出され、過去の調査と合わせ10基以上の古墳がまとまった古墳群であったことが確認された。平野部での発掘調査で、墳丘が削平され周溝だけが残った古墳の検出例が増えてきており、注意しておかなければならないだろう[7]。平成4年度には金沢市教育委員会により、藤江B遺跡(13)の発掘調査が実施された。この調査では、溝からくり抜き円盤や管玉の未製品などが出土しており、玉造との関係が注目される[8]。平成3年度から始まった鞍月土地区画整理事業に係り、平成4年度には戸水B遺跡の北の戸水ホコダ遺跡(39)が調査された。戸水ホコダ遺跡は弥生時代終末から古墳時代前期を中心とする集落遺跡で、今回の調査でも多くの掘立柱建物跡や井戸などが検出されている。また、南東方約1kmには二口六丁A遺跡(18)が存在する。昭和53年の第1次調査では大量の古墳時代前期の遺物が出土している[9]。さらに西方約1.5kmの畝田遺跡(25)では、昭和60年度から3か年にわたって発掘調査が実施され、大量の土器の他、古墳時代初頭の大溝から、玉杖形木製品や弧文板、卜骨などが出土している[10]。また、古府クルビ遺跡(2)は発掘調査で出土した土器群で、古墳時代前期の「古府クルビ式」が設定されたことで知られる標識遺跡である。南西方約3kmには北塚遺跡(3)が存在する。古墳8基が確認されており、当時の墓域であったと考えられている[11]。この他、南方約1.8kmの薬師堂遺跡(16)、南東方約1.5kmの西念クボ遺跡(19)、北西方約2kmの無量寺遺跡(43)、桂遺跡(41)、南西方約3.3kmの稚日野遺跡(4)などの散布地の遺跡が存在する。

古代の遺跡では、南方約1.2kmに存在し、昭和44年に発掘調査が実施された藤江A遺跡(12)、その翌年に発掘調査が実施された藤江B遺跡(13)がある[12]。この発掘調査で4間×6間両庇付きの掘立柱建物跡が検出されたほか、「石田庄」、「石田」などの墨書土器が出土しており、石田庄の存在が示唆された。さらに藤江C遺跡(36)では、平成2年度の調査で7棟以上の掘立柱建物跡が検出されたほか、その掘立柱建物跡群内を区画するとみられる掘立柱列も検出されている[1]。藤

江C遺跡の発掘調査はさらに続くため、掘立柱建物跡の検出棟数は増えるとみられる。また、桜田・示野中遺跡(10)からも平成2年度の発掘調査で、「石田」と書かれた墨書土器が出土しており、藤江A・B遺跡との関連が注目されている[5]。

戸水C遺跡(45)は、平安時代の初めにはなんらかの官衙的な施設があったとみられている遺跡である。これまで数次にわたる調査がなされ、目を見張る成果が挙げられている。平成2年度と3年度にも発掘調査が実施され、8棟の掘立柱建物跡や、渡来銭の埋納遺構などを検出したほか、緑釉陶器、灰釉陶器、獣脚付円面硯、斎串などが出土している。平成4年度には戸水B遺跡遺跡の北の戸水大西遺跡(38)の発掘調査が実施され、多くの墨書土器や斎串・木簡などが出土した。この他にも北西方約0.6kmの畝田ナベタ遺跡(31)、西方約2.2kmの金石本町遺跡(20)などの集落遺跡の他、東方約0.5kmの二ツ屋町遺跡(50)などの古代の遺跡が数多く周辺に立地している。

周辺において中世の遺跡となると、その数は非常に少なくなる。おそらく近世以降現在の集落域とほぼ同じ様な位置に生活域があったのであろう。そうした中で周囲には、南方約1.9kmに若宮遺跡(15)、北西方約1.6kmに無量寺遺跡(43)などが存在するほか、隣の藤江C遺跡遺跡でも平成2年度の発掘調査で、鎌倉時代に属する井戸2基などが検出されている。

戸水B遺跡を含め、その周辺は近年、金沢西部地区土地区画整理事業や鞍月地区土地区画整理事業・金沢駅西地区の区画整理事業などによる発掘調査が一気に進められている。それに伴う調査成果も著しいものがあり、新しい発見も相次いでいる。この周辺地域の歴史的環境は大きく様変わりする可能性を秘めている。ここ数年は目を離せない地域である。

註

(1) 藤江C遺跡現地説明会資料　1990年

(2) 『金沢市寺中遺跡』　金沢市文化財紀要11　金沢市教育委員会　1977年

(3) 金沢西部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査で、周溝の内側に根がらみ構造を持つ6主柱多角形の建物跡を検出した。この平地式建物は弥生時代中期に出現し、古墳時代前期まで見られるもので、周溝が土坑を連続させたような不定形を呈するものである。主に北陸を中心とした日本海側に分布するようだが、ここ数年で確認例も増えており、県内でも検出例はすでに数十棟を数えるにいたっている。この寺中B遺跡の例は現在報告されているものの中では古い方に属するものである。

(4) 『金沢市西念・南新保遺跡』　金沢市文化財紀要40　金沢市教育委員会　1983年
『金沢市西念・南新保遺跡II』　金沢市文化財紀要77　金沢市教育委員会　1989年
『金沢市西念・南新保遺跡III』　金沢市文化財紀要99　金沢市教育委員会　1992年

(5) 『桜田・示野中遺跡』　金沢市文化財紀要92　金沢市教育委員会　1992年

(6) 『寺中B遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1991年

(7) 野々市町御経塚シンデン遺跡、松任市一塚遺跡などの検出例がある。

(8) 『平成4年度金沢市埋蔵文化財調査年報』　金沢市文化財紀要108　1993年

(9) 『二口六丁遺跡』　金沢市教育委員会　1983年

(10) 『畝田遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1991年

(11) 『北塚遺跡群』　石川県立埋蔵文化財センター　1985年

(12) 『藤江Ａ遺跡』　石川県教育委員会　1969年
『藤江Ｂ遺跡』　石川県教育委員会　1970年

参考文献

福田弘光編著　『大徳郷土史』　大徳公民館　1970年

第２章　調査の経緯と経過

第１節　戸水Ｂ遺跡の既往の調査（第３図）

１　遺跡の発見（1973年）と第１次調査（1974年）

戸水Ｂ遺跡の発見は、昭和48年（1973年）に遡る。同年６月、石川県立金沢西高等学校の建設予定地として、金沢市戸水町、南新保町、藤江町にまたがる土地約16,000㎡が内定し、県教育委員会庶務課の依頼をうけた同文化財保護課が建設に先立ち分布調査（同年10月30日～11月１日）を実施したところ、弥生時代を主体とする遺跡が発見されたのである。

協議の結果、校舎等構造物は遺跡の確認されなかった予定地東側に建設し、遺跡が発見された予定地西側については、グランド用地として約１ｍの盛土を施し保存することとなり、発掘調査は、予定地西縁の取り付け道路部分のうち、現農道を除く拡幅部分約423㎡（延長約140㎡、幅約３ｍ）について実施することで合意に達した。

発掘調査は、昭和49年（1974年）３月７日～４月６日にかけて、悪天候のなかを年度をまたいでおこなわれ、弥生時代の溝６条、土坑５基、平安時代の溝１条などを検出している。出土土器は、その後橋本澄夫[1]、湯尻修平[2]両氏によって研究が進められ、畿内第Ⅳ様式に平行するものとして戸水Ｂ式土器の設定をみている。同土器は、現在も遺跡の所在する加賀地域のみならず、北陸を代表する弥生時代中期末葉の標式として著名である。

２　第２次、第３次調査（1981年）と立会い調査（1983年）

第１次調査から５年後の昭和54年（1979年）には、金沢西高等学校の西側に隣接して石川県工業試験場（県商工労働部商工課主幹）の移転計画が立案された。工業試験場の依頼をうけ、昭和55年（1980年）３月１日～３月30日にかけて、埋蔵文化財センターが同予定地を分布調査し、現存する遺跡の西端を確認している。その結果、建物等構造物は遺跡の確認されなかった予定地西側に建設し、遺跡が確認された予定地東側は緑地とし、発掘調査は予定地南東縁に計画された進入路約800㎡（第１次調査区の南西側）について実施することとなった[3]。

発掘調査は、昭和56年（1981年）６月９日～７月30日にかけて実施され、溝７条、土坑18基などを検出しているが、この間、金沢西高等学校敷地内では第二体育館建設が計画され、それにともなう発掘調査（約1,200㎡、第１次調査区の南東側）も上記調査にほぼ平行しておこなわれている（同年５月１日～７月20日）[4]。溝12条、土坑20基のほか分銅形土製品などを検出した後者が第２次調査、前者が第３次調査となる。

なお、工業試験場敷地内では、その後第３次調査区の北側（第１次調査区の西側）で建物（鉄工会館）建設にともない埋蔵文化財センターが立会い調査を実施し（昭和58年（1983年）５月４日）、第３次調査区西側で検出した南北溝（27号溝）の延長部と推定される溝内より、完形品の竪杵２点を検出している。

3　第4次（1988年）、第5次（1989年）[5]

第4次、第5次調査は県商工労働部商工課が工業試験場敷地の北側で計画した第2地場産業振興センター（仮称、現地場産業振興センター新館）建設にかかる敷地造成事業を原因としている。昭和62年（1987年）9月に分布調査の依頼がなされ、同年12月に埋蔵文化財センターが分布調査を実施、結果の回答をおこなっている。同予定地は、次項以降でふれる金沢西部地区土地区画整理事業予定地に含まれていたこともあって、すでに昭和61年（1986年）度に同事業にともない分布調査を実施し、本遺跡の存在が推定されていたところであるが、範囲等詳細を確定するため、再度トレンチ法による分布調査をおこなったのである。

上記の分布調査結果にもとづき、建物建設によって影響をうける部分約1,500m²（第1次調査区の北西側）について、発掘調査を実施することで合意ができ、昭和63年（1988年）8月8日～10月14日にかけて、埋蔵文化財センターが発掘調査（第4次調査）を実施している[6]。調査では溝、土坑、掘立柱建物などを検出したほか、絵画土器も出土した[7]。

第4次調査終了後、調査区には敷地造成のために盛土（砂）が施され、翌年度には本体工事着工および完成の運びとなったが、その後工事計画が大幅に変更となり、追加発掘調査の必要性が生じてきた。具体的には、建物規模が拡大したため、第4次調査区に接する北、南、南西側にあわせて約1,000m²が新たに影響をうけることとなった。第5次発掘調査は、平成元年（1989年）5月8日～6月9日にかけて実施され、溝、土坑などを検出している。一部は、第4次調査で検出した遺構の延長である。なお、第5次調査は、次項でふれる第6次調査（6月12日～8月2日）にさきだっておこなわれた。

4　土地区画整理事業と第6次調査（1989年）

第6次～第9次調査の原因は、すべて金沢西部地区土地区画整理事業である。同事業は、県金沢駅鉄道高架事務所金沢西部開発室（県土木部都市計画課主幹、現金沢西部開発事務所）が実施するもので、昭和61年（1986年）に同室の依頼をうけ、事業予定地100.9haについて埋蔵文化財センターが分布調査を実施している。その結果本遺跡は、県立金沢西高等学校および県工業試験場敷地の南北両端の同事業予定地内にも所在することが明らかとなった。

同事業の実施によって影響をうける埋蔵文化財の取扱いについては、年度毎に具体的な協議をおこない、順次発掘調査等を実施していくことで大筋の合意ができ、平成元年（1989年）6月12日～8月2日にかけて、街路建設予定地となった第4次、第5次調査区の東側東西2箇所あわせて約1,700m²について、埋蔵文化財センターが発掘調査をおこなっている（第6次調査）。溝、土坑などのほか、西側の調査区では、柱穴内に柱根、枕木が遺存した平地式建物跡1基（約二分の一）を検出した[8]。協議の結果、同建物については街路外（区画内）約150m²を拡張し全掘している。（総調査面積は約1,850m²）[9]。第6次調査は第5次調査に引き続いておこなわれたことは前述したが、さらに同事業にともなう金沢市二ツ屋町遺跡発掘調査（約1,300m²、同年6月26日～7月28日）も平行しておこなっている[9]。

5　第７次（1989年）、第８次（1990年）

第７次調査は、第６次調査と同じ平成元年度におこなわれたが、調査にいたる経緯は異なるものであった。同年秋、金沢西部開発室が金沢西高等学校敷地の南および西側を通る都市計画道路（３・５・20金沢西校通り線）敷内で、鞍月用水切替えにともなう暗渠工事他に着手したのである。同工事、というより現道下での工事にかかる埋蔵文化財の取扱いについては、具体的な協議がなされておらず、高等学校敷地南西側（第２次、第３次調査区の南側）現道下には埋蔵文化財が遺存しており、同工事によって影響をうけることが判明したため、事態は深刻であった。協議の結果、急遽発掘調査を実施するものの、冬季間の調査でもあることから当該工事の実施に必要最小限の範囲（約800㎡）にとどめることとなった。平成元年（1989年）11月20日～12月14日にかけておこなわれた調査では、溝、土坑などを検出したほか、弓が出土している[9]・[10]。

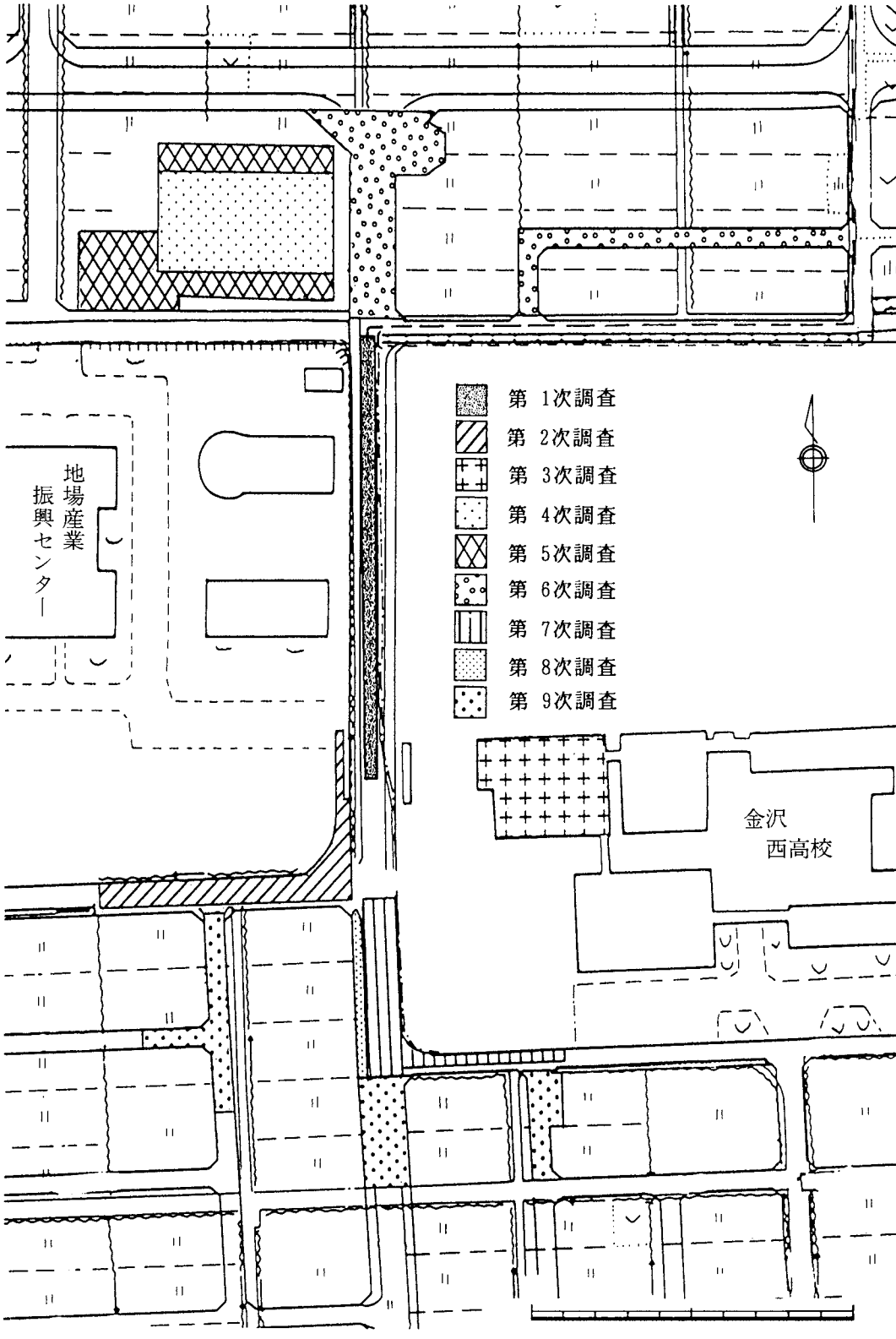
翌平成２年度は、上記工事範囲のうち施行予定を次年度へ繰り延べた箇所について、平成２年（1990年）５月２日～５月14日にかけて発掘調査を実施している[11]。第７次調査区西側のさらに西側に隣接する箇所（第３次調査区の南東側約200㎡、延長50m、幅４m）である。なお、同年は引き続き、同事業にともなう金沢市藤江Ｃ遺跡（約5,800㎡、５月15日～11月30日）の発掘調査を実施している[12]。

6　第９次調査と立会い調査（1991年）

土地区画整理事業にともなうものとしては第４次、通算では第９次に数える最新の調査は、藤江Ｃ遺跡の発掘調査（約4,400㎡、５月21日～12月12日）と一部並行して、平成３年（1991年）４月11日～５月29日にかけて、第３次、第７次、第８次調査区の南側３箇所約1,300㎡についておこなわれた。本遺跡の南端を確認したほか、西側の調査区で第３次調査区西側で検出された南北溝（27号溝）の延長と推定される東西溝を検出している。

第１次調査

第９次調査



第3図　　戸水B遺跡　調査区位置図(S＝1/2,000)

なお平成２年度には、工業試験場敷地内（南東側）に石川県ソフトウェア研修開発センター建設計画が立案され、県商工労働部商工課との間で本遺跡の取扱いをめぐって協議がおこなわれている。建物本体は埋蔵文化財の所在範囲外であったため特に支障はなかったが、建物の西側で計画された合併処理施設放流管埋設および駐車場整備工事については、埋蔵文化財の所在範囲内であったため、盛土内で施行することを条件に、平成３年度工事立会いを実施している。

7　小　結

以上、昭和48年（1973年）の遺跡発見から20年、本遺跡の発掘調査は９次にわたり、調査面積も9,000m²をこえるものとなった。各調査区が概して小規模であるため、検出された遺構も全体像を把握できるものは少なく、隣接する調査区間の相互関係をみても、若干の調査不能範囲が介在することもあって、必ずしも明確とはいえない。公刊された報告書も本書が３冊目であり、一部の整理、報告が今後に持ち越されることも、調査面積のわりには遺跡の全体像を不明確なものにしている一因であろう。今後も、主として土地区画整理事業にともなう発掘調査が想定されていることもあり、やや冗長となったがこれまでの経過をまとめてみた。

参考文献

(1) 橋本澄夫　「弥生土器－中部・北陸－」　『考古学ジャーナル』　No. 111　1975

(2) 湯尻修平　『金沢市戸水Ｂ遺跡調査報告』　石川県教育委員会　1975

(3) 小嶋芳孝・佐藤俊也　『戸水Ｂ遺跡　第３次調査の概要』　石川県立埋蔵文化財センター　1984

(4) 『石川県立埋蔵文化財センター年報』　第３号　昭和56年度　石川県立埋蔵文化財センター　1983

(5) 中屋克彦ほか　『金沢市戸水Ｂ遺跡－第４・５次調査－』　石川県立埋蔵文化財センター　1992

(6) 『石川県立埋蔵文化財センター年報』　第10号　昭和63年度　石川県立埋蔵文化財センター　1990

(7) 『拓影』　石川県立埋蔵文化財センター所報　第27号　石川県立埋蔵文化財センター　1988

(8) 『拓影』　石川県立埋蔵文化財センター所報　第31号　石川県立埋蔵文化財センター　1990

(9) 『石川県立埋蔵文化財センター年報』　第11号　平成元年度　石川県立埋蔵文化財センター　1991

(10) 『拓影』　石川県立埋蔵文化財センター所報　第32号　石川県立埋蔵文化財センター　1990

(11) 『拓影』　石川県立埋蔵文化財センター所報　第33号　石川県立埋蔵文化財センター　1990

(12) 『拓影』　石川県立埋蔵文化財センター所報　第34号　石川県立埋蔵文化財センター　1991

第2節　調査にいたる経緯

前節のとおり、本報告書所収分の第6次から第9次の発掘調査は、いずれも昭和61年度に認可された金沢西部地区土地区画整理事業に係るものである。同事業は県土木部都市計画課所管のもと、金沢西部開発室（現金沢西部開発事務所）が事業を担当している。

そもそも金沢西部地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財の取り扱いの協議の経緯は、昭和61年3月の「昭和61年度事業に係る埋蔵文化財の取り扱い協議会」にはじまる。同協議会において、埋文センターは事業認可を受けた本事業の概要説明を受けた。この協議会の結果を受け、昭和61年8月1日付金高架発第162号にて金沢西部開発室より事業区域100.9haについて分布調査の依頼があった。埋文センターでは、同年10月から11月にかけて分布調査を実施、周知の埋蔵文化財包蔵地の戸水B遺跡・藤江B遺跡・藤江C遺跡・南新保A遺跡の大まかな範囲を確認したほか、3ヶ所の再分布調査必要箇所の特定をし、昭和61年12月4日付埋文収第242号にて同分布調査の結果を回答している。その後発掘調査対象区域・調査体制・換地後の取り扱いなどについて協議を重ねたが、調査は街路等の公共用地に限定するとの金沢西部開発室の方針が示された。

（第6次調査）　発掘調査は街路等の公共用地のみとする方針に沿い、金沢西部開発室は戸水B遺跡地内の街路建設予定地約1,700m²について、平成元年5月1日付金高架発第55号にて文化庁長官あて埋蔵文化財発掘の通知と埋文センターに対する発掘調査依頼をおこなった。これを受け、埋文センターは平成元年5月15日付埋文収第98号にて文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査の通知をおこない、6月12日から8月2日にかけて現地調査を実施した。同調査では貴重な建物跡が検出されたため、前節のとおり協議（平成元年7月11日付埋文収第99号）の上、約150m²を拡張して調査を実施した。

（第7次調査）　前節のとおり、金沢西部開発室が発注した現道内での暗渠工事他により、戸水B遺跡が影響を受けることが明かとなったため、急遽発掘調査に着手することとなった（発掘調査必要面積約1,000m²）。金沢西部開発室はこれを受け、平成元年10月20日付金高架発第189号にて文化庁長官あて埋蔵文化財発掘の通知を、平成元年10月20日付金高架発第188号にて埋文センターに対する発掘調査依頼をそれぞれおこない、埋文センターは平成元年11月1日付埋文収第241号にて文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査の通知をおこなった。金沢西部開発室と埋文センターの協議の結果、冬季の発掘調査ということもあり、調査対象面積を約800m²に絞り、平成元年11月20日から12月14日にかけて現地調査を実施した。

（第8次調査）　平成元年度の冬季に実施した第7次調査で、平成2年度に繰り越した約200m²につき、金沢西部開発室から平成2年4月12日付金高架発第70号にて文化庁長官あて埋蔵文化財発掘の通知を、平成2年4月12日付金高架発第67号にて埋文センターに対する発掘調査依頼がなされた。これを受け、埋文センターは平成2年4月21日付埋文収第56号にて文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査の通知をおこない、5月2日から5月14日にかけて現地調査を実施した。

（第9次調査）　街路建設予定地約1,300m²について、金沢西部開発室から平成3年3月28日付金高架発第50号にて文化庁長官あて埋蔵文化財発掘の通知を、平成3年3月28日付金高架発第49

号にて埋文センターに対する発掘調査依頼をそれぞれおこなった。これを受け、埋文センターは平成3年4月8日付埋文収第38号にて文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査の通知をおこない、平成3年4月11日から5月29日にかけて現地調査を実施した。

（出土品等整理事業）　第8次調査終了段階で、埋文センターは金沢西部開発事務所に対し、平成2年7月25日付埋文収第79号にて、第6次から第8次調査で出土した遺物等についての出土品整理事業に関する協議をおこなった。この結果に基づき、平成3年度にその一部（土器の実測作業まで）を実施した。平成3年度事業終了時に、第9次調査分も合わせ、再度出土品整理事業に関する協議（平成4年5月1日付埋文発第7号）をおこない、平成5年度完了の計画で事業を進めることとなった。この計画に基づき、金沢西部開発事務所から平成4年4月27日付金西部発第29号にて出土品整理事業の依頼が出され、事業が進められた。

第3節　調査の経過

1　第6次調査の経過

第6次調査の現地発掘調査の期間は、平成元年6月12日から8月2日までの実働30日である。調査担当者は栃木英道・中屋克彦で、大藤雅男・田畑弘・北野裕保（埋文センター調査補助員）の協力を得ている。本調査は県商工課からの依頼を受け実施した第5次調査に引き続いて実施された。調査依頼は戸水B遺跡と二ツ屋町遺跡を合わせた形で出され、当初戸水B遺跡発掘調査終了後に二ツ屋町遺跡の調査に着手する予定であった。しかし戸水B遺跡で発見された平地式建物跡の取り扱いを二ツ屋町遺跡調査中に協議することとなり、変則的な調査期間をとることになった。以下発掘調査日誌からその経過をふりかえっておく。

6月	12～15日（月～木）	晴れ・曇り	重機による表土除去作業（西14調査区）と並行して遺構の検出作業
	19日（月）	曇り	調査区東側の遺構掘り下げ
	20～23日（火～金）	晴れ	SD－603・604掘り下げ、遺構平面実測作業
	26日（月）	曇り	SD－603・606・607掘り下げ この日から二ツ屋町遺跡の発掘調査併行
	27日（火）	晴れ	SD－603掘り下げ、遺構平面図・土層断面図実測作業
	28日（水）	雨	土層断面実測作業、遺構排水作業
	29・30日（木・金）	晴れ・曇り	平地式建物柱穴掘り下げ、遺構平面・土層断面実測作業、写真撮影、柱根・枕木取り上げ
7月	3日（月）	雨	遺構平面実測作業
	4日（火）	曇り	調査区清掃
	5日（水）	晴れ	平板測量
	～6日（木）	晴れ	L6調査区重機による表土除去作業、写真撮影作業

	7日（金）	晴れ	L 6調査区遺構掘り下げ、写真撮影作業
	10～12日（月～水）	曇り・雨	前日までの雨で調査区は冠水、排水作業、遺構平面実測作業
（13～24日	二ツ屋町遺跡発掘調査）		
	24日（月）	晴れ	平地式建物跡調査区拡張（重機）
	25～27日（火）	晴れ	拡張区遺構掘り下げ、遺構平面・土層断面実測作業、写真撮影作業
	28・31日（金・月）	晴れ	拡張区写真撮影作業、L 6調査区埋め戻し
8月	1・2日（火・水）	曇り・雨	西14調査区埋め戻し、撤収作業

現地調査参加作業員　（50音順、敬称略）

岩脇研爾、奥野健一、蚊爪康典、加藤直枝、川村春枝、木村和雄、小玉正志、坂井かず子、坂井澄江、坂田進午、清水美佐枝、高橋一雅、高崎春子、高村松子、高柳美代子、竹山くに子、鳥越勇人、西川愛子、西村みどり、西本与三作、藤沢勇一、藤高きよ子、本田和子、松田公文、水口淳、宮上正吉、宮嶋豊和、宮田ハル、村上勝次、最里健太郎

2　第7次調査の経過

第7次調査の現地発掘調査の期間は、平成元年11月20日から12月14日までの実働19日である。調査は松山和彦・中屋克彦が主に担当し、湯尻修平、中島俊一、福島正実、北野博司、安英樹が参加した。また、大藤雅男・中村繁和・北野裕保(埋文センター調査補助員)の協力を得ている。本調査は前述の経緯のとおり、天候が不順な時期の調査となった。また、工事も既に着手されており、迫り来る冬将軍と工期に追われる調査であった。にもかかわらず調査は内容の濃いものとなり、集落南端の周溝を確認するなど、大きな成果を挙げることができた。以下発掘調査日誌からその経過をふりかえっておく。

11月	20日（月）	曇り時々雨	南調査区（以下、南調）表土除去作業（重機）
	21日（火）	晴れ	調査機材搬入、南調表土除去作業（重機)、遺構検出作業、1・2区遺構掘り下げ
	22・24日（水・金）	晴れ・曇り	南調遺構検出、遺構掘り下げ、遺構平面実測作業
	25・27・28日（土・月・火）	晴れ～雨	西調査区（以下、西調）表土除去作業（重機)、南調遺構掘り下げ作業
	29～30日（水・木）	雪	南調遺構平面実測、土器取り上げ作業
12月	1日（金）	曇り	南調遺構掘り下げ、写真撮影作業
	4日（月）	晴れ	南調遺構掘り下げ、遺構実測、写真撮影作業 西調遺構検出、遺構掘り下げ作業
	5～7日（火～木）	晴れ	西調遺構掘り下げ、遺構平面実測、土層断面実測作業

11～13日（月～水）	雨～晴れ	西調遺構掘り下げ、遺構平面実測、土層断面実測、写真撮影作業
14日（木）	雨	撤収作業

現地調査参加作業員　（50音順、敬称略）

池村みよ子、稲本百合子、加藤直枝、唐木武雄、川村春枝、神田与作、北川綾、北野さや子、斉藤与志雄、佐野そと子、新保清作、永井静子、中川和子、中村政則、西田豊子、西本与三作、丹羽住子、広瀬信子、藤沢勇一、藤高きよ子、舟田美幸、堀越文子、本田和子、孫田文子、水口明、水戸清子、水村とみ、宮上正吉、安田重子

3　第8次調査の経過

第8次調査の現地発掘調査の期間は、平成2年5月2日から5月11日までの実働6日である。調査担当者は中屋克彦で、宮下栄仁・田畑弘（埋文センター調査補助員）の協力を得ている。本調査の対象となった箇所は、第7次調査で未調査のため翌年度に繰り延べた部分で、第7次調査の西調査区の西側にあたる。以下発掘調査日誌からその経過をふりかえっておく。

5月	2日（水）	曇り	機材搬入
	7日（月）	晴れのち曇	重機による表土除去作業、遺構検出作業
	8日（火）	曇りのち雨	遺構検出、杭打ち作業
	9日（水）	晴れ	遺構検出状況写真撮影、遺構掘り下げ作業
	10日（木）	晴れ	遺構掘り下げ、遺構平面実測作業
	11日（金）	曇り	遺構掘り下げ、遺構平面実測作業、完掘状況写真撮影、機材撤収

現地調査参加作業員　（50音順、敬称略）

唐木武雄、川村春枝、木村和雄、新保清作、寺西栄松、西本与三作、丹羽住子、広瀬信子、藤沢勇一、本田和子、宮上正吉

4　第9次調査の経過

第9次調査の現地発掘調査の期間は、平成3年4月16日から5月29日までの実働25日である。調査担当者は中屋克彦で、柿田祐司（埋文センター嘱託）・福田弘光・大藤雅男（埋文センター調査補助員）の協力を得ている。また、埋文センターの市町村埋蔵文化財専門職員長期研修の実地研修で、竹中義博（志雄町）・田中健一（津幡町）が参加した。本調査の調査区は3ヶ所に分かれており、それぞれを東トレンチ、中トレンチ、西トレンチと名付けた。東トレンチは第7次調査の南調査区の南側にあたる。表土を除去した結果、遺跡はここまで延びてはおらず、遺物・遺構は確認されなかったため、そのまま調査を終えている。中トレンチは第7次調査の西調査区

の南側にあたる。西トレンチは1981年に実施された第３次調査の調査区の南側にあたる。以下発掘調査日誌からその経過をふりかえっておく。

４月	16～19日（火～金）	晴れ・曇り	重機による表土除去作業、機材搬入
	22日（月）	晴れ	調査区杭打ち、遺構検出作業
	23日（火）	晴れ	東トレンチ写真撮影、中トレンチ遺構検出写真、遺構掘り下げ作業
	24日（水）	曇り	中トレンチ遺構掘り下げ、土器取り上げ作業
	25日（木）	曇り	西トレンチにて遺跡外縁部にトレンチを入れ、調査範囲を確定する。
	30日（火）	晴れ	標高移動、東トレンチ平板測量、標高記入
５月	１日（水）	雨	中トレンチ遺構実測作業
	７日（火）	晴れ	西トレンチ遺構検出作業
	８～10日（水～金）	曇り・晴れ	西トレンチ遺構掘り下げ、中トレンチ遺構平面・土層断面実測作業
	13・14日（月・火）	晴れ	西トレンチ遺構掘り下げ、中トレンチ遺構平面実測、標高記入作業
	15日（水）		完掘状況写真撮影作業
	17・20～24日（金・月～金）	晴れ	西トレンチ遺構平面実測、土層断面実測、標高記入作業
	29日（水）	曇り	調査区埋め戻し、藤江Ｃ遺跡へ機材運搬

現地調査参加作業員　（50音順、敬称略）

浅岡哲彦、加藤直枝、上村外志雄、川口栄子、川口末男、川村春枝、木村和雄、蔵勝子、小島清高、佐野そと子、仕道義松、新保清作、田内郁枝、戸水利夫、西川重治、西川緑、西本与三作、丹羽住子、橋場盛嗣、広瀬信子、藤沢勇一、藤元哲、堀越三郎、本田和子、孫田喜作、孫田文子、松田正三、南野佐市、宮上正吉、山口政男、横山洋子、渡辺栄吉

室内整理作業参加作業員（第６次～第９次）

吉田麗子、村田保子

第3章　第6次調査

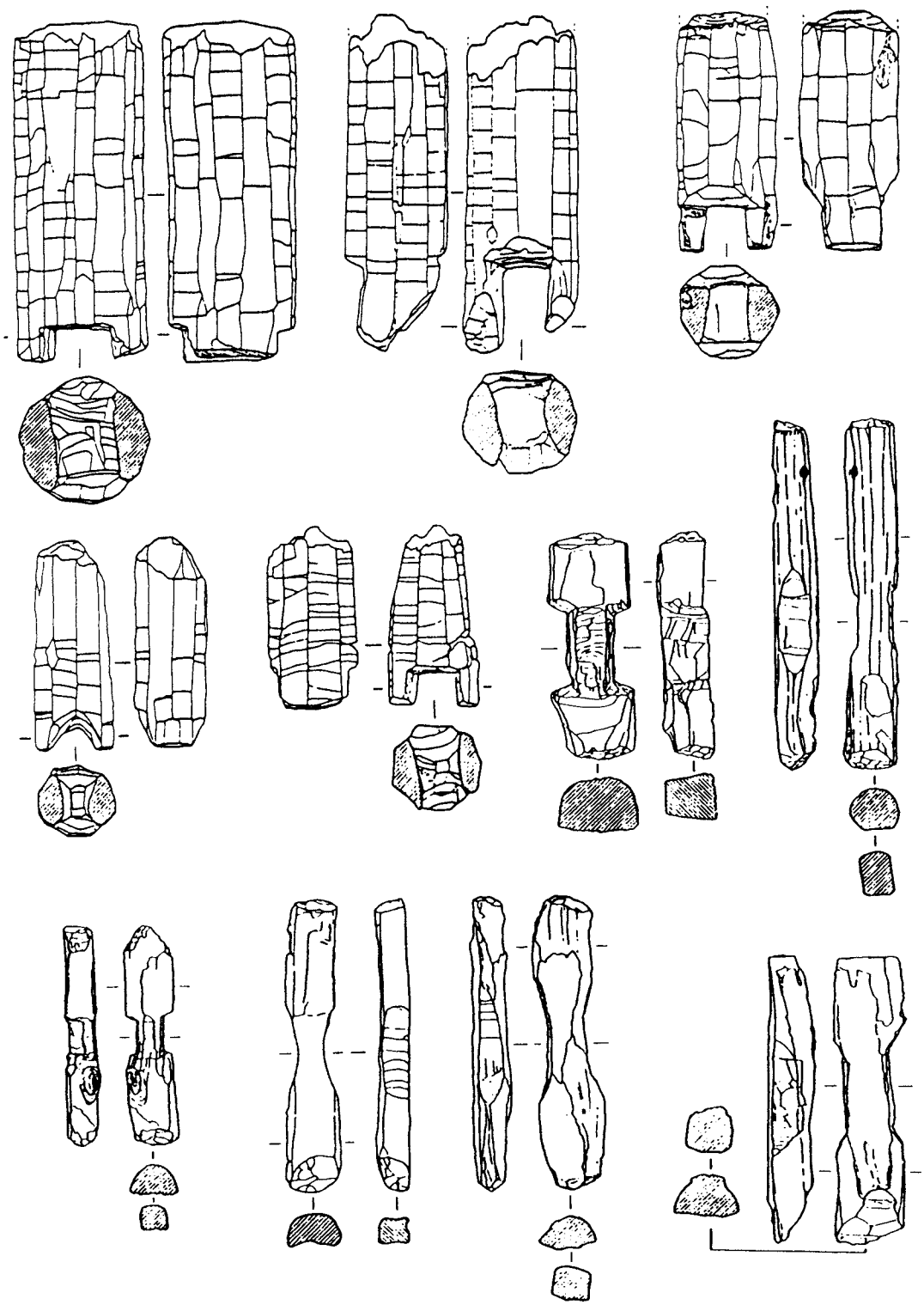
第1節　調査の概要

第6次調査の調査区は、第4・5次調査区の東側に当たる。包含層はおろか遺構面も後世の削平を受け、検出された遺構も、概して浅いものばかりである。調査区の南側は近世の攪乱で落ち込んでいる。検出された遺構は土坑5基、溝8本などである。このうちSD－601・603は、平地式建物の周溝にあたる溝である。内径約13mを測る。この溝に囲まれた内側からは、柱穴が6箇所で検出され、そのうち5箇所から後述する「根がらみ」と呼ばれる構造の柱根が出土した。6本主柱の建物跡と考えられるが、上屋構造についてはほぼ竪穴住居と同様のものと考えられる。同様の建物跡は、金沢市磯部運動公園遺跡や同市西念・南新保遺跡などで検出されており、近年検出例が増加しているものである。この建物が造られた時期は、弥生時代中期のおそらく初頭頃から古墳時代の前半までの期間で、分布の中心は日本海側、特に北陸に多いようである。その他の地域では、西は大阪や北九州、東は信濃あたりで検出例が報告されている。時期や地域により、溝の断面形・平面形・柱の数などが異なっているようで、明らかに時期差・地域差を持っていることが分かる。いくつかの報告例では、中央に炉跡とみられる土坑と、その横に2個1対の小ピットが検出されているが、本遺跡の例では中央に攪乱が及んでおり、それらの検出はできなかった。また、建て替えの痕跡が認められないことから、単一時期の建物と考えられる。この建物では、その周溝から多くの土器が出土しており、時期特定の決め手になるとみられる。今回の調査では1棟のみの検出であったが、調査区外にさらに数棟立地している可能性が高い。

第2節　「根がらみ」構造について

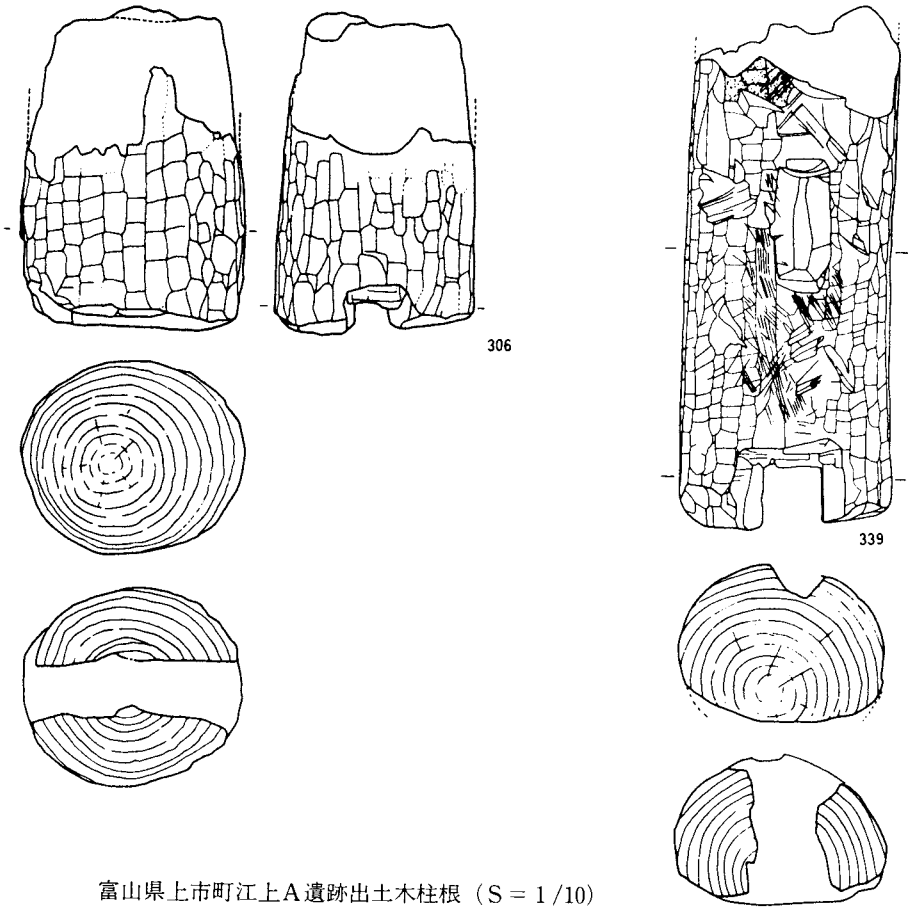
第6次調査の平地式建物跡から出土した木柱根と枕木は、非常に興味深い造作がなされていた。通常掘立柱建物は、地面に柱穴を掘り柱を立て、上屋を造る。地盤が安定していればこれだけでも柱の沈下は少なく、建物全体の不等沈下はおきにくい。ところが比較的不等沈下を生じやすい低湿な地盤の場合、柱の沈下を防ぐために柱穴の底に礎板が敷かれる。礎板の利用は比較的広範に一般化していたようで、低湿な遺跡の調査で発掘されることは少なくない。岡山県の百間川遺跡群では、礎板の中央部が柱をはめ込むように彫り込まれているものも発見されている。

今回戸水B遺跡で発見された平地式建物は、金沢平野の低湿な地盤に建てられていた。通常の掘立柱建物の建て方では、柱がすぐに沈下してしまうことは、建築の素人である我々から見ても明らかである。事実、第6次調査のすぐとなりの第4次調査の調査区では、礎板が柱穴の底に敷かれていた掘立柱建物跡が1棟検出されている。そこで当時の戸水B村の住人たちはこの建物を建てるにあたり、その基礎部分にいわば珍しい技術を採用したのである。それがいわゆる「根がらみ」と呼ばれる構造である。「根がらみ」とは主柱の下端を「コ」の字にえぐり込み、柱穴の底に寝かせた横木（枕木）をまたがせるようにはめ込んだ構造である。枕木が自然木のままのもの、枕木にも加工を施すもの、礎板と併せて使われるものなどいくつかのバリエーションがあ

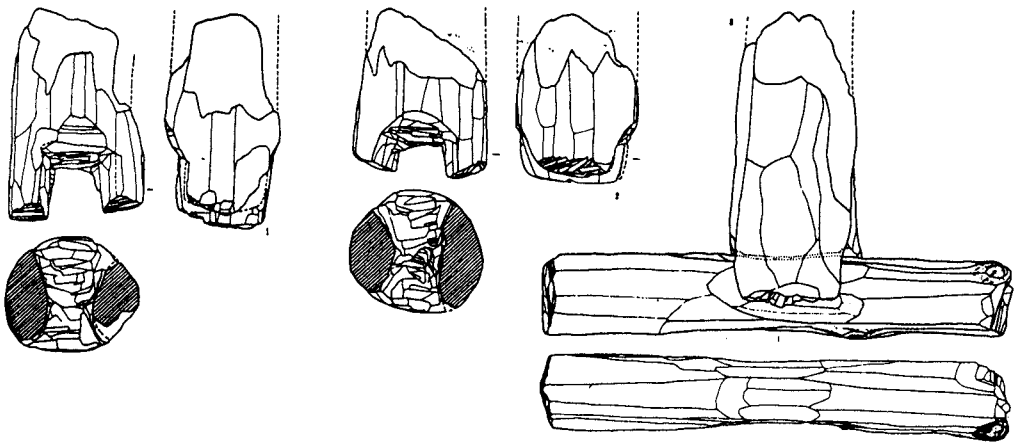


佐賀県神埼町川寄吉原遺跡出土木柱根（S＝1/10）

第4図　根がらみの類例1



富山県上市町江上A遺跡出土木柱根（S＝1/10）



大阪府東大阪市瓜生堂遺跡出土柱根（S＝1/10）

第5図　根がらみの類例2

るらしく、古代には柱の下部にほぞ穴を穿ち、その中に横木を通す構造のもの見られるようである。今回発見されたものは、柱根・枕木ともに金属製工具によって加工された痕跡があるものである。特にPit－5では枕木と朽ちた柱根の他に5などの材が出土しており、枕木の下にさらに横木をかませていた可能性もある。このような根がらみ構造が確認されているのは、富山県の江上A遺跡、大阪府の瓜生堂遺跡、若江北遺跡、佐賀県の吉野ヶ里遺跡、川寄吉原遺跡、平塚川添遺跡などで礎板に比べると圧倒的にその報告例は少ない。その中では北九州（主に佐賀）に比較的多くの類例を見ることができる。

第3節　出土土器の観察

今回この報告書では、第6次調査分56点、第7・8次調査分130点、第9次調査分17点、合計203点の出土土器実測図を掲載した。その全てについて観察を行い、土器観察表を作成した。観察は主に石川県埋蔵文化財保存協会の担当が行い、これを中屋が補足する形で実施した。観察表への記載方法と内容は以下のとおりである。

No.：この項目の番号は、挿図版のものと同一である。

出土地区：遺構出土のものは遺構名を、遺構外出土のものは地区を記入。接合した遺構出土遺物については、接合関係のある遺構全てを記入した。第6次調査の遺構は600番台、第7次調査の遺構は700番台、第8次調査の遺構は800番台、第9次調査の遺構は900番台である。

器種：後述の形式分類にしたがって記入。器種のわからないものについては（　）で部位を記すにとどめた。

法量：口径（口：）、胴部最大径（胴：）、底径（底：）、器高（器：）を計測し記入。数値に不確実な要素が強いものには（　）をつけた。

調整・文様・装飾など：土器の口頸部・胴部・底部（脚部）に分けてそれぞれ観察した。O：で外面、I：で内面を表す。すす・炭化物の付着、黒斑の有無、成形・整形の痕跡などについても観察を行ったが、スペースの都合上割愛した。基本的に調整を先に記入し、その後に文様・装飾を記入している。また→印は後の意味である。

色調：外面（O：）と内面（I：）を分けて観察した。観察者による色の統一はいま一つ図ることができなかったが、黄橙色系と、白色系に大きく分けられるようである。観察前に黄橙色系が在来、白色系が外来というイメージを漠然と抱いていたが、つくりなどからもかなりそのイメージに近い結果がでたように思われる。

胎土：土器胎土中に含まれる、石英（石）、長石（長）、黒雲母（黒）、焼土粒（焼）、海綿骨片（海）などの大きさ、量について裸眼で観察した。筆者の不勉強のため、判別できない砂礫もいくつか確認したが、それらはその他（他）の中に含めた。大きさは概ね2㎜以上の物をL、1㎜前後の物をM、0.5㎜以下の物をSとして表記した。量は5段階表示とし、5：多い～1：少ないの段階で判断した。一応以上の基準により観察を行ったが、観察者により多少の個人差もでていると思われる。なお、今回は砂礫の形状にまで観察が及ばなかった。今後周辺の地層や、岩石の分布

状況を把握し、戸水B遺跡産の土器とそうでないものの分別を試みる必要があるかも知れない。

第6次調査分から第9次調査分まで、土器観察表はすべて以上の観察基準に基づいて作成した。

第4節　弥生土器の分類

今回の発掘調査で出土した土器の大半は、凹線文系土器群の影響を受けた、いわゆる戸水B式期のものである。

1974年の第1次調査で、凹線文系の土器群がまとまって出土したことにより「戸水B式土器」が設定された。以来、加賀地域における弥生時代中期末の標識土器群として、幾つかの論考にも引用されたりしながら今日に至っている。しかしながらその内容は、当該期の資料が乏しいこともあっていまだ詳細には検討されていないのが現状である。ここでの分類は第4・5次調査の報告書での分類と基本的には同一であるが、一部については記載を改めた。

今回の調査で出土した土器では、壷形土器・甕形土器・高坏形土器・鉢形土器などが認められる。前回器台が存在する可能性を指摘したが、今回までの調査でその確実な例がみられないことから、この時期の土器組成の中には器台はまだ存在していないものとみられる。以下器種ごとに分類して報告する。今回の発掘調査で出土していない器種でも、既往の報告で分類されているものは参考として触れた。

壺形土器

壷形土器A　口縁部はラッパ状に開き、その先端が「く」の字形に内屈する壷で、口縁外面に刺突綾杉文や刺突斜格子文などが施される。大型のものが多く、前段階の小松式期から存在。

壷形土器B　大きく開いた口縁端部が緩く上方に立ち上がり、受口状口縁になる壷。

壷形土器C　いわゆる無頸壷。口縁端部外面に突帯が巡るものもある。

壷形土器D　口縁部がラッパ状に大きく開いた壷。端面が無文のもの（D_1）、A種凹線が施されるもの（D_2）、波状文が施されるもの（D_3）とに細分される。

壷形土器E　口縁部が頸部からほぼ直口する壷。口縁外面にC種の凹線が施される。

壷形土器F　壷Eより少し長めの口縁端部に指掛け状のへこみ（指かかり？）がある壷（水差形土器として一器種に分類したほうが良いかも知れない）。口縁外面にC種の凹線が施される。口縁のへこみ部分もしくは取っ手部分が出土しないとE類に分類される。

壷形土器G　口縁部がゆるく「く」の字形に開く広口壷。頸部に蓋留めの2孔1対の穴が2箇所に開けられている。

在来系譜を引くものは、A類・B類・C類・G類で、外来系のものは、D類・E類・F類となる。D_1類は折衷か？

甕形土器

甕形土器A　口縁が斜め上方に開き、口縁端面にA種凹線が施される凹線文系の甕。断面三角形の口縁に、胴部タタキ調整で、内面は削らない畿内系（A_1）、上下につまみ出した口縁端面に、2～3条の凹線を施し、内面下半を削る瀬戸内系（A_2）、畿内系と瀬戸内系の折衷品（A_3）、頸部に突帯を貼り付ける大型甕（A_4）に細分される。

甕形土器B　口縁がゆるく開き、端部にA種凹線が施された甕。

甕形土器C　口縁の端部が上方につまみ上げられた受口状口縁の甕。口縁の端面にはA種凹線が施される。つまみ上げの長（C_2）短（C_1）で二つに細分できる。

甕形土器D　近江北部型の甕。受口状口縁をもち、口縁部から胴部最大径付近にかけて波状文と直線文が交互に施された甕。

甕形土器E　胴部の内面を頸部まで削り上げている甕。調整以外は甕Aと同様のもの（E_1）と口縁がやや直口気味に開き、頸部の屈曲も弱いもの（E_2）とに細分できる。

甕形土器F　「く」の字形の口頸部をもつ甕。口縁はややゆるく開く。端面に沈線を一本巡らせているもの。

甕形土器G　口頸部が「く」の字形に屈曲しているもの（甕Aの凹線が施されていないもの）。くびれの強（G_1）弱（G_2）で二つに細分できる。

甕形土器H　「く」の字形の口頸部をもつが、口縁端部に面を作り出しているもの。端部を押さえて広げたもの（H_1）とつまみ出しているもの（H_2）とに細分できる。

甕形土器I　口縁端部に櫛歯状原体を使って連続刺突文を施した甕。口縁端面に施文するもの（I_1）と、口縁部下に施文するもの（I_2）とに細分できる。

甕形土器J　口縁が大きく外反した甕。同部の最大形が口径を超えない。口縁端部が無文のもの（J_1）と連続刺突文を施すもの（J_2）とに細分できる。

甕形土器K　「く」の字形の口頸部をもつが、口縁部内側に櫛歯状原体を使って刺突羽状文を施した甕。口縁端部外面が無文のもの（K_1）と連続刺突文を施すもの（K_2）とに細分できる。

在来系譜を引くものは、I類・J類・K類で、外来系のものは、A類・C類・D類・E類であり、F類・G類・H類は折衷品と考えられる。

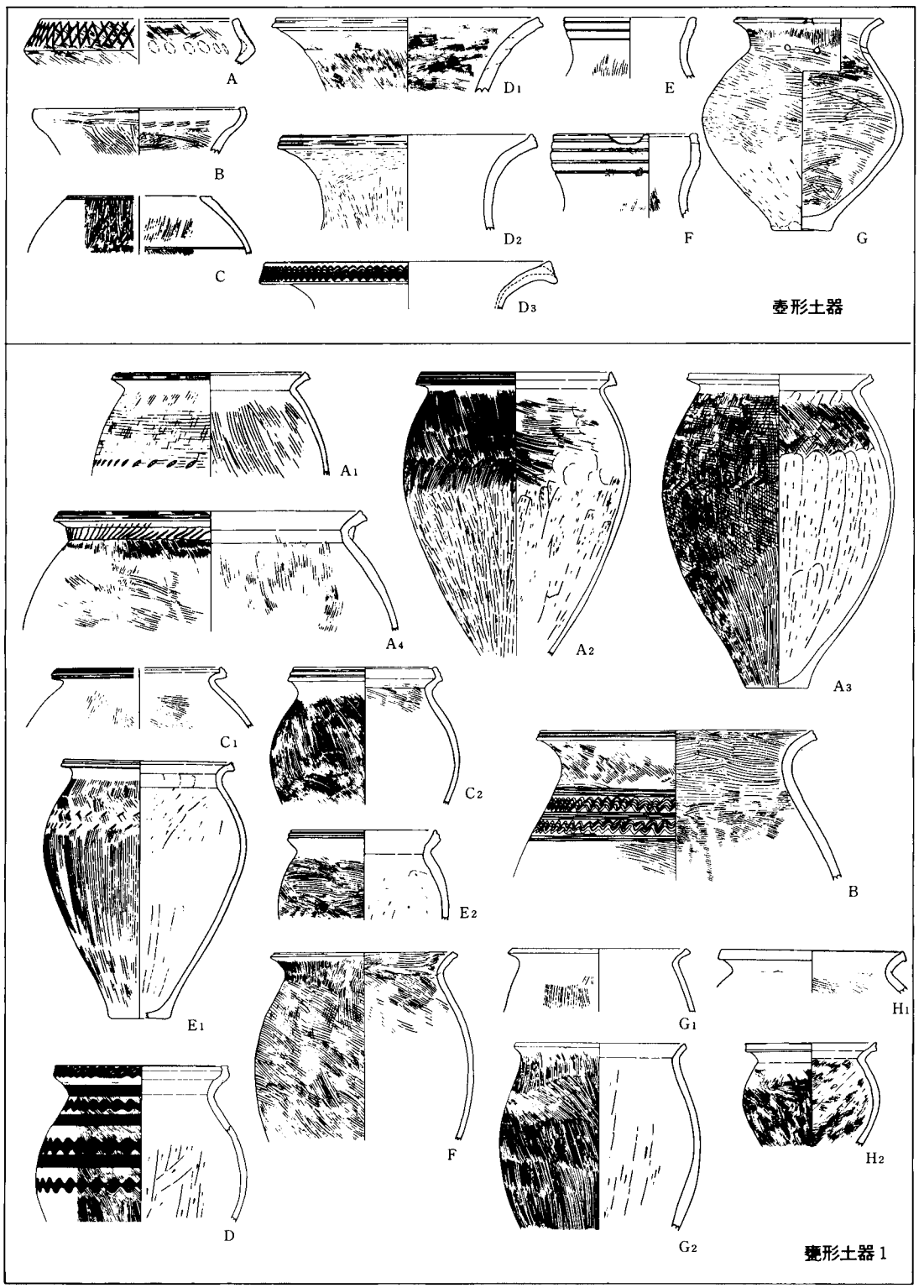
高坏形土器

高坏形土器A　坏部の口縁が直立し、外面にC種凹線文を施した高坏。脚部にも凹線文が巡る。透かし孔が開けられるものもある。

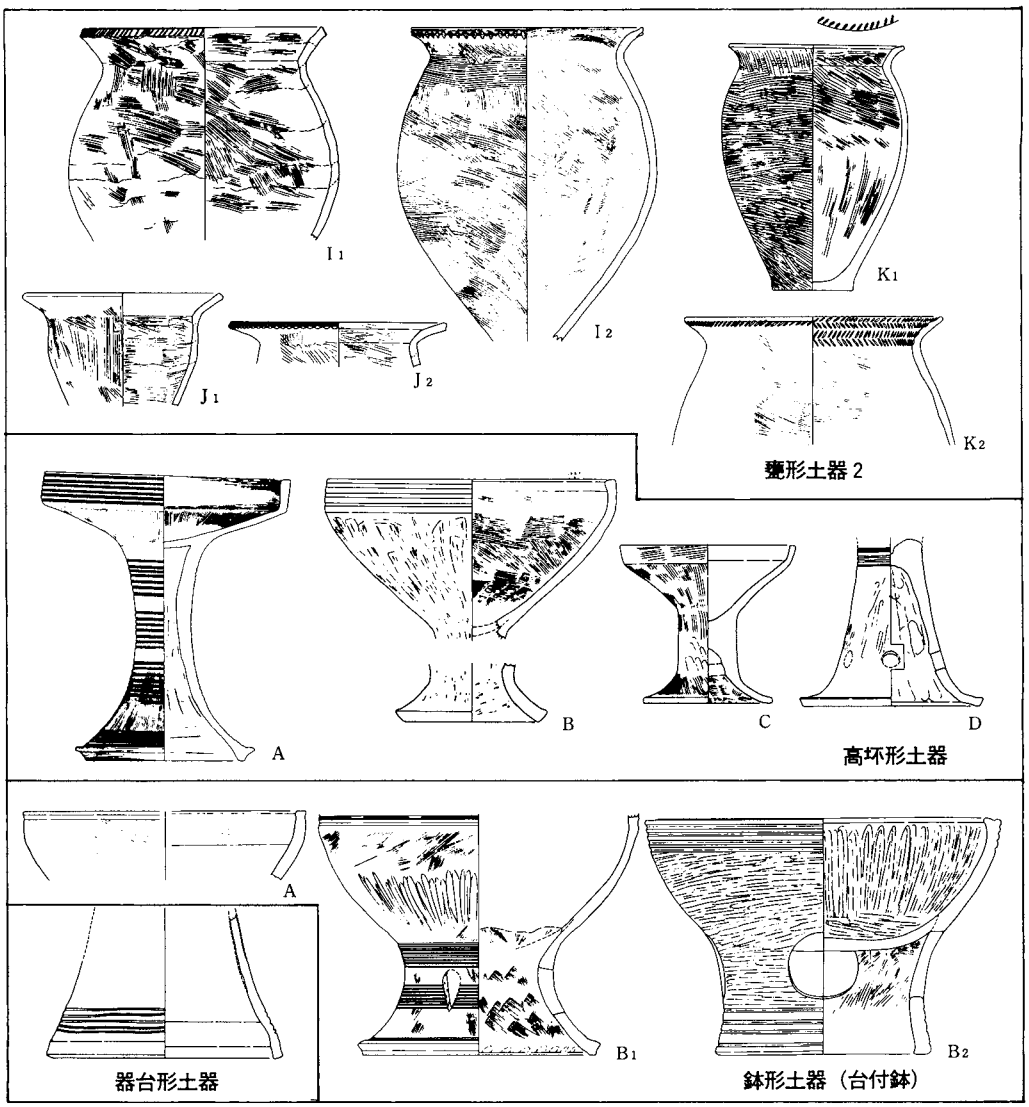
高坏形土器B　坏部が深くなだらかなカーブを描いて立ち、直口する口縁部をもつ高坏。外面にC種凹線文が施されている。

高坏形土器C　筒状の脚部に逆三角錘状の坏部がつくY字形の高坏。高坏A・Bに比べつくりが稚拙である。

高坏形土器D　脚部がやや狭いハの字状に開く高坏。外面に凹線が施され、透かし穴が開けら



第 6 図　　弥生土器の分類 1



第7図　弥生土器の分類2

れる。後期初頭につながるもの。

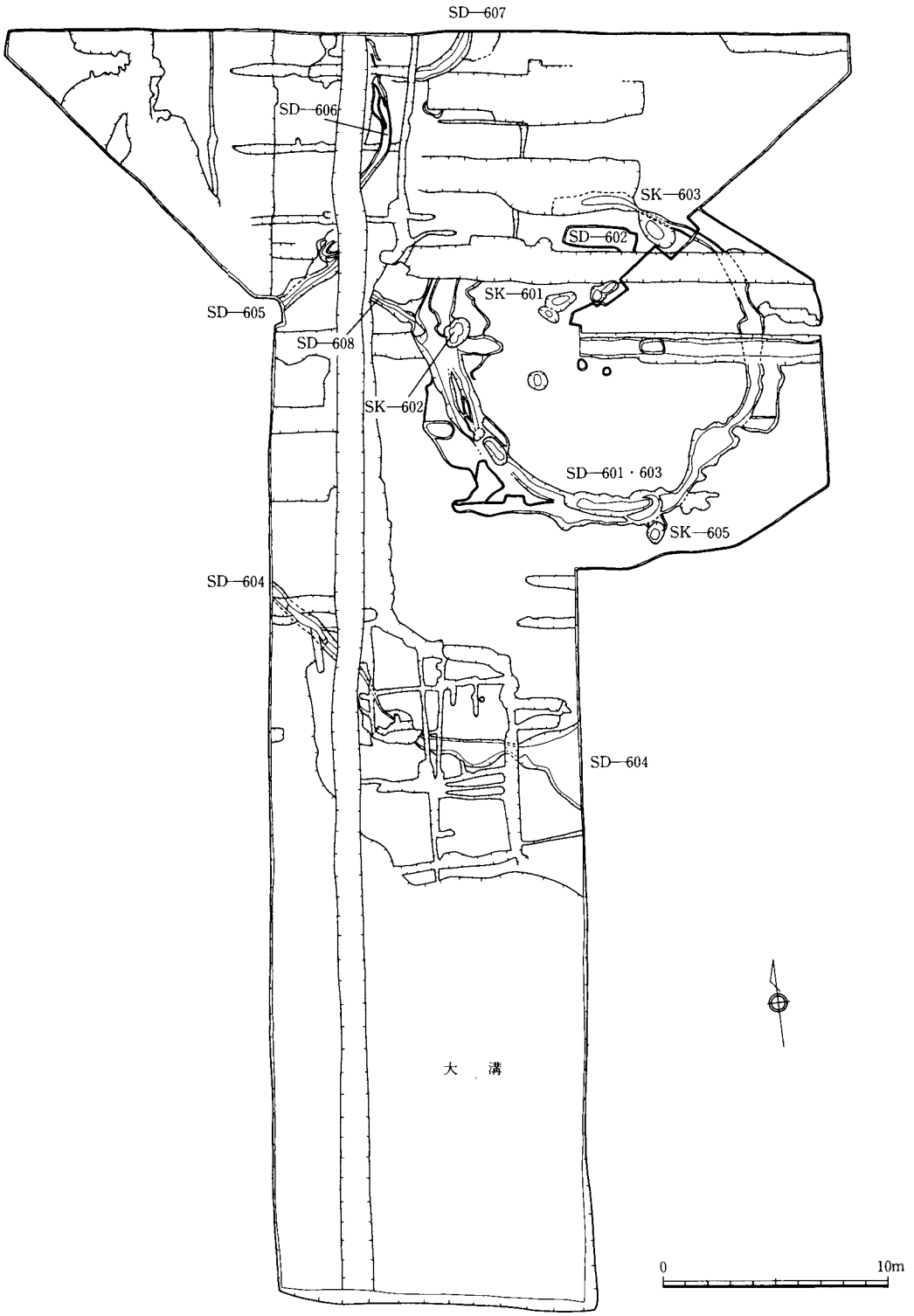
台付鉢

台付鉢A　体部は内わんしながら立ち上がり、口縁は直立もしくはやや外傾する台付鉢。外面に一条もしくは二条の沈線が施される。口縁から体部にかけての破片だけでは、高坏Bとの区別はつかない。

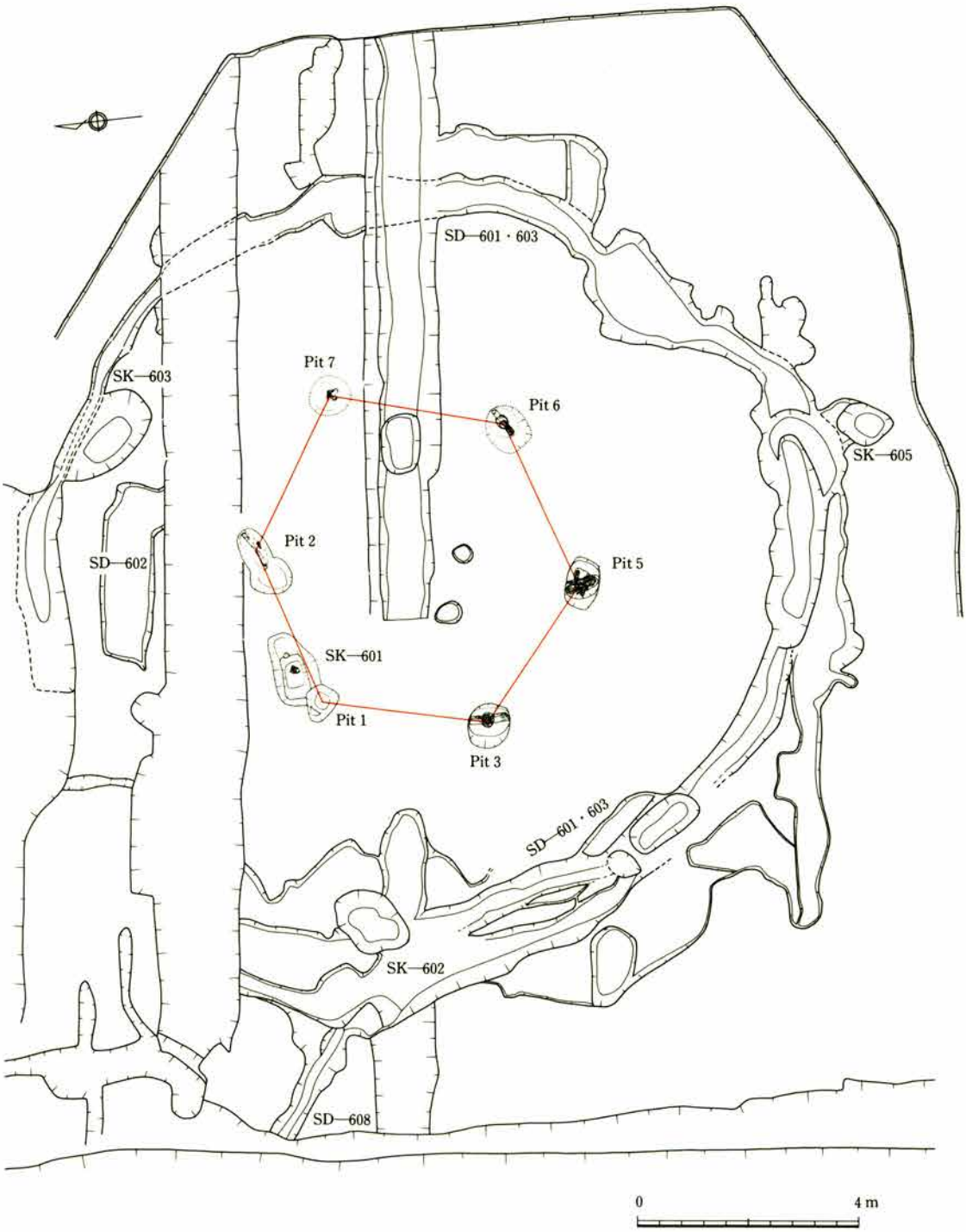
台付鉢B　体部は内わんしながら立ち上がり、口縁は内傾する台付鉢。外面にB種もしくはC種凹線が施される。台部には3～4方向に透かし孔が開けられる。台部のくびれにより（B_1）・（B_2）に細分される。

器台形土器

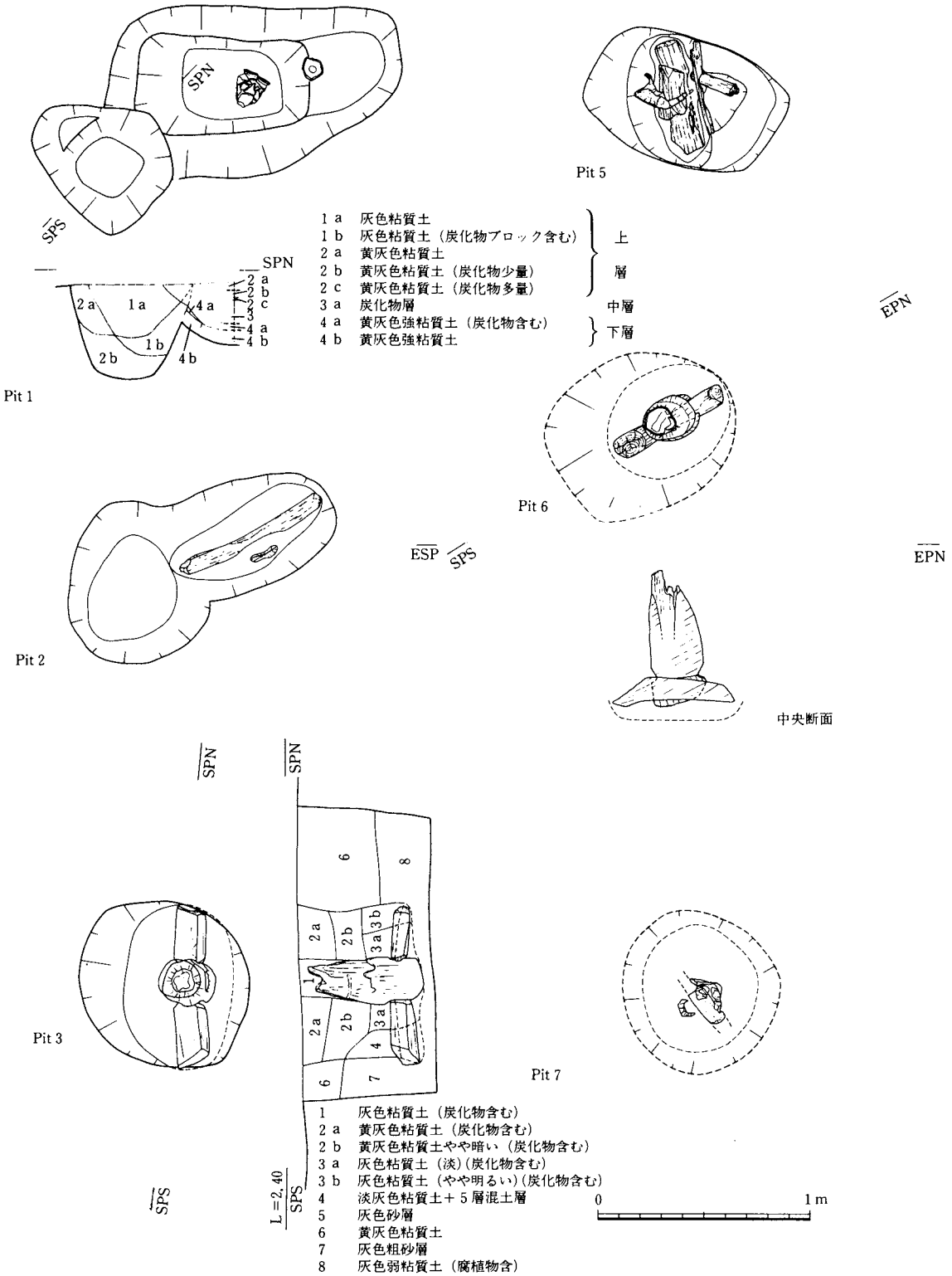
器台形土器　確実な例はまだ確認されていないが、第7次調査で出土した90（第49図）が大型の器台になる可能性がある。



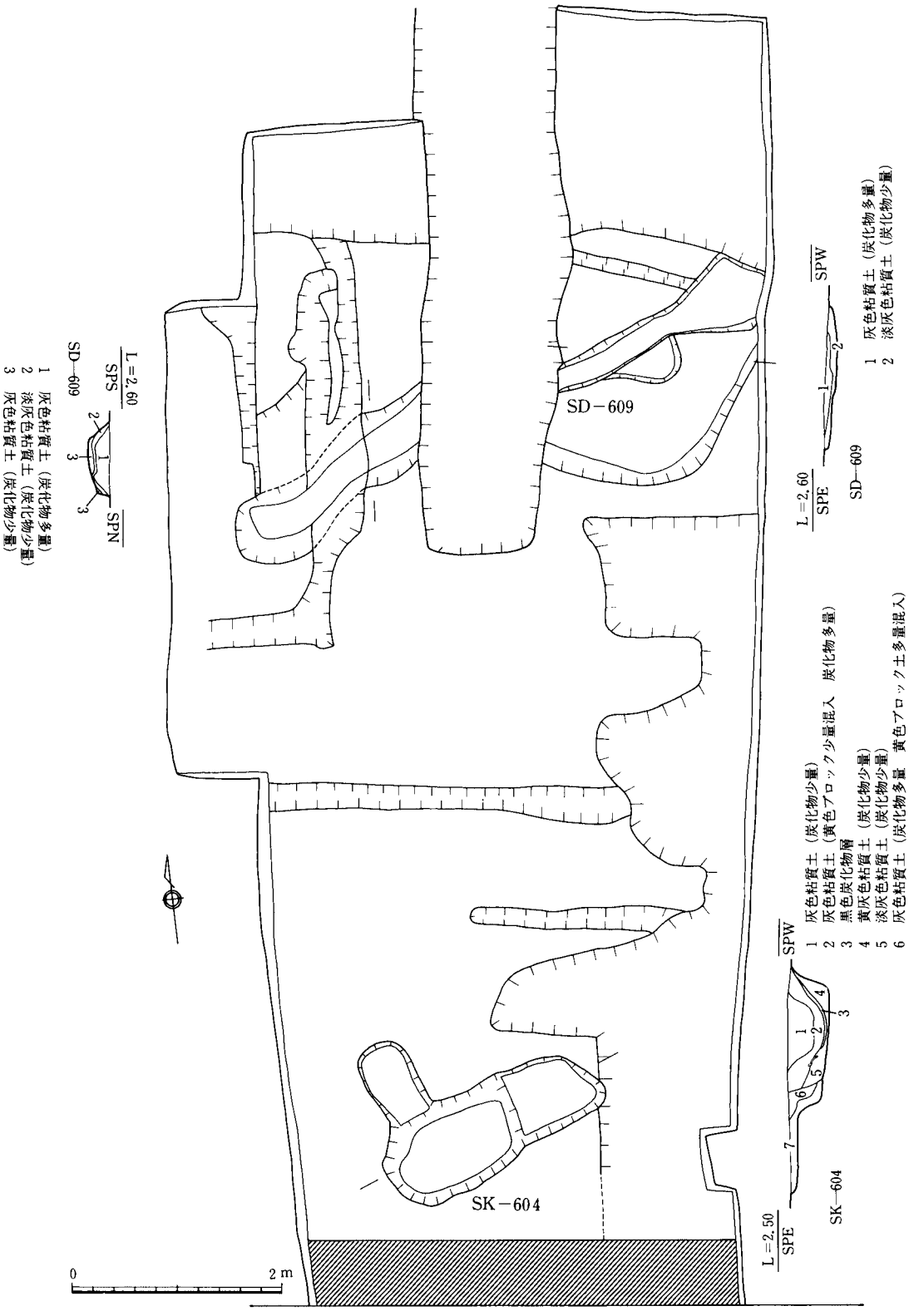
第8図　第6次調査　平面図



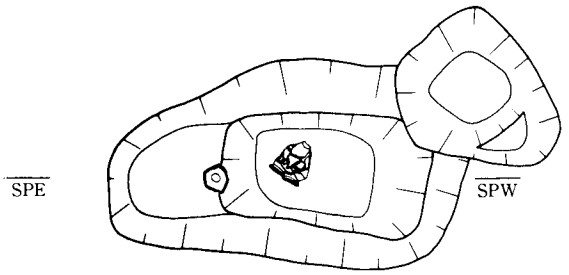
第9図　平地式建物跡　平面図（SD－601・603・Pit 1～3・5～7）

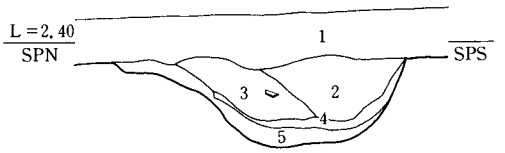


第10図　平地式建物跡　柱穴内柱根出土状況（S＝1/30）



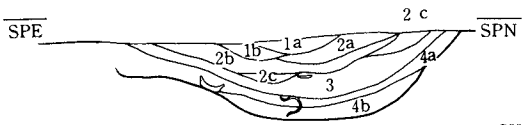
第11図　第６次調査　Ｌ－６調査区　平面図





SK—603(A)(1/30)　　SK—603

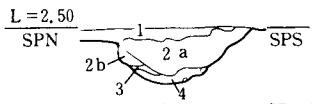
1　茶褐色粘質土（現耕土）
2　灰色粘質土（炭化物多量）
3　暗灰色粘質土（炭化物多量）
4　黒色炭化物層
5　暗灰褐色粘質土（炭化物なし）



SK—601(1/30)　　SK—601

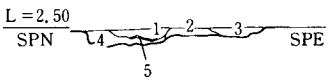
上層
1a　灰色粘質土（黄灰色粘質土ブロック、炭化物含む）
1b　灰色粘質土（炭化物含む）
2a　淡灰色粘質土（炭化物含む）
2b　淡灰色粘質土（炭化物少量含む）

3a　炭化物層
下層
4a　黄灰色強粘質土（炭化物含む）
4b　黄灰色強粘質土（炭化物含む）



SD—601(B)(1/60)　　SD—01

1　黄灰色粘質土（茶、灰色ブロック混）撹乱土
2a　暗灰色粘質土（炭化物多量）
2b　暗灰色粘質土（炭化物多量　黄灰ブロック混）
3　灰色粘質土（炭化物なし　淡灰ブロック混）
4　暗灰色粘質土（炭化物なし　腐植物多量）

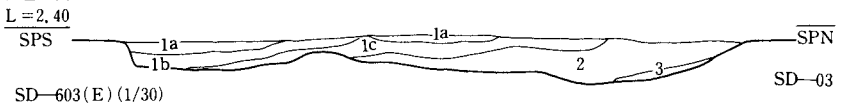


SD—601(C)(1/60)　　SD—01

1　暗灰色シルト（灰色ブロック混　炭化物少量）
2　灰色シルト（暗灰シルト混　炭化物少量）
3　暗灰色粘質土（1より淡い　炭化物少量）
4　暗灰色砂質土（炭化物多量）
5　黒色炭化物層

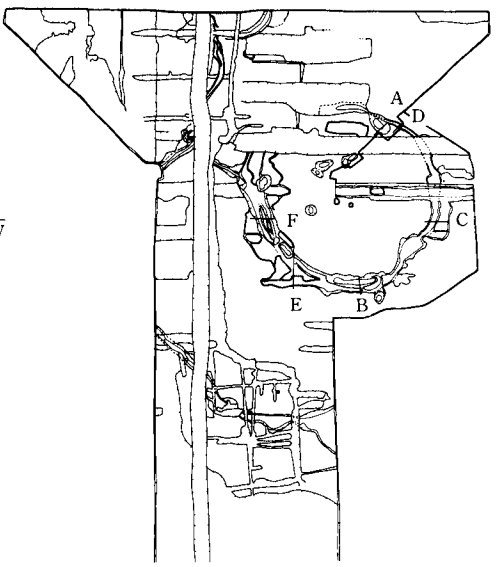
SD—601(D)(1/30)

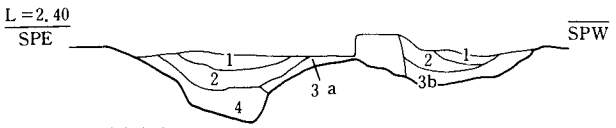
1　茶褐色粘質土（現耕土）
2　暗灰色粘質土（炭化物多量）



SD—603(E)(1/30)　　SD—03

撹乱土
1a　暗灰色粘質土（ブロック状に暗灰に淡灰が混じる）
1b　淡灰色粘質土（炭化物含、ブロック状に暗灰色粘質土が混じる）
1c　淡茶褐色粘質土（ブロック状に淡黄緑色粘質土が混じる）
2　淡灰色粘質土（炭化物多含）遺構覆土
3　黒色炭化物

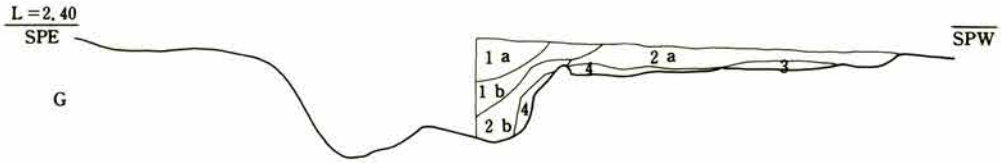




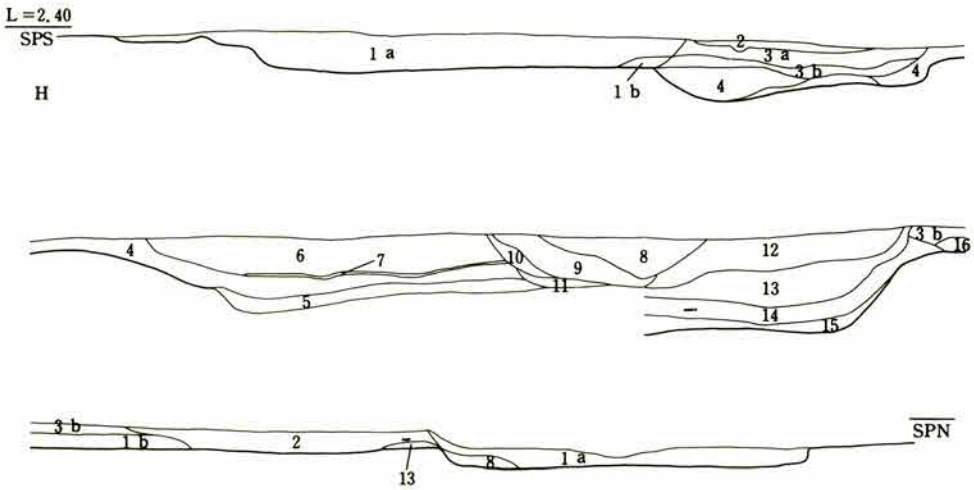
SD—603(F)(1/30)

1　暗灰色粘質土（炭化物少量）
2　淡灰色粘質土（炭化物多量）黄灰色粘質ブロック混入
3a　暗灰色粘質土（炭化物多量）
3b　暗灰色粘質土（炭化物多量）
4　暗灰色粘質土（炭化物多量）

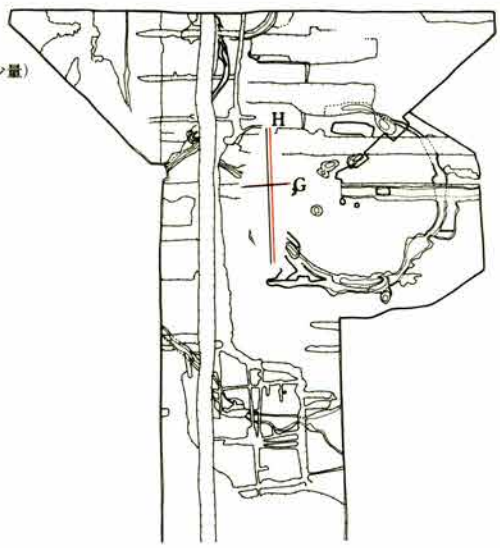
第12図　第6次調査　遺構平面図・断面図



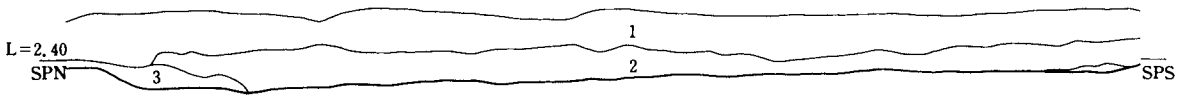
1 a　暗灰色粘質土（炭化物少量）
1 b　暗灰色砂質土（炭化物わずか）
2 a　淡灰色粘質土（炭化物多量）
2 b　暗灰色粘質土（炭化物多量）
3　黄灰色砂質土（地山）
4　淡黄灰色砂質土（地山）



埋土
1 a　灰色粘質土（炭化物多量黒茶褐色粘質ブロック多量混入）
1 b　淡灰色粘質土（炭化物なし　1 aに入るブロックの1つか）
2　暗灰色粘質土（黒茶褐色ブロック混入、炭化物少量）
3 a　暗黄灰色粘質土（炭化物多量）
3 b　淡黄灰色粘質土（炭化物多量）ブロック状
4　淡灰色粘質土（炭化物多量）遺構覆土
5　灰色粘質土（炭化物なし）地山か
6　灰色粘質土（炭化物多量）
7　黒色炭化物
8　淡灰色粘質土（暗茶褐色粘質土ブロック多量混入、炭化物少量）
9　灰色粘質土（炭化物なし）
10　暗灰色粘質土（炭化物少量）ブロック混入
11　黄橙色砂土（地山）
12　暗灰色粘質土（炭化物少量）
13　淡灰色粘質土（炭化物多量）（黄灰色ブロック混入）
14　灰茶褐色粘質土（炭化物多量）
15　暗茶褐色粘質土（炭化物多量）
16　暗灰色砂土（地山）

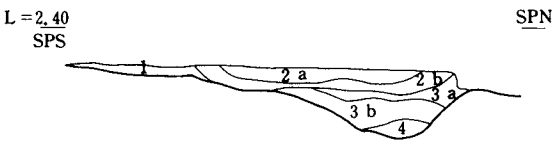


第13図　第6次調査　遺構断面図（SD－603）（S＝1/30）



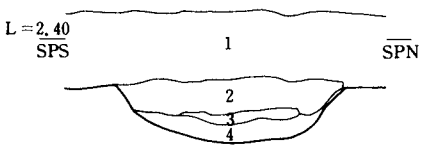
SD—604東(I)

1　茶褐色粘質土（現耕土）
2　暗灰色粘質土（黄灰色粘質ブロック多量混入、炭化物少量）
3　淡黄灰色粘質土（地山）



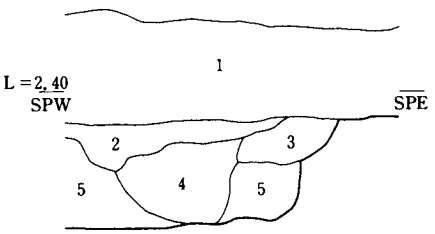
SD—605(J)

1　黄灰色粘質土
2a　灰色粘質土（炭化物少量）
2b　淡灰色粘質土（炭化物少量）
3a　暗灰色粘質土（炭化物多量）
3b　淡灰色粘質土（炭化物少量）（2bよりは暗い）
4　暗茶褐色土（炭化物なし）



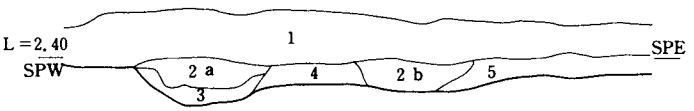
SD—604西(K)

1　茶褐色粘質土（現耕土）
2　灰色粘質土（炭化物多量）淡黄灰色ブロック混入
3　黒色炭化物層
4　暗灰色粘質土（地山の砂質土混入）



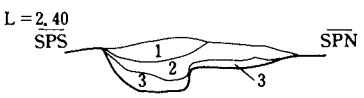
SD—606(L)

1　茶褐色粘質土（現耕土）
2　暗茶褐色粘質土（流土）
3　灰色粘質土（炭化物多量）（遺構覆土）
4　暗灰色粘質土（炭化物少量）（現溝）
5　黄灰色粘質土（地山）



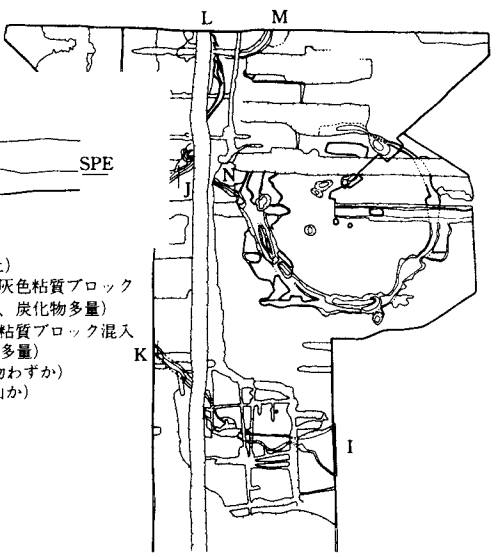
SD—607(M)

1　茶褐色粘質土（現耕土）
2a　淡灰色粘質土（明黄灰色粘質ブロック混入、炭化物多量）
2b　灰色粘質土（黄灰色粘質ブロック混入炭化物多量）
3　黄灰色粘質土（炭化物わずか）
4　淡黄灰色砂質土（地山か）
5　黄緑色粘質土（地山）

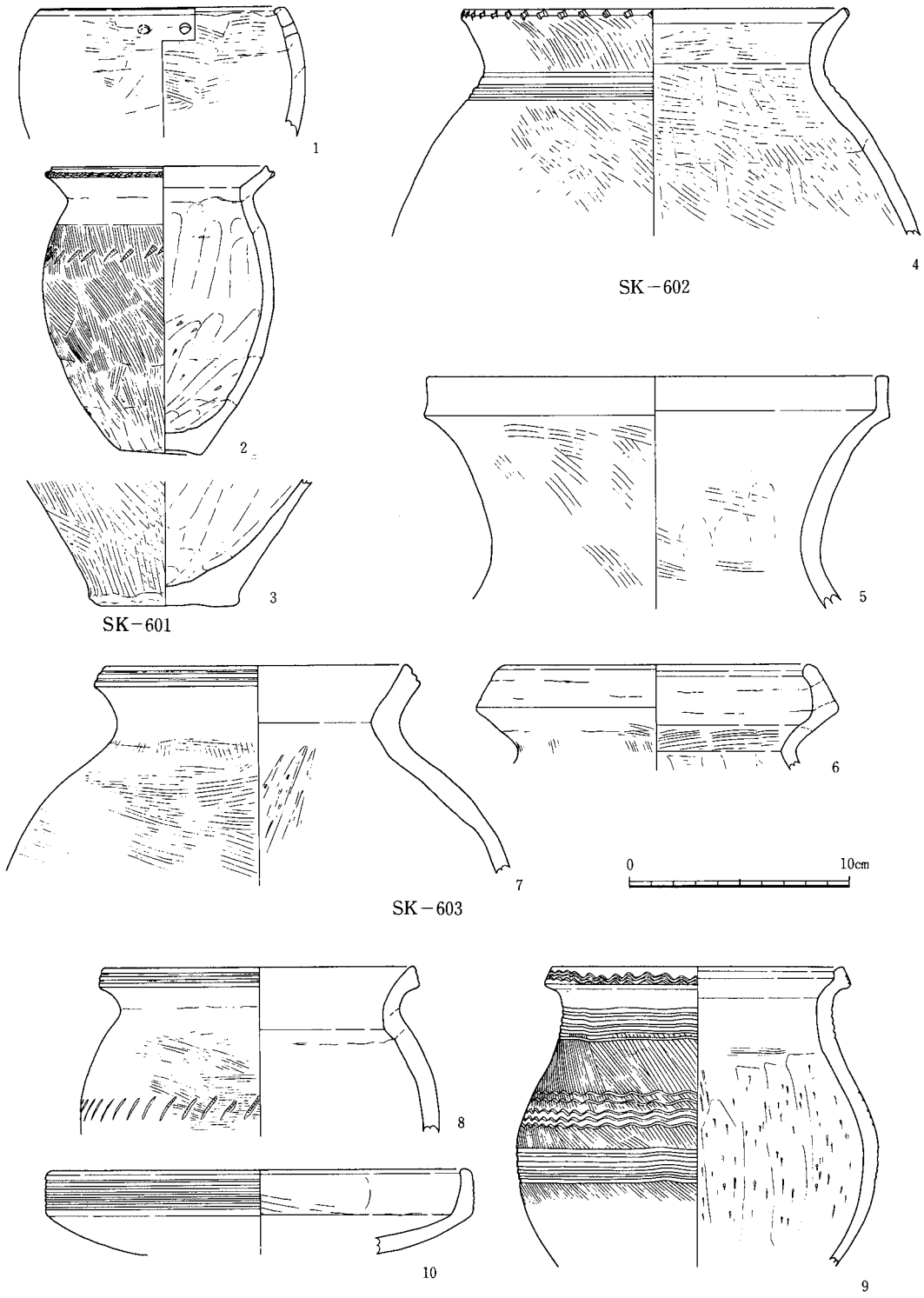


SD—608(N)

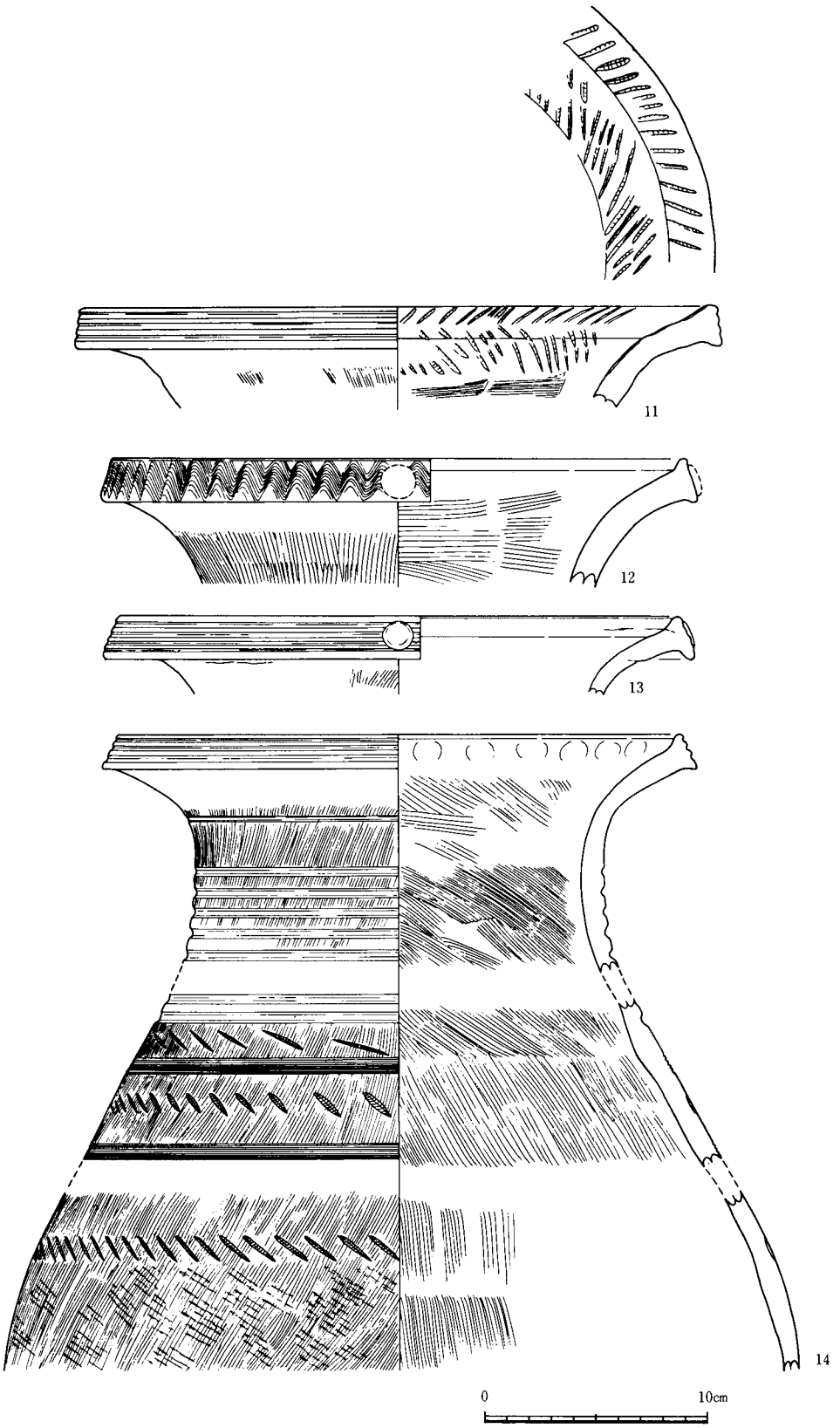
1　灰色粘質土（炭化物少量）
2　淡灰色粘質土（炭化物多量）
3　黄灰色砂質土（地山）



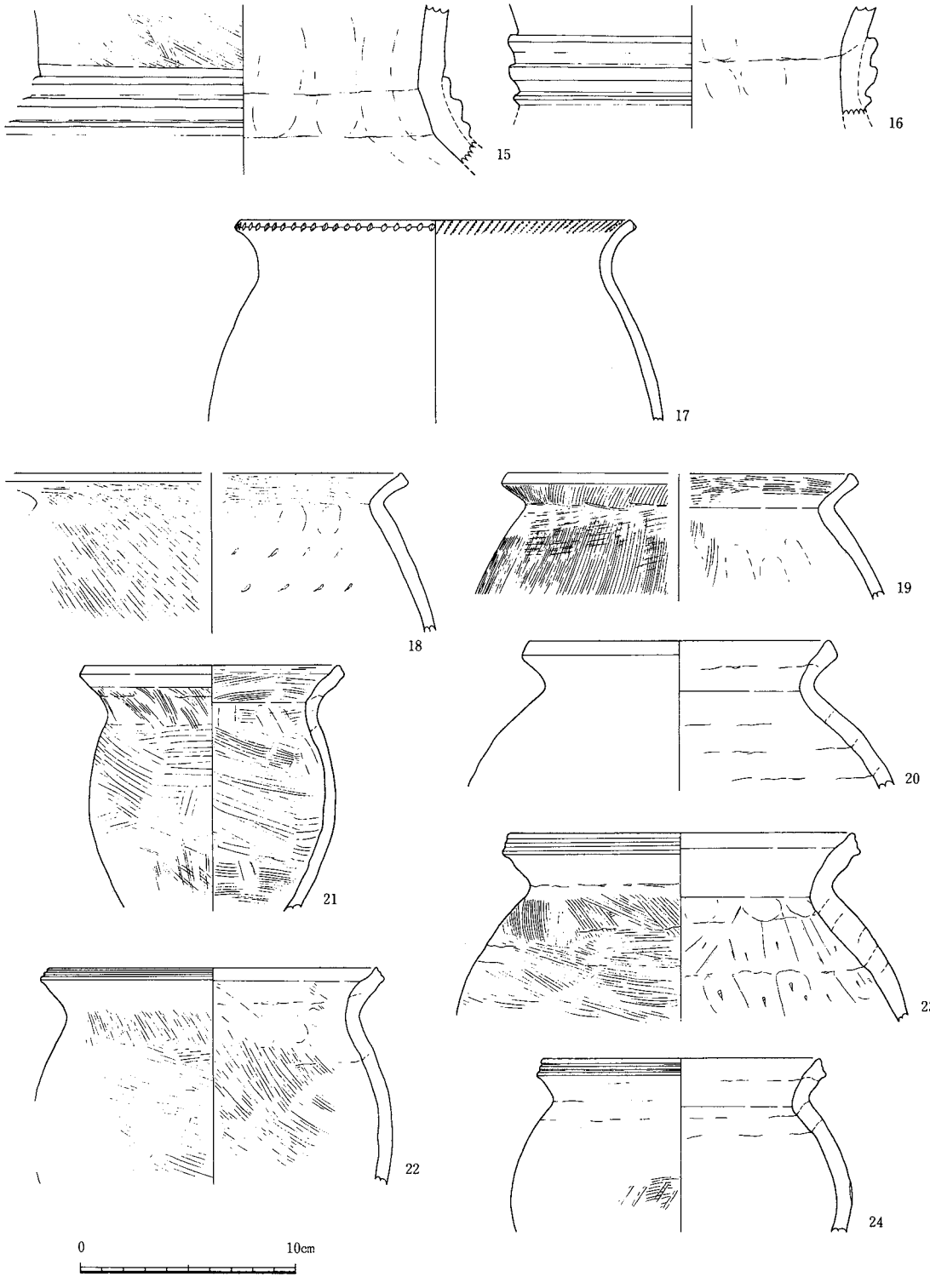
第14図　第6次調査　遺構断面図



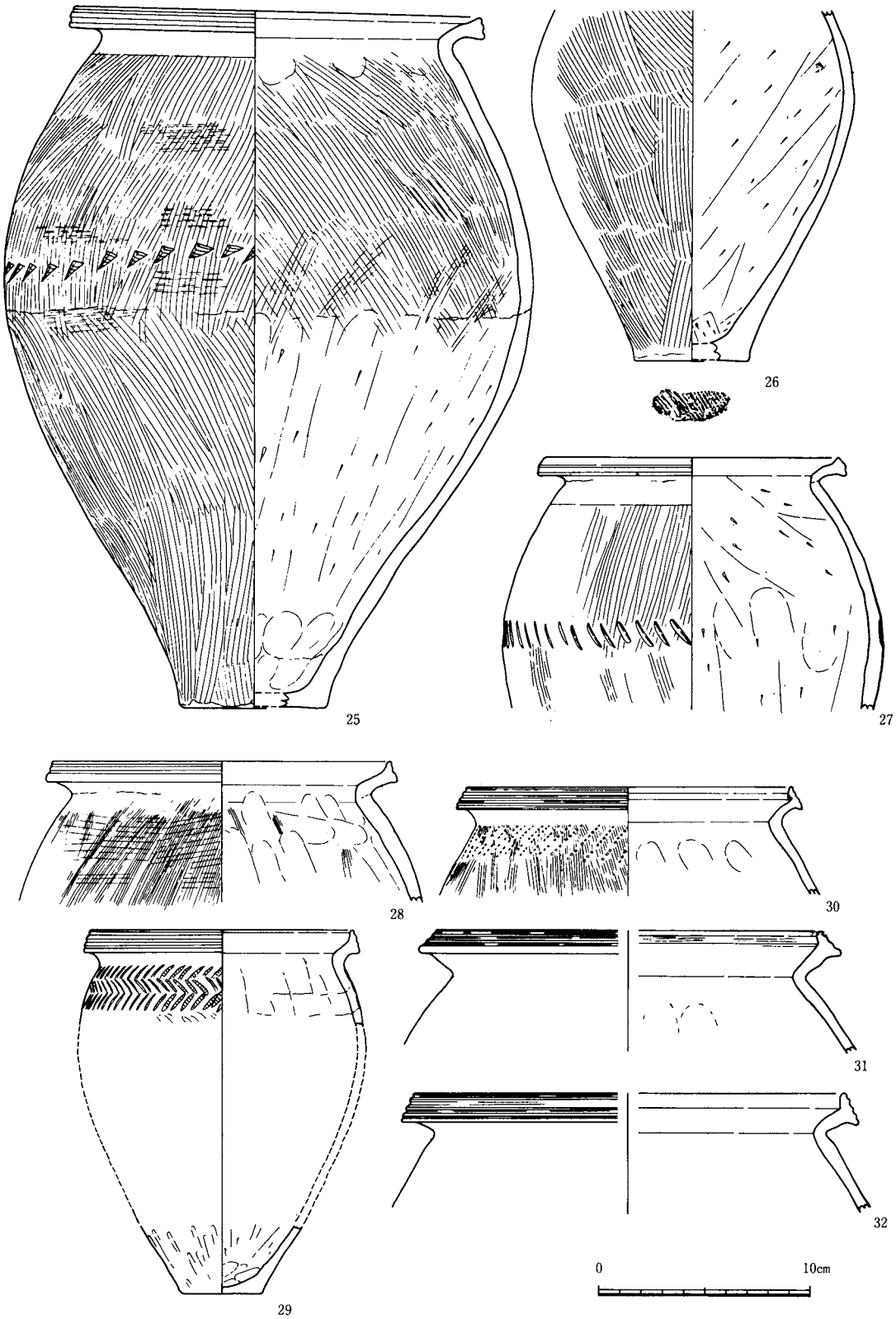
第15図　第６次調査　出土土器（１）



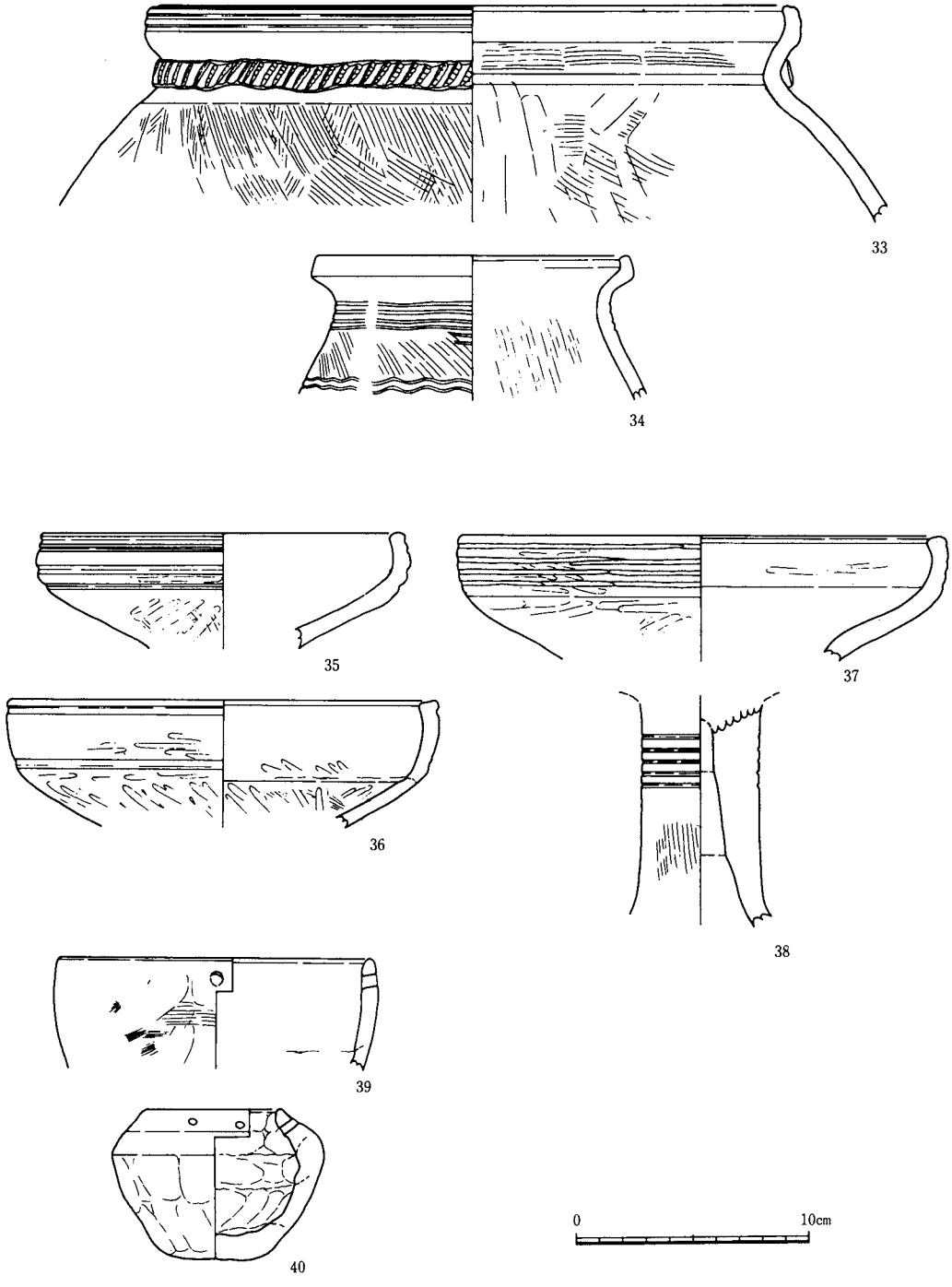
第16図　第６次調査　出土土器（２）(SD－601・603)



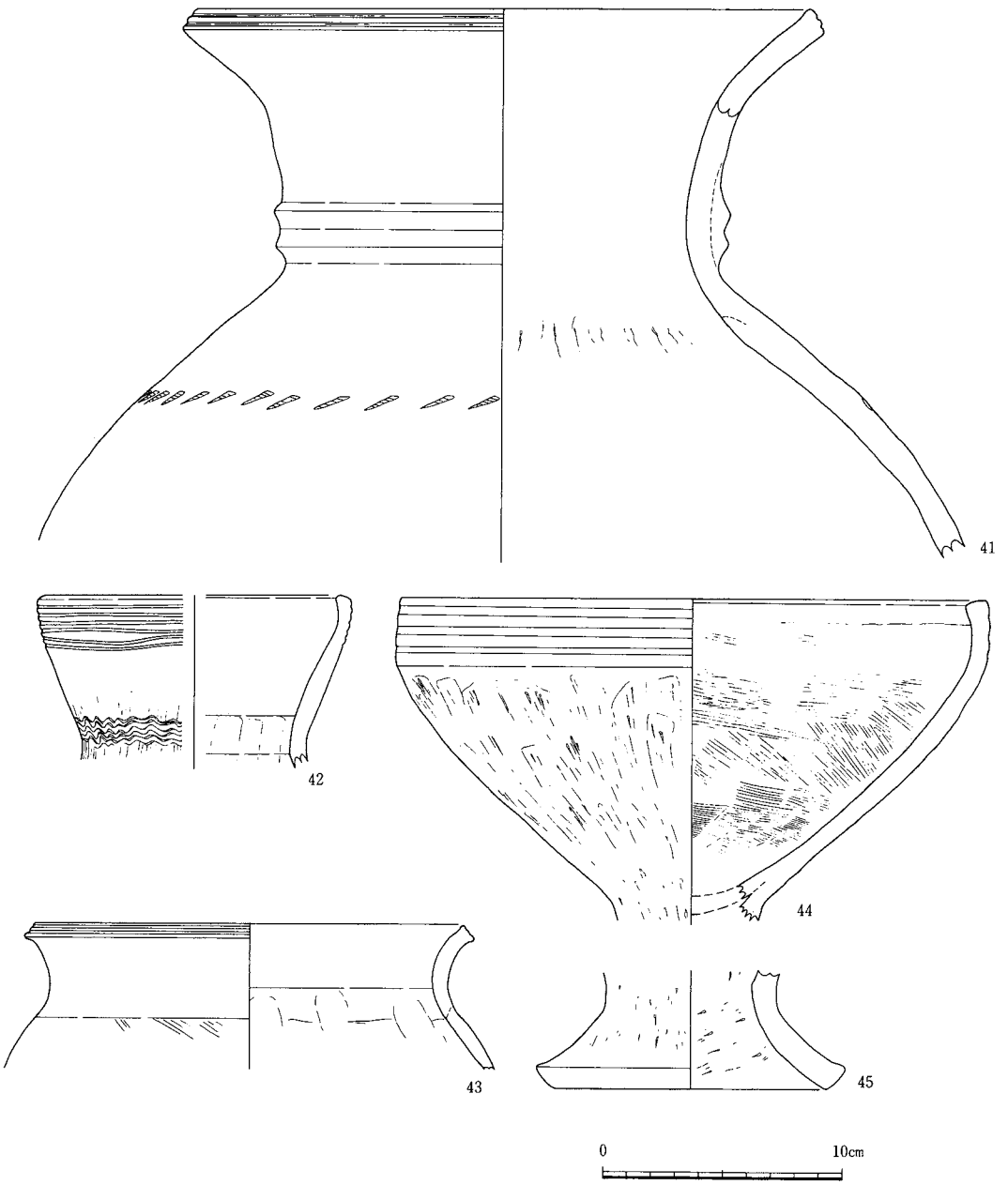
第17図　第６次調査　出土土器（３）(SD－601・603)（S＝1／3）



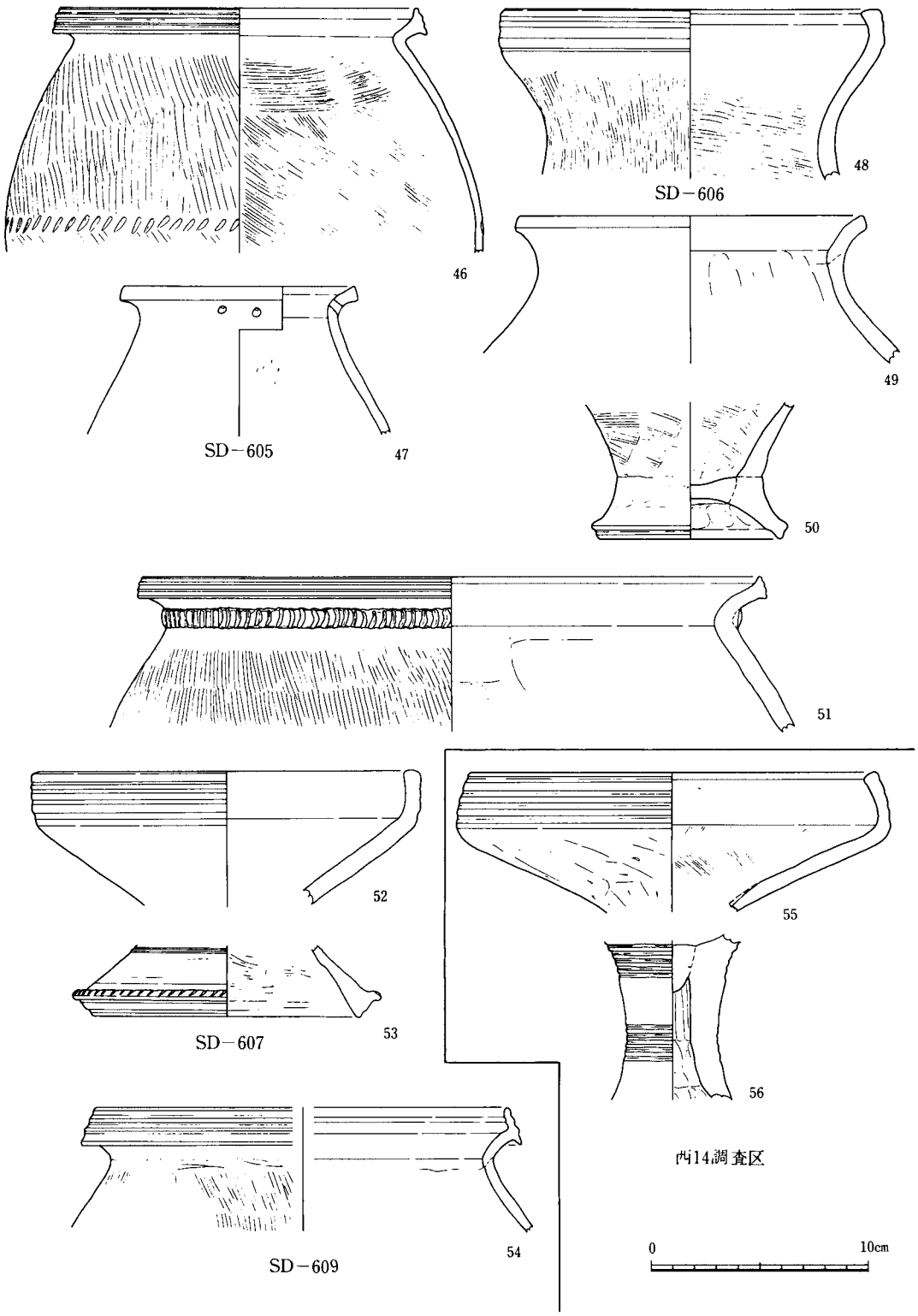
第18図　第６次調査　出土土器（４）(SD－601・603)



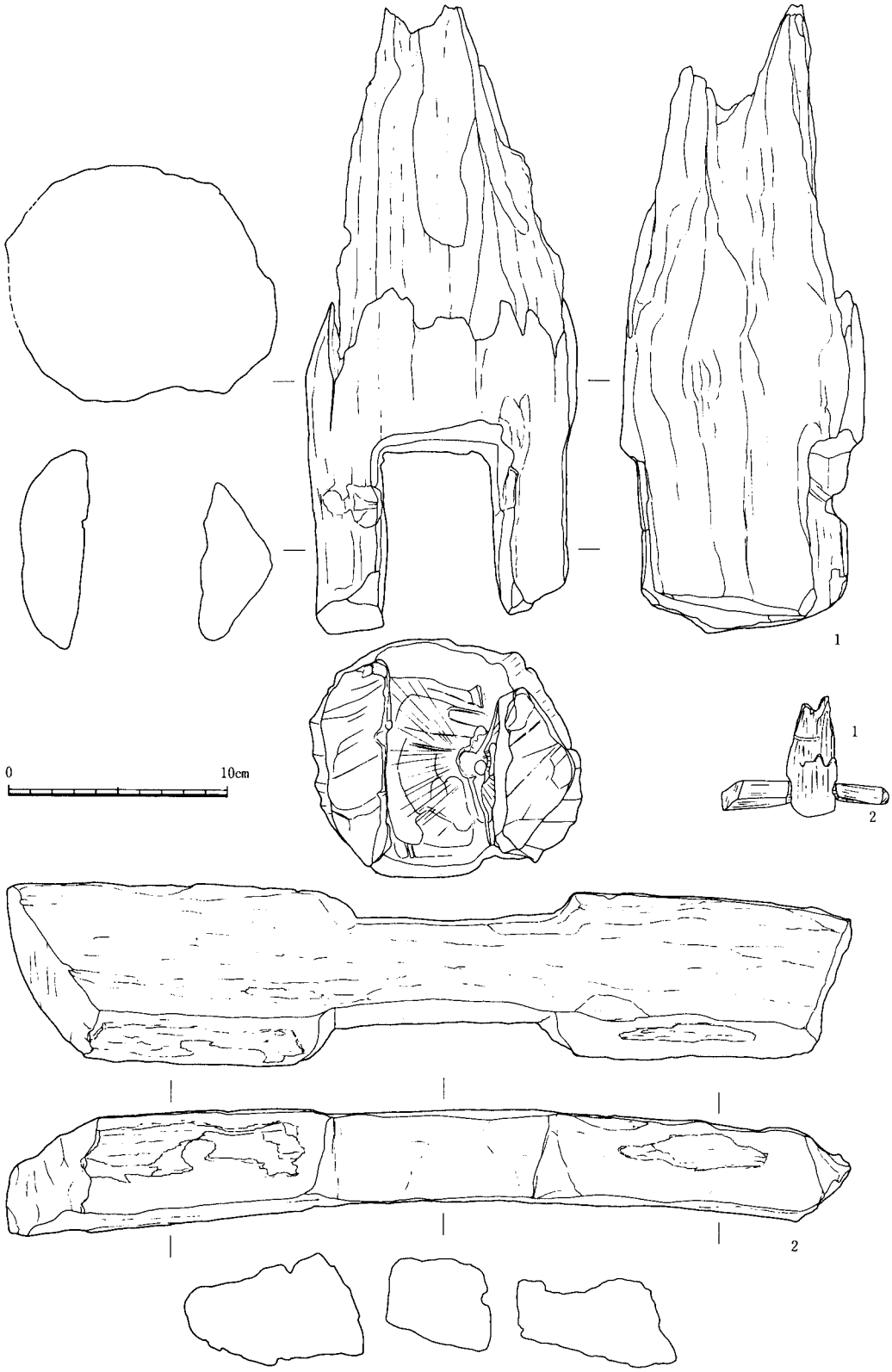
第19図　　第６次調査　出土土器（５）(SD－601・603)（S＝1/3）



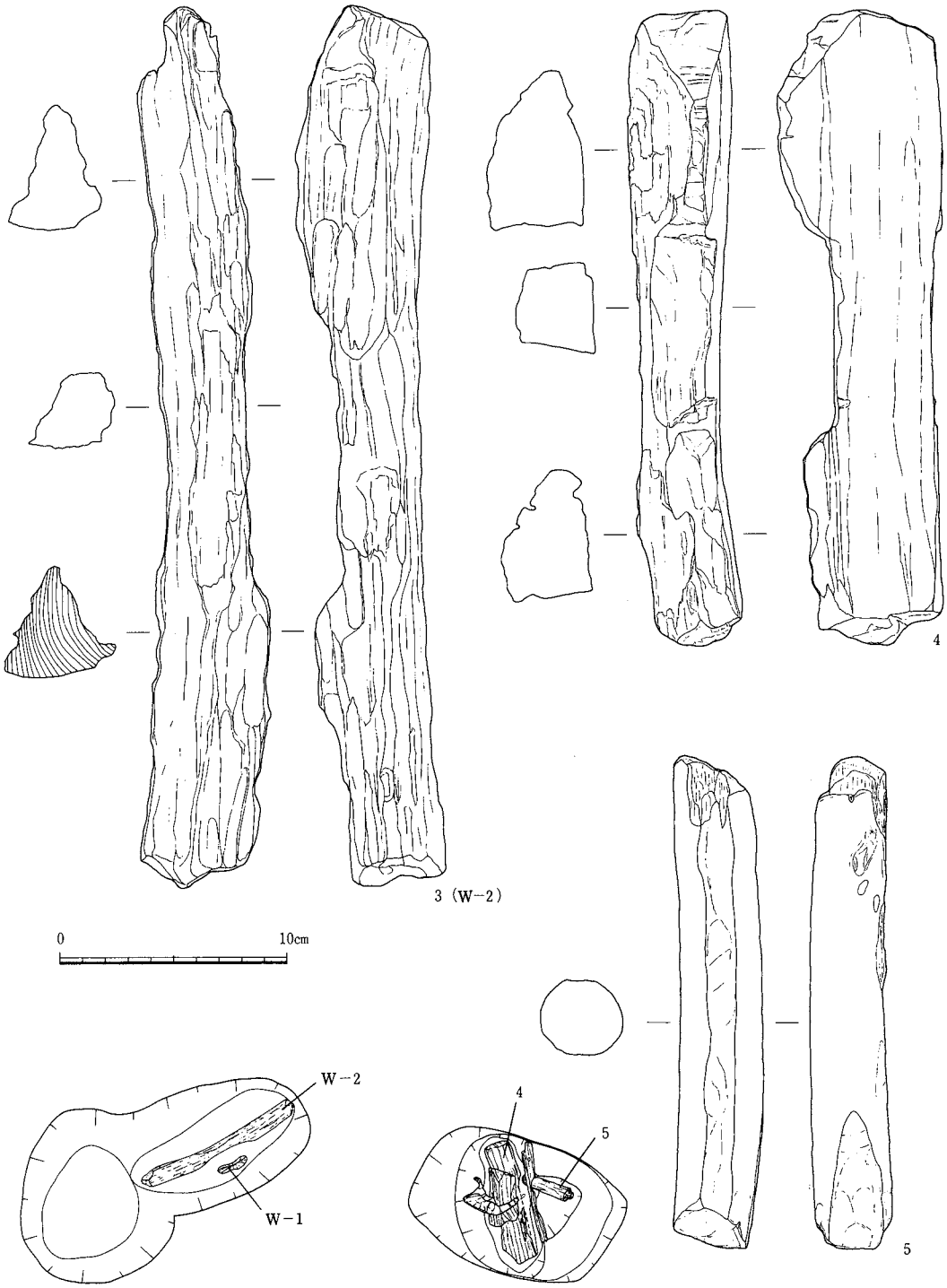
第20図　第６次調査　出土土器（６）(SD - 604)（S＝１/３）



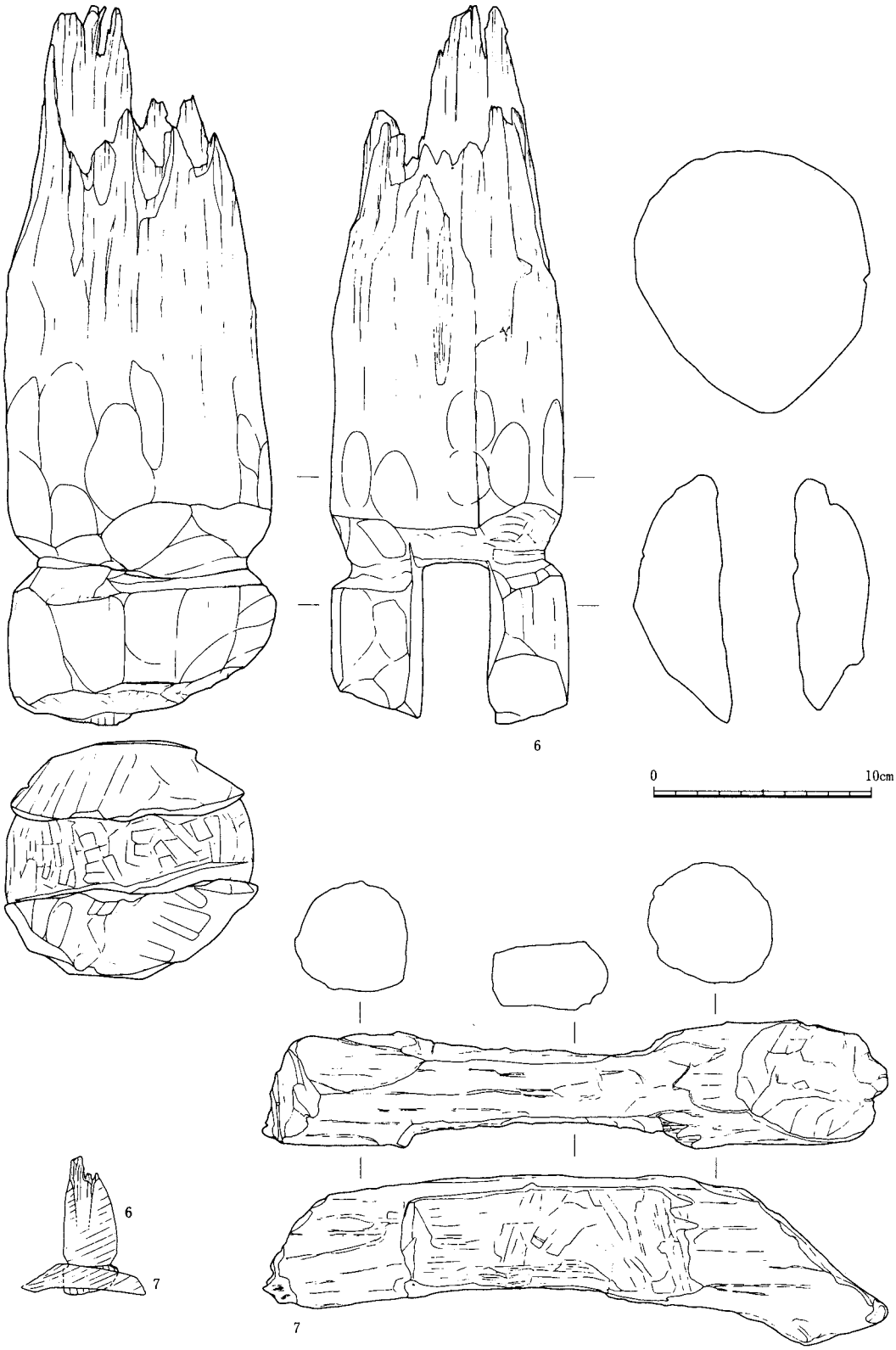
第21図　第６次調査　出土土器（７）（S＝１／３）



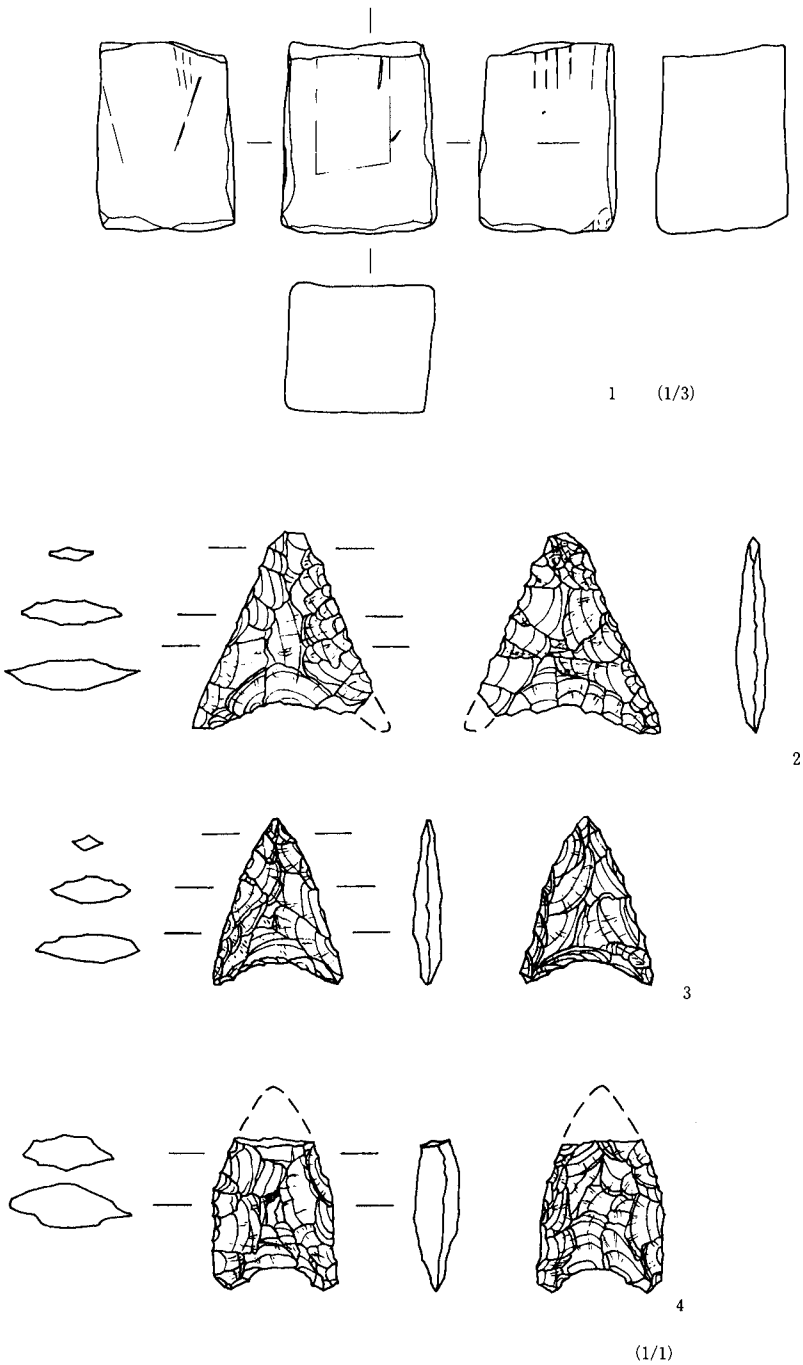
第22図　平地式建物跡　柱穴出土木柱根・枕木（Pit－3）



第23図　平地式建物跡　柱穴出土木製品（Pit－2・Pit－5）



第24図　平地式建物跡　柱穴出土木柱根・枕木（Pit－6）



第25図　第６次調査　出土石製品

第２表　第６次調査遺構一覧表

遺構名	出土遺物	数	土器接合関係	備　　考	挿図No.
第６次調査					
SK－601	１～２	3		長さ1.4m、幅0.8m、深さ0.35m	12
SK－602	4	1	SD－601・603	SD－601・603内に掘られる、深さ45cm	9
SK－603	５～７	3		SD－601より新、２×１m、深さ35cm	12
SK－604	８～10	3	SD－601・603	Ｌ６調査区、2.25×0.8m の隅丸方形、深さ35cm、二段掘り、坑底に木質遺存	11
SK－605				径約１m、深さ30cm	
SD－601 603	11～40	29	SK－602・604 SD－605 第４次７号土坑	平地式建物の周溝、内径13m、連続土坑状の溝、北西方向で開口か？	９・12
SD－602				土坑状に完結	
SD－604	41～45	5		調査区を東西に横切る浅い溝、調査区東端で幅4.2m、西端で幅0.85m	14
SD－605	46、47、48	2	SD－601・603	幅75cm、深さ20cmの南西－北東の溝	14
SD－606		1		幅40cm、深さ20cmの南北溝、SD－605と接続か？	14
SD－607	49～53	5		幅60cm、深さ20cm	14
SD－608				SD－601・603から西へ延びる溝	14
SD－609	54	1		Ｌ６調査区、幅30～60cm、深さ約20cmの東西溝	
西14調	55、56	2			
Pit－１				SK－601と切り合い、SK－601より新、径約60cm深さ45cm	10
Pit－２	木５			90×55cmの楕円形、深さ約15cm	10
Pit－３	木１・２			径約80cm、深さ60cm	10
Pit－４					
Pit－５	木３・４			90×60の隅丸方形、深さ75cm	10
Pit－６	木６・７			径約80cm、深さ約80cm	10
Pit－７				径約75cm、深さ約40cm	10

第3表　第6次調査出土土器観察表

No.	出土地区	器種	法量	口頸部	胴部	底(脚)部	色調	石	長	黒	他	焼	海	備考
1	SK601	壺	口：(11) cm 胴：(13) cm		O：ハケ後ナデ、透し穴2コ残存 I：ハケ、透し穴		O：にぶい褐 I：にぶい褐	S 1	S 1		S 1			13
2	SK601P-1	甕	口：9.8cm 胴：10.5cm 底：3.5cm 器：13.2cm	O：ヨコナデ、凹線1条、キザミ I：ヨコナデ	O：ハケ、ケズリ、刺突文 I：ナデ、ケズリ	O：ナデ I：ナデ	O：にぶい褐 I：にぶい褐	S 4	S 2	S 2	S 3			12
3	SK601P-2	(底部)	底：6.8cm			O：ハケ、ナデ I：ナテ	O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 2	L 2					11
4	SD601・603 SK602	甕	口：(17.3)cm	O：ハケ、キザミ、凹線5条 I：ヨコナデ、ハケ	O：ハケ、ナデ I：ハケ、ナデ		O：浅黄橙 I：浅黄橙			M 2	S 2			37
5	SK603	壺	口：(21.0)cm 頸：(15.0)cm	O：ヨコナデ、ハケ I：ヨコナデ、ハケ			O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙				M 4	MS 3		150
6	SK603	甕	口：(13.8)cm	O：ヨコナデ、ハケ I：ヨコナデ			O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 3	S 1		L 1	L 1		31
7	SK603	甕	口：(14.6)cm	O：ヨコナデ、凹線2条 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ナデ、ケズリ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	LM 2	S 1		LM 3	MS 3	S 1	149
8	SD601・603 SK604	甕	口：(14.2)cm	O：ヨコナデ、凹線2条	O：ハケ、刺突文		O：浅黄橙 I：浅黄橙	M 3	M 3		M 3	M 3		35
9	SK604	甕	口：(13.2)cm 胴：(16.5)cm	O：ヨコナデ、波状文3条、凹線5条 I：ヨコナテ	O：縦ハケ、ナデ、波状文5条、凹線5条 I：ナデ→ヘラケズリ		O：褐灰 I：にぶい黄橙	M 2			MS 3			16
10	SK604	高坏	口：(19.0)cm	O：凹線6条 I：ハケ			O：にぶい橙 I：にぶい橙	S 2		S 2				30
11	SD601・603	壺	口：28cm	O：ヨコナデ、ハケ、凹線3条 I：ヨコナデ、綾杉文			O：浅黄橙 I：浅黄橙	M 3	S 1		MS 2			5
12	(SD605) (SD603)	壺	口：26.8cm	O：ヨコナデ、ハケ、波状文、円形浮文 I：ヨコナデ、ハケ			O：淡黄 I：淡黄	M 2			L M 3			6
13	SD601・603	壺	口：(25.2)cm	O：ヨコナデ、凹線4条、円型浮紋 I：ヨコナデ			O：にぶい褐 I：にぶい褐	S 4	S 2		S 2			19
14	SD601-603	壺	口：23.2cm	O：ヨコナデ、凹線3条、凹線5条 I：ヨコナデ、ハケ	O：凹線6本、ハケ状具による連続刺突紋 I：ハケ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M 4	S 2	M 2	M 3	M 1		18
15	SD601・603	壺	頸：(18.6)cm	O：ハケ、3条突帯 I：ナデ			O：浅黄 I：浅黄	S 1			M S 3	S 3		142
16	SD601南側下層	壺	頸：(16.2)cm	O：ナデ、突帯3条 I：ナデ			O：浅黄橙 I：浅黄橙	M 1			MS 2			143
17	SD601・603	甕	口：(18.2)cm	O：キザミ I：連続刺突紋			O：にぶい橙 I：にぶい黄橙	M 1			L 3	S 4		155
18	SD601	甕	口：(17.7)cm	O：ヨコナデ I：ハケ、指頭痕	O：ハケI：ケズリ後ナデ、爪圧痕		O：にぶい黄橙	S 2			MS 3			163
19	SD603	甕	口：(16)cm	O：ハケ、ヨコナデ I：ハケ（横）	O：タタキ、ハケ I：ハケ、ナデ		O：灰白 I：灰白	MS 2			MS 3			160
20	SD603	壺	口：14cm				O：浅黄橙 I：浅黄橙	M 3	M 3		MS 3	M 3		154
21	SD601	甕	口：(11.7)cm 胴：(11.4)cm	O：ヨコナデ、ハケ I：ハケ	O：ハケ I：ハケ		O：明褐灰 I：にぶい橙	S 1		S 1	MS 2			7

No.	出土地区	器種	法　量	口　頸　部	胴　　部	底（脚）部	色　　調	石	長	黒	他	焼	海	備考
22	SD601・603	甕	口：(15.2)cm	O：ヨコナデ、凹線2条 I：ヨコナデ、ハケ、ナデ	O：ハケ I：ハケ		O：にぶい黄橙 I：灰黄				M S 3			33
23	SD601No.2	甕	口：(15.8)cm	O：ヨコナデ、凹線2条 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ケズリ、ナデ		O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 2	S 2	S 2	M 3	S 3		3
24	SD601	甕	口：(12.7)cm 胴：(15.8)cm	O：凹線2条	O：一部ハケ、刺突文		O：浅黄 I：浅黄	M 3	M 2	S 1	S 2			36
25	SD601 (炭化物上面)	甕	口：(19.5)cm 胴：25.3cm 底：6.8cm 器：33.3cm	O：ヨコナデ、2条凹線 I：ヨコナデ、ナデ	O：接合痕、タタキハケ、刺突紋 I：ハケ、接合痕ケズリ、ナデ	O：ハケ I：ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2			S 3			1
26	SD601・603	甕	胴：(15.3)cm 底：(5.3)cm		O：ハケ I：ケズリ	O：ハケ I：ケズリ	O：にぶい褐 I：にぶい黄褐	S 3			S 3			34
27	SD601No.1	甕	口：(13.8)cm 胴：(17.9)cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：ハケ、キザミ I：ケズリ後ナデ		O：明黄褐 I：明黄褐	S 1	S 1		M 4			2
28	SD601南側	甕	口：(16.2)cm	O：接合痕、凹線2条、ヨコナデ I：ヨコナデ	O：ハケ I：ナデ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M 3	S 1	S 1	S 2			162
29	SD601・603	甕	口：(12.4)cm 底：4.0cm	O：ヨコナデ、ミガキ、凹線3条、綾杉文 I：ヨコナデ、ナデ		I：ミガキ、ケズリ(外底) ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙			S 1	S 1			9
30	SD603 SK602	甕	口：(15.4)cm	O：ヨコナデ、凹線4条、刺突紋 I：ヨコナデ	O：ナデ I：ナデ		O：にぶい褐 I：灰褐	S 3			S 1			8
31	SD601・603	甕	口：(18.2)cm	O：ヨコナデ、凹線3条 I：ヨコナデ、指頭痕	O：ナデ、ハケ I：ナデ		O：淡黄 I：灰白	S 4			LM S 3	161		
32	SD601・603	甕	口：(20.4)cm	O：ヨコナデ、凹線4条 I：ヨコナデ	O：ナデ I：ナデ		O：淡黄 I：淡黄	M 4	S 1	S 3				157
33	SD601・603	壺	口：26.6cm	O：ヨコナデ、2条凹線、突帯 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ナデ		O：灰黄褐 I：灰褐	S 1	S 1	S 1	S 1			4
34	SD601・603	甕	口：(13.5)cm		O：ハケ、波状文沈線 I：ナデ、ハケ		O：にぶい橙 I：にぶい橙	M 1			M			156
35	SD603	高坏	口：15.4cm	O：ミガキ、凹線4条 I：ミガキ	O：ハケ後ミガキ		O：淡黄 I：淡黄		M 1		LM S3	M 1		158
36	SD603	高坏	口：18.2cm	O：ミガキ、凹線2条 I：ミガキ			O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 1	S 1		S 1		S 1	10
37	SD601・603	高坏	口：(20.5)cm	O：ミガキ、凹線4条 I：一部ミガキ、ヨコナデ			O：灰黄 I：淡黄	S 2	M 2		S 3		M 1	14
38	SD603	高坏	クビレ部：4.8cm		O：ハケ残る、凹線5条 I：ナデ		O：灰白 I：灰白	LM 3	M 1		MS 4			159
39	SD601・603 ・605	壺	口：(13.2)cm	O：ナデ、透かし穴1コ残存	O：ハケ後ナデ		O：浅黄橙 I：浅黄橙	M 2			S 2	S 1		32
40	SD601・603 P－1	壺	口：5.8cm 胴：9.2cm 底：3.5cm 器：6.6cm	O：ヨコナデ、透かし穴（2個1組で2か所） I：ナデ	O：ナデ（工具） I：ナデ	O：ナデ I：ナデ	O：にぶい褐 I：灰褐	S 3	S 2	S 1	S 3			15
41	(SD-604) (北側カクラン)	壺	口：25.5cm		O：連続刺突紋		O：浅黄橙 I：浅黄橙	M 2			LM 3	LM 3		147
42	SD604	壺	口：(12)cm	O：ハケ、ヨコナデ、凹線、波状文 I：ヨコナデ、ナデ			O：にぶい橙 I：にぶい黄橙	M S 3	M 1	S 1	2			25
43	SD604	甕	口：(18)cm	O：ヨコナデ、凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ナデ		O：にぶい橙 I：にぶい橙	M 2			LM 5			20
44	SD604P-1	高坏	口：(24.4)cm	O：ヨコナデ、凹線 I：ヨコナデ	O：ヘラケズリ後ヘラミガキ、ハケ I：横ハケ、ナデ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M S 3			M 3			17－1
45	SD604P-1	(脚)	底：(11.4)cm			O：ヘラケズリ、ヨコナデ I：ヘラケズリ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	MS 3			M 3			17－2

No.	出土地区	器種	法量	口頸部	胴部	底（脚）部	色調	石	長	黒	他	焼	海	備考
46	SD605	甕	口：(16.4)cm 胴：(21.6)cm	O：ヨコナデ、凹線3条 I：ヨコナデ	O：タテハケ、キザミ 横ハケ、斜めハケ I：一部ナデ		O：淡黄 I：淡黄	S 4	S 2	S 2		S 2		21
47	SD605	壺	口：(10.7)cm	O：ヨコナデ、孔2個 I：ヨコナデ	O：ナデ、ビット状剥離 I：ヘラケズリ		O：淡黄 I：淡黄	S 4			M 3			148
48	SD605	壺	口：(17.0)cm	O：ヨコナデ、凹線 I：ヨコナデ	O：縦ハケ I：横ハケ		O：淡黄 I：淡黄	S 3		S 2		S 2		26
49	SD607	壺	口：(15.8)cm	I：ヨコナデ			O：浅黄橙 I：にぶい黄橙		S 1		MS 3			29
50	SD607	(脚)	底：8.9cm			O：ハケ、ヨコナデ、凹線 I：ハケ、ナデ	O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 1	S 1		S 2			38
51	SD607	甕	口：(28.6)cm	O：ヨコナデ、凹線、凸帯 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ナデ		O：淡黄 I：淡黄	MS 4	M 1		S 3			22
52	SD607	高坏	口：(7.0)cm	O：凹線4条			O：浅黄橙 I：にぶい橙	M 4	M 2			S 4		24
53	SD607	(脚)	底：(12.4)cm			O：ヘラミガキ、ヨコナデ、凹線、キザミ I：ヘラケズリ	O：褐灰 I：黒褐	S 3	S 2	S 3				23
54	SD609	甕	口：(19)cm	O：凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ		O：にぶい橙 I：浅黄橙	S 1	S 1		S 3			153
55	西14調	高坏 (坏部)	口：(18.6)cm	O：ナデ、ケズリ、凹線 I：ヨコナデ、ハケ			O：灰黄 I：灰黄	S 3	S 2	S 4	S 2			27
56	西14調	高坏 (柱状部)				O：ヨコナデ、凹線5条 I：ケズリ、ナデ	O：浅黄橙 I：黒	S 3	S 1	S 4	S 1			28

第4表　第6次調査出土木製品観察表

No.	名称	遺　構	残存法量（cm）	樹　種	木 取 り	備　　考
1	柱根	Pit－3	L57.8× φ22～24.8	コナラ節 ISF-479	丸木 （芯持ち）	2とセット 下端にW10×D16の抉り込みあり。
2	枕木	Pit－3	L77×W16.5× H11	コナラ節 ISF-480	割り材 （ミカン割り）	1とセット、樹皮残存、中央両側に L24×D2.5～3の削り込みあり。
3	枕木	Pit－2	L77.5×W11.5× H10	コナラ節 ISF-485	割り材 （ミカン割り）	中央片側にL27×D2.5の削り込みあり。
4	枕木	Pit－5	L56×W14×H9	コナラ節 ISF-481	割り材 （ミカン割り）	樹皮残存 中央両側にL20×D2.5の削り込みあり。
5	杭？	Pit－5	L43.5×φ7		丸木 （芯持ち）	平らに削った面あり。枕木の下のかませか？
6	柱根	Pit－6	L67×φ24.4	コナラ節 ISF-478	丸木 （芯持ち）	No.7とセット 下部に縄掛けの削り込みあり。 下端にW6×D15の抉り込みあり。
7	枕木	Pit－6	L58×W12×H13	コナラ節 ISF-482	丸木 （芯持ち）	No.6とセット、樹皮残存 中央両側にL26×D2の削り込みあり。

第4章　第7・8次調査

第1節　遺構と出土遺物

第7次調査と第8次調査の調査区は、本来は一体で扱うべきであり、2ヶ年にわたる調査となった経緯は第2章のとおりである。ここでは一括して扱うこととする。この調査区も、後世の削平を受け、包含層も残っておらず、遺構面も削られている。検出された遺構は、土坑21基、溝17本などである。この他遺構プランがはっきりしない遺構が2基検出された。調査面積は約1,000m²とそれほど広くはないが、出土した土器量は過去の調査通じて最多であった。掲載した土器実測図は130点に及ぶ。このうち51点がSD－701からの出土品である。溝はそのほとんどが東西溝であり、SD－701はそれらの内もっとも南（集落の南端）に位置する。東西溝は集落の拡大、もしくは縮小を示しているのかもしれない。

SK－703とSK－704はSD－701に沿うように検出されている。SK－703からは礎板らしい木製遺物が出土していることから、柱穴と考えられる。SK－704からは完形の甕が埋納されたような状態で出土した。両土坑の間隔は約5.5mで建物の南辺を構成していた可能性が高い。SK－704の土器はおそらく建物廃棄後の祭祀行為であろう。SD－701を環濠と考えれば、この位置に建つ建物は物見櫓か？残念ながら北側は工事により破壊されていたため、それを確かめることはできなかった。

SD－708から出土した壺は、これまで県内では出土例のないものである。西念・南新保遺跡などで、その口縁かとも思われる破片が出土しているが、調査担当者はいずれも器台か壺かを決めかねているようである。事実筆者も当初は器台と考えていた。口縁内面と体部上半の外面は、扇形文と丁字文で加飾されている。常用していたとは考えにくく、祭祀用の土器であろうか。

第2節　第6～9次調査出土の石器について

本書で報告する石器の過半数は第7・8次調査において出土したものであり、20点を数える第6～9次調査出土の石器についての説明もここで一括して行うことにする。

まず、**石鏃**に関しては3点とも凹基無茎で、いずれも第6次調査に係る資料である。石質はすべて（珪化）黒色頁岩で占められる。石質の同定をお願いした小島和夫氏によれば、輝石安山岩にも近い感じがするということであった。既応の調査も含め本遺跡では凹基無茎のものが石鏃の主体をなすといえようか。**打製石斧**は第7・9次において1点ずつ出土。片面に自然面を残す製作技法や石質の面などで縄文時代晩期頃の手取川扇状地の諸遺跡の資料と共通する。大型の打製石斧の下限については弥生時代終末に及ぶとする見解もあり、その場合は過渡期に位置付けられる資料となる。磨石類としては**磨石**1、**凹石**2、**敲石**1、計4点がみられる。以上は縄文時代晩期以来の系譜をひく石器群である。

弥生時代の中期を特徴付ける大陸系の磨製石器類は今回は出土していないが、その現象とは裏腹の関係にあるともいえる**砥石**が4点出土している。中世の砥石に詳しい垣内光次郎氏のご教示によれば、第6次－1と第7・8次－3は石質からみて中砥石的性格を、また第7・8次－5と同じく11は仕上げ砥石的性格を有するのではないかとのことであった。第7・8次－5はサイズから手持ちの砥石、他は置き砥石と考えられる。興味深いのは第6次－1であり、浅くU字状に窪んだ研磨面からはその対象が鉄器とも想像できるが、その点に関しては今後の課題としたい。

石製品としては第9次出土の**小玉**が1点ある。装飾品であろう。

これら以外では、定形的な石器（TOOL）ではないが**剝片**5点と**礫**1点があげられる。本遺跡周辺では礫の散布はみられず、いずれも少なくとも数キロメートル離れた地点からの搬入品である可能性が高いことには注意する必要があろう。

上記諸石器の年代については、第6～8次調査では出土した土器が弥生時代中期後葉、第Ⅳ様式併行の「戸水B式」期にほぼ限られるため、その時期に属する蓋然性が高い。一方、第9次調査出土資料には弥生時代終末から古墳時代前期に降る土器も認められることから、他に比して後出する時期のものが含まれることが十分に考えられる。

第5表　第6次調査出土石器属性表　　（　）＝遺存値

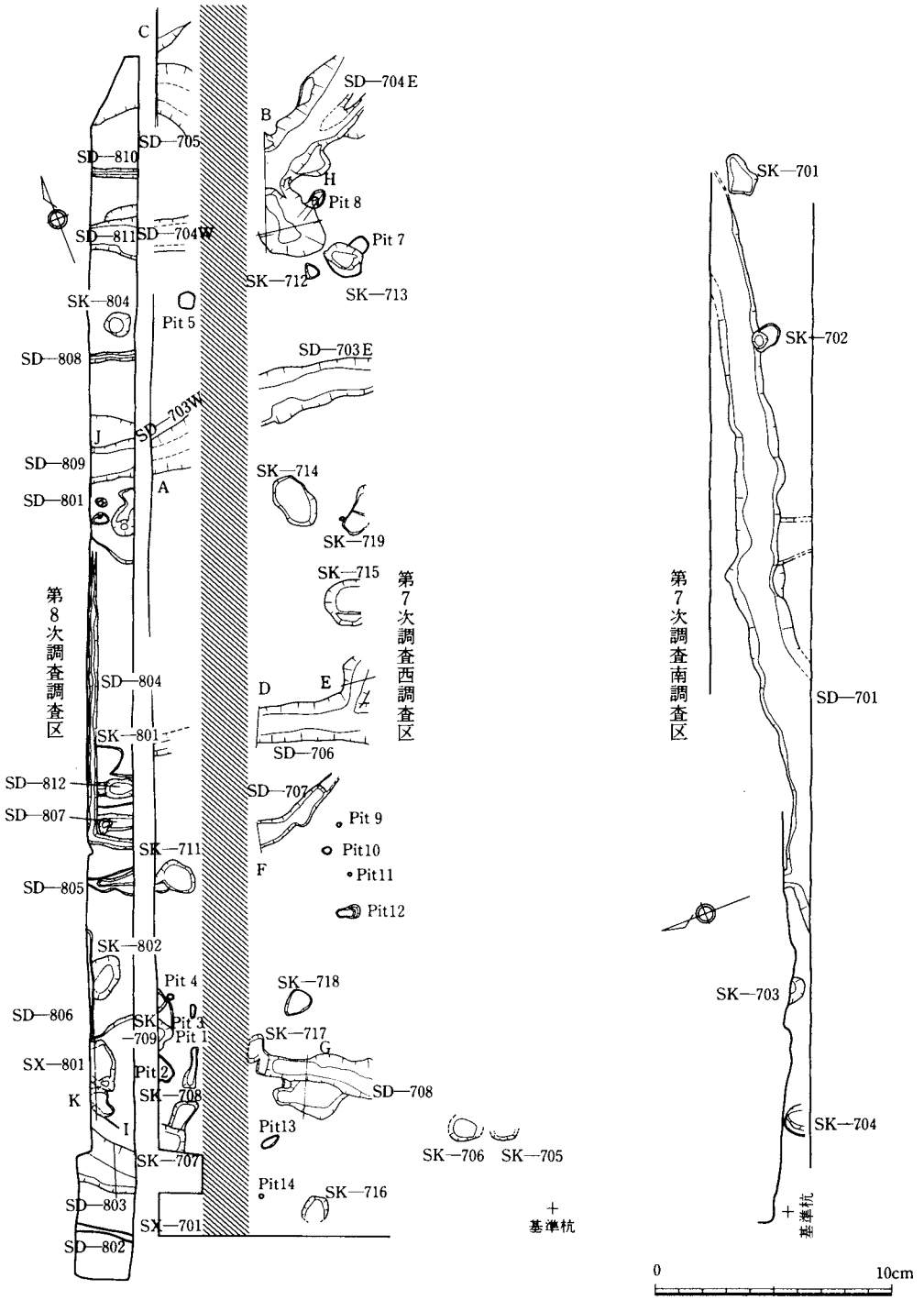
No.	器種	出土地	大きさ(cm)	重量(g)	石質	備考
1	砥石	SK604	長さ(7.7)、幅6.3 厚さ5.5	(397.3)	細粒砂岩	上部欠損。下端を除く4面で明瞭な使用痕。全体に火を受けた痕跡。一部に黒い付着物。
2	石鏃	SD601	長さ(2.6)、幅2.4 厚さ0.4	(1.8)	(珪化)黒色頁岩	凹基無茎。先端及び右脚若干欠。
3	石鏃	SD601	長さ2.2、幅1.8 厚さ0.4	1.1	(珪化)黒色頁岩	凹基無茎。
4	石鏃	SD601	長さ(2.0)、幅1.6 厚さ0.6	(2.2)	(珪化)黒色頁岩	凹基無茎。先端部欠損。

第6表　第7・8次調査出土石器属性表　　（　）＝遺存値

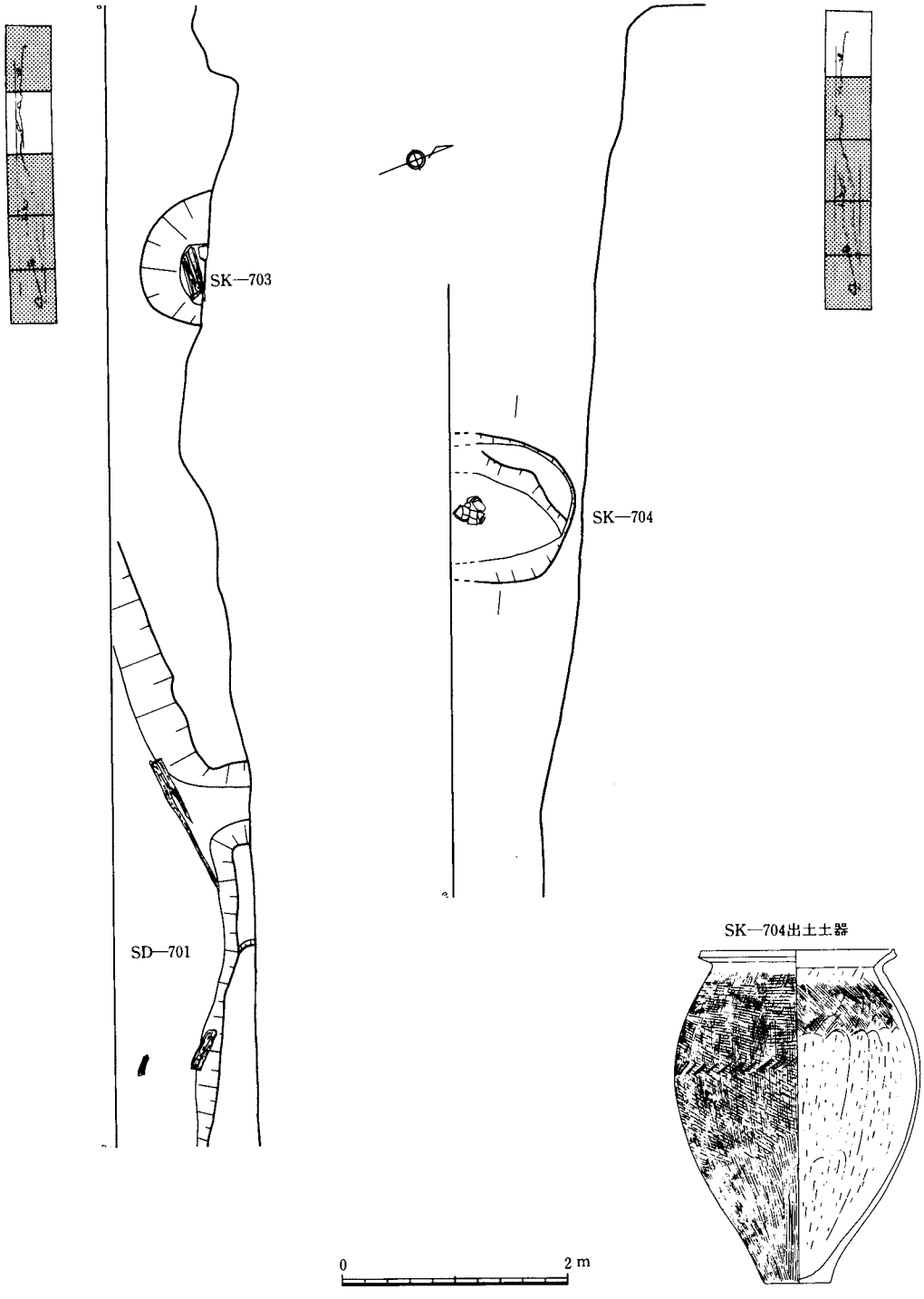
No.	器種	出土地	大きさ(cm)	重量(g)	石質	備考
1	打製石斧	SK712	長さ17.1、幅10.5 厚さ3.5	541.1	角礫凝灰岩	バチ形。片面が自然面。
2	凹石	SK706	長さ16.8、幅6.5 厚さ3.3	481.0	石英斑岩	両面に凹み。
3	砥石	ピット5	長さ7.8、幅4.2 厚さ2.3	97.4	細粒砂岩	表面・右側面で使用痕明瞭。左側面にV字状の溝。下端中心に火を受けた痕跡。
4	剥片	SD704	長さ13.4、幅12.8 厚さ2.8	346.1	流紋岩	小型の打製石斧の素材礫？
5	砥石	8次 包含層	長さ6.3、幅1.4 厚さ1.1	17.4	流紋岩	上端を除く5面に明瞭な使用痕。
6	磨石	7次 ?	長さ11.3、幅(9.8) 厚さ4.4	(643.4)	流紋岩	一部欠損。労面に顕著な磨痕。両面及び側縁全周に敲打痕。上端が茶色に変色。
7	敲石	7次 ?	長さ12.7、幅4.9 厚さ3.3	(321.2)	珪岩	上下両端に敲打痕。表面に顕著な磨痕。
8	剥片	7次 ?	長さ11.5、幅9.2 厚さ2.8	297.6	珪化細粒凝灰岩	片面が自然面。左側縁が鋭利。
9	剥片	7次 ?	長さ12.7、幅13.3 厚さ2.4	599.2	安山岩	縁辺部に2次加工あり。
10	剥片	7次 ?	長さ16.4、幅11.2 厚さ3.9	751.0	流紋岩	両極打法？
11	砥石	7次 ?	長さ9.1、幅4.3 厚さ2.9	128.9	珪化細粒凝灰岩	表面及び右側面上部で使用痕跡顕著。

第7表　第9次調査出土石器属性表　　（　）＝遺存値

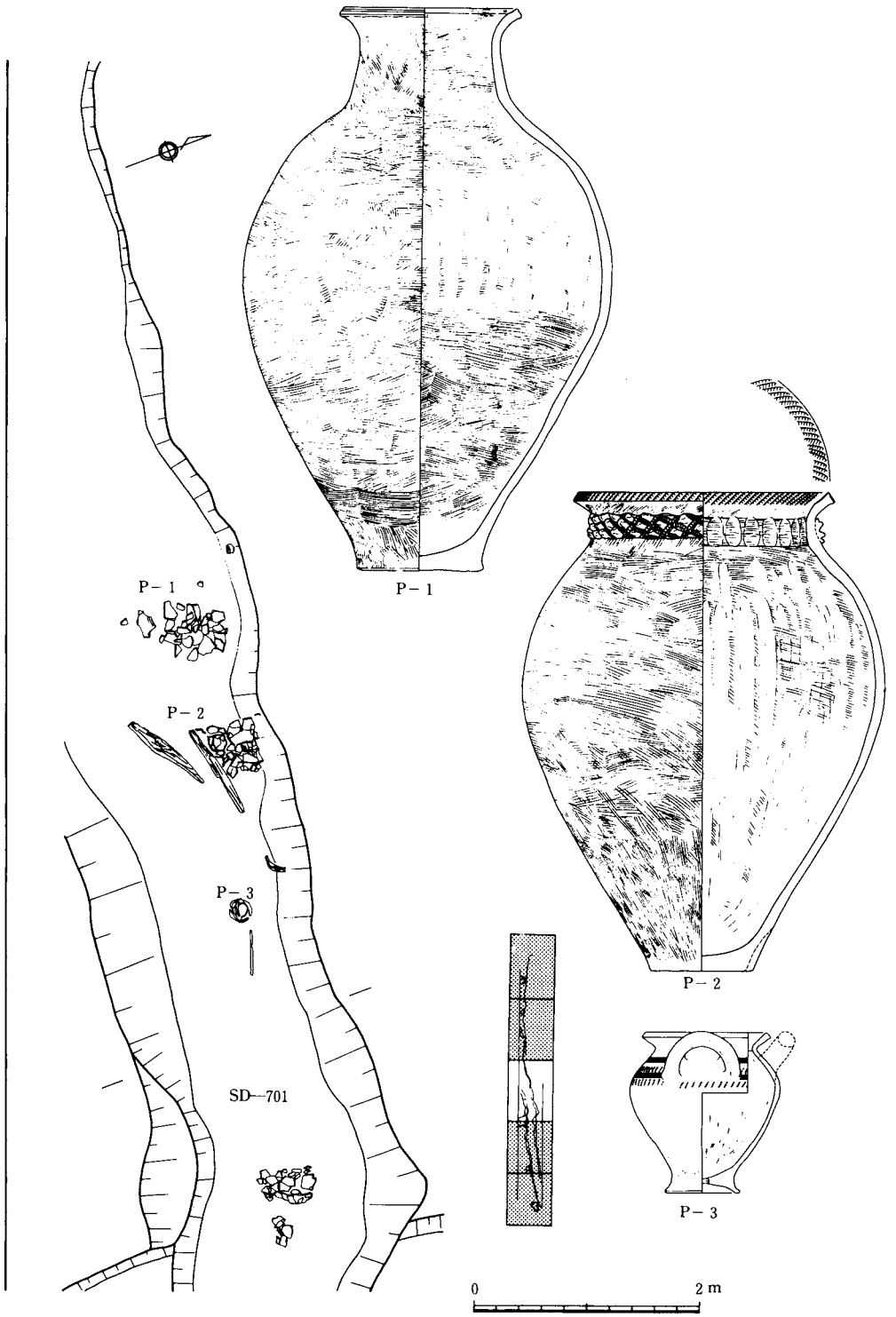
No.	器種	出土地	大きさ(cm)	重量(g)	石質	備考
1	打製石斧	環濠	長さ27.2、幅12.6 厚さ4.8	1476.9	角礫凝灰岩	刃部に磨耗あり。
2	凹岩	環濠 下層	長さ9.9、幅8.9 厚さ4.5	536.7	安山岩	全体に風化進む。両面に凹み。側縁全体に敲打痕。
3	礫	SX901	長さ14.9、幅4.2 厚さ4.1	497.0	流紋岩	敲打痕はないが全面がトロトロとなる。
4	剥片	環濠	長さ(12.2)、幅14.3 厚さ3.7	(748.7)	玢岩	上部を欠損。側縁の一部に2次加工あり。
5	小玉	環濠	径0.3 高さ0.2	0.1	玄武岩？ 安山岩？	孔径0.12cm



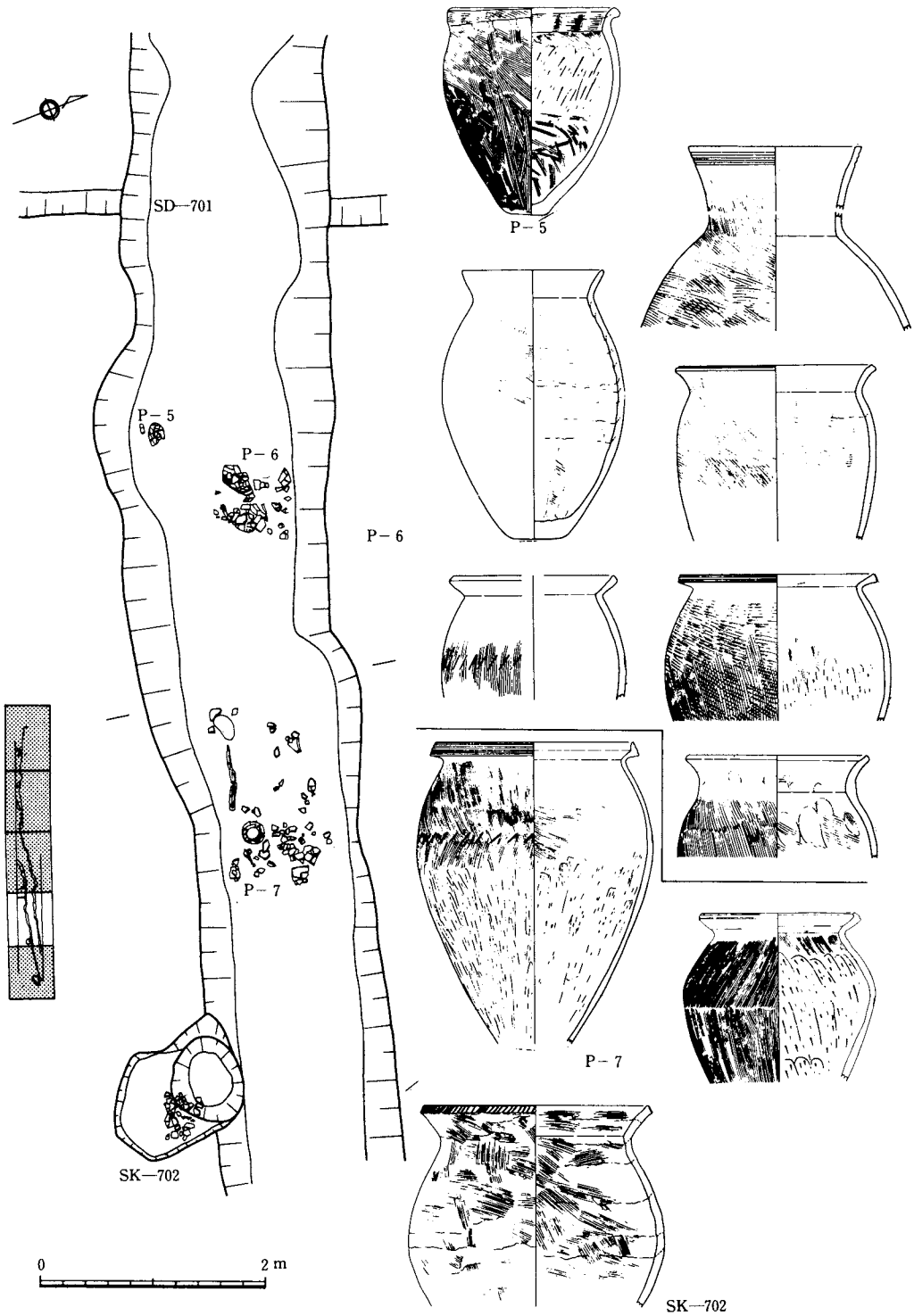
第26図　第７・８次調査　平面図



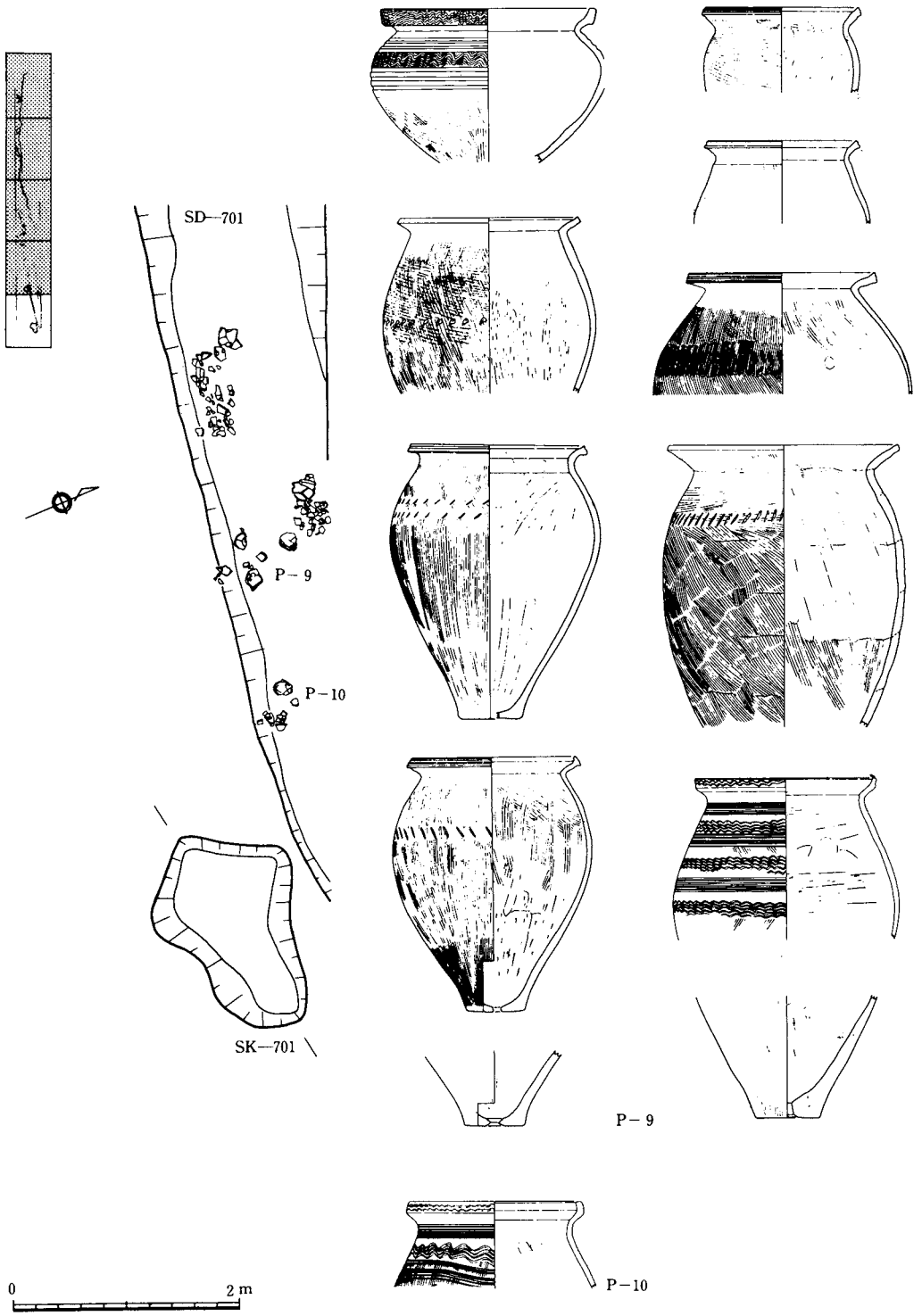
第27図　第７次調査　南調査区平面図（１）



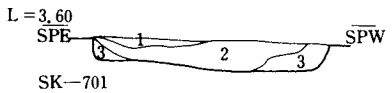
第28図　第７次調査　南調査区平面図（２）



第29図　第７次調査　南調査区平面図（３）（S＝１/60）

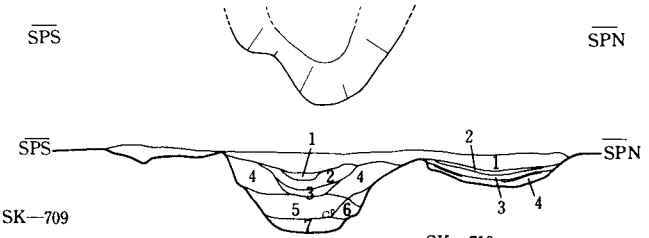


第30図　第７次調査　南調査区平面図（４）（S＝１/60）



SK—701

1　暗茶灰褐色土
2　黄白灰色土
3　淡暗灰色土（地山質とベースとし暗い）

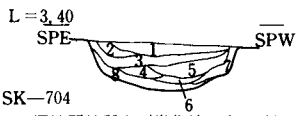


SK—709

1　暗灰褐色シルト（炭化物多量）
2　濁黄灰白色粘土（地山質埋め土）
3　暗灰褐色土（シルト）（炭化物多い）　自然堆積
4　濁青灰褐色土（地山質砂層混）
5　青灰色粗砂混土（灰褐色シルト＋青灰色粗砂）
6　青灰褐色粗砂混土（７層混じり）　埋め土
7　灰色粘土層（植物含みピート質）——自然堆積

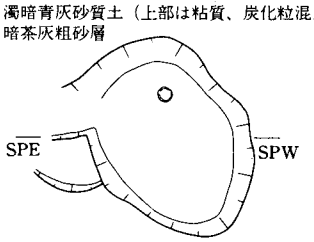
SK—710

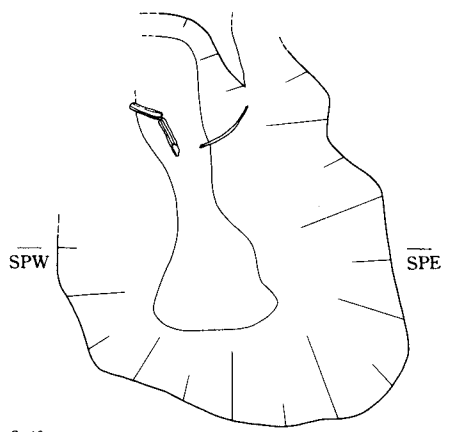
1　濁淡灰褐色シルト（遺構上面埋め土）
2　地山（黄灰白色粘土）質埋め土（①層＋地山）
3　暗灰褐色シルト（炭化物多い）←土器含む
4　暗灰褐色シルト（細かい地山土混）

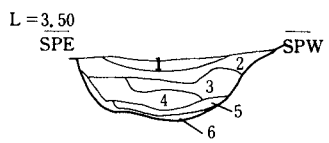


SK—704

1　濁淡灰粘質土（炭化粒　小石砂混入）
2　濁暗灰粘質土（炭化粒　小石　砂混入）
3　濁暗灰砂質土（炭化粒混入　やや粘）
4　濁灰粘質土　（炭化粒混　砂っぽい）
5　濁青灰砂質土（粗粒の砂　しまり良し）
6　淡青灰粘質土
7　濁暗青灰砂質土（上部は粘質、炭化粒混入）
8　暗茶灰粗砂層

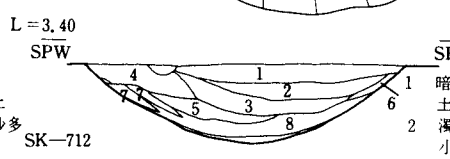






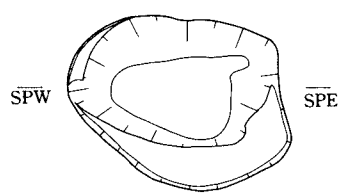
SK—711

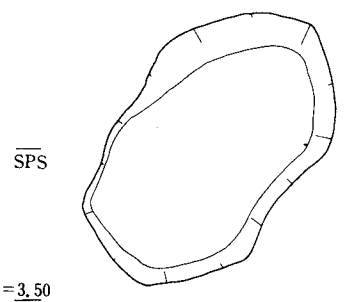
1　暗灰褐色シルト（遺構鞍部堆積土）
2　灰褐色シルト（粗砂若干混じる）　自然堆積
3　濁灰褐色土（灰褐色シルト、地山粗砂層）　埋め土
4　濁青灰褐色粗砂混土（灰褐色シルト少＋地山の粗砂多細礫）
5　灰色粘土層
6　黒色炭化物層

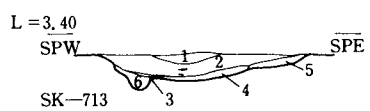


SK—712

1　暗灰褐色土（下層より褐色強い炭化物、小片土器多い）
2　濁暗灰褐色土（上層より灰色強い、炭水化物、小片土器多い）　※１・２は鞍部自然堆積
3　濁黄灰色粘土＋粗砂（地山による埋め土）
4　濁黄灰白色粘土（地山質土）　埋め土
5　青灰色シルト
6　８層＋暗灰褐色土
7　黄灰色粘土（地山質土）
8　黒色炭化物層（植物質、暗灰褐色シルト～粘土と稿状に互層をなす）
9　茶褐色ピートに黒色炭化物層（８層）が混じる

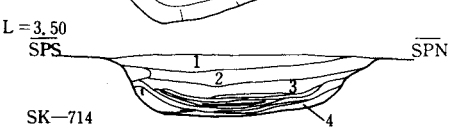






SK—713

1　暗灰褐色土
2　濁暗灰褐色土（砂混じり、炭化物、土器多い）（１、２は鞍部自然堆積）
3　地山質粘土
4　暗灰褐色土＋黒色炭化物層
5　地山＋灰褐色シルト
6　濁青灰褐色砂混じり土
地山：黄灰白色粘土

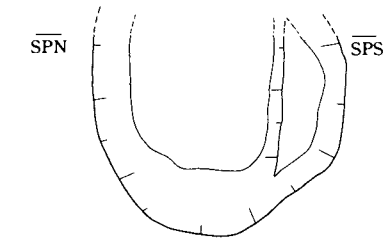


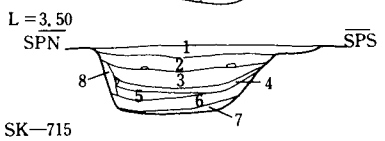
SK—714

1　濁灰褐色砂まじり土
2　濁青灰褐色砂混土（炭化物少量、土器小片）　自然堆積？
3　濁暗灰褐色土（黄灰色シルト地山細かいブロック状に多量含む炭化物多量）　埋め土
4　暗灰色土（上面に茶色のピート（植物）のる）

0　10cm

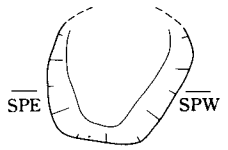
第31図　第７次調査　遺構図（１）（S＝1/60）

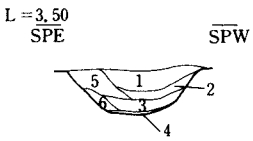




SK—715

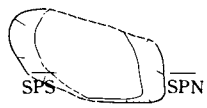
1　灰褐色粘質土　I
2　灰褐色粘質土　II
3　粘土ブロックまじり暗灰褐色土
4　炭化物まじり暗灰褐色土
5　黄灰色粘質土
6　黒色炭化物層
7　青灰色粘質土間層
8　暗灰色砂質土

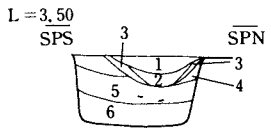




SK—716

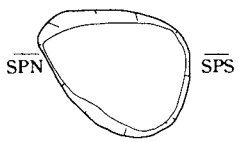
1　黄褐色粘質土
2　地山及び炭まじり灰褐色粘質土
3　灰褐色粘質土　　自然堆積層
4　黒色炭化物層
5　地山質黄褐色土
6　地山質灰褐色土





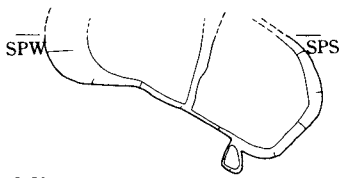
SK—717

1　暗灰褐色土（炭化物粒少量含む）
2　炭化物を主体とする暗灰褐色土（粘性）
3　濁灰褐色土（粘性）
4　黄灰黄色土（粘性で地山に類似す）
5　淡灰黄色土（粘と砂のまざる土で4層よりやや濁る感じ）
6　暗灰色粘性土（部分的に地山の砂をかむ）



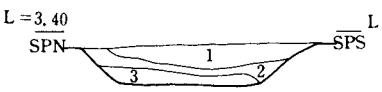
SK—718

1　黄灰色粘性土（細かい炭化物粒少量含む）
2　灰黄色粘質土（炭化物を層的に含んでいる）
3　黄白色粘質土（地山）



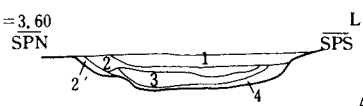
SK—719

1　濁黄灰白色シルト
2　濁黄灰色粗砂
}土器含む



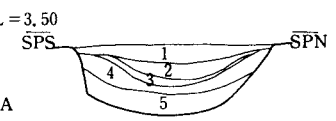
SD—701

1　暗茶灰褐色土（炭化物少量粘性強）遺物取り上げ（上層）
2　黄灰色土（ベースに極めて近い色　粘性やや弱）
3　暗淡灰色土（粘性やや強　炭化粒少量混入）
}下層



SD—701

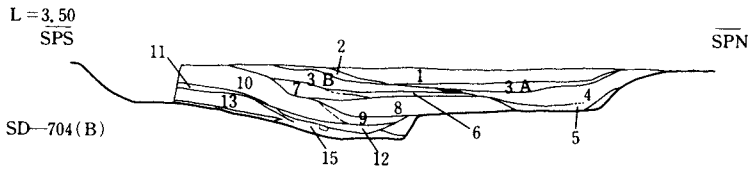
1　暗茶灰褐色土　　（上層）
2　暗淡灰色土（ベースに極めて近い色　但し暗い粘性やや強）
2′　より地山に近く明るい、砂っぽい
3　濁濃暗灰褐色土（下2cmに炭化物層、径数ミリの黄色の斑点あり
粘性強、もっとも暗い色調）
4　濃灰色土　　（3より砂っぽい）
}（下層）



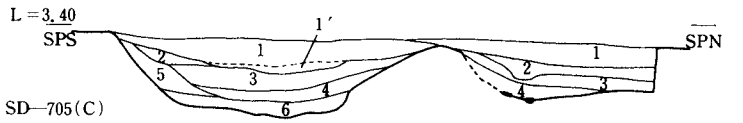
SD—703

1　暗茶褐色土　I
2　粘土ブロックまじり暗茶褐色土
3　炭化物層
4　暗茶褐色土　II
5　暗茶褐色粘質土
6　青灰色粘質土地山

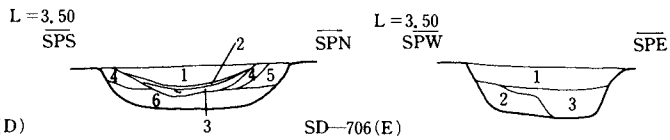
第32図　第7次調査　遺構図（2）（S＝1/60）



SD704
1　淡茶褐色、粘砂混土
2　黄褐色粗粒砂
3 A　茶褐色粘砂土で炭化粒を間帯する
3 B　茶褐色粘砂土（炭化粒の不在層）
4　灰褐色粗砂層
5　暗灰色粘＋炭化物粒（少量）＋粗砂の混土
6　暗灰色粘土に炭化物（比較的多し）の混土層
7　灰茶褐色粘質土層
8　灰色粘土層
9　灰白色粘土層（左側の立ち上がり不明瞭）
10　黄灰色粘性で地山土同質（大粒炭化粒あり）
11　灰色粘土に薄く炭化物粒を含んでいる
12　草炭を主とした層（炭化途中のような茶色）
13　濁黄灰色粘性土（地山土のにごった感じの層）
14　灰白色粗粒層
15　黒い炭化物主とした層（部分で砂、粘土をかむ）



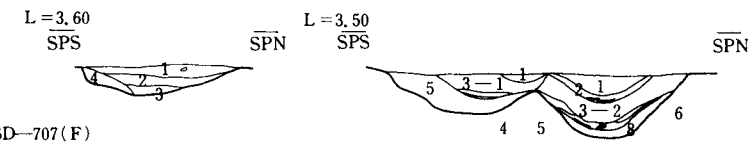
SD—705
1　濁青灰色粗砂（＝地山の埋め土）
（細礫混、中央下位は黄灰白色粘土も混じる）
2　白色褐色粘土（基本的には3層のつづき）
3　暗灰褐色土
4　黒灰色土（3層に黒色炭化物を大量に含む層）
5　暗灰白色粘土（地山質小、炭化物少量）
6　暗灰色土（木片　木器類多い）
※2～6　自然堆積



SD—706(D)
1　濁黄灰色粘質土
2　灰褐色粘質土に炭化物を層的に含む
（比較的細かい炭粒）
3　基本的に2層であるが、炭化材質が大きな粒をなしまばらに点在
4　淡灰褐色土（砂っぽい）
5　淡灰黄色土（砂っぽい）
6　暗黄灰色粘質土（細かい炭粒少量含まれているが目立たず）

SD—706(E)
1　濁黄灰色砂混土
2　濁青灰色砂まじり土（黄灰白色粘土の地山ブロック少量）
3　2層＋黄灰白粘土（地山）ブロック多い

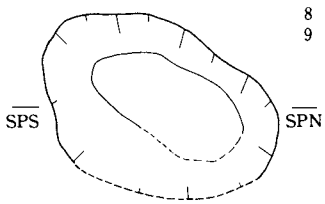
落ち込み
1　濁青灰色砂混土（埋め土）
2　濁黄灰色砂混じり土（SD—705の1′層…埋め土）
3　暗褐色土（炭化物多い　植物質の炭化）
SD—705の（3、4）層に対応）
4　灰褐色粗砂混じり土（加工木片　土器含む）

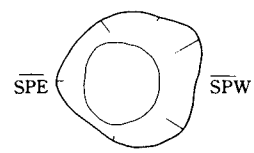


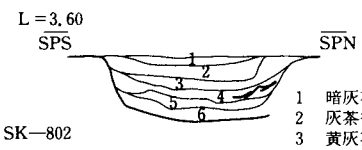
SD—707(F)
1　暗茶褐色土
2　暗茶褐色土（砂まじり）
3　暗茶褐色土粘質土
4　明黄褐色粘質土

SD—708(G)
1　地山質暗黄褐色土
2　地山質暗黄褐色土（炭化物多く含む）
3　地山質暗黄褐色土（砂まじり）
3—1は粗砂多し　3—2は少ない
4　地山質黄褐色粘質土
5　粘土ブロックまじり　灰褐色粘質土（地山質）
6　シルト質　灰褐色粘質土
7　黒色炭化物層
8　青灰色シルト層
9　青灰色粘質土地山

P—8(H)
1　暗灰褐色土（炭化物小片含む　シルト～砂混じり）
2　〃　（地山粗砂混　上層より粘性
強く暗い色調）





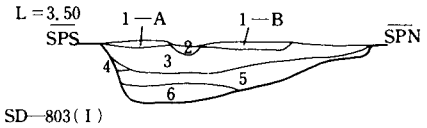


SK—802

1　暗灰茶褐色土（炭化物少量含む）
2　灰茶褐色土（炭化物少量含む）
3　黄灰茶褐色土（岩化物少量含む）
4　灰茶褐色土（2より濃く炭化物を多量に含み土器出土層）
5　淡黄灰色土（炭化物少量含む）
6　淡灰色土（炭化物多量含む）
強粘質土

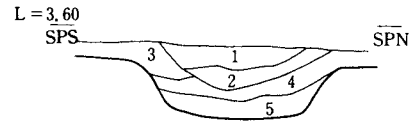
SK—804
暗灰茶褐色土（炭化物少量含入）

第33図　第7・8次調査　遺構図（S＝1/60）



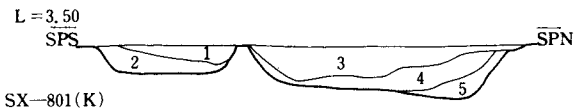
SD—803（I）

1—A
1—B　黒色粘質土
2　暗灰色粘質土
3　灰色粘質土（炭化物少量含む）
4　灰色砂質土
5　淡灰色粘土（土器出土炭化物少量含む）
6　灰色粘質土（3より明るい）



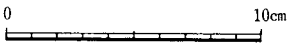
SD—809（J）

1　暗灰茶褐色土（炭化物少量含む）
2　淡灰褐色土（層最下部炭化物多量含む）
3　暗灰茶褐色土（1より淡い）
4　灰褐色土（炭化物少量含む）
5　灰色土（炭化物少量含む）

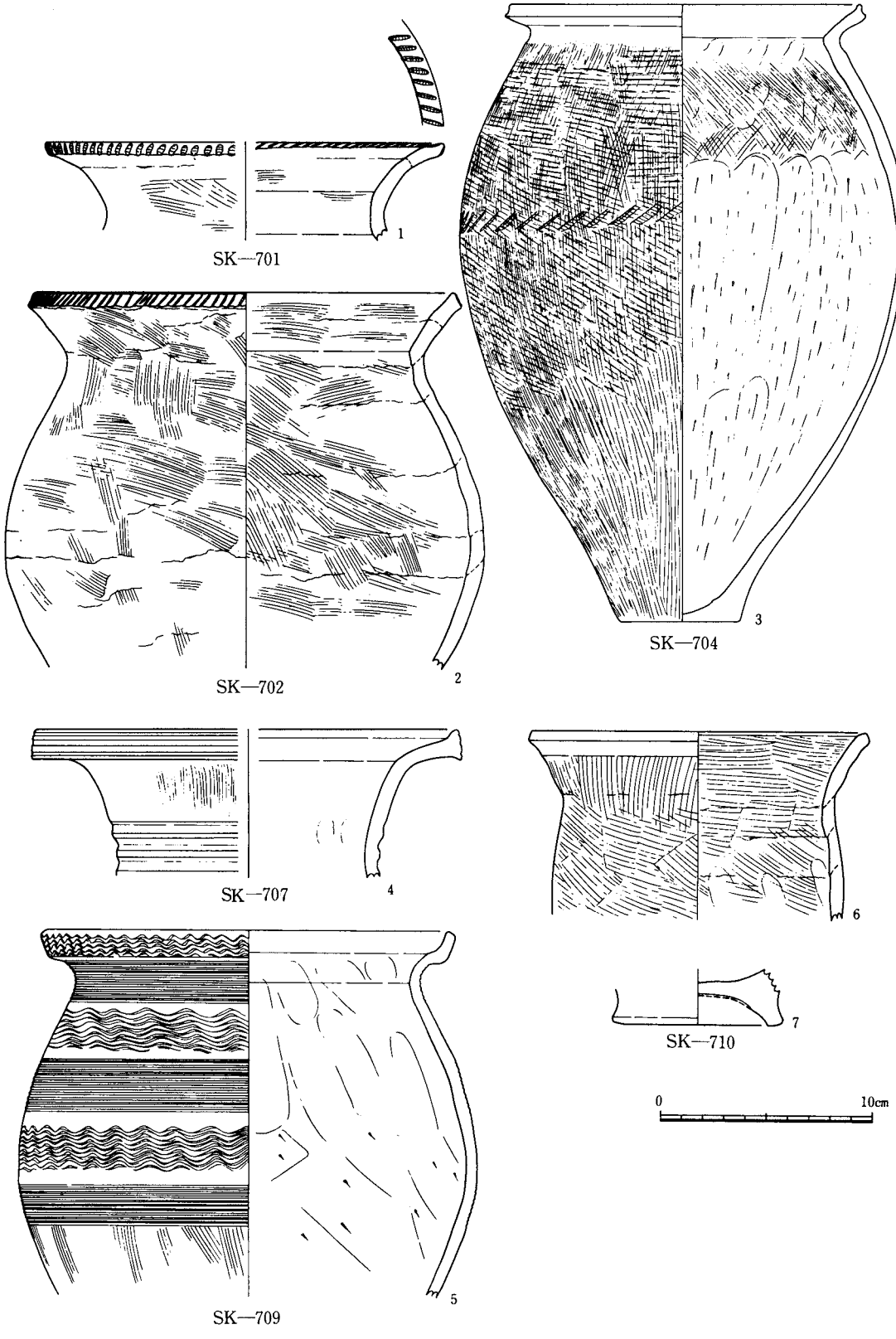


SX—801（K）

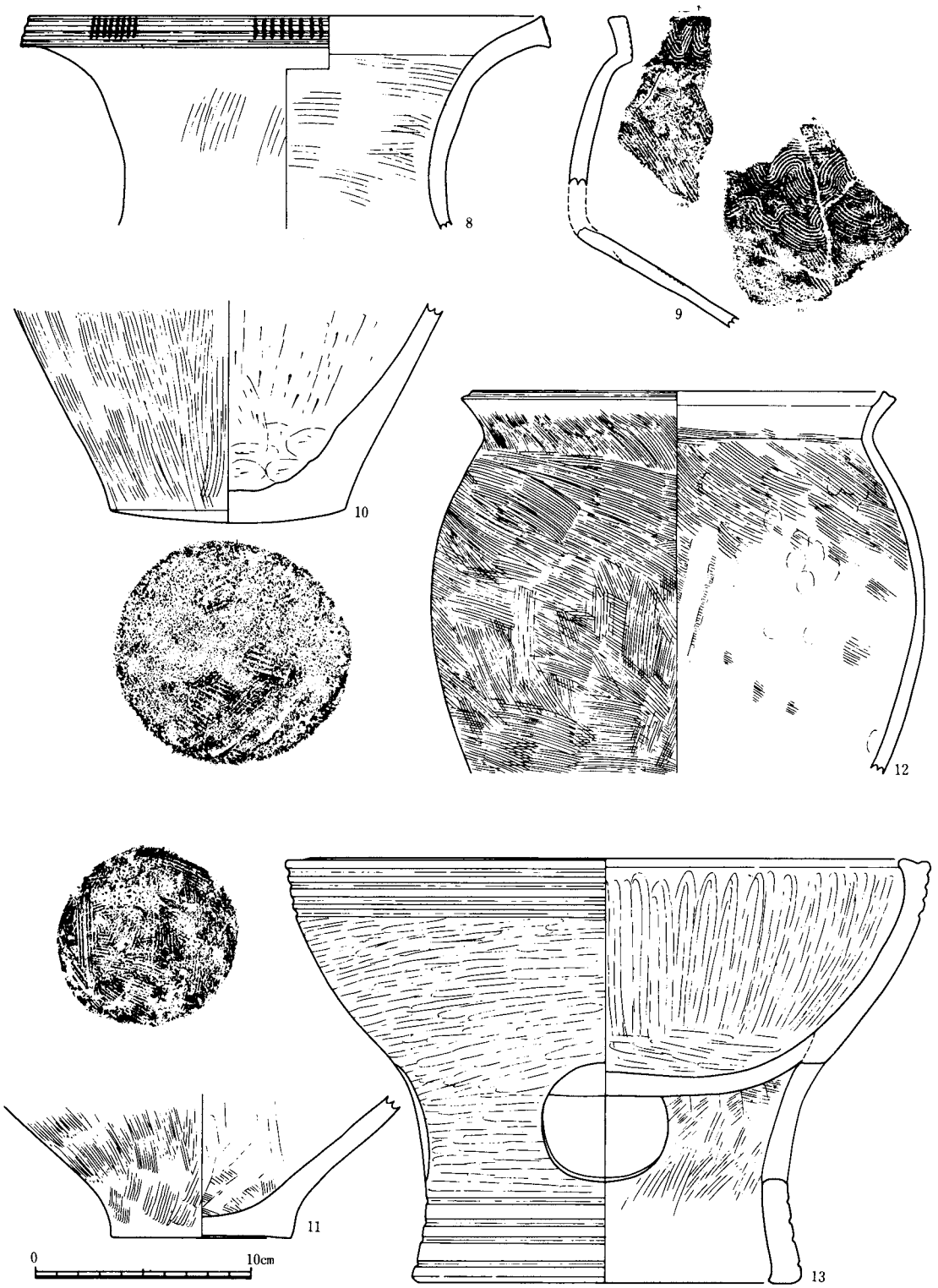
1　暗灰色粘質土
2　淡黄灰色粘質土（岩化物少量含む）
3　灰色粘質土（炭化物多量）
4　灰色粘質土（炭化物多量　3より明るい）
5　灰色シルト層（炭化物少量）



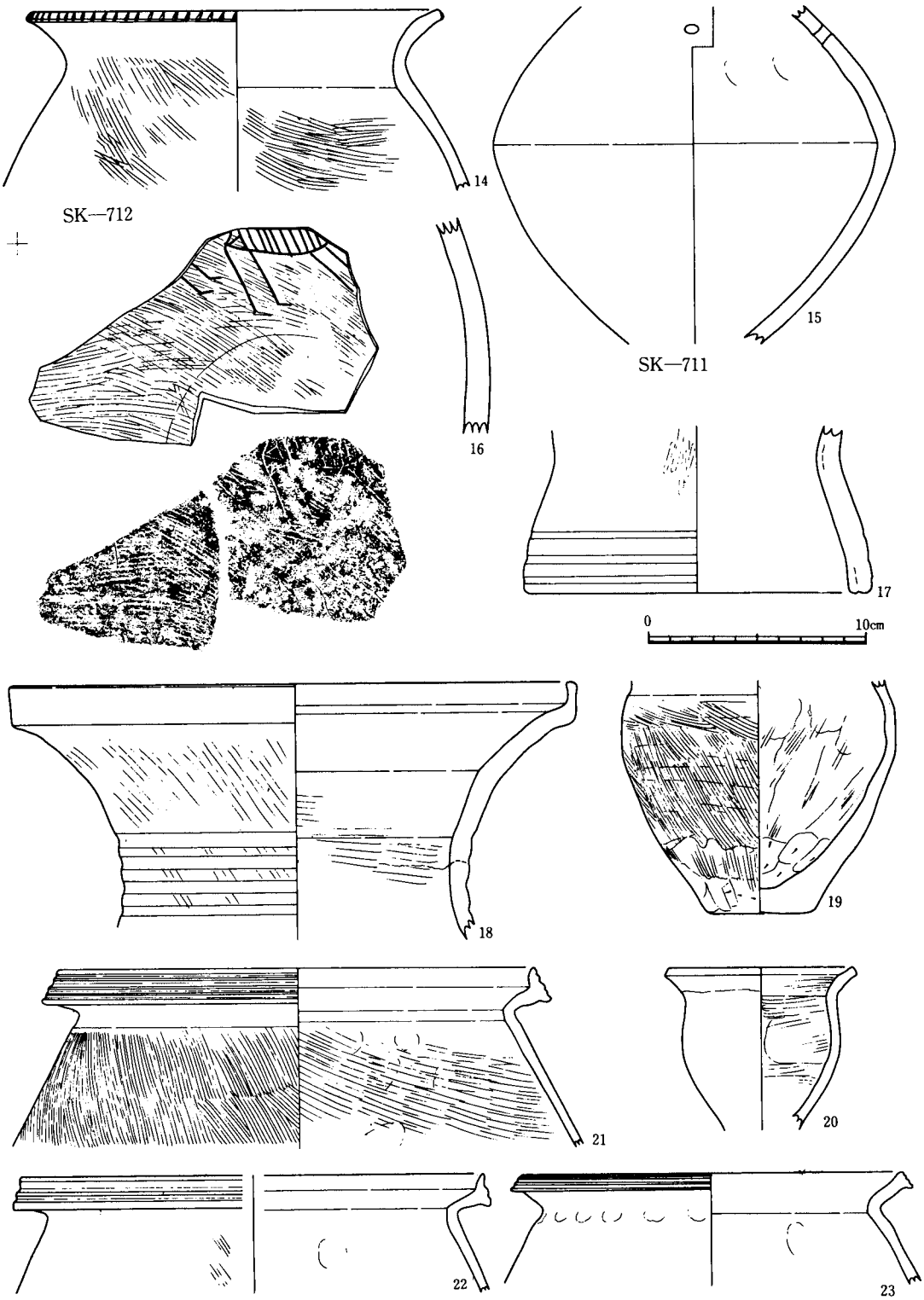
第34図　第8次調査　遺構図（S＝1/60）



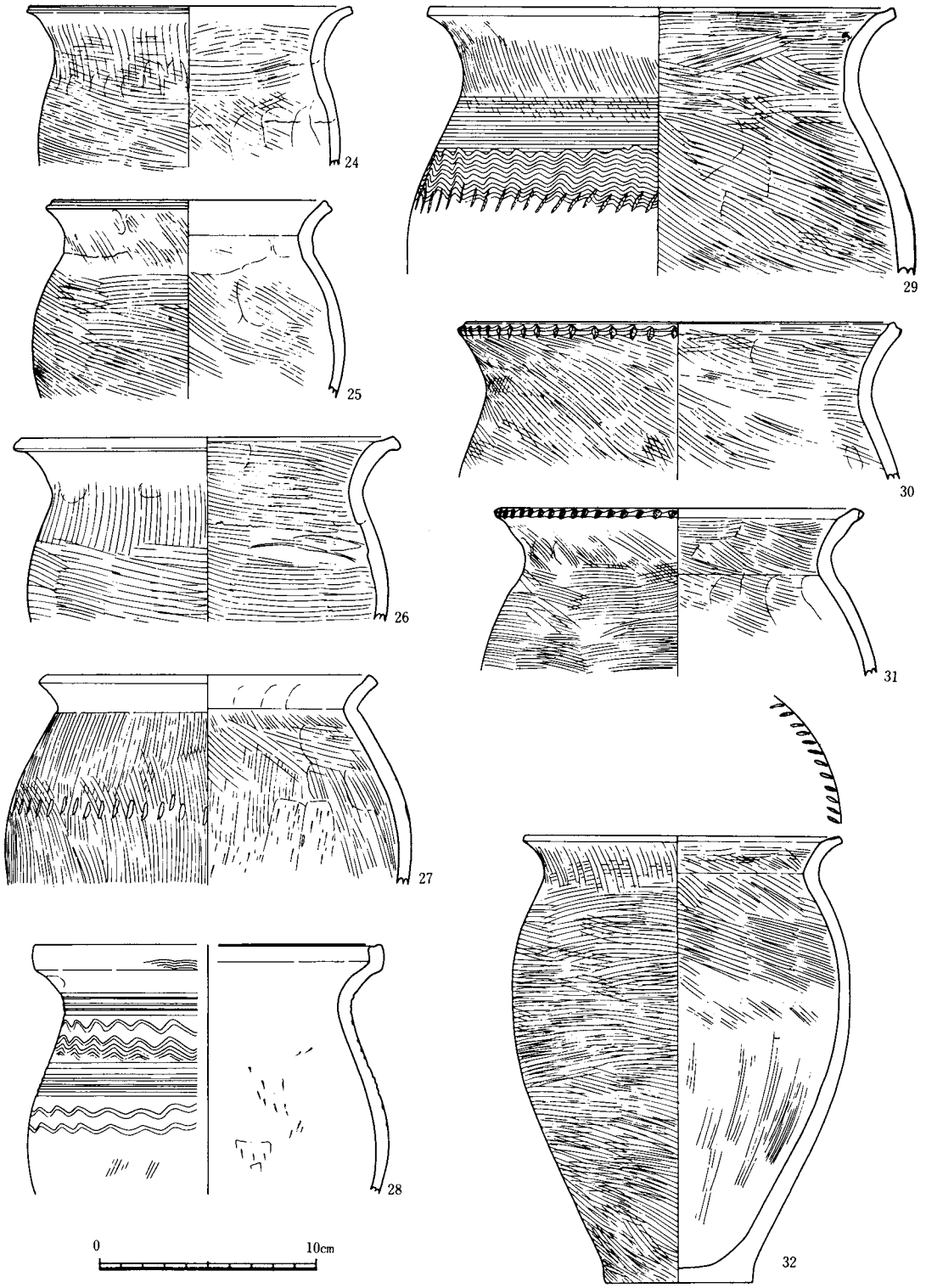
第35図　第７次調査　出土土器（１）



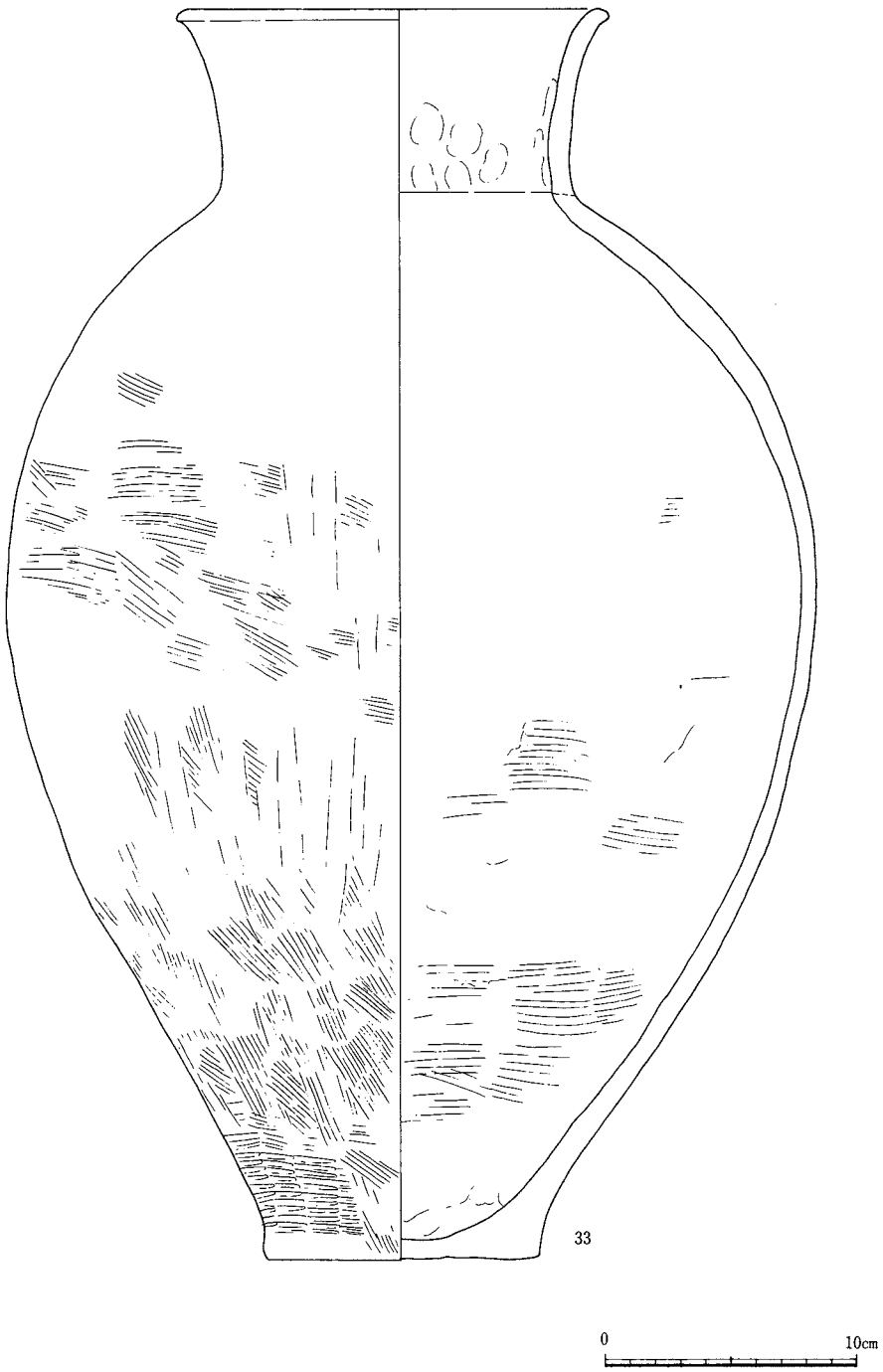
第36図　第７次調査　出土土器（２）(SK－706)



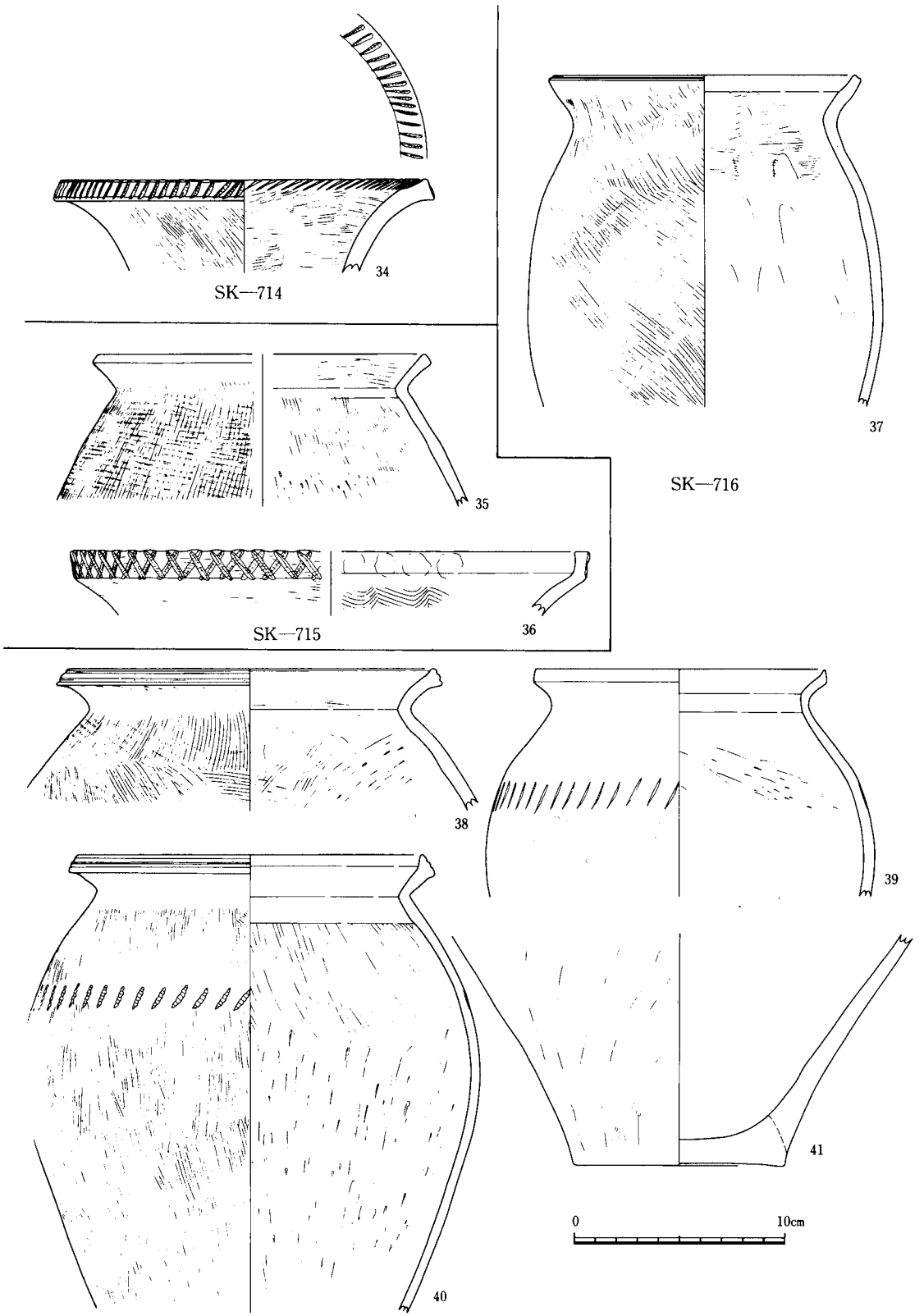
第37図　第７次調査　出土土器（３）



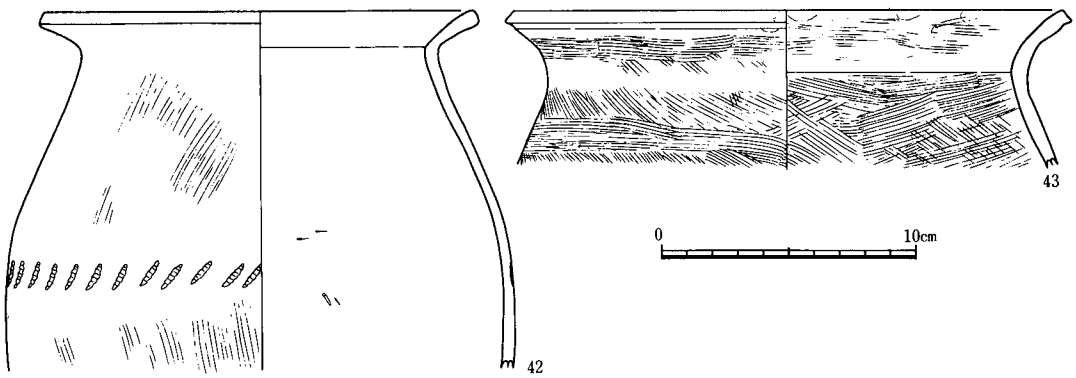
第38図　第７次調査　出土土器（４）(SK－712)（S＝１／３）



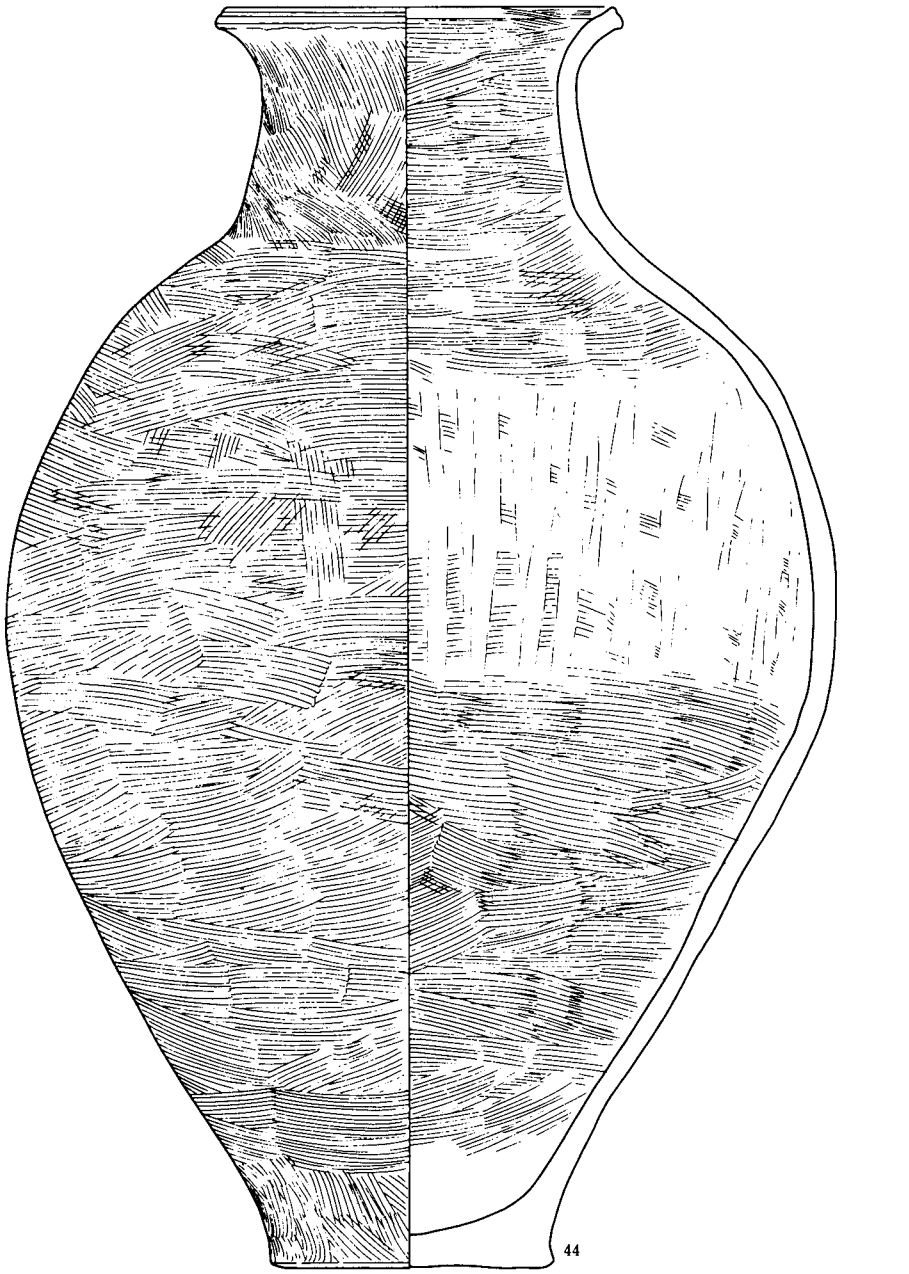
第39図　第７次調査　出土土器（５）(SK - 714)



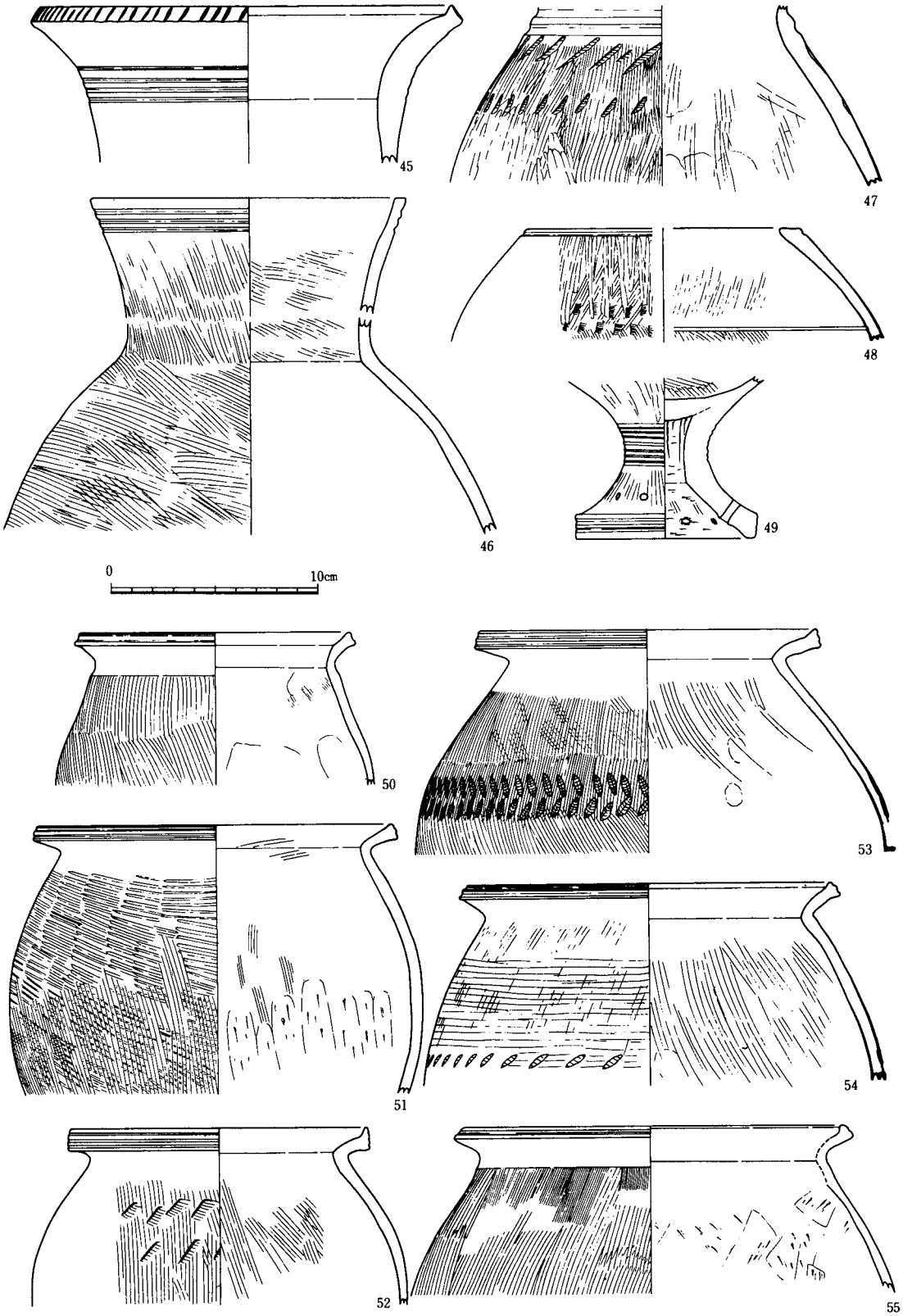
第40図　第７次調査　出土土器（６）



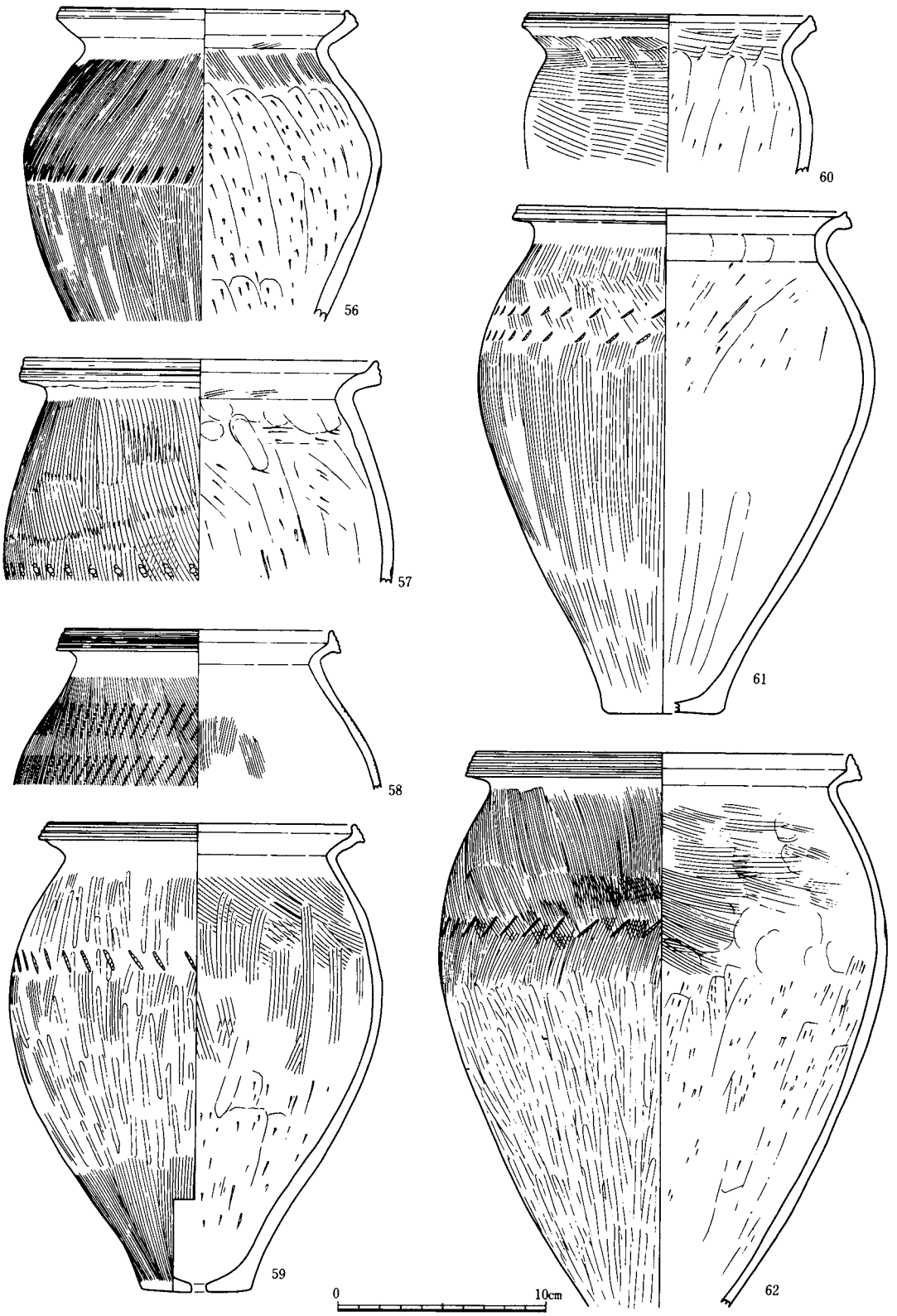
第41図　第７次調査　出土土器（７）(SK－717)（S＝1／3）



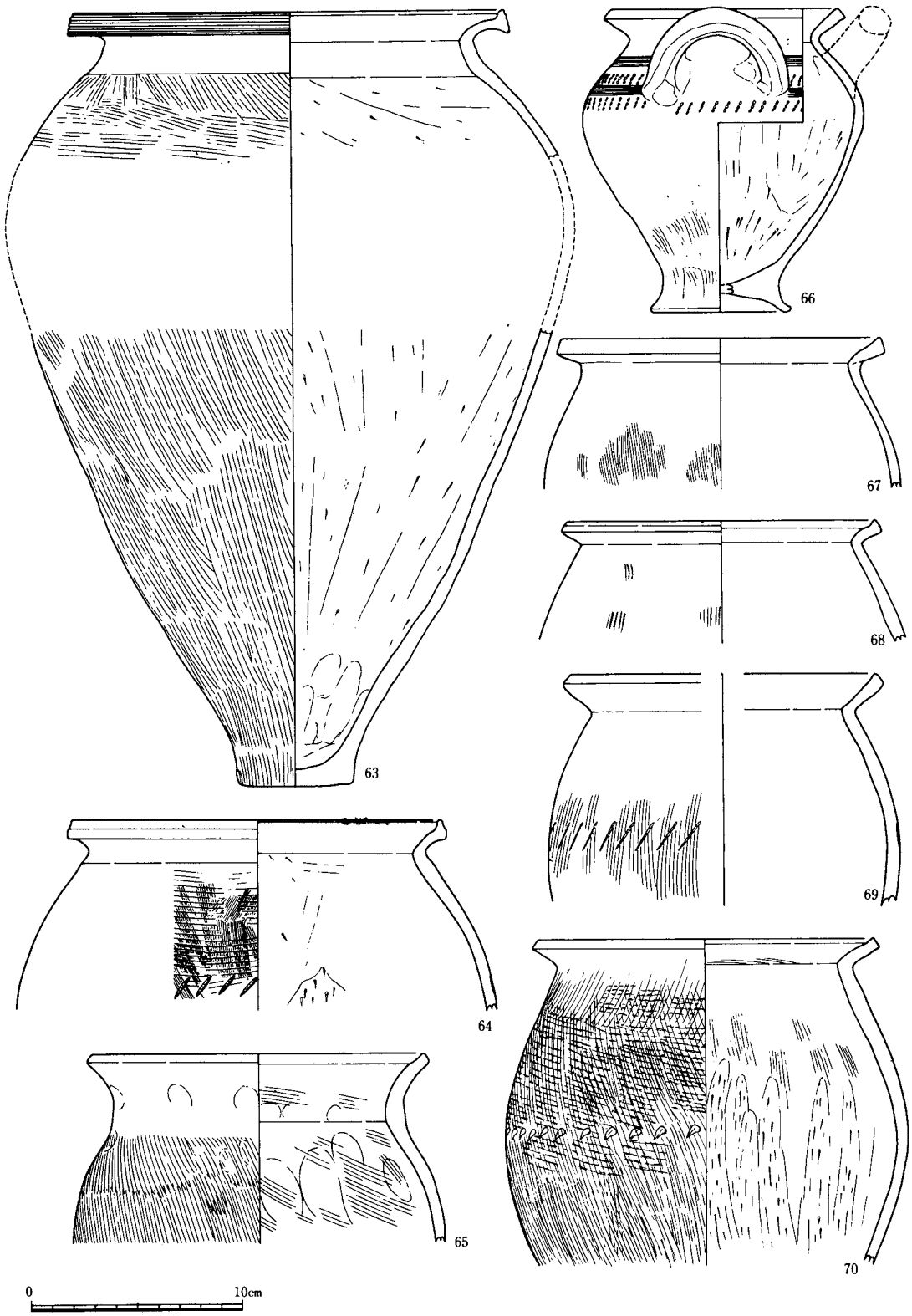
第42図　第７次調査　出土土器（８）(SD－701P－１)（S＝１／３）



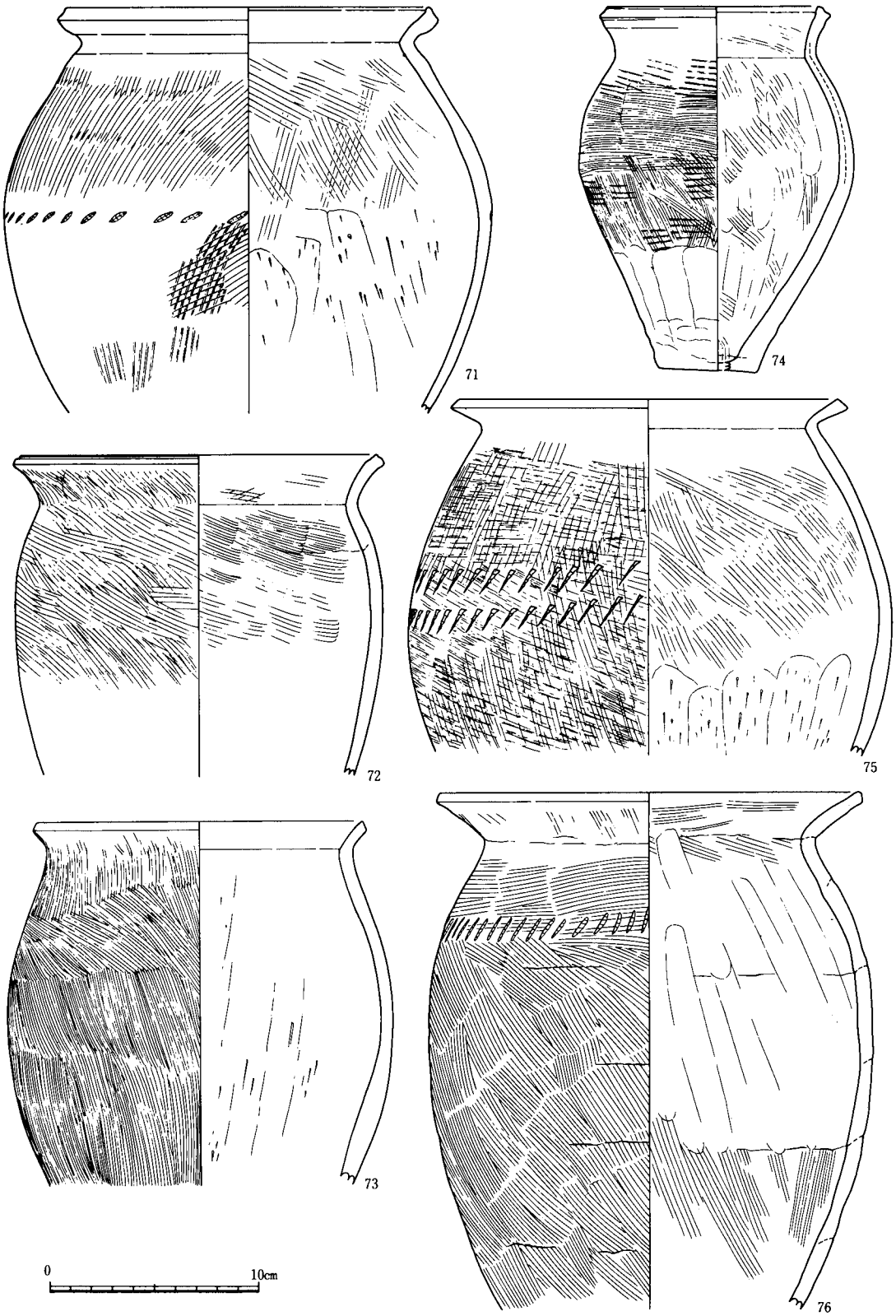
第43図　第７次調査　出土土器（９）(SD－701)



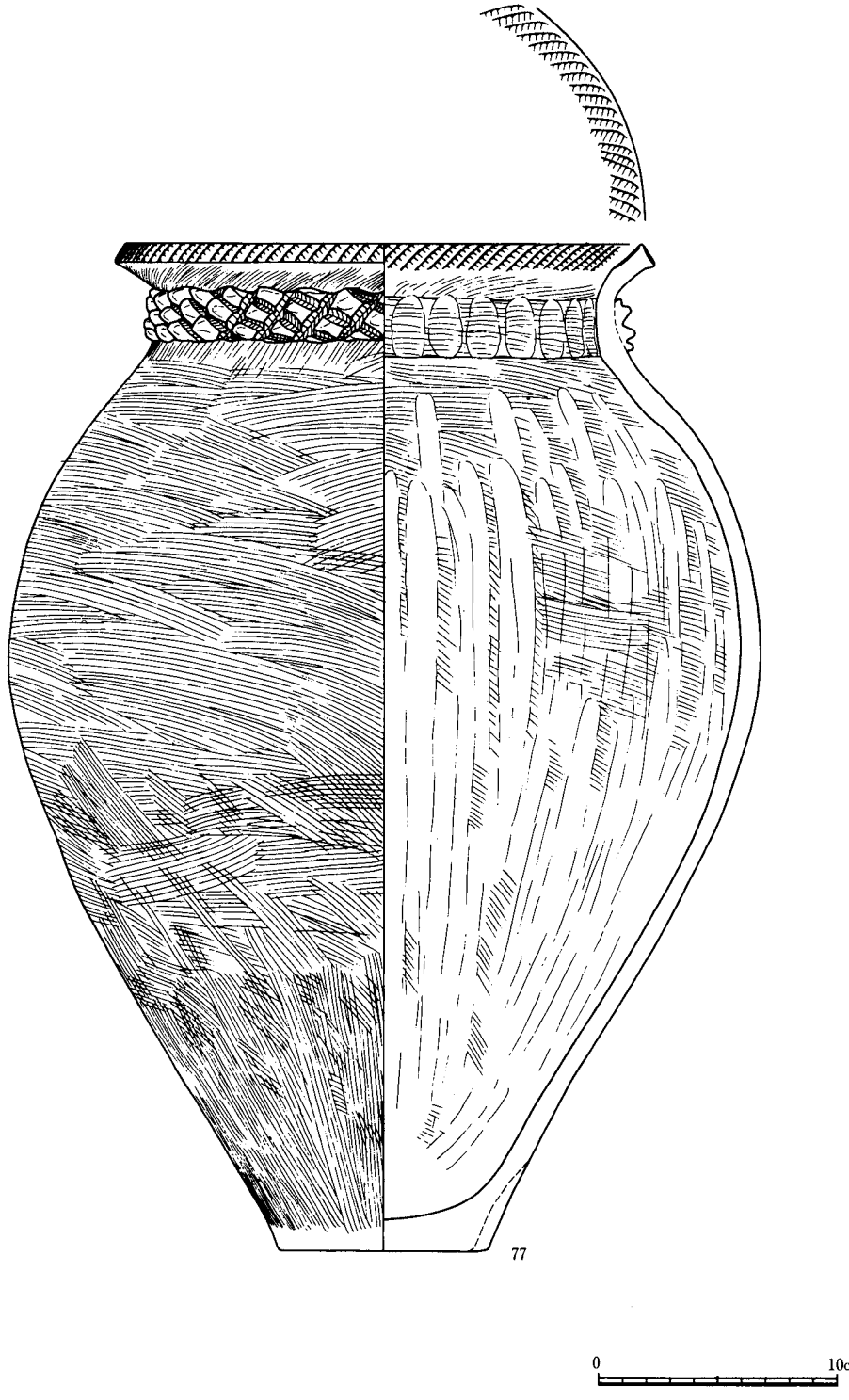
第44図　第７次調査　出土土器（10）(SD－701)



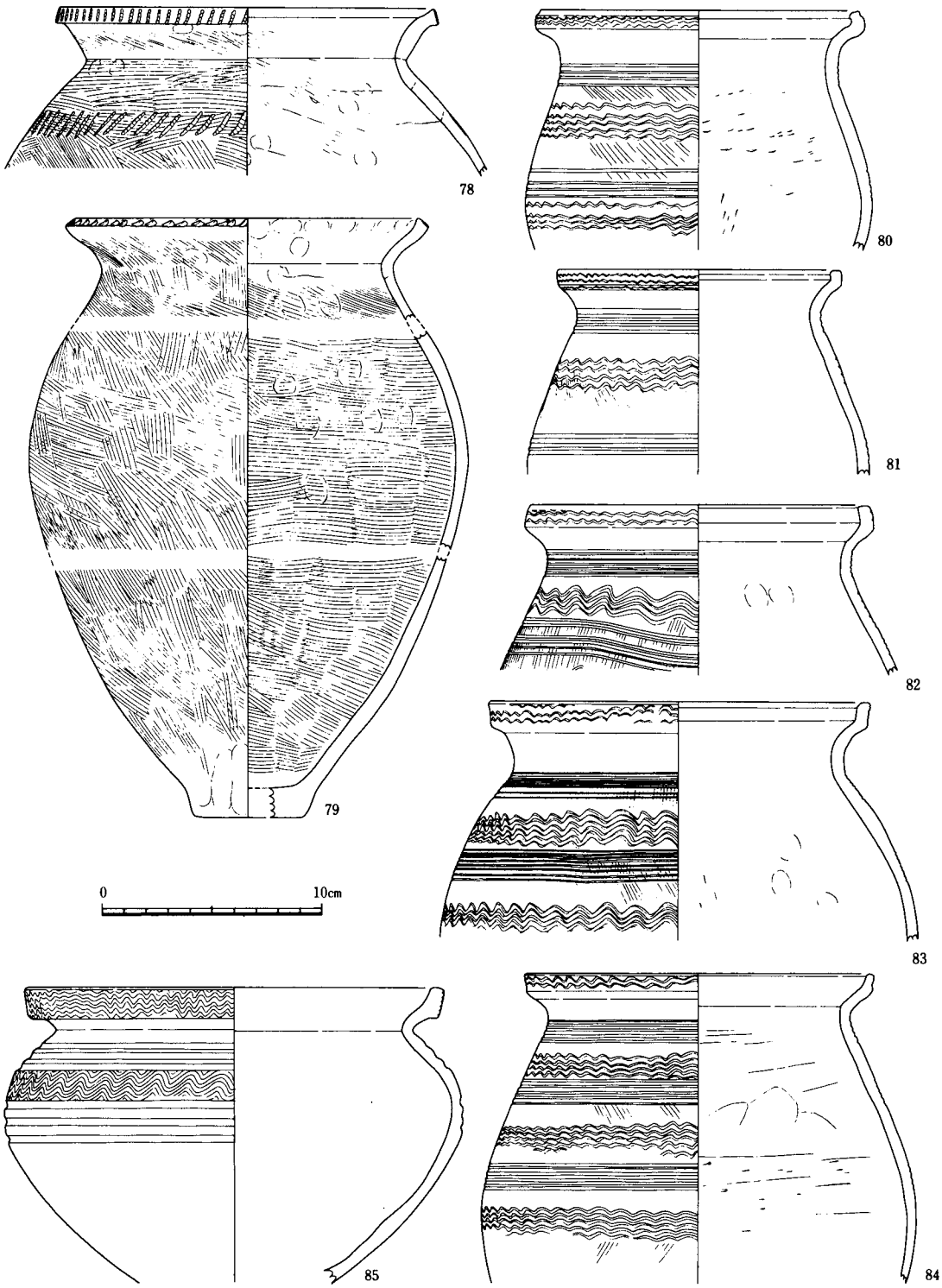
第45図　第７次調査　出土土器（11）（SD－701）（S＝1／3）



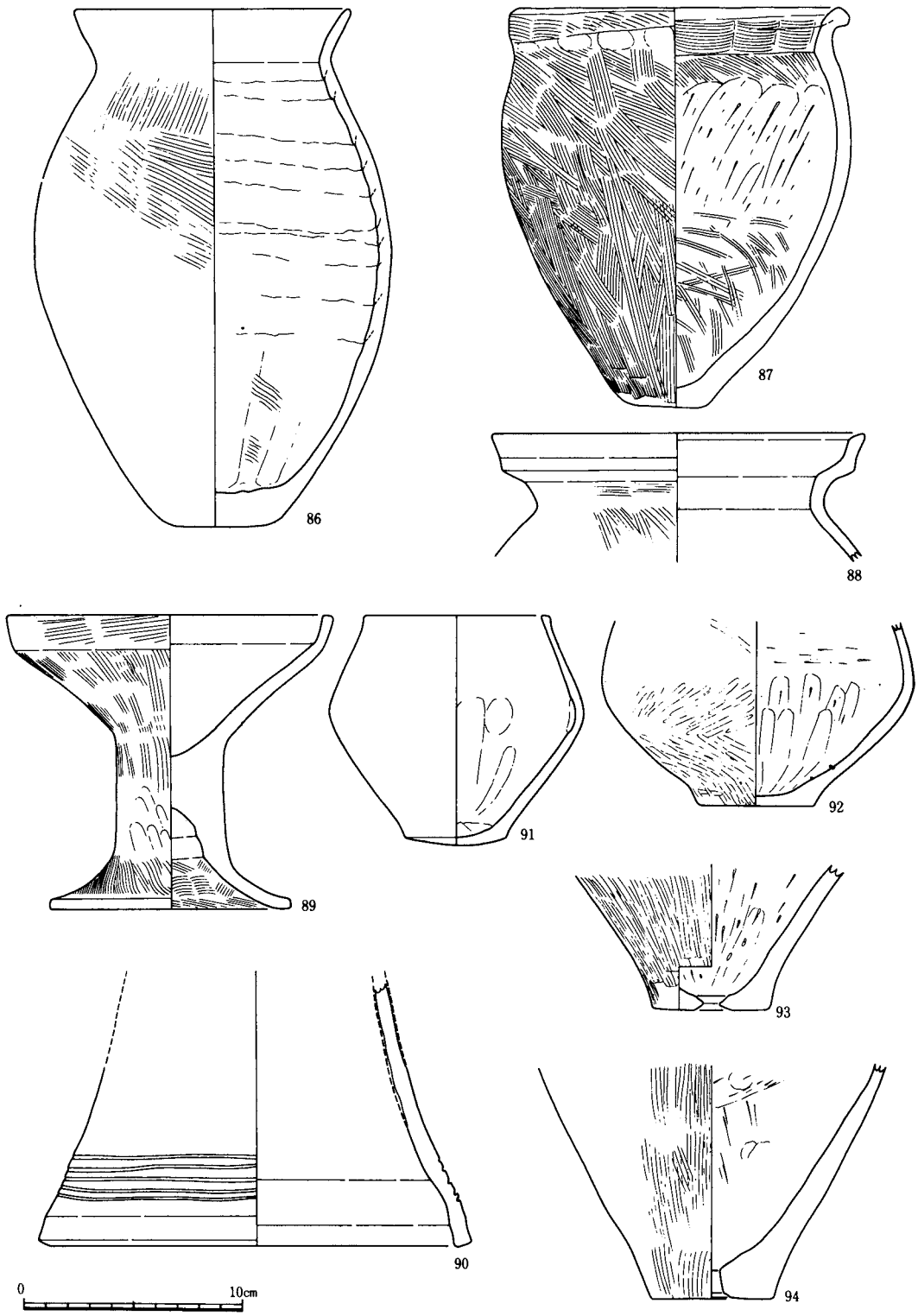
第46図　第７次調査　出土土器（12）（SD－701）



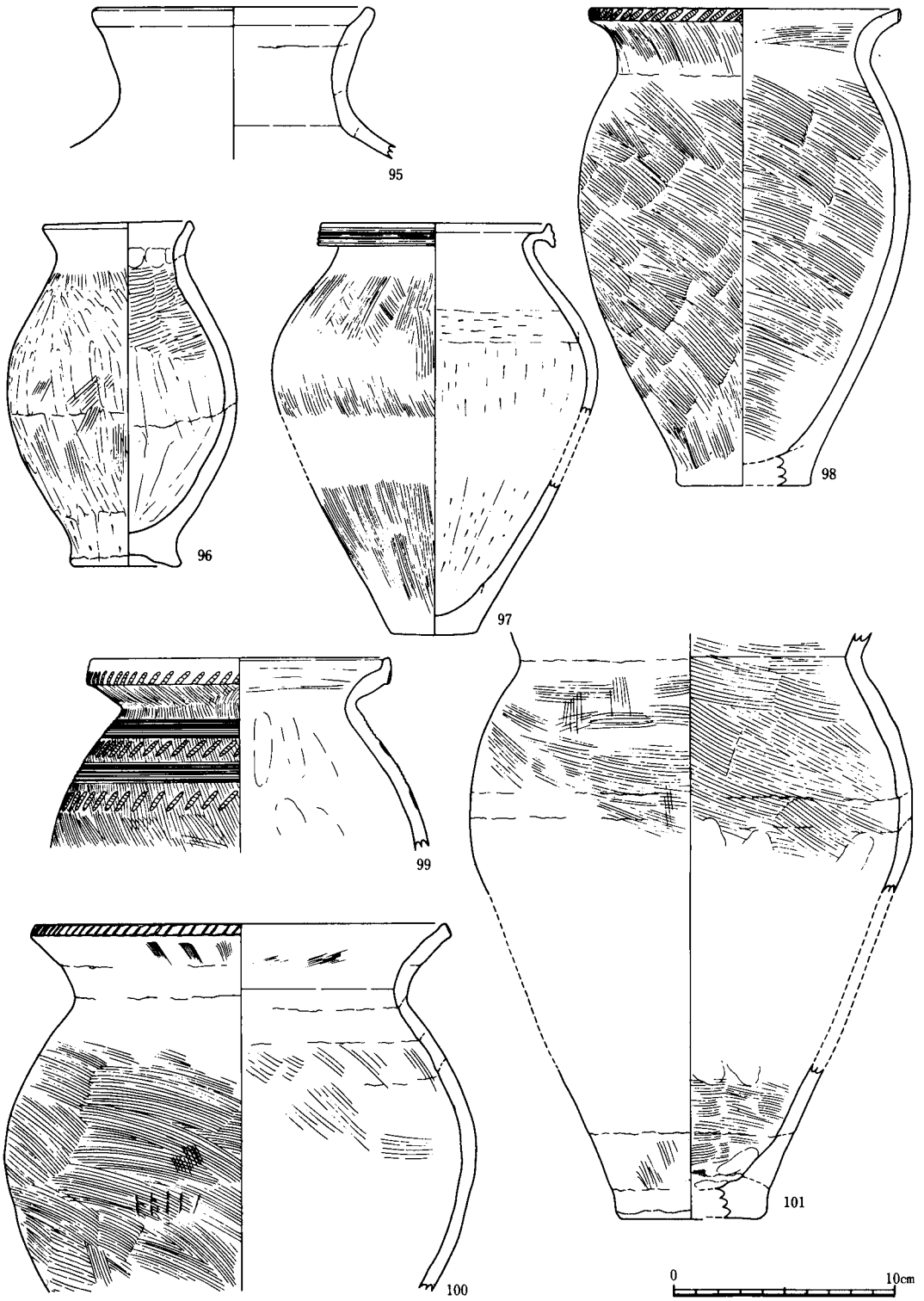
第47図　第７次調査　出土土器（13）(SD－701P－２)



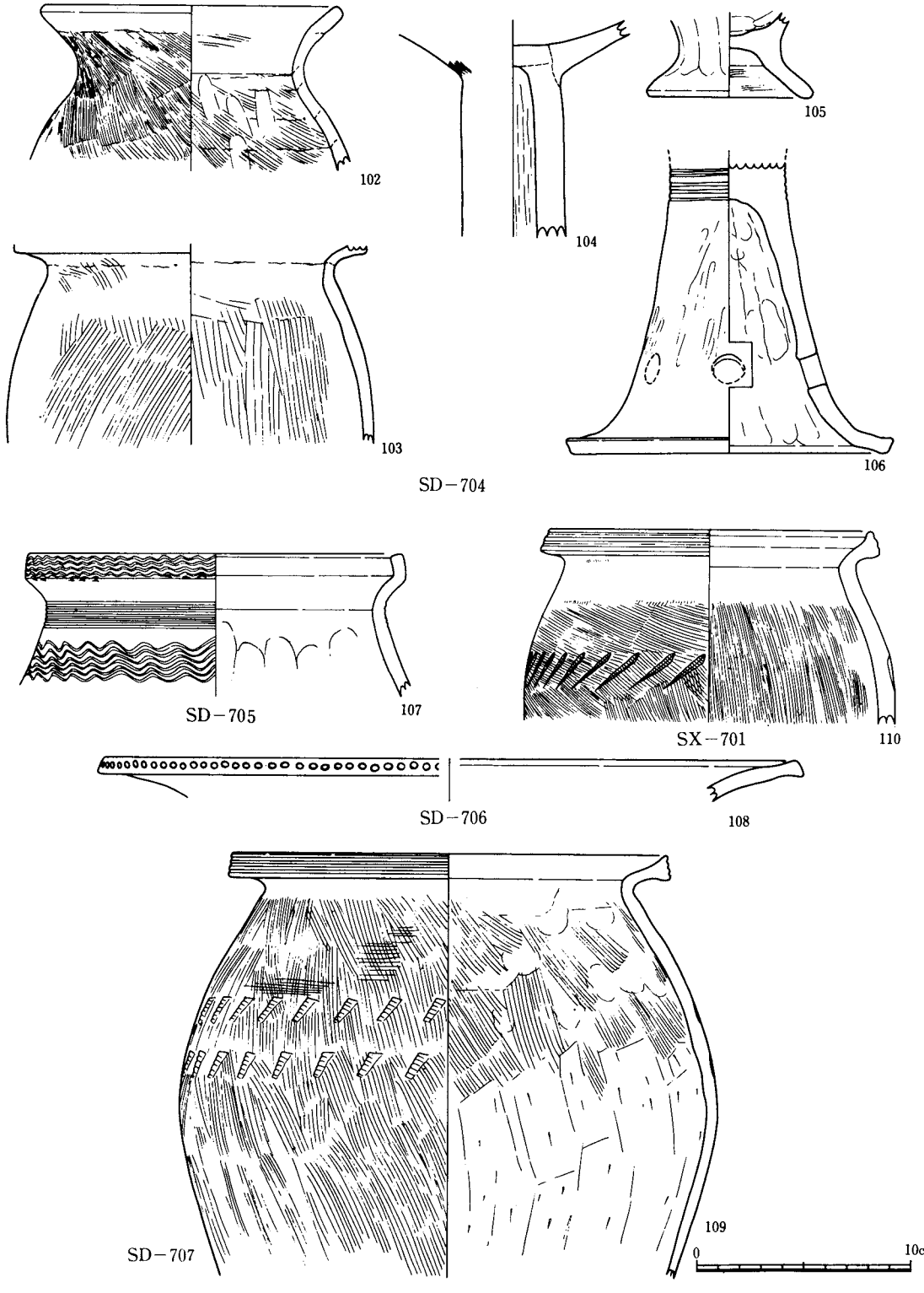
第48図　第７次調査　出土土器（14）(SD－701)



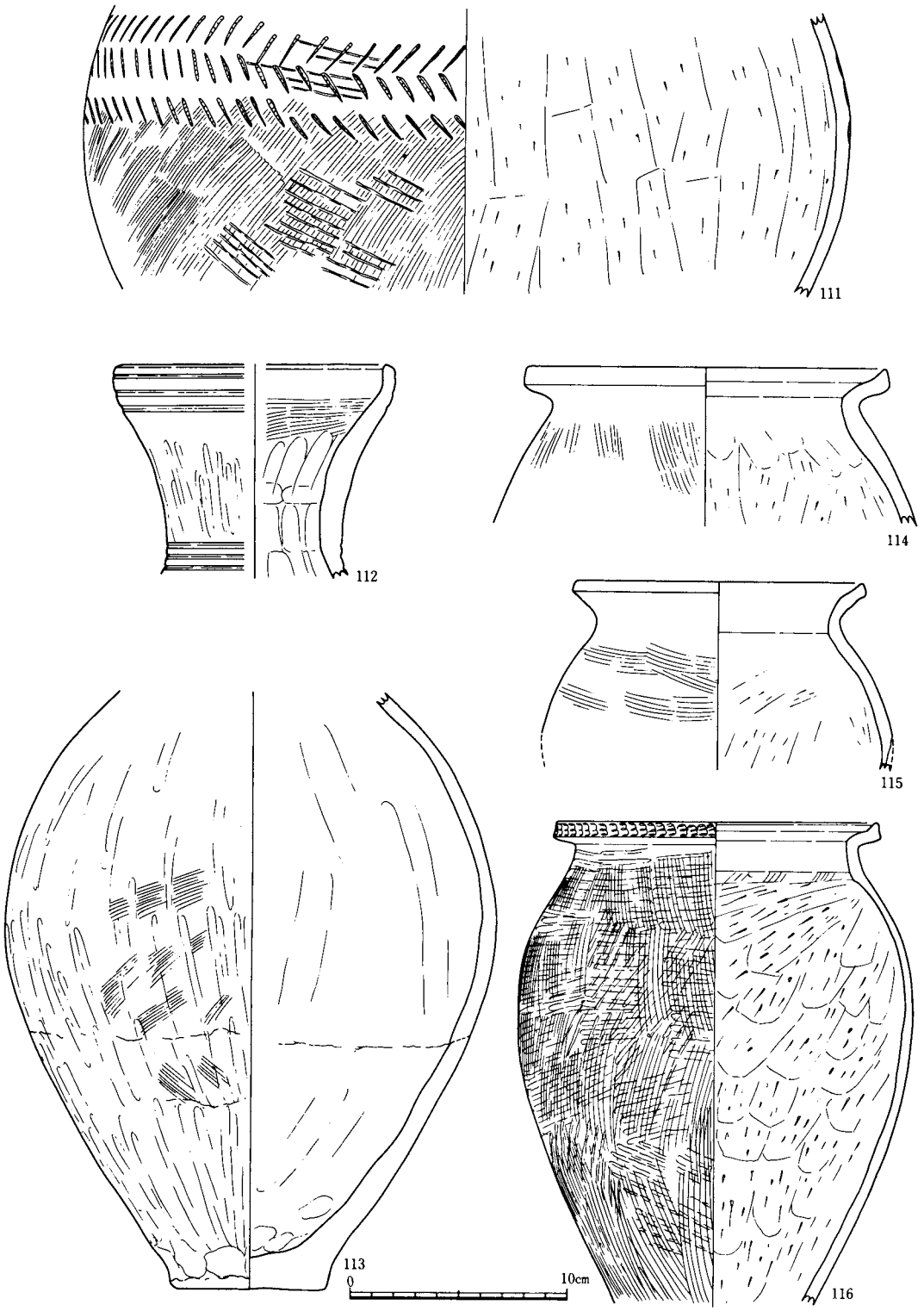
第49図　第７次調査　出土土器（15）(SD - 701)



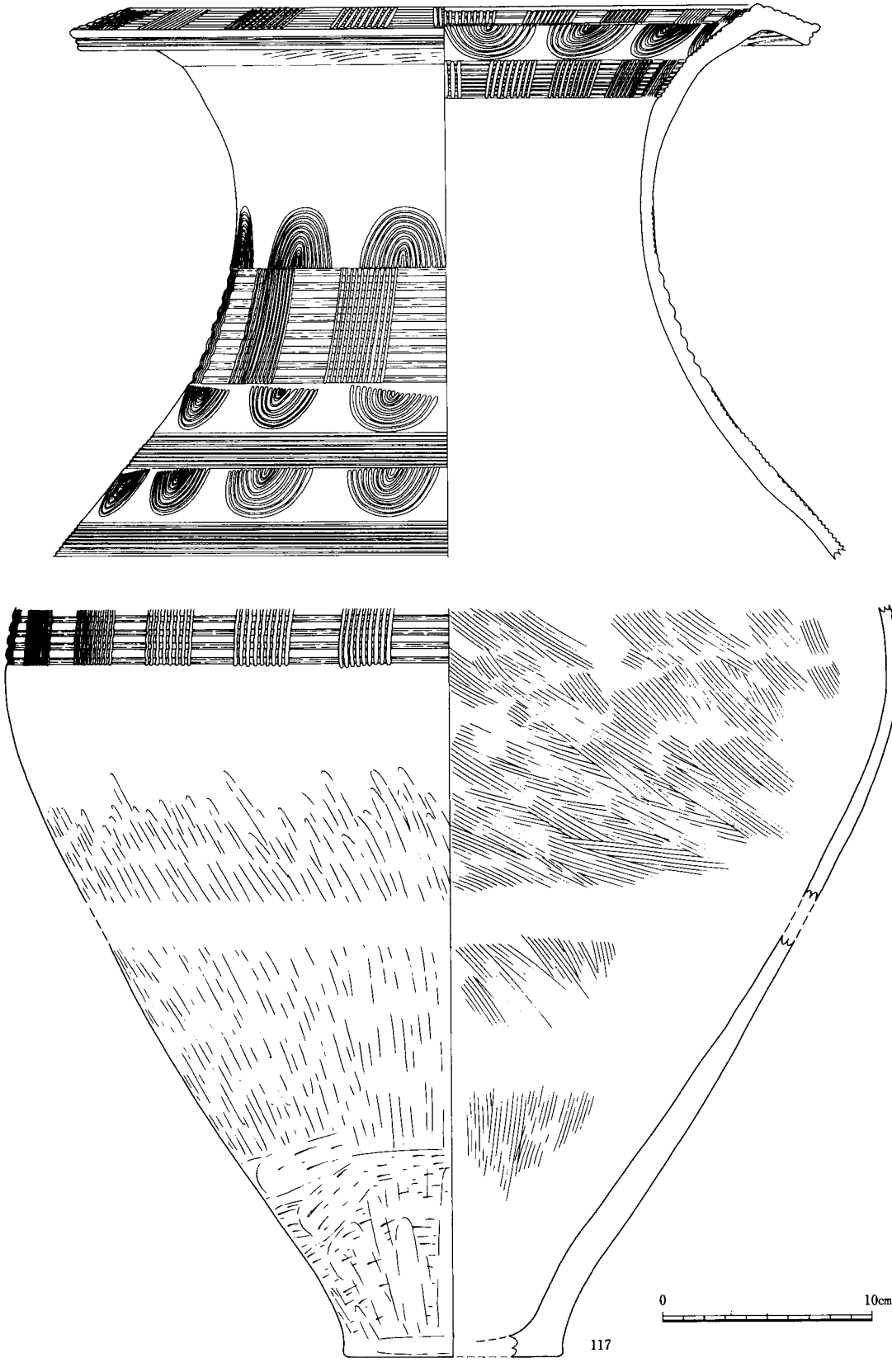
第50図　第７次調査　出土土器（16）(SD - 704)



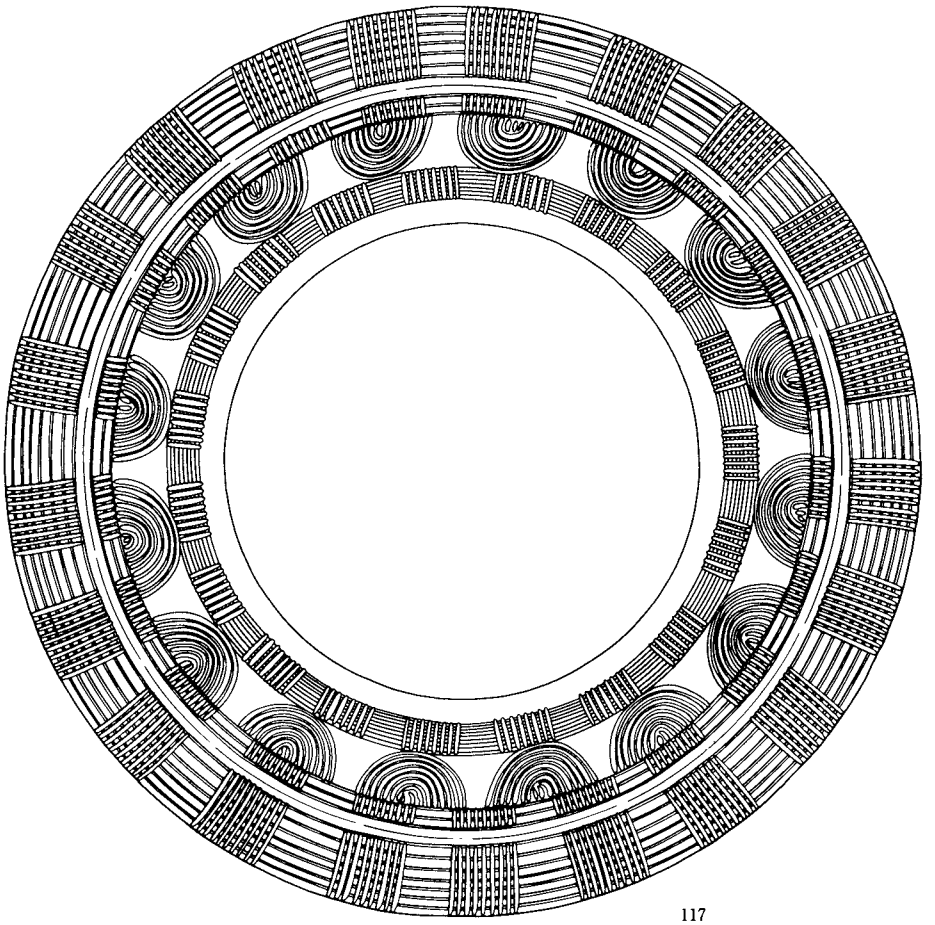
第51図　第７次調査　出土土器（17）

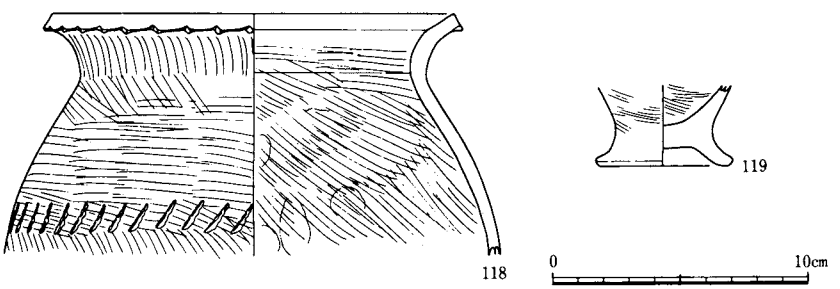


第52図　第７次調査　出土土器（18）（SD－707）（S＝1／3）

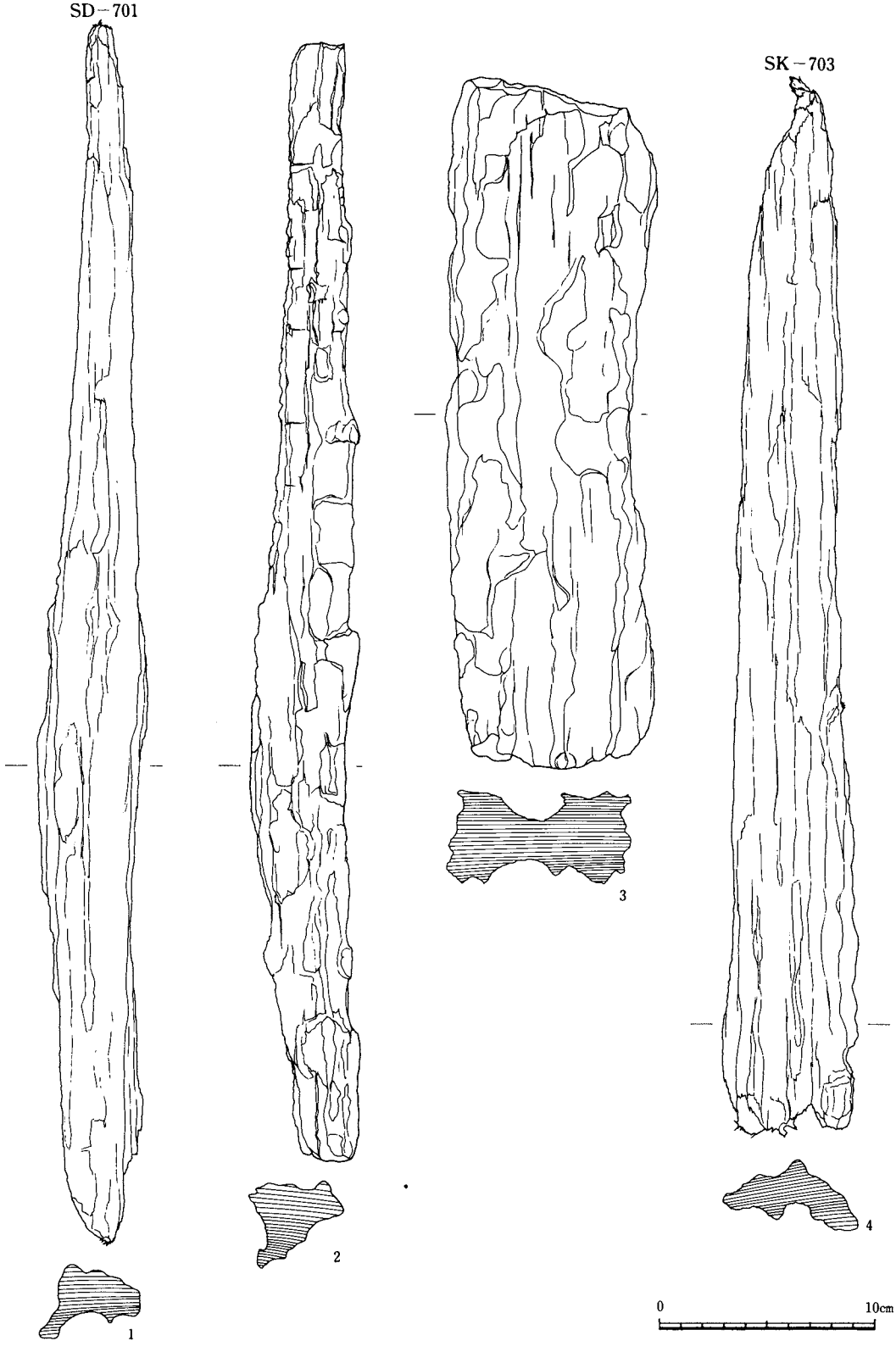


第53図　第７次調査　出土土器（19）（SD－708）（S＝1／3）

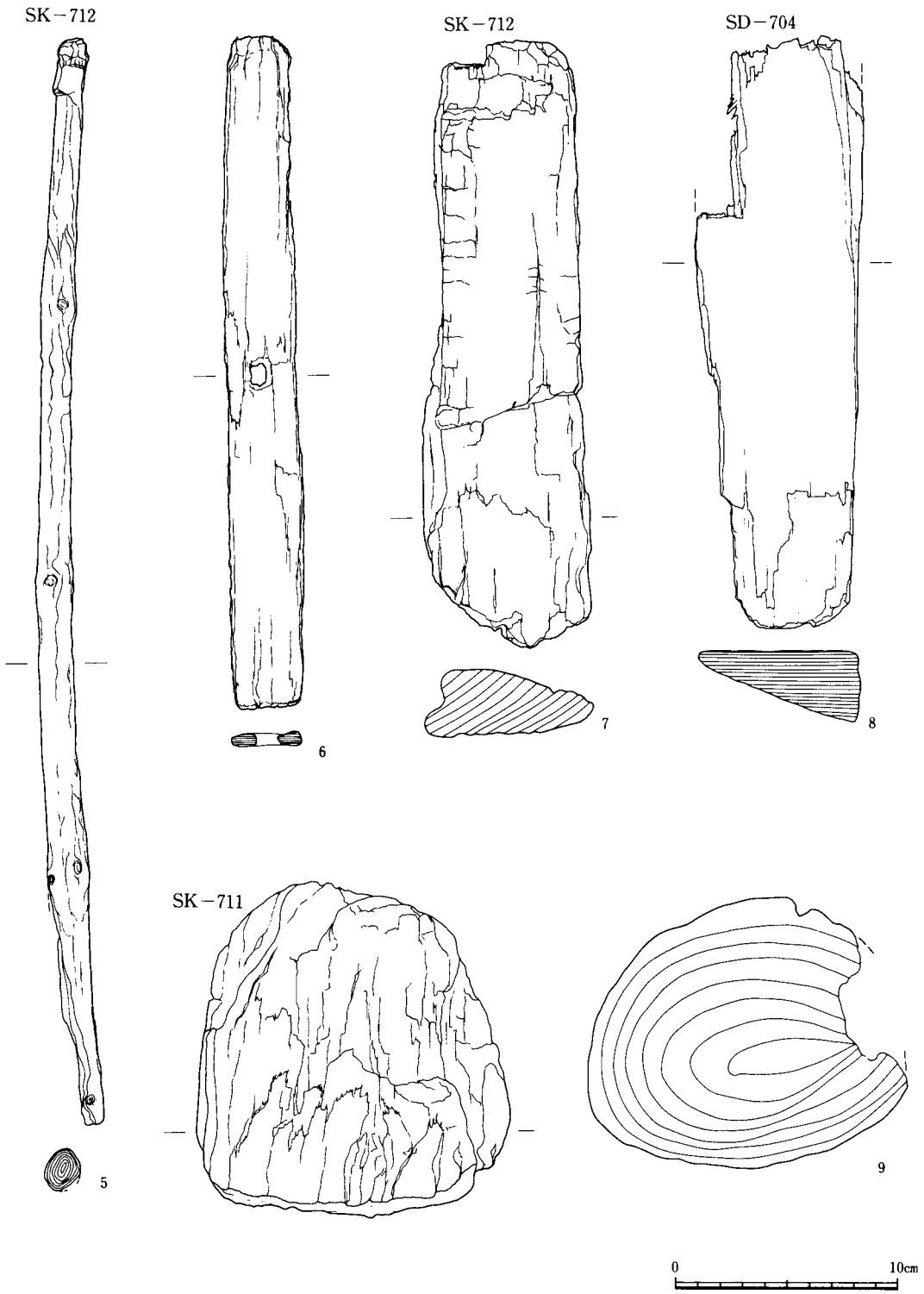




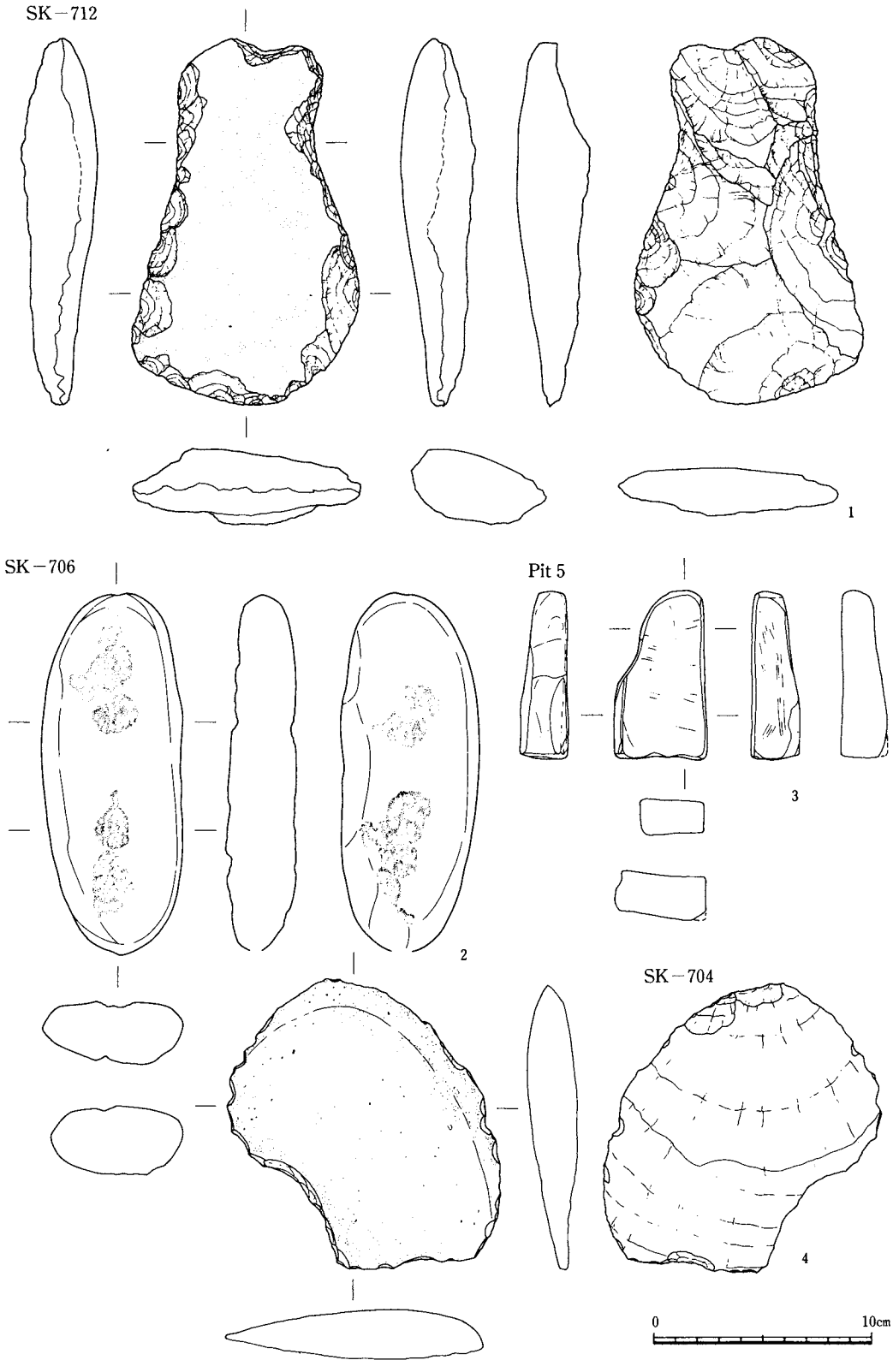
第54図　第７次調査　出土土器 (20) (SD - 708) (S = 1 / 3)



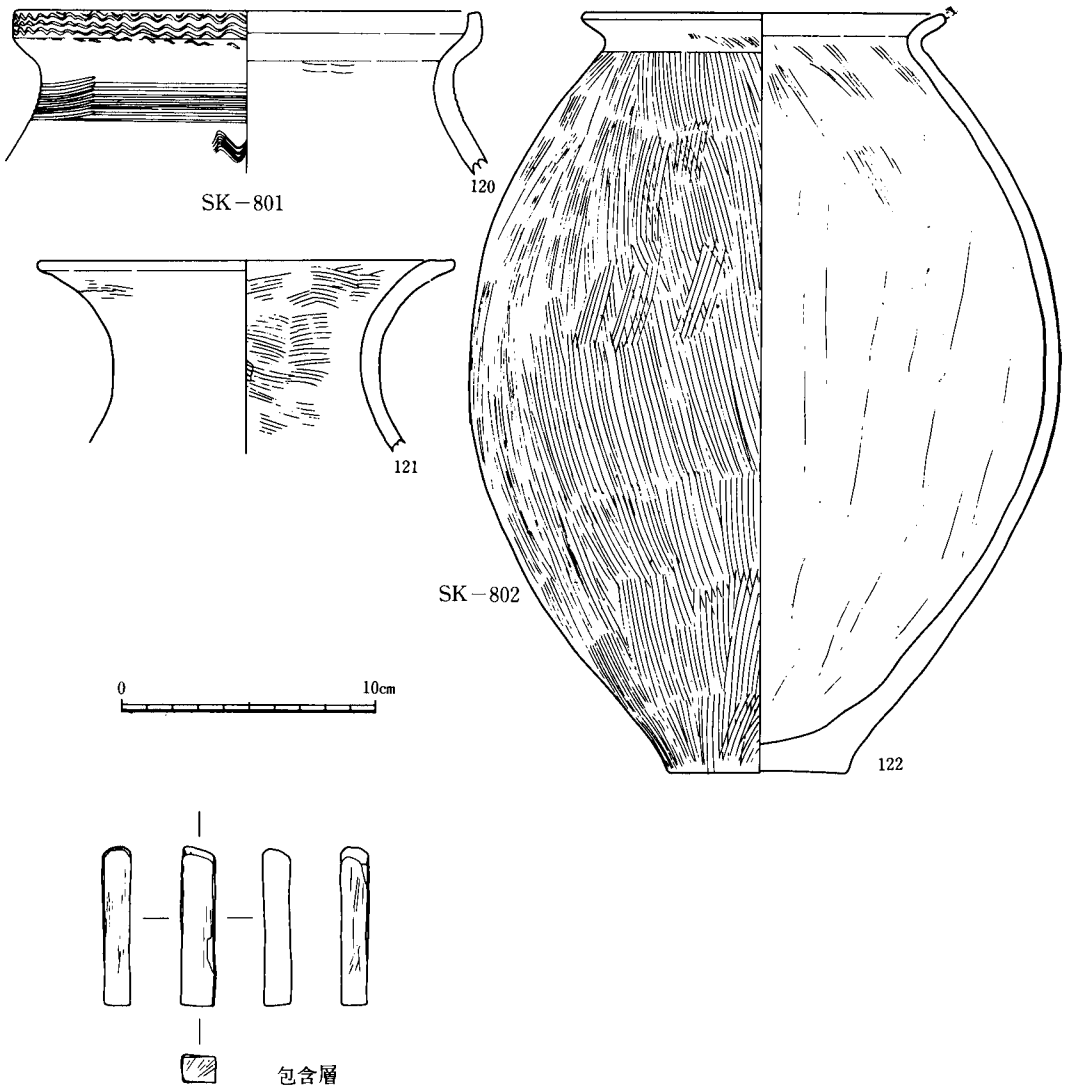
第55図　第７次調査　出土木製品（１）



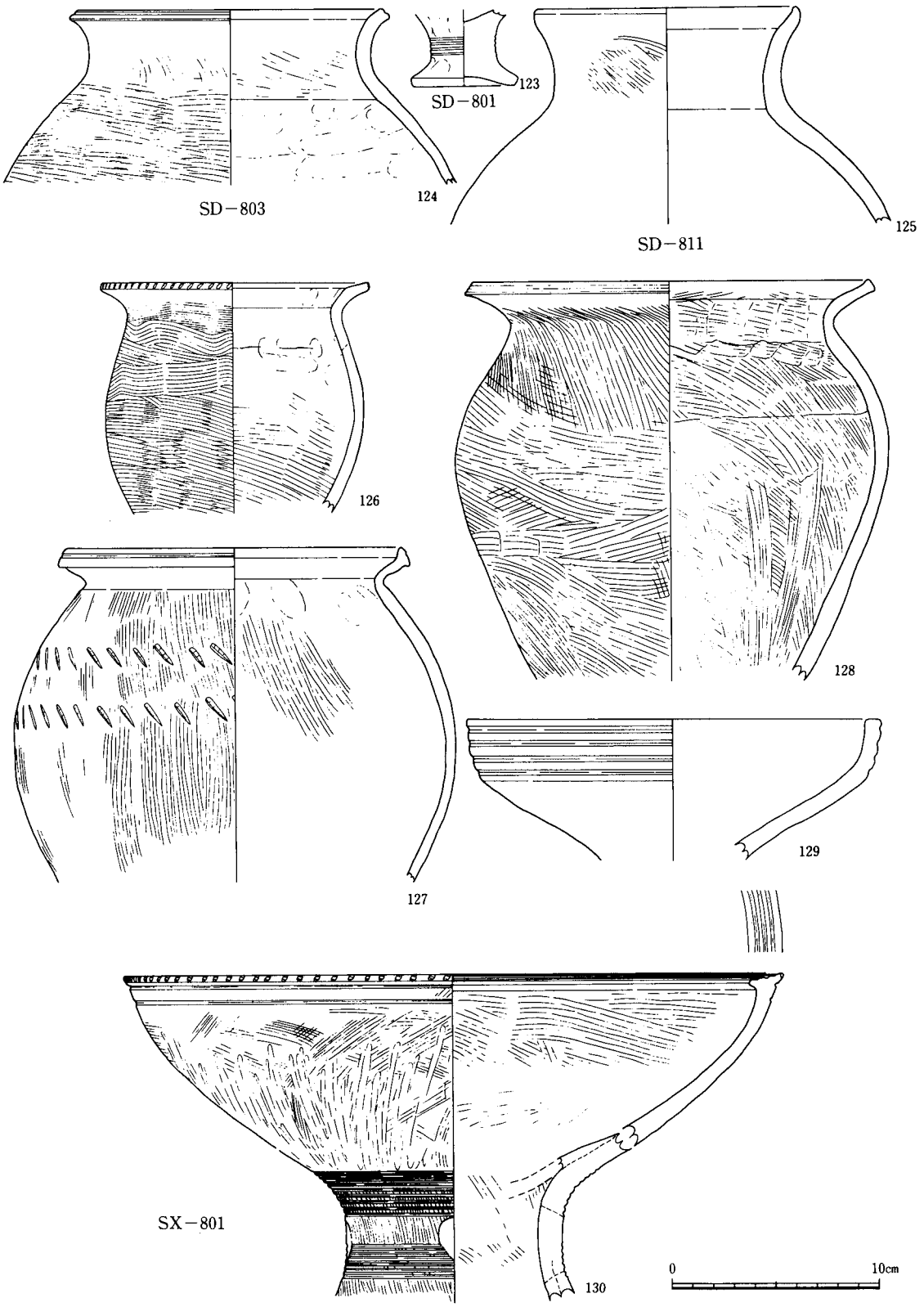
第56図　第７次調査　出土木製品（２）



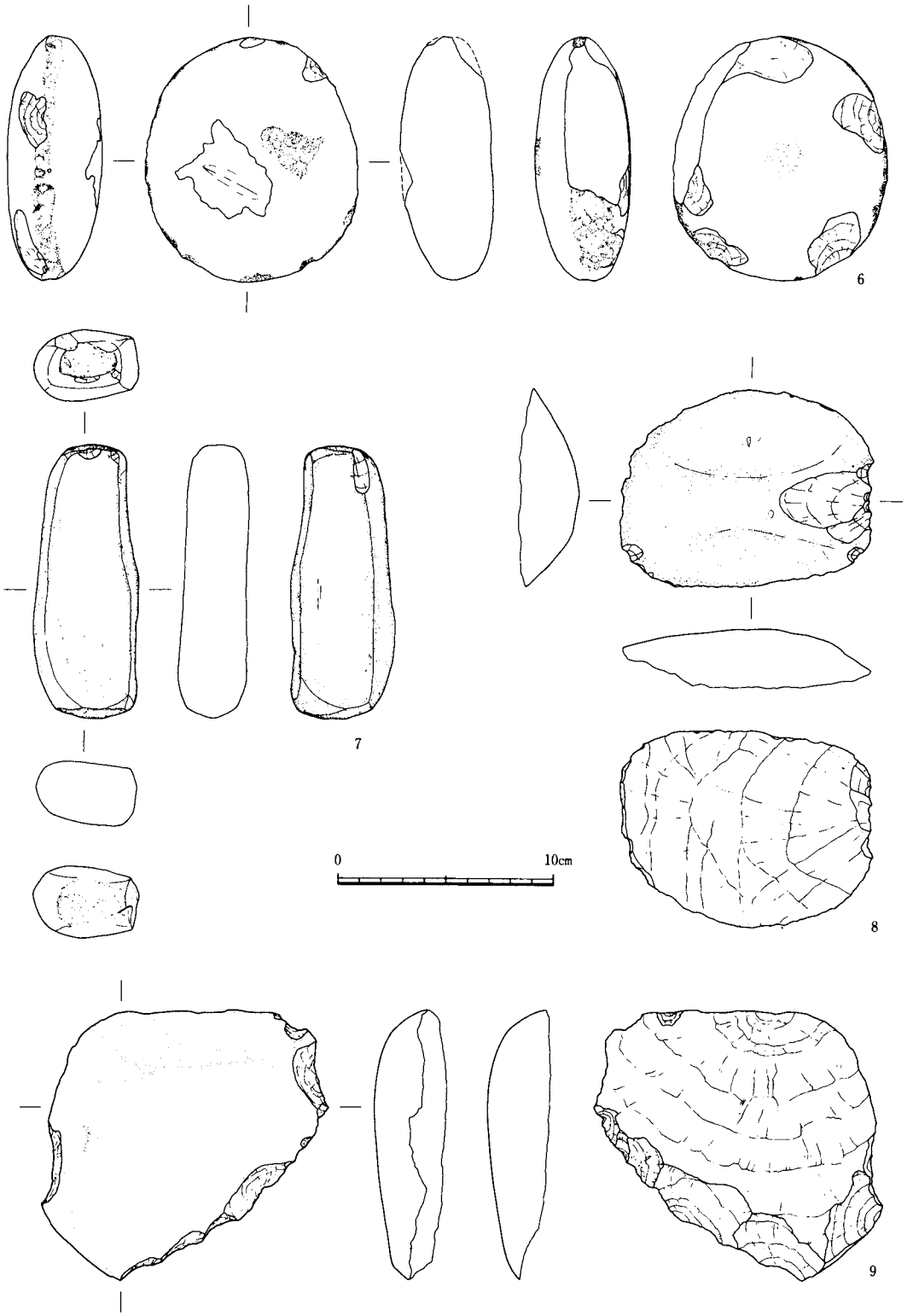
第57図　第７次調査　出土石製品



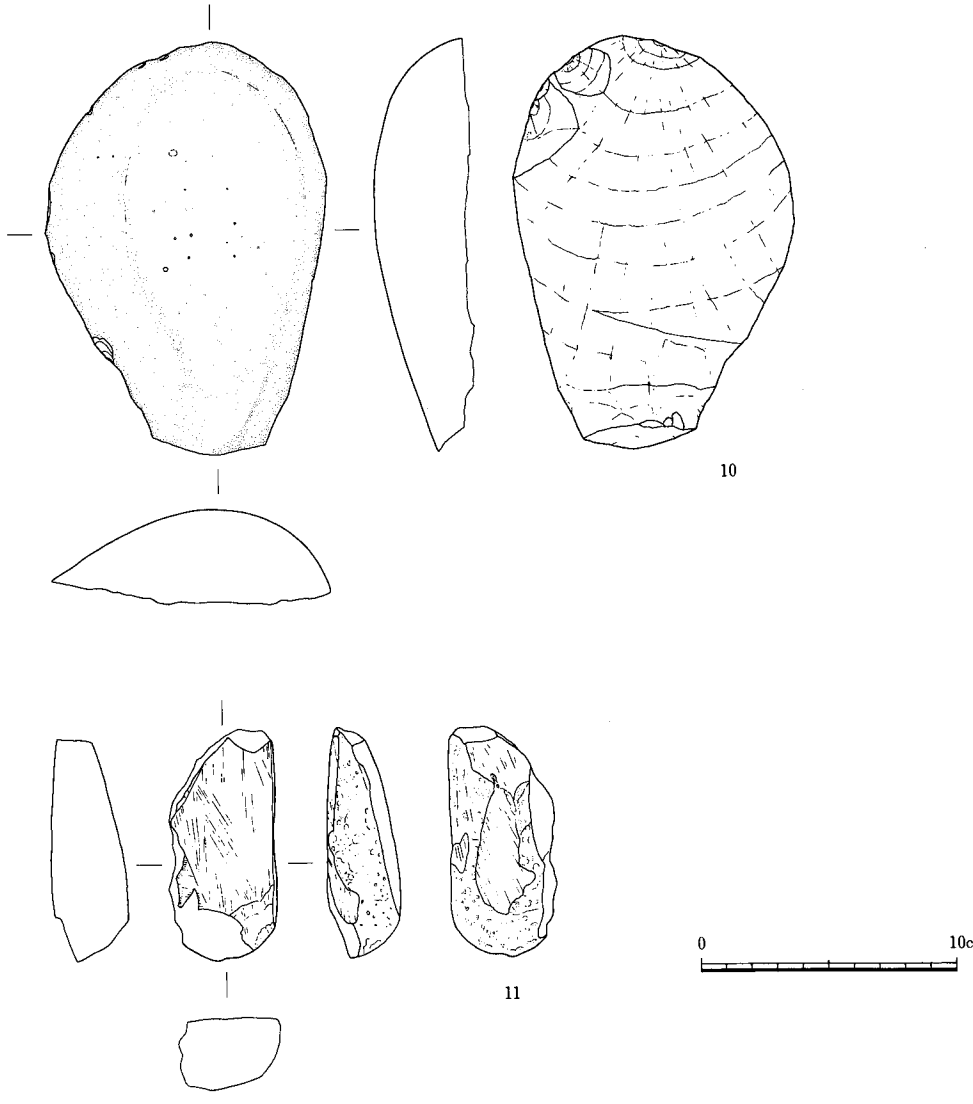
第58図　第８次調査　出土土器（１）・石製品



第59図　第８次調査　出土土器（２）



第60図　石製品（1）



第61図　石製品（2）

第８表　第７次調査遺構一覧表

遺構名	出土遺物	数	土器接合関係	備　　考	挿図No.
第７次調査					
SK－701	1	1		1.9×1.3m の不定形な土坑、深さ20cm	30・31
SK－702	2	1	SD－701	径約70cm、深さ45cm	29
SK－703				工事により北側半壊、径1.2m、深さ30cm、木製遺物有り（礎板か？）	27
SK－704	3	1		南半分は調査区外(現道下)、径1.2m、深さ45cm、SK－703と対か？　土器（３）は完形品	27・31
SK－705				北半分はかく乱で切られる、径約1.1m、深さ約20cm	
SK－706	8～13	6		北半分はかく乱で切られる、径約1.5m、深さ約50cm	
SK－707	4	1	SD－803	電柱のため全容不明、SD－803から張り出す土坑か？	
SK－708				南側を SK－707に切られる	
SK－709	5	1		西半分は第８次調査との間の未掘部分、SK－710との切り合いは不明	31
SK－710	6、7	2		西半分は第８次調査との間の未掘部分、SK－709との切り合いは不明	31
SK－711	14、15	2		1.6×1.3m の円形、深さ30cm、柱根（木－９）出土、SD－805に接続か？	31
SK－712	16～32	17	SK－715	3.4×2.6m の楕円形、深さ70cm、SD－704から南に張り出す、弓（木－５）出土	31
SK－713				1.8×1.4m、深さ30cm、二段掘り	31
SK－714	33、34	2		2.5×1.4m の楕円形、深さ30cm	31
SK－715	35、36	2	SK－712	東側１/３は調査区外、径２m、深さ55cm	32
SK－716	37～41	5	SX－701	径1.1m、深さ40cm	32
SK－717	42、43	2		SD－708の西延長上、径１m、深さ65cm	32
SK－718				径１m、深さ15cm	32
SK－719				西半分は調査区外、2.2×１m の隅丸方形、深さ20cm	27～30 32
SD－701	44～94	51	SK－702	幅約２m、深さ約20cmの東西溝、集落を囲む環濠か	
SD－702					
SD－703				幅２m、深さ約30cmの東西溝	
SD－704	95～106	12		幅2.3m、深さ35cm、SK－712が南に張り出す	33
SD－705	107	1		幅約２m、深さ約55cm	33
SD－706	108	1		幅1.6m、深さ約40cm、調査区東端で幅約1.2m の支流が北に延びる	33
SD－707	109・111～116	7		幅0.5～１m、深さ約20cmの東西溝	33
SD－708	117、118、119	4		幅0.9～1.8m、深さ30cmの東西溝、南に土坑状の掘り込み（新）有り	33
SX－701	110	1			

第9表　第8次調査遺構一覧表

遺構名	出土遺物	数	土器接合関係	備　　考	挿図No.
第8次調査					
SK－801	120	1	SD－812	SD－706の続きか？	
SK－802	121、122	2		2×1.5m、深さ60cm	33
SD－801	123	1		SD－809の南側の浅い部分	
SD－802					
SD－803	124	1	SK－707	幅2m、深さ50cm、SD－701の延長の可能性高い	34
SD－804				径約1m、深さ10cm	
SD－805					
SD－806					
SD－807					
SD－808					
SD－809				SD－703の続き	34
SD－810					
SD－811	125	1		SD－704の続	
SX－801	126～130	5		土坑状、西半分は調査区外、2.3×約1.5m、深さ40cm	34

第10表　第７・８次調査出土土器観察表

No	出土地区	器種	法量	口頸部	胴部	底（脚）部	色調	石	長	黒	他	焼	海	備考
1	SK701	甕	口：19cm	O：ハケ後ナデ、口縁部キザミ I：口縁端キザミ			O：明褐灰 I：明褐灰	S 1	S 1	S 1				166
2	SK702	甕	口：(20)cm 胴：(23)cm	O：ハケ後ナデ、キザミ I：ハケ後ナデ	O：ハケ I：ハケ		O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 3	S 3		MS 3			69
3	SK704	甕	口：16.5cm 胴：21.2cm 底：5.5cm 器：29.5cm	O：ヨコナデ、凹線１条 I：ヨコナデ、指頭痕	O：タタキ、ハケ、連続刺突文 I：ハケケズリ	O：ハケ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 1	M 1	MS 3	S 3		50
4	SK707 SD803	壷	口：(21.0)cm	O：ヨコナデ、ハケ、凹線 I：ヨコナデ			O：にぶい赤橙 I：にぶい赤橙	M 4				S 3		135
5	SK709	甕	口：(19.3)cm 胴：(22.0)cm	O：波状文５条 I：ヨコナデ	O：波状文９、102段、凹線10、12、10条３段 I：ナデ、ケズリ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M 1			M 4	S 2		106
6	SK710	甕	口：16cm	O：ハケ、ヨコナデ I：ハケ、ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：にぶい褐 I：にぶい褐	S 2	S 2	S 1	MS 3		LM 4	107
7	SK710	台 (台鉢?)	底：8cm			O：ヨコナデ I：ハクリ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 3	S 3	S 1				58
8	西調 SK706	壷	口：(24.0)cm	O：凹線３条、キザミ I：ハケ			O：淡橙 I：浅黄橙	S 3			LM 3			91
9	西調 SK706	壷		O：波状文、直線文 I：ヨコナデ、ハケ	O：波状文（10条）２段 I：ハケ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2			LM 3	MS 2		105
10	SK706	壷	底：11.0cm		O：ハケ I：ケズリ	O：ハケ I：ケズリ	O：にぶい黄橙、浅黄橙　I：灰色	M 3			LM 4			134
11	SK706	壷	底：8.4cm			O：ハケ、一部ナデ I：ナデ、ハケ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙				LM 3	M 1	S 2	133
12	西調 SK706	甕	口：(19.0)cm 胴：(22.8)cm	O：ヨコナデ、タテハケ、凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ、ナデ、指頭圧痕		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 3		S 3				104
13	SK706	台付鉢	口：28.8cm	O：ミガキ、凹線４本 I：ヨコナデ	O：ミガキ I：ミガキ	O：ミガキ（?）凹線４本、透かし穴４方 I：ハケ、ヨコナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M 2			LM S 4	M 1	S 1	90
14	SK711	甕	口：(18.8)cm	O：ヨコナデ、キザミ I：ヨコナデ	O：縦ハケ I：横ハケ		O：にぶい橙 I：にぶい黄橙	S 3				L 3	S 4	185
15	SK711	壷	胴：(18.6)cm		I：ハケ？、指頭圧痕		O：にぶい橙 I：にぶい橙	S 3				M 3		186
16	SK712 最下層				O：ハケ I：ハケ		O：にぶい橙 I：にぶい橙	M 2	S 2		M 3	S 2	M 1	100
17	SK712	(脚)	底：(15.7)cm			O：ヘラミガキ、凹線３条 I：ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 3		S 2		S 3		109
18	SK712	壷	口：(26.0)cm	O：ハケ、凹線 I：ハケ			O：にぶい橙 I：にぶい赤橙	L 3			L 4	M 3		108
19	SK712 最下層	甕	胴：(13)cm 底：(4.5)cm		O：ハケ、ナデ、ケズリ? I：ナデ	O：ナデ I：ケズリ後ナデ	O：にぶい橙 I：にぶい橙	S 1	MS 1	S 1	MS 3	S 1		136
20	SK712最下層　SK715	甕	口：(8.5)cm 胴：(7.3)cm	O：ヨコナデ I：ハケ後ヨコナデ	O：ナデ、指頭痕 I：ハケ後ナデ		O：灰黄 I：灰黄～黒	S 3	S 2	S 1				92
21	SK712 最下層	甕	口：(22.2)cm	O：ヨコナデ、凹線 I：ヨコナデ	O：縦ハケ I：ハケ後ナデ、指頭痕		O：灰褐 I：にぶい黄橙	S 4	S 2	S 2				103

No.	出土地区	器種	法量	口頸部	胴部	底（脚）部	色調	石	長	黒	他	焼	海	備考
22	SK712	甕	口：(21.6)cm	O：ヨコナデ、凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ後ナデ I：ケズリ後ナデ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 4	S 2	S 2				181
23	SK712 最下層	甕	口：(17.6)cm	O：指頭痕、凹線	I：指頭痕		O：にぶい橙 I：にぶい橙	M 4		S 1	M 3	M 4		180
24	SK712 最下層	甕	口：(14.8)cm 胴：(14.0)cm	O：ヨコナデ、凹線1条 I：ヨコナデ、ハケ	O：ハケ、ナデ、指頭痕 I：ハケ後ナデ		O：灰黄褐 I：灰黄褐	S 3				S 3		112
25	SK712 最下層	甕	口：(12.6)cm 胴：(14.5)cm	O：ヨコナデ縦ハケ、指頭痕、凹線 I：ヨコナデ	O：横ハケ I：ハケ後ナデ		O：にぶい橙 I：にぶい黄橙	S 3		S 1	S 2			179
26	SK712 最下層	甕	口：(17.4)cm 胴：(16.8)cm	O：ヨコナデ、指頭痕 I：ヨコナデ、横ハケ	O：縦ハケ後横ハケ I：横ハケ、一部ナデ		O：灰黄 I：黄灰、灰	S 3			M 3			111
27	SK712下層 （黒色部）	甕	口：(15.0)cm 胴：(19.0)cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：縦ハケ下→上キザミ I：ハケ、ヘラケズリ、ナデ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M S 3		S 1	M 3			102
28	SK712 上層	甕	口：(16.2)cm 胴：(16.8)cm	O：ヨコナデ、波状文 I：ヨコナデ	O：ハケ、波状文、凹線 I：ヘラケズリ		O：にぶい黄橙 I：淡黄	M 4		S 1	M 2			182
29	SK712 上層	甕	口：(21.4)cm 胴：(23.4)cm	O：ヨコナデ、縦ハケ I：ヨコナデ、横ハケ	O：ハケ、凹線、波状文、列点文 I：ハケ、ナデ		O：にぶい橙 I：にぶい橙	M 3			M S 3	M 4		88
30	SK712上層 SK712下層	甕	口：(19.7)cm	O：ヨコナデ、ハケ、キザミ I：ハケ後ヨコナデ	O：斜めハケ I：ハケ、指頭痕		O：にぶい橙 I：橙	M 1			M 2	S 4		176
31	SK712 最下層	甕	口：(16.2)cm	O：ハケ後ヨコナデ、指頭圧痕、キザミ I：ヨコナデ、ハケ	O：細かいハケ後粗いハケ I：ハケ後		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M 2			M 3	S 4		87
32	SK712 最下層	甕	口：(14.0)cm 胴：(15.5)cm 底：6.6 cm 器：21.0 cm	O：ヨコナデ、縦ハケ I：横ハケ、斜めハケ、キザミ	O：横ハケ I：斜めハケ、ナデ	O：ナデ I：ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2		S 1				101
33	SK714 上層	壺	口：(16.5)cm 胴：(32.4)cm 底：(10.3)cm 器：49.9 cm		O：ハケ I：横方向ケズリ横方向ハケナデ	O：タタキ後ハケ I：ナデ	O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 3	M 2			S 2		119
34	SK714 下層	壺	口：(17.4)cm	O：ハケ、キザミ I：ハケ、キザミ			O：にぶい橙 I：にぶい橙	S 1			S 1			152
35	SK715	甕	口：(15.6)cm	O：ヨコナデ I：ハケ後ヨコナデ	O：タタキ後ハケ I：ハケ、ケズリ		O：にぶい黄橙、にぶい橙 I：にぶい黄橙	M 1	S 2	S 5	M 4			187
36	SK715	壺	口：(25)cm	O：ハケ後ナデ、格子状キザミ I：ハケ、指頭痕、ナデ			O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 2			S 3	S 2		139
37	SK716	甕	口：14.3 cm 胴：16.8 cm	O：ハケ、ヨコナデ、凹線1条 I：ヨコナデ、ハケ、ナデ	O：ハケ I：ナデ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 2	S 1	S 3			97
38	SK716	甕	口：17.5 cm	O：ヨコナデ、タタキ後ヨコナデ、凹線2条 I：ヨコナデ	O：タタキ後ハケ I：ハケ、ナデ、ケズリ		O：橙 I：橙、にぶい橙	M 2	M 1		LM 3			86
39	SK716	甕	口：(15.8)cm 胴：(18.6)cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：ハケ、キザミ I：ヘラケズリ		O：浅黄橙 I：明褐灰	S 3	S 2		S 2	S 3		188
40	SK716	甕	口：16.6 cm 胴：21.9 cm	O：ヨコナデ、凹線2条 I：ヨコナデ	O：縦ハケ、キザミ I：ヘラケズリ		O：浅黄橙 I：にぶい黄橙	M 3	S 1		M 2	L 2		85

No.	出土地区	器種	法量	口頸部	胴部	底（脚）部	色調	石	長	黒	他	焼	海	備考
41	SX701 SK716	壺	口： 6.0 cm 底： 10.0 cm		O：（ナデ）、ミガキ	O：ハケ後ミガキ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M 3	MS 3		M 4			124
42	SK717	甕	口：(17.0)cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：縦ハケ I：ヘラケズリ		O：浅黄橙 I：淡黄	M 2			M 4	L 2		96
43	SK717	甕	口：(21.7)cm	O：ハケ、ヨコナデ I：ハケ後ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：にぶい黄褐 I：灰黄褐	S 4			S 3		S 1	110
44	SD701 P－1	壺	口：(15.4)cm 胴：(32.6)cm 底： 11.2 cm 器： 50.0 cm	O：ヨコナデ、縦ハケ I：横ハケ、ヨコナデ	O：横ハケ I：横ハケ、指頭痕によるナデあげ	O：ナデ、縦ハケ I：ナデ	O：灰黄 I：灰黄	S 3	S 2			S 2		53
45	SK702 SD701下層	壺	口：(20.0)cm	O：ヨコナデ、口縁部キザミ、4条の凹線 I：ナデ			O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 1	S 4	S 1	M 5			167
46	SD701 P－6	壺	口：15.0 cm	O：ヨコナデ、ハケ、凹線3条 I：ヨコナデ、ハケ	O：ハケ I：ナデ？		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙				M 3	M S 2		151
47	SD701 下層	壺		O：ヨコナデ、沈線 I：ナデ	O：ヨコナデ、縦ハケミガキ、列点文2列 I：ハケ後ナデ		O：淡黄 I：淡黄	L 2	S 2		M 2	S 3		79
48	SD701 下層	壺	口：(13.2)cm	O：ヘラミガキ、端部ヨコナデ I：ヨコナデ	O：ハケ、ヘラミガキ、列点文、単線文 I：ハケ後ナデ、ハケ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 3	M 3					80
49	SD701 下層	高坏 （脚部）	底：(18.5)cm		O：ヨコナデ、ハケ、ミガキ、透穴10ヶ所、平行沈線 I：ナデ	O：端部に凹線	O：淡黄 I：灰黄	S 3	M 2					44
50	SD701 P－9	甕	口：(12.9)cm	O：ヨコナデ、凹線 I：ヨコナデ	O：縦ハケ I：指頭によるナデ、ハケ残す		O：明褐灰 I：にぶい黄橙	S 3	S 2	S 2				81
51	SD701 P－6	甕	口： 17.2 cm 胴： 20.0 cm	O：ヨコナデ、凹線2条 I：ヨコナデ	O：タタキ、ハケ I：ナデ、ケズリ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M 1		S 1	MS 4			66
52	SD701 下層	甕	口：(14.3)cm 胴：(18.2)cm	O：ヨコナデ、凹線3条	O：縦ハケ、列点文2列		O：浅黄橙 I：にぶい黄橙	S 2						55
53	SD701 P－9	甕	口：(16.2)cm	O：ヨコナデ、凹線 I：ヨコナデ	O：縦ハケ、キザミ2段 I：縦ハケ後ナデ		O：にぶい橙 I：にぶい橙	M 3	S 1		M 1	M 2		60
54	SD701 下層	甕	口：17.4 cm	O：ヨコナデ、凹線2条 I：ヨコナデ	O：ヨコナデ、タタキハケ状具による連続刺突文 I：ハケ、ナデ		O：にぶい黄橙 I：浅黄橙	M S 3	M 1		M 4	S 2		183
55	SD701 下層	甕	口：(18.2)cm	O：ヨコナデ、端部凹線 I：ヨコナデ	O：縦ハケ I：ケズリ		O：にぶい黄橙 I：灰黄	L 1	M 2		M 3	S 1		57
56	SD701 P－7	甕	口：13.6 cm 胴：17.0 cm	O：ヨコナデ、擬凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ、連続刺突文		O：にぶい黄橙、黒褐 I：黒褐	S 2		S 2	MS 4			48
57	SD701	甕	口：(16.8)cm 胴：(18.6)cm	O：凹線、ヨコナデ、接合痕 I：ヨコナデ、ハケ	O：縦ハケ、キザミ I：指頭痕、ナデ、縦ケズリ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	MS 3				S 1		40
58	SD701 下層	甕	口：(12.8)cm	O：ヨコナデ、凹線2条 I：ヨコナデ	O：縦ハケ、刺突文2段 I：縦ハケ後ナデ		O：にぶい橙 I：にぶい橙	S 3		S 3				67

No.	出土地区	器種	法量	口頸部	胴部	底(脚)部	色調	石	長	黒	他	焼	海	備考
59	SD701 P-9	甕	口：14.7cm 胴：17.8cm 底：5.2cm 器：22.5cm	O：ヨコナデ、凹線3条 I：ヨコナデ	O：縦ハケ後ヘラミガキ、キザミ I：ヘラケズリ、ナデ	O：縦ハケ、底部穿孔 I：ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 3	S 3			S 2		63 復7
60	SD701 P-9	甕	口：(13.3)cm 胴：(13.6)cm	O：ハケ、ヨコナデ、2条凹線 I：ハケ、ヨコナデ	O：ハケ I：ケズリ、ナデ		O：褐灰 I：褐灰	MS 3			S 3			72
61	SD701 P-9	甕	口：15.5cm 胴：18.8cm 底：5.0cm 器：24.3cm	O：ヨコナデ、沈線 I：ヨコナデ、指頭圧痕	O：タタキ後縦ハケ、斜行列点文2段 I：ケズリ後ナデ	O：ナデ I：ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 3	S 1	S 4			S 2	89
62	SD701下層 P-7	甕	口：(17.8)cm 胴：(21.2)cm	O：ヨコナデ、凹線 I：ヨコナデ	O：縦ハケ後ミガキ、キザミ I：ハケ後ナデ、ケズリ後ナデ		O：淡黄 I：にぶい黄橙	S 4		S 2				77？
63	SD701	甕	口：20.5cm 胴：(27)cm 底：5.5cm 器：(36.7)cm	O：ヨコナデ、4条凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ケズリ	O：ナデ I：ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 3		S 1	M S 4			59
64	SD701 下層	甕	口：(17.4)cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：縦ハケ後横ハケ、キザミ I：ヘラケズリ後工具によるナデ		O：淡黄 I：にぶい黄橙	S 3	S 2	S 3		S 2		56
65	SD701下層 SD701 P-6	甕	口：(15.8)cm	O：ヨコナデ、指頭痕 I：ハケ後ヨコナデ、指頭痕	O：ハケ、指頭痕、 I：ハケ後ナデ、指頭痕		O：にぶい黄橙 I：褐灰	S 4		S 4	M 3	M 4		51
66	SD701 P-3	壺	口：(10.6)cm 胴：13.2cm 底：(6.3)cm 器：14.4cm	I：ヨコナデ	O：把手1ヶ所連続刺突文2段 I：ナデ、ヘラケズリ	O：縦方向ハケ I：ナデ	O：浅黄橙 I：浅黄橙	M 2	M 2		L M 3	S 3		82
67	SD701 下層	甕	口：(15.0)cm 胴：(16.8)cm	O：ヨコナデ？ I：ヨコナデ？	O：縦ハケ I：ハケ		O：浅黄橙 I：鈍い黄橙							
68	SD701 下層	甕	口：(14.6)cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：縦ハケ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 4			M 1			78
69	SD701 P-6	甕	口：(14.4)cm 胴：(16.5)cm		0：ハケ、刺突文		O：灰黄 I：褐灰	S 1		M 2	S 3	S 2		52
70	SD701 P-9	甕	口：15.8cm 胴：19.0cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：タタキ、ハケ、連続刺突文 I：ハケナデ、ケズリ		O：にぶい褐 I：にぶい褐	M S 3			L M 4			61
71	SD701 下層	甕	口：(17.4)cm 胴：(19.4)cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：ケズリ後ハケ、キザミ I：ハケ、ケズリ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	MS 4			S 2	S 3		41
72	SD701 P-6	甕	口：(17.0)cm	O：ハケ、凹線 I：ハケ後ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ、ナデ？		O：灰黄褐 I：にぶい黄橙	M 4		S 3	M 2			76
73	SD701 下層	甕	口：(15.8)cm 胴：(13.5)cm	O：ヨコナデ、縦ハケ I：ヨコナデ？	O：縦ハケ I：ヘラケズリ		O：にぶい褐 I：にぶい橙～黒褐			S 2	M 4	S 4	S 1	178
74	SD701 上層、下層	甕	口：10.2cm 胴：13.0cm 底：4.6cm 器：17.6cm	O：ヨコナデ、凹線(1本) I：ヨコナデ、ハケ	O：ハケ、ナデ（底部付近） I：ナデ、ハケ	O：ケズリ I：ハケ、ナデ	O：明褐灰、黒 I：にぶい黄橙	M S 4	M 1		M 4			75
75	SD701 下層	甕	口：18.0cm 胴：23.0cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：タタキ、ハケ、連続刺突文2段 I：ハケ、ケズリ		O：浅黄橙、にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	MS 2	S 2		M 3			43

No.	出土地区	器種	法量	口頸部	胴部	底(脚)部	色調	石	長	黒	他	焼	海	備考
76	SD701 P-9	甕	口:(19.8)cm 胴:(21.2)cm	O:ヨコナデハケ、斜行列点文 I:ヨコナデ	O:ハケ I:ナデ、ハケ		O:灰褐 I:灰褐				M 4			65
77	SD701 P-2 No.2、89、11、22	甕	口:22cm 胴:31.8cm 底:8.8cm 器:42.5cm	O:ハケ、ハケ状具による連続刺突紋降帯貼付 I:ハケ、指頭圧痕(頚部)ハケ状具による連続刺突紋	O:ハケ I:ハケ、指ナデ	O:ハケ I:ナデ	O:にぶい黄橙 I:にぶい黄褐	M 3	M 2		M 3	M 1	S 1	39
78	SD701 下層	甕	口:(17.2)cm	O:ハケ、ヨコナデ、指頭痕キザミ(端部) I:ハケ後ヨコナデ	O:ハケ、キザミ I:ハケ後ナデ、指頭痕、接合痕		O:にぶい黄橙 I:にぶい黄橙	S 4			3	M S 3		45
79	SD701 下層	甕	口:(15.6)cm 胴:(20.1)cm 底:5.0cm 器:(27.6)cm	O:ヨコナデ、ハケ、キザミ I:ヨコナデ、指頭圧痕	O:ハケ I:ハケ、指頭圧痕	O:ハケ、ナデ I:ハケ、ナデ	O:褐灰 I:にぶい黄橙	S 4	S 2	S 3	L 2			73
80	SD701 P-7	甕	口:(12.1)cm	O:ヨコナデ、波状文 I:ヨコナデ	O:ハケ、波状文4~5条、凹線4条 I:ナデ、ヘラケズリ		O:にぶい黄橙 I:灰黄	S 3			2	M S 2		194
81	SD701 下層	甕	口:(12.8)cm	O:ヨコナデ、波状文 I:ヨコナデ	O:縦ハケ、凹線4条、波状文4条凹線3条 I:ハケ後ナデ		O:にぶい黄橙 I:灰黄橙	S 3			M 3			46
82	SD701 P-9	甕	口:(15.3)cm	O:ヨコナデ、波状文3条、凹線6条 I:ヨコナデ	O:ハケ、波状文5条、凹線6条 I:ハケ後ナデ		O:浅黄橙 I:浅黄橙	S 3			M 2	S 3		64
83	SD701 下層	甕	口:(17.2)cm	O:ヨコナデ、波状文 I:ヨコナデ	O:(ヨコナデ)ハケ、凹線、波状文2段 I:ナデ(ケズリ?)		O:にぶい黄橙 I:にぶい黄橙	S 3				S 2		42
84	SD701 P-9	甕	口:(15.6)cm 胴:(19.7)cm	O:ヨコナデ、波状文 I:ヨコナデ	O:ハケ、波状文3段、凹線3段 I:ケズリ後ナデ		O:にぶい橙 I:にぶい橙~黄灰	M 4	S 2		S 2	S 2		68
85	SD701 P-9	甕? (鉢)	口:18.8cm 胴:21.0cm	O:ヨコナデ、波状文(ハケ状具) I:ナデ	O:ハケ、凹線3条2段、波状文 I:ハケ、ナデ		O:灰白、にぶい黄褐 I:にぶい黄橙	M 2	S 3		LM 3			49
86	SD701 P-6	甕	口:12.5cm 胴:16.4cm 底:5.3cm 器:23.8cm		O:ハケ I:接合痕、ハケ	I:ナデ?	O:橙、浅黄橙 I:浅黄橙					L M 2		84
87	SD701 P-5	甕	口:14.7cm 胴:16.0cm 底:2.8cm 器:18.4cm	O:ハケ I:ナデ	O:ハケ I:ヘラ、ケズリ	O:ハケ I:ナデ	O:にぶい黄橙 I:浅黄橙				L 3			47
88	SD701 下層	甕	口:15.8cm 頚部:13.0cm	O:ヨコナデ、有段口縁 I:ヨコナデ	O:ハケ I:ハケ後ナデ		O:にぶい黄橙 I:にぶい黄橙	MS 3	S 2		LM S3	M 2		196
89	SD701 (上層) (下層)	高坏	口:14.8cm 底:11.0cm 器:13.5cm	O:ハケ I:ヨコナデ?	O:ハケ	O:ハケ I:ハケ、ナデ	O:にぶい橙,灰 I:にぶい黄橙、黒灰	S 2			M 3	M 2		74
90	SK702 SD701	(高坏) 脚	底:(18.6)cm			O:ヨコナデ、凹線5条 I:ヨコナデ	O:にぶい黄橙 I:にぶい黄橙	S 2	S 2	S 1				70

No.	出土地区	器種	法量	口頸部	胴部	底（脚）部	色調	石	長	黒	他	焼	海	備考
91	SD701 下層	壺	口：(8.6)cm 胴：(10.8)cm 底：4.7cm 器：(10.5)cm		I：指頭痕、ナデあげ	I：工具によるナデ	O：淡黄 I：浅黄橙	S 3				S 2		54
92	SD701 下層	壺	胴：14.2cm 底：5.0cm		O：ミガキ I：ケズリ、ナデ		O：にぶい黄橙、褐灰 I：にぶい黄橙	S 1		S 2	MS 3	S 3		195
93	SD701 (P-9下層)	甕？	底：5.3cm		O：ハケ I：ケズリ	O：ハケ、穿孔 I：ケズリ	O：淡黄、黒 I：淡黄	M 1			LM 4	M 2		165
94	SD701 P－9	有孔鉢 底部	底：6.6cm			O：縦方向ハケ、焼成前、穿孔 I：ヘラケズリ	O：灰黄褐 I：灰	L 3				S 2		164
95	SD704－W	壺	口：(12.3)cm 頸：(10.4)cm				O：橙 I：橙	S 1	S 1	S 1	S 2			137
96	SD704E 上層	壺	口：6.8cm 胴：10.6cm 底：4.8cm 器：15.9cm	O：ヨコナデ I：ハケ後ヨコナデ	O：ハケ後ミガキ I：ナデ	O：ケズリ I：ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 2	S 2	S 3	S 2		83
97	SD704	甕	口：10.4cm 胴：15.0cm 底：4.0cm 器：(19.0)cm	O：ヨコナデ、凹線3条 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ナデ、ケズリ	O：ハケ I：ナデ	O：にぶい黄橙 褐灰 I：褐灰	M 3			L M 3		M 1	94
98	SD704 SD704－W	甕	口：14.0cm 胴：15.0cm 底：5.8cm 器：22.0cm	O：ハケ、連続刺突文 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：浅黄橙、黒褐 I：浅黄橙、黒灰				L M S 5	L M 4		98
99	SD704－E	甕	口：13.6cm	O：ハケ、連続刺突文 I：ハケ後ヨコナデ	O：連続刺突文平行沈線（各2段） I：ナデ、指頭痕		O：明褐 I：にぶい黄橙	S 2	S 3		L M 3	L M 2	S 2	144
100	SD704	甕	口：19.0cm 胴：21.8cm	O：ナデ、キザミ I：ヨコナデ	O：ハケ、タタキ？ I：ナデ、ハケ		O：浅黄橙 I：浅黄橙		S 2		M S 3	S 3		175
101	SD704－W	甕	胴：(20.2)cm 底：(6.2)cm		O：ハケ I：ハケ、ナデ？	O：ハケI：ハケ、ナデ？	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M 4	M 4	S 1	MS 4			189
102	SD704－W	甕	口：(14)cm	O：ヨコナデ、接合痕 I：横方向のナデ	O：ハケ I：ハケ後ナデ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙		S 1		S 1		S 1	95
103	SD704－E	甕	頸部：12.6cm	O：ハケ、ヨコナデ I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：明褐灰 I：にぶい黄橙	S 3	S 1	S 1	S 1	S 1		93
104	SD704－E	高坏	柱状部：4.9cm				O：淡黄 I：淡黄				M 2	L 4		130
105	SD704－W	(台付甕) 底部	底：7.4cm			O：ナデ（外底）ハケ後ナデ I：ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 4	S 2	S 1	S 1			184
106	SD704－E	脚 (高坏の脚)	底：(14.6)cm			O：ミガキ、透穴3個残存（4個） I：ナデ、絞り目	O：浅黄橙 I：浅黄橙				S 2	S 2		138
107	SD705	甕	口：(17.6)cm	O：ヨコナデ波状文6条、凹線6条 I：ヨコナデ	O：ハケ、波状文 I：ナデ		O：浅黄橙 I：黄灰	S 3			S 3	S 2		145
108	SD706	壺	口：(32.7)cm	O：ハケ管文			O：浅黄橙 I：浅黄橙	M 3				M 4		146

No.	出土地区	器種	法量	口頸部	胴部	底（脚）部	色調	石	長	黒	他	焼	海	備考
109	SD707 下層 上層	甕	口：(20.5)cm 胴：(25.4)cm	O：ヨコナデ、凹線3条 I：ヨコナデ、ナデ	O：ハケ、刺突紋2段 I：ハケ、指おさえ、ケズリ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 2	S 1	M S 3			177
110	SX701	甕	口：15.0cm 胴：17.4cm	O：ヨコナデ、凹線2条 I：ヨコナデ	O：ハケ、ハケ状具による連続刺突文 I：ハケ		O：浅黄橙 I：にぶい黄橙	S 2			LM S3	M S 2		125
111	SD707 下層	甕	胴：35.2cm		O：ハケ、タタキ、刺突紋 I：ケズリ		O：浅黄橙 I：にぶい黄橙	S 2		MS 3	MS 4			126
112	SD707 上層	壷	口：(12.1)cm	O：ヨコナデ、ミガキ、凹線3条 I：ヨコナデ、ハケ、ナデ			O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 1	S 2	S 2			128
113	SD707 下層	壷	口：(22.6)cm 底：6.8cm		O：ミガキ I：ナデ、接合痕	O：ナデ？I：ナデ	O：にぶい橙 I：橙	S 2	S 2	S 1	M 3			203
114	SD707	甕	口：(16.2)cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：ハケ I：ケズリ、ナデ		O：灰白I：淡黄	MS 1	S 1		M 3			127
115	SD707 上層	甕	口：(13.0)cm 胴：(16.0)cm	O：ナデ I：ヨコナデ	O：ハケ I：ケズリ		O：赤灰 I：褐灰	MS 3	S 2		S 3			129
116	SD707 下層	甕	口：14.4cm 胴：18.0cm	O：ヨコナデ、連続刺突文 I：ヨコナデ、ハケ	O：タタキ、ハケ I：ケズリ		O：にぶい黄橙、黒褐 I：にぶい黄橙、褐灰	M 2		S 2	LM S 4	M 1		99
117	SD708 A群B群	壷	口：36cm 頸部：20.1cm 残存高：26.7cm	O：ヨコナデ、凹線、平行沈線 I：凹線平行沈線(縦、横)扇形文	O：凹線、沈線（縦、横）、扇形文		O：褐灰 I：明褐灰	M 2	M 1		M S 3	M 1		89
117	SD708 下層	底部	底：10.2cm		O：ミガキ、ケズリ、ナデ、凹線4条以上、平行沈線 I：ハケ、ナデ	O：ケズリ後ミガキ I：ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M 2	M 1		M S 3	M 1		123
118	SD708 下層	甕	口：(15.9)cm	O：ヨコナデ、ハケ、キザミ I：ヨコナデ、ハケ	O：ハケ、キザミ I：ハケ、指頭圧痕		O：にぶい赤褐 I：にぶい橙	M 4	M 2	M 2		S 2		131
119	SD708 上層	脚	底：5.1cm			O：ハケ、ヨコナデ I：ハケ、ナデ、指頭痕	O：黒褐 I：褐灰	L M 3			L 3			132
120	SK801 SD812	甕	口：(18.2)cm	O：ヨコナデ、波状文5条 I：ヨコナデ	O：凹線7条、波状文 I：ナデ、ハケ残る		O：淡黄 I：灰黄	S 4		S 3				120
121	SK802	壷	口：(16.2)cm	I：ヨコハケ			O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M 3				M 3		121
122	SK802	甕	口：(14)cm 胴：23cm 底：7cm	O：ヨコナデ、ハケ I：ハケ	O：ハケ I：ナデ？	O：ナデ I：ナデ	O：浅黄橙 I：浅黄橙				M S 3	S 2		141
123	SD801	脚	底：(4.8)cm			O：指頭痕、凹線	O：赤彩 I：浅黄橙	S 4		S 4		S 3		122
124	SD803	甕	口：(14.6)cm	O：ヨコナデ、凹線 I：ハケ後ヨコナデ	O：ハケ一部ナデ I：粗いナデ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2			L 1	M 2		113
125	SD811	壷	口：(12.4)cm	O：ハケ I：ヨコナデ			O：にぶい橙 I：にぶい橙	M 4			M 3	M 4		114
126	SX801	甕	口：(8.9)cm 胴：12.5cm	O：ヨコナデ、キザミ I：ヨコナデ、指頭痕	O：ヨコハケ I：ハケナデ、接合痕、指頭痕		O：にぶい黄橙 I：明褐灰	S 1			M 2	S 3		117
127	SX801	甕	口：(16.2)cm 胴：(21.4)cm	O：（1条）凹線（沈線） I：ヨコヨデ	O：ハケ、刺突文2段 I：ハケ、ナデ		O：にぶい黄橙、褐灰 I：浅黄橙	S 1			MS 2			140

No.	出土地区	器種	法量	口頸部	胴部	底（脚）部	色調	石	長	黒	他	焼	海	備考
128	SX801	甕	口：19.0cm 胴：21.0cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ、接合痕		O：にぶい黄橙、にぶい褐 I：にぶい褐	M 2			LM S3		S 1	116
129	SX801	高坏	口：19.8cm	O：凹線4条			O：浅黄橙 I：浅黄橙	M 1	M 2		LM S4	MS 2		115
130	SX801	台付鉢	口：32.0cm	O：ヨコナデ、ハケ、キザミ、凹線2条、口唇部に凹線3条 I：ヨコナデ	O：ハケ後ミガキ I：ハケ、ミガキ、透穴あり、形、数不明	O：ハケ、ミガキ、凹線9条、凹線6条、透穴あり	O：灰白、黒 I：灰白	M 1	MS 2		LM 5	M 1	S 1	118

第11表　第7次調査出土木製品観察表

No.	名称	遺構	残存法量（cm）	木取り	備考
1	棒	SD－701	L57.1×W4.7×H3.5	辺材	
2	棒	SD－701	L52.4×W4.8×H4.2	辺材	
3	板材	SD－701	L32×W10×H4	板目	
4	棒	SK－703	L49.5×W6.3×H3	辺材	
5	弓	SD－705	L50×φ約2	丸木 （芯持ち）	弭部分の加工あり
6	有孔板	SD－705	L30.9×W3.45×H0.65	板目	孔1
7	くさび形	SK－712	L28×W7.4×H4	斜目	全体に炭化
8	くさび形	SD－704E	L27.3×W7.53×H3.1	板目	
9	柱根？	SK711	L15.5×W14.5×H12.3	丸木 （芯持ち）	

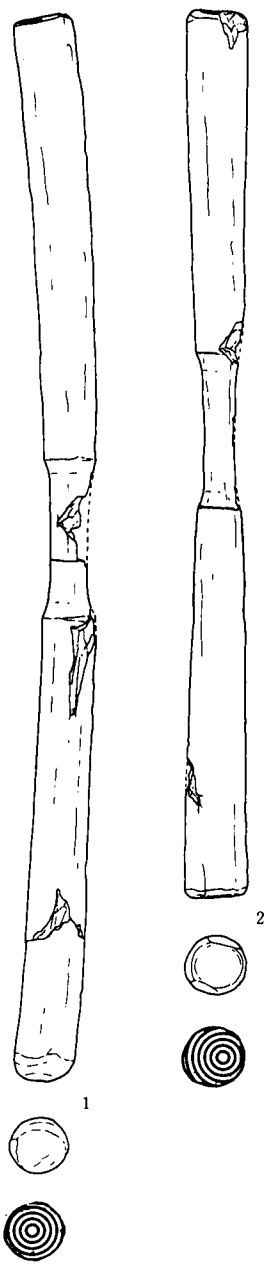
第5章　第9次調査

第1節　遺構と出土遺物

第9次調査では戸水B遺跡の南端を捉えることができた。第2章第3節でふれたとおり、3つの調査区の内、西トレンチの溝（環濠）とその横に付く土坑状の遺構（SX－901）でまとまって遺物が出土した。今回検出した環濠は、第3次調査の第27号溝の延長部分とみられ、埋蔵文化財センターに保管されている記録資料からも、溝底のレベルがほぼ同じであることを確認している。この溝は第2章第1節でふれたとおり、鉄工会館建設時の工事立会いによって北流していることが確認されており、その中から竪杵2点が出土している。

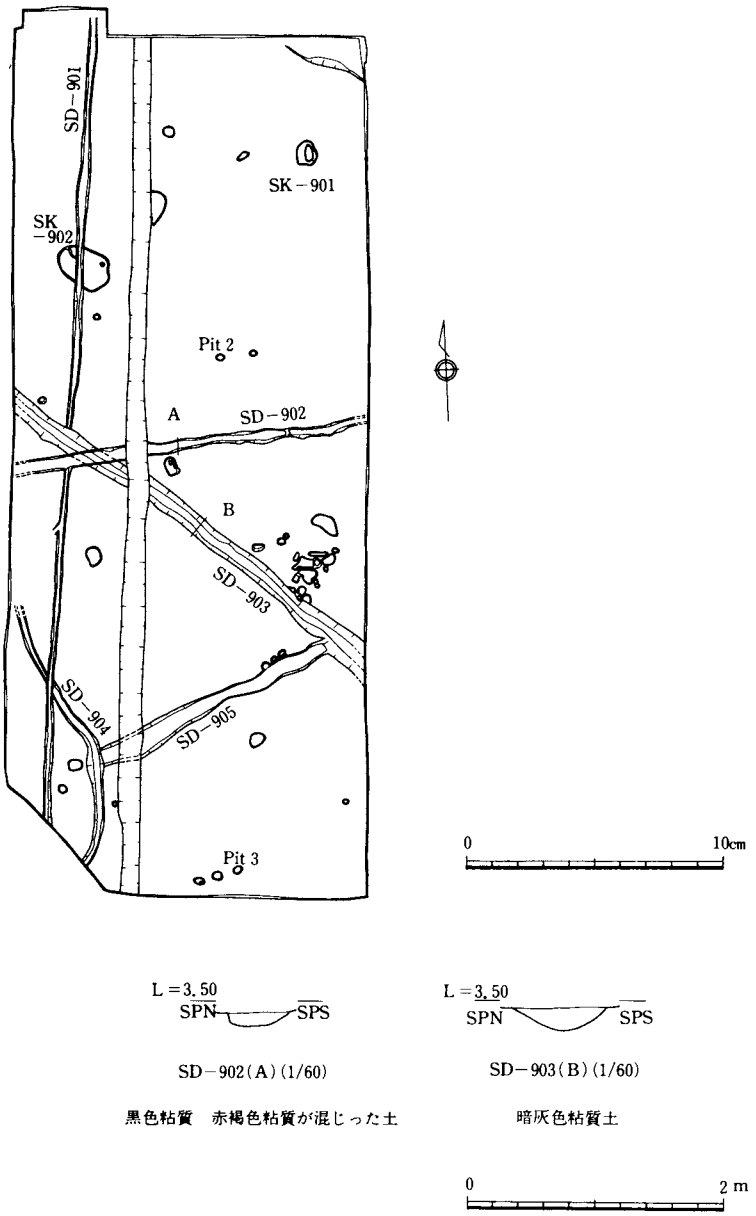
この2つの遺構から出土した土器の中には、第8次までの調査でみられた土器群とは明かに時代を異にしているものが混じっている。それらは古墳時代初期を中心とした時代の遺物である。その出土状況から、1～6は上層、7～10は下層と区別した。1と2は凹線文系土器で、戸水B式の範疇で捉えられる甕である。内面の削りが頸部近くまで上がってきているなどさらに新しい様相が見られる。4は近江系の受口状口縁甕であるが、この地域で変容を受けたものであろう。5は月影甕である。7と8も月影甕であるが、擬凹線が5のように蛇行せず、作りがしっかりしている。環濠の上層と時期的にほぼ同時とみられるSX－901からは、11～16までの土器が出土している。11は在来の系譜を引く甕で、口縁端面を面とりしそこに刻みを施したものである。おそらく戸水B式の範疇で捉えられるものであろう。13は東海系の高坏である。坏部と脚部の接点はないが、同一個体と考えられる。外面と坏部内面をミガキ調整で仕上げている。14と15は月影甕である。16は布留甕の口縁である。小片のため口径等は分からないが、口縁端部の内面を肥厚し、その特徴を備えている。遺構の時期としては、下層遺物から掘削時期はほぼ戸水B式期、上層が堆積したのがほぼ白江式期と考えられる。

さて、先にふれた鉄工会館建設時の工事立会で出土した竪杵について少しふれておきたい（第62図）。出土した竪杵は2点で、いずれも完形品である。1の長さは142cmで、径が7.5cm、握り部の径が4.5cm、2の長さは116cmで、径が7.5cm、握り

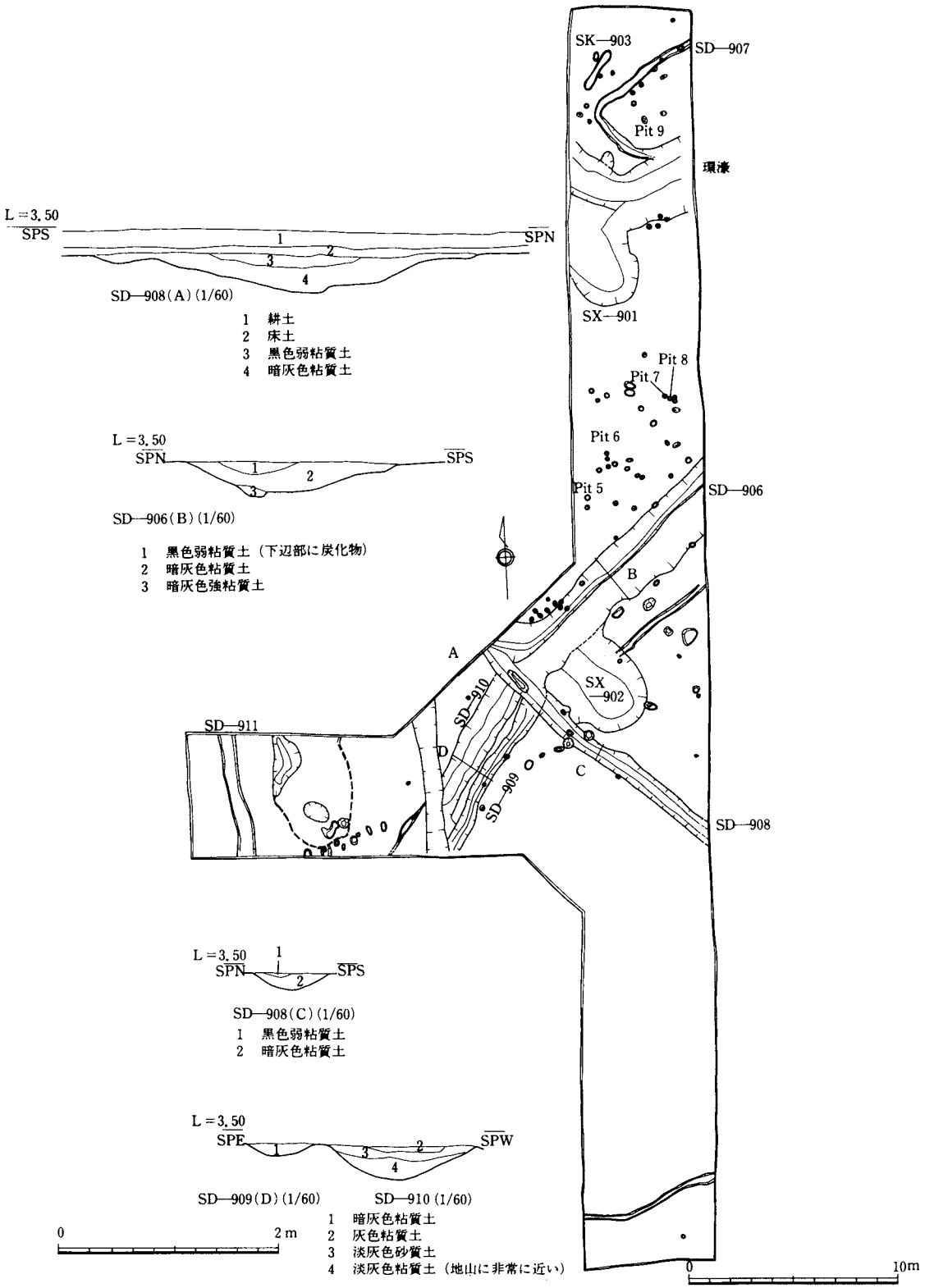


第62図　戸水B遺跡出土の竪杵

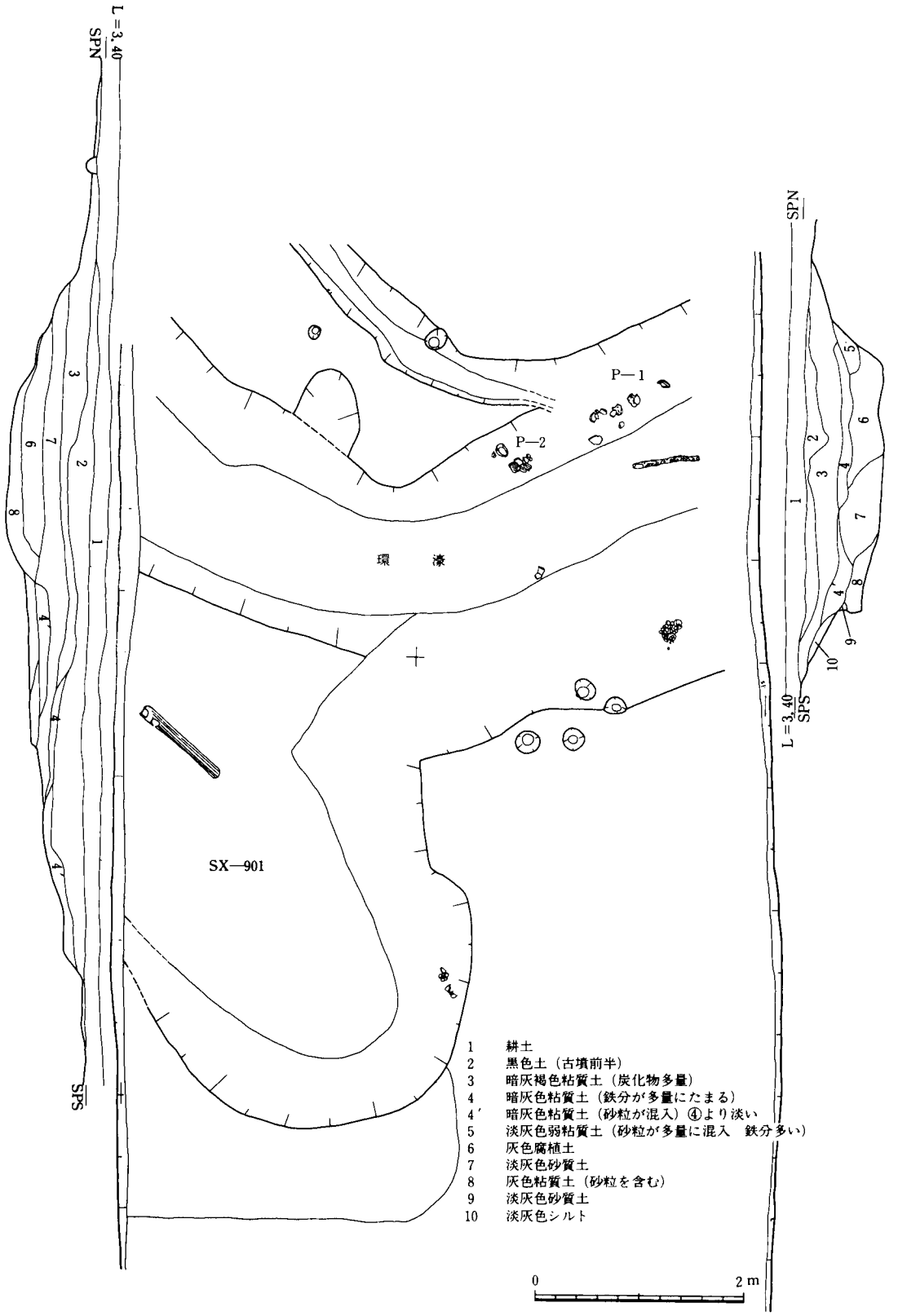
部の径が4㎝である。2点ともに炭化したのか真っ黒である。握り部分に滑り止めはなく、2点ともに芯持ち材である。竪杵の型式変化として、滑り止めの付かないものの上限は今のところ弥生時代後期とのことで、木取りについても芯を持たないものから芯持ち材への変化がみられるという（金沢市教育委員会　楠正勝氏のご教示による）。これまでこの2点の竪杵は、県内では弥生時代中期の竪杵の優品として知られてきた。ところが今回の調査において、その杵が出土した溝の延長とみられる溝が、古墳時代初期にも機能していたことが確認されたことから、戸水B遺跡出土の竪杵2点は、弥生時代のものではなく古墳時代のものと考える方が自然であろう。ただし、これはあくまで溝がつながっていることが前提であり、全掘しているわけではないので、まだ確定はできない。



第63図　第９次調査　中央トレンチ平面図・遺構断面図

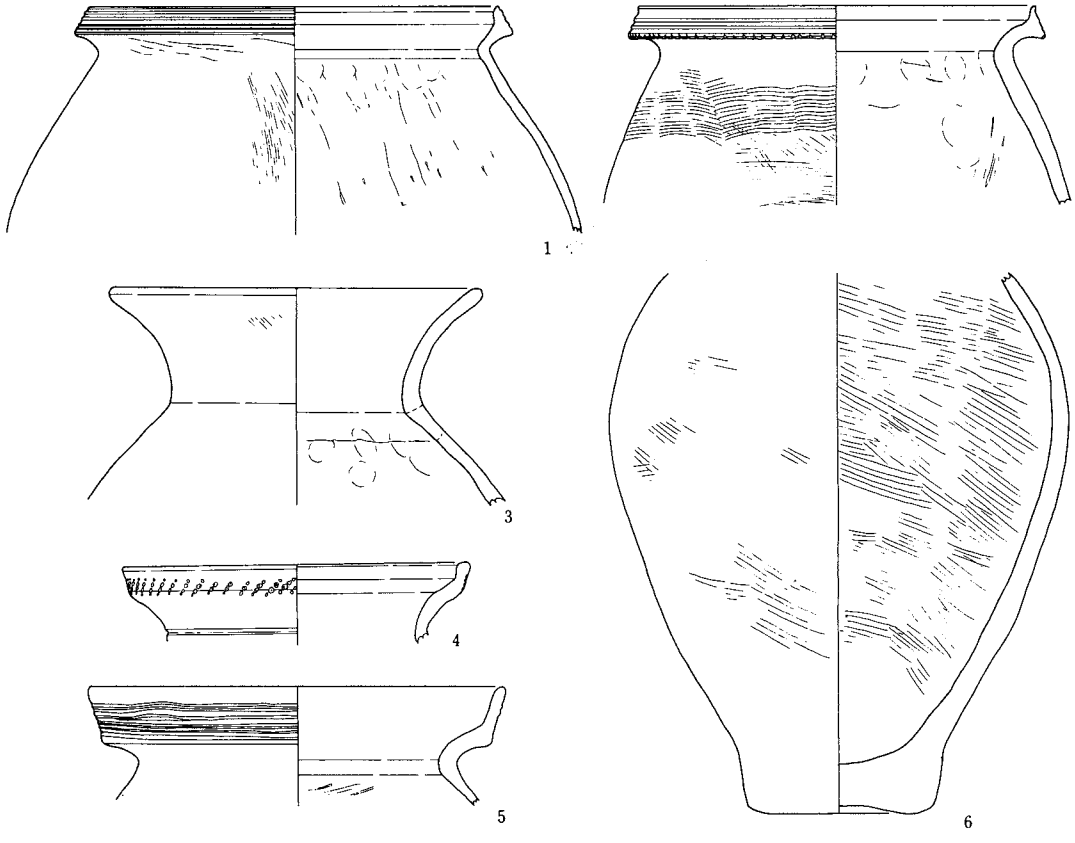


第64図　第９次調査　西トレンチ平面図・遺構断面図

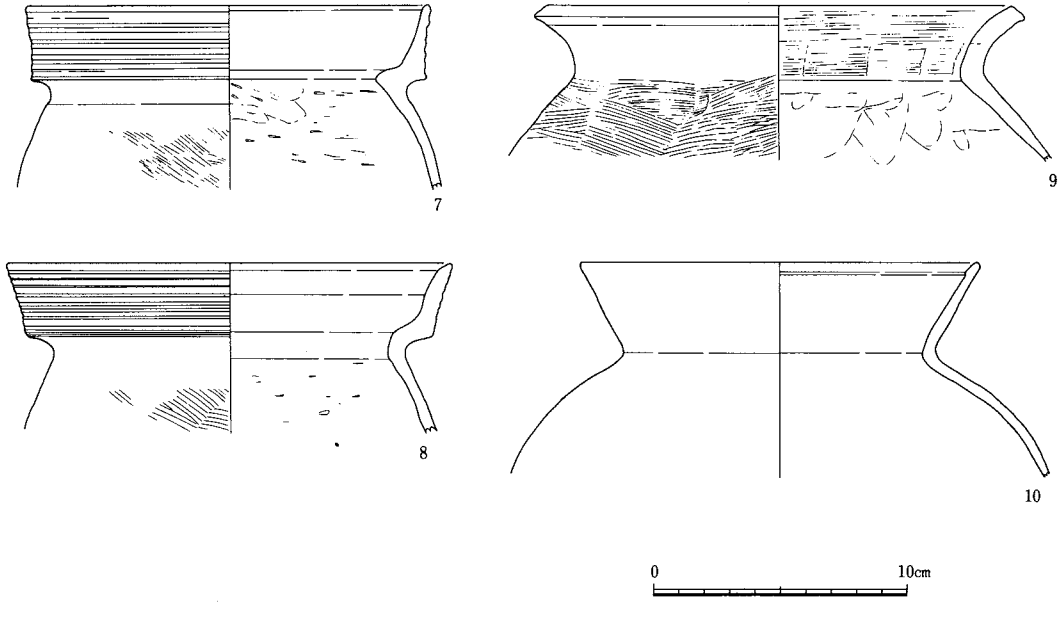


第65図　第9次調査　西トレンチ　環濠・SX－901平面図・断面図

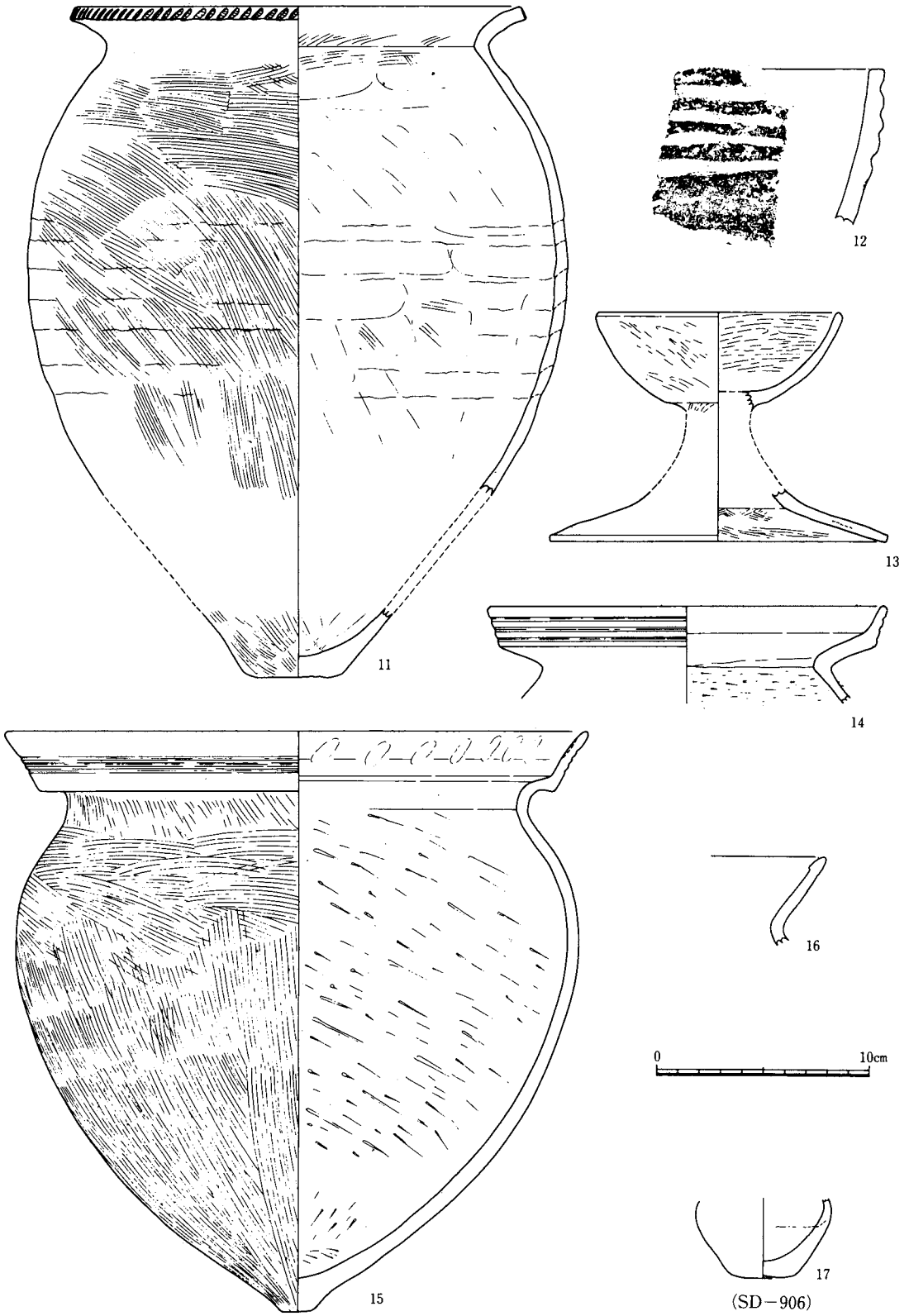
下層



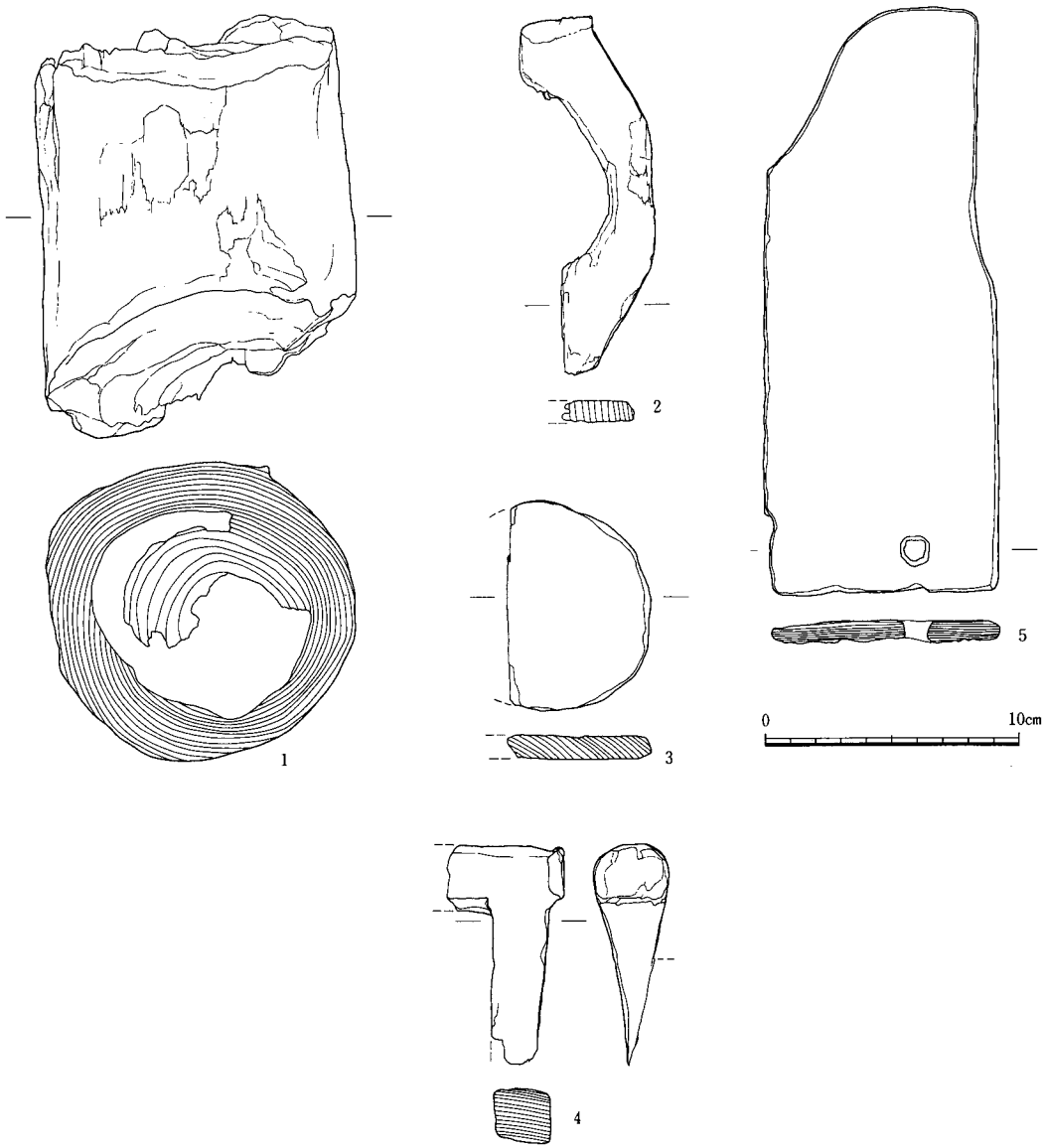
上層



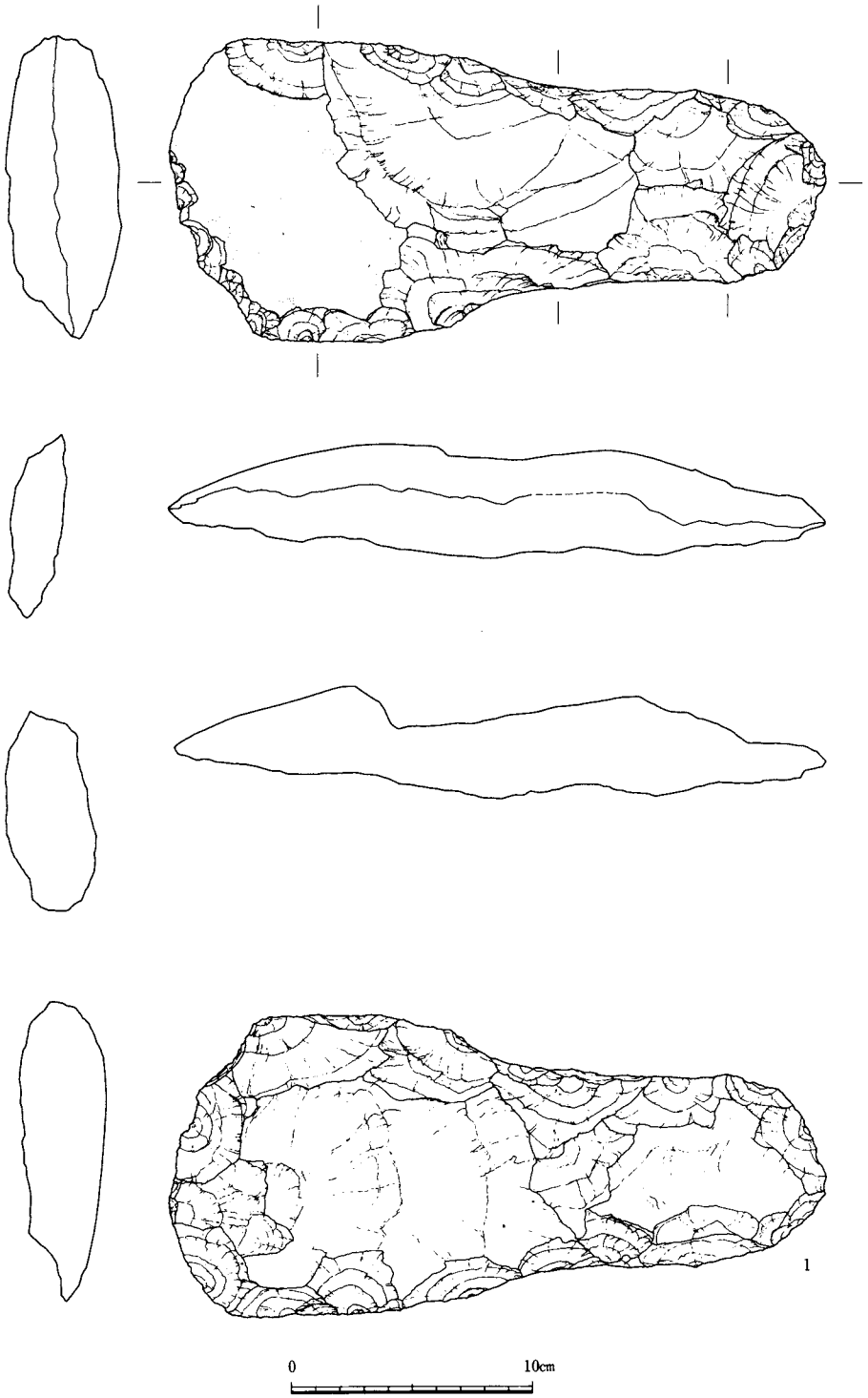
第66図　第９次調査　出土土器（１）(環濠)



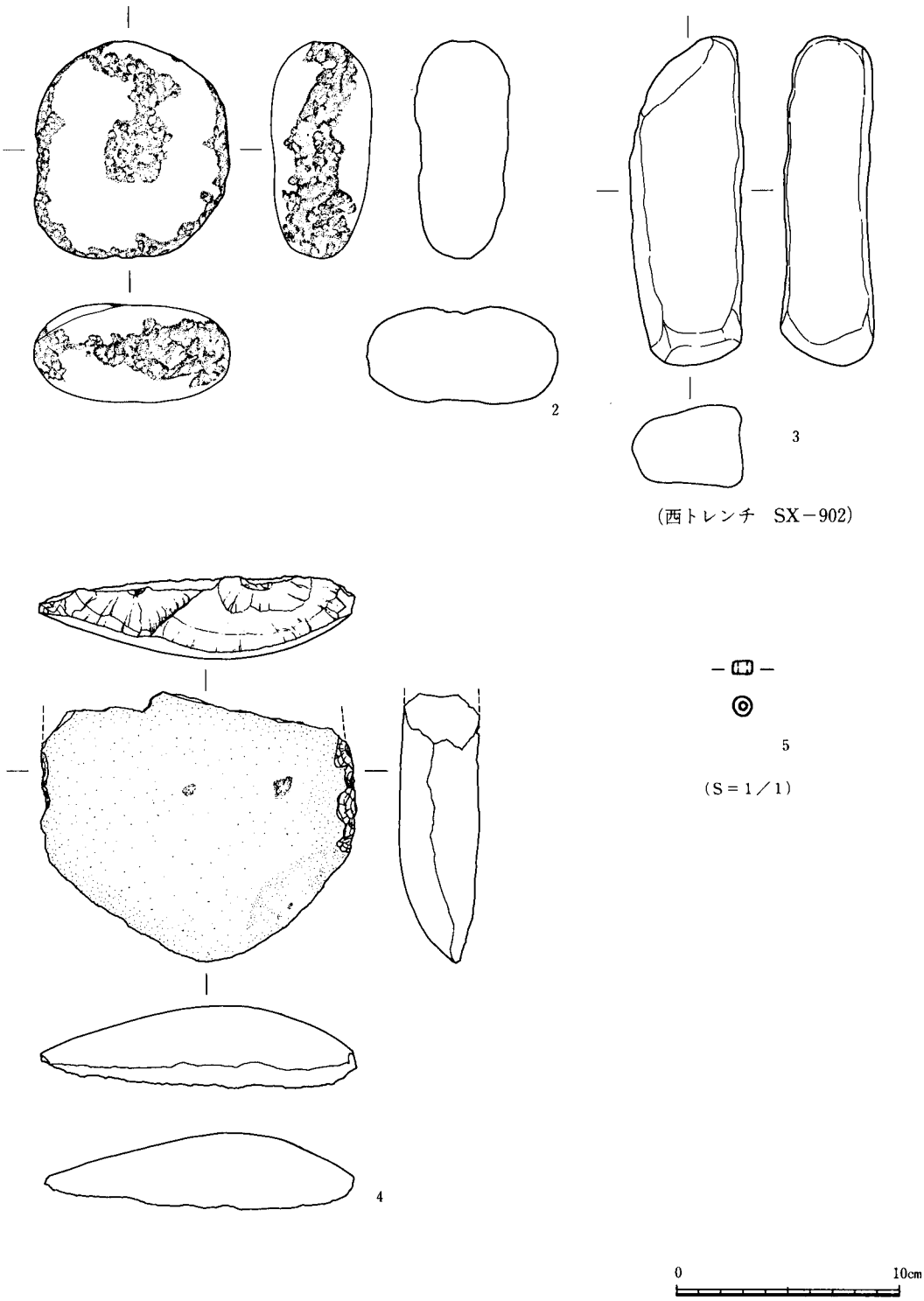
第67図　第９次調査　出土土器（２）(SX－901・SD－906)



第68図　第９次調査　出土木製品（環濠）（S＝１／３）



第69図　第９次調査　出土石製品（１）（S＝１／３）



第70図　第９次調査　出土石製品（２）(S＝１／３)

第12表　第９次調査遺構一覧表

遺構名	出土遺物	数	土器接合関係	備　　考	挿図No.
第９次調査					
SD－901					
SD－902					63
SD－903				幅約35cm、深さ約20cmの北西一南東の溝、時期不詳、SD－908と同一溝	63
SD－904					
SD－905					
SD－906	17	1			64
SD－907					
SD－908				幅約40cm、深さ約20cmの北西一南東の溝、時期不詳、SD－903と同一溝	64
SX－901	11～16	6		環濠から南へ張り出す５×３ｍの楕円形、深さ50cm	65
環濠	１～10	10		幅3.5m、深さ70cm、東西溝が西トレ内で北に方向を変え、第３次調査の27溝へつながる	65

第13表　　第９次調査出土土器観察表

No.	出土地区	器種	法量	口　頸　部	胴　　部	底（脚）部	色　　調	石	長	黒	他	焼	海	備考
1	環濠トレンチ	甕	口：(16.2cm)	O：ヨコナデ、凹線５条 I：ヨコナデ	O：タテハケ、絞り目、指頭圧痕 I：ケズリ後ナデ		O：淡黄 I：淡黄	M 4		S 3			S 1	171
2	環濠Ｐ－３最下層、黒色土	甕	口：(15.6)cm	O：ヨコナデ、凹線３条、キザミ I：ヨコナデ	O：横ハケ、斜めハケ I：ヘラケズリ後ナデ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M S 3				S 1		168
3	環濠第２層暗灰褐色土	壺	口：(14.7cm)	O：ハケ	I：指頭圧痕		O：にぶい橙 I：にぶい黄橙	S 3				M 4		192
4	環濠　下層粘質土	甕	口：(13.7cm)	O：ヨコナデ、刺突文（櫛状工具） I：ヨコナデ			O：にぶい黄橙	S 3		S 2		S 2	M 4	202
5	環濠、下層、粘質土	甕	口：(16.4)cm	O：ヨコナデ、擬凹線３～５条程で２段 I：ヨコナデ	O：ヨコナデ I：ヘラケズリ		O：にぶい橙 I：浅黄橙	L 4	L 1		M 3	S 2		170
6	環濠Ｐ－４	壺	胴：(18.2cm) 底：(7.2cm)		O：ヨコハケ I：ヨコハケ	O：ナデ I：ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 3	S 2			S 3		198
7	環濠肩砂利土	甕（月影）	口：(15.9cm)	O：ヨコナデ、擬凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ I：横方向ケズリ		O：灰黄褐 I：にぶい褐	M 4			M 3	S 3		173
8	環濠肩砂利土	甕（月影）	口：(17.5cm)	O：ヨコナデ、擬凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ I：横方向ケズリ		O：にぶい橙 I：にぶい橙	S 4				S 4	S 3	174

No.	出土地区	器種	法量	口　頸　部	胴　　部	底（脚）部	色　　調	石	長	黒	他	焼	海	備考
9	環濠肩 砂利土	甕	口：(18.3cm)	O：ヨコナデ I：ヨコナデ（工具）	O：ヨコハケ I：ナデ		O：浅黄橙 I：明褐灰	M 3			M 3	M 3		172
10	環濠最下層 黒色土、暗 灰褐色土、 第2層	甕 （布留）	口：(15.7cm)				O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 3				S 3		200
11	SX801P－1 下層	甕	口：(21.4)cm 胴：(26.0)cm 底：　3.5 cm 器：(32.2)cm	O：キザミ、ヨコナデ I：ハケの後ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ後ナデ	O：ハケ I：ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 2		M 3			197
12	環濠ヨコ SX01			O：ナデ、沈線4条 I：ナデ			O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M 2		S 1	LM S4	M 2	S 1	201
13	環濠ヨコ SX01最下 層黒色土	高坏	口：　11.3 cm 底：　15.8 cm	O：ヨコナデ、ケズリ 後ミガキ I：ヨコナデ後ミガキ	O：ケズリ後ミガキ I：ミガキ	O：ケズリ後ミガキ I：ハケ	O：にぶい褐 I：にぶい褐				LM S 4	M		190
14	SX01 最下層	甕		O：ヨコナデ、擬凹線3条 I：ヨコナデ	O：ヨコナデ I：ケズリ		O：淡黄 I：淡黄				LM 3	M 2		169
15	環濠横 SX01 下層	甕	口：(28　)cm 底：　1.8 cm 器：(28　)cm	O：ヨコナデ、擬凹線 3本以上 I：ヨコナデ指頭圧痕	O：ハケ I：ケズリ	O：ハケ I：ケズリ、ナデ？		M 2	M 2		M 3	M 3	M S 2	193
16	環濠ヨコ SX01最下 層黒色土	甕		O：ヨコナデ I：ヨコナデ			O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙				M 4	S 1		191
17	A区　6溝		胴：　5.8 cm 底：　3.0 cm				O：灰白 I：灰白							199

第14表　第9次調査出土木製品観察表

No.	名　　称	遺　　構	残存法量（cm）	木 取 り	備　　考
1	柱根？	環濠	L16.8×W12.6×H11.9	丸木 （芯持ち）	
2	用途不明品	環濠	L14.3×W4×H0.9	柾目	
3	曲物の底？	環濠	φ約8×H0.96	柾目	針葉樹
4	把手	環濠	L8.7　握り φ2.7		針葉樹
5	有孔板 （盾？）	環濠	L23.5×W9.24×H0.9	板目	孔1、上端を曲線に加工

第７章　戸水Ｂ式土器と戸水Ｂ遺跡(まとめにかえて)

第１節　はじめに

戸水Ｂ遺跡は、1974年の第１次発掘調査によって出土した凹線文系土器群が、畿内第Ⅳ様式に並行するものとして設定された戸水Ｂ式土器で知られる遺跡である[1]。戸水Ｂ式土器は、その発見から20年を経た現在も、加賀地域における弥生時代中期末葉の標識として著名である。

戸水Ｂ遺跡の発掘調査は本報告分までで９次を数える。1974年の第１次に始まり、20年余りの間に蓄積された出土遺物は膨大な量である。今回はできるだけ過去の発掘調査で蓄積された資料も活用しつつ、戸水Ｂ式土器の現段階での評価を試みたい。

第４・５次発掘調査の報告書の中では、戸水Ｂ遺跡の出土土器を戸水Ｂ式の中でも新古に区別できるのではないかとの見通しをたてておいた[2]。ただ、第４・５次の調査では良好な一括資料が少なく、新相・古相の区分も曖昧とした部分が少なくなかった。ところが、第４・５次調査の報告書刊行とほぼ時を同じくして、金沢市より『金沢市専光寺養魚場遺跡』[3]が刊行された。調査を担当された増山氏はこの中で、同遺跡出土の土器群を基本的には戸水Ｂ式に含まれると考えられるとしつつ、磯部運動公園遺跡[4]と戸水Ｂ遺跡の中間的な様相を示すものと位置付けられた。その上で、北陸における凹線文系土器群の波及から、後期に至る過程を、磯部運動公園遺跡→専光寺養魚場遺跡→戸水Ｂ遺跡という３段階に区分できると指摘された。筆者も波及期から定着期までを３つの段階で捉えることには今のところ異論はない。今回の報告においてもこの流れに沿って進めていきたい。

第２節　戸水Ｂ式土器群

戸水Ｂ式土器は、前述の通り1974年の第１次発掘調査によって出土した土器群により設定された、北陸における畿内第Ⅳ様式並行期の代表的な標識として理解されている。この時期を増山氏は「当初、外来系の土器として認識された凹線文系の土器が既にある程度在地化した段階」[4]と認識され、楠氏は「凹線文が各器種に施され、当地域に定着する時期」[5]とされている。

そこでまず、この戸水Ｂ式土器群が、具体的にはどのような内容の土器群であるのかを、主に今回報告の土器から確認しておきたい。

壺　在来の壺の量が減り、凹線文系の壺の割合が高まっている。凹線文系の壺は、面取りした口縁端部に凹線文や波状文を巡らせた大型の広口壺と口縁部にＣ種の凹線[6]が施された大型・中型・小型の直口壺が見られる。広口壺の頸部には、突帯が巡るものも見られる。在来の壺では大型の広口壺と有段口縁壺、頸部に２孔１対の穿孔が見られる中・小型の口縁が大きく外反する広口壺などがある。また、数は少ないが、中・小型の無頸壺も見られる。

甕　大半は中型甕である。甕は凹線文系のものが定着し、量的にもかなりのウェイトを占めるようになる。口縁端部を面取りもしくは上下に拡張し、その面に凹線文を施す。胴部外面はハケ調整（タタキの痕跡が残るものもある）され、最大径の位置が底面から器高の約２/３付近に設

けられ、逆さ卵形を呈する[7]。胴部内面はハケ調整の後下半を削り（ナデ仕上げのものもある）、薄く・軽く仕上げている[8]。また、小型の甕を中心に受口状口縁を持つ近江系の甕も、この時期一定量の普及が認められる。外面は口縁から胴部上半部にかけて、波状文と直線文を交互に施文する近江の「北部型」[9]の特徴を備え、内面はナデやケズリを施し、やはり薄く仕上げようという意識が感じられる[10]。これら外来系の甕に対し、前段階の畿内第Ⅲ様式並行期の小松式に盛行した櫛描文系の在来の甕は、その多くは凹線文系土器群の影響を受け、口縁端部がヨコナデ調整されて口縁のハケがナデ消されたものや、頸部のくびれが強くなるものなどといった折衷的なものが多くなる。また、これらとは別に、量的には少ない大型の甕は、外来系のもので占められる。口縁の形態は凹線文系のそれであるが、頸部に突帯が巡るものが目立つ。

高坏　圧倒的に凹線文系のものが多くなる。基本的に坏部の口縁が直立し、外面にC種凹線が巡るが、坏部の浅いものと比較的深いものの2タイプが見られる。脚部はラッパ状で、外面は凹線で飾られる。調整は内外面ともにミガキ調整が施されている。この他、調整はハケ調整で、脚部の器壁も厚く、凹線文系のものに比べ粗雑な作りのY字状の高坏も見られる[11]。

鉢　鉢についても在来のものはその数を減じ、凹線文系のものの量が増える。凹線文系の鉢は大型のものと中型のものに見られ、高坏同様外面にC種凹線を巡らせた半円球状の鉢に台の付く台付鉢が一般的になる。坏部が深く内湾するもの、比較的浅く直立程度で終わるもの、それらに高坏の脚を縮めたような台（この場合脚というべきか）、もしくは透かし穴がある筒状の台が付く。丁寧にミガキ調整で仕上げられる。この他、小型のもので、在来の内湾気味の椀状のものなどが少数残る。

前述の通り、いずれの器種においても凹線文系土器群がある程度定着し、土器組成の中で大きなウェイトを占めるようになっている。その中で在来の土器も、外来系土器の影響を受け、変容を受けつつもかろうじて生き残っている状況である。ここに挙げた特徴は基本的には増山氏の指摘された3段階の戸水Bの段階に当てはまると考えられる。戸水B遺跡の中にあっても比較的新しい段階の状況である。この状況を踏まえ、次節で当遺跡出土の土器の検討をおこないたい。

第3節　戸水B遺跡出土土器の検討

本報告書では、第6次から第9次までの発掘調査報告を所収している。このうち第9次調査で検出された第3次調査の27号溝につながる環濠とした溝、及びその横のSX－901からの出土品を除けば、そのほとんどがいわゆる戸水B式の範疇に収まる資料である。溝資料が多いため、良好な一括資料ばかりとは言いがたいが、一応第4・5次の発掘調査報告書で見通しをたてた新相・古相を念頭におきつつ検討を加えたい。同報告書の中では、はっきりとした根拠を提示することはできなかったが、畿内第Ⅲ様式並行期からの系譜の土器と、凹線文系土器を中心とした外来系の土器の量比によって新古の関係を捉えようと試みた。今回は土坑資料の中でも比較的まとまった数の土器が出土しているものもあり、前回に比べればよりはっきりとした傾向がでるのではないだろうか。

まず、前項で確認した新相段階のものを、土坑資料を中心に抽出してみる。壷では凹線文系の大型の広口壷がSD－601・603、SK－706、SK－707で見られる。甕では近江系の受口状口縁のものがSK－604、SD－601・603、SK－709、SK－712上層、SK－801から出土している。凹線文系の甕は、新相以前の段階から既に一定量見られることから、新古を示す指標とするにはさらに細かい検討が必要であろう。高坏では凹線文系のものが、SD－601・603、SX－801で出土している。鉢は凹線文系の台付鉢がSK－706、SK－712上層、SX－801で出土している。この他、溝の資料ではあるが、遺構として比較的まとまって新相を示しているものでは、SD－604、SD－701などが挙げられよう。

次に古相を示すものを抽出してみる。器種にかたよりが有り、組成としての新古を示す場合には若干問題を残すが、SK－712の下層出土土器群が比較的まとまった資料といえよう。この他、溝資料でSD－704も古相を示すように見えるが、高坏の脚部に疑問が残るところである。単品でみればSK－701、SK－702出土の土器も古相の土器と判断できるが、組成がはっきりしないので保留しておきたい。

ここで過去の調査での出土品を振り返っておく。過去の調査においても一括資料として扱うことができるものは以外に少ない。第1次調査の第1号土坑出土土器は台付鉢には疑問も残るが、在来の土器中心の組成を示している。第3号土坑についても在来系の甕を中心に古相を示しているといえよう。第4次調査では古相を示すのが第3号土坑、第29号土坑、新相を示すのが第5号土坑、第7号土坑、第10号土坑などである。このうち第7号土坑出土の口縁端面に波状文が巡る広口壷は、第6次調査のSD－601・603出土の広口壷[12]と同一個体であることも確認している。

集落が営まれた期間が短いこともあり、遺構同士の切り合いが余りないため、根拠は若干弱いが、これらの検討を整理してみると次の表のようになる。

第15表　遺構新古関係表

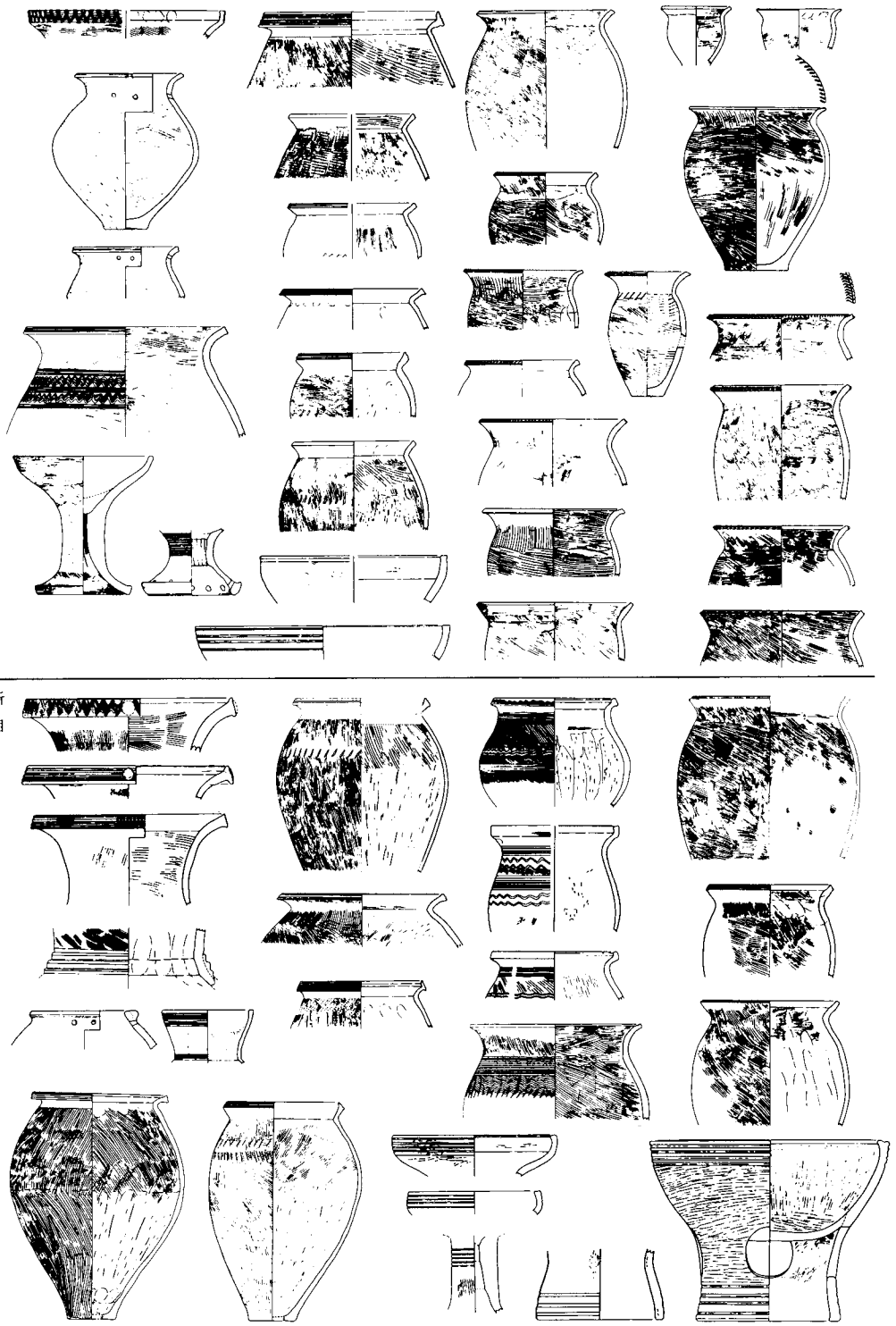
	第1次調査	第4次調査	第6次調査	第7次調査	第8次調査
古相	1号土坑 3号土坑	3号土坑 29号土坑		SK－712下層 SK－715 (SK－701) (SK－702)	
新相		5号土坑 7号土坑 10号土坑	SK－604 SD－601・603 (SD604)	SK－706 SK－712上層 SK－716 (SD－701)	SX－801

比較的遺跡の範囲全般に、古相・新相の遺構が散らばっている。時期による居住域の変更がほとんどなく、集落の廃絶を迎えたということであろうか。しいて挙げれば6次調査区付近に古相を示す遺構が見あたらないくらいである。

ここまで土器の組成、在来・外来の比率等出土土器全般を眺めての検討であった。新相・古相

古相

新相



第71図　戸水B遺跡出土土器

に、大きな土器形式の変化を認めることができず、他の要素を判断材料とすることに大過はないと考えるが、土器(特に甕類)の細かな変化を一応挙げておきたい。前述のとおり戸水B式は、凹線文系土器を特徴とする畿内第Ⅳ様式並行期と考えられている。凹線文系の甕には、畿内第Ⅴ様式に後継するタタキ技法により器壁を薄くする畿内系のものと、内面下半をケズリ上げて器壁を薄くする瀬戸内系のものが存在する[12]。この他にも口縁端面を余り広げず、凹線も1条程度の畿内系と口縁端面を上下につまみ出し2～3条の凹線をめぐらせる瀬戸内系などといった形態的・装飾的特徴の違いも見られるが、やはり器壁を薄く仕上げる技法の採用が最も大きなこの甕の特徴であるといえよう。

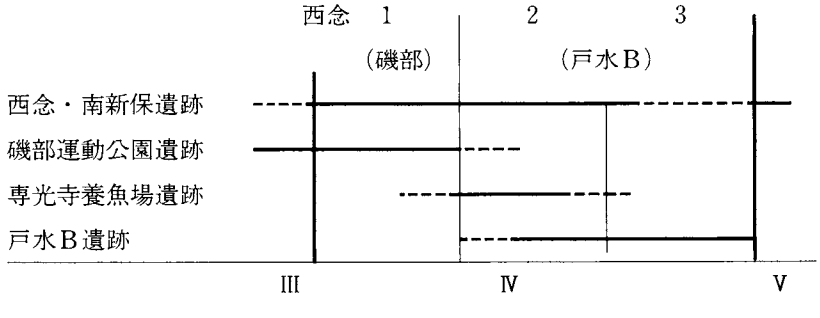
北陸地方の在来の甕の多くは、内外面ともにハケ調整されるものが多い。その調整は口縁端部にまで及び、口縁端部をヨコナデする凹線文系の甕とは大きな違いを見せている。特に内面の調整は器壁の厚みと関係が深く、凹線文系土器の定着度を推し量る上で1つの指標となるのではないだろうか。また、口縁端部もヨコナデを施すものと端部までハケ調整を残すものとで凹線文系土器の定着度を知ることが可能なのではなかろうか。口縁端部のヨコナデにより、口縁内面に見られた羽状文や刺突文は姿を消すことになる。

以上が甕類でみられる戸水B古相と新相を区別するポイントとなるのではないだろうか。

第4節　他の遺跡との比較検討

前項において不十分ではあるが、戸水B遺跡出土土器についての分析をおこなった。ここではその結果に基づき、関連する時期の数遺跡を比較対象に、戸水B遺跡の地域での特徴を浮かび上がらせたい。比較材料とするのは、金沢市磯部運動公園遺跡、金沢市専光寺養魚場遺跡、金沢市西念・南新保遺跡[13]の3遺跡である。当該期については前述のとおり増山氏が3期に区分しているが、西念・南新保遺跡でも楠氏が当該期を1期～3期に区分している。土器の分類などは最終報告を待たねばならないが、遺構変遷表から土器の変遷もある程度知ることができる。報告書から読み取ると各遺跡の当該期の並行関係は以下の図のようになる。

第16表　各遺跡並行関係1



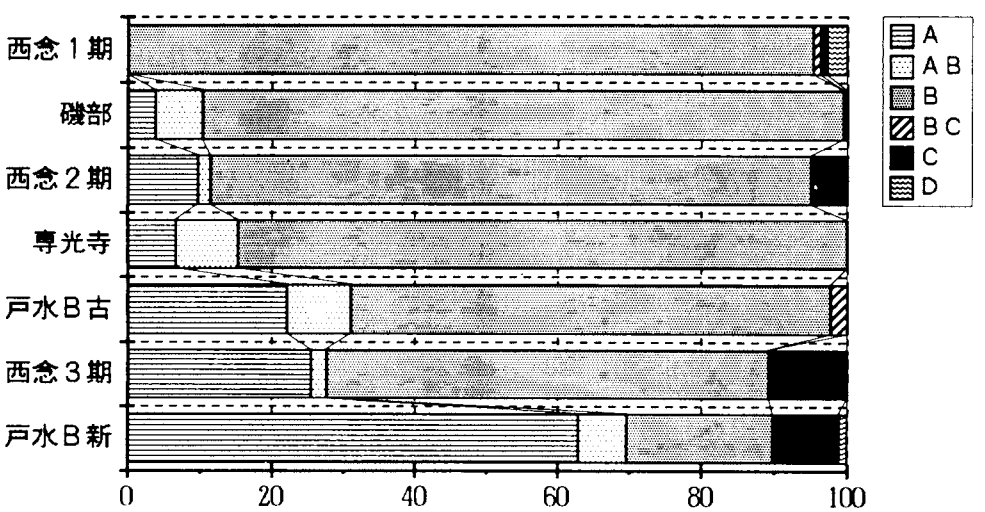
さて、畿内第Ⅳ様式並行期のこの時期の大きな流れとして、凹線文系土器群を中心とする外来系の土器群の波及・定着が見られることは前述の通りである。そこでここではその外来系の土器群が、在来の土器群の中でどのように定着していくのかを、各遺跡の土器がどのような組成になっているのかを分析して明らかにしたい。

まず、外来系の土器群と在来系譜の土器の出土数を単純に比較してみた（下表）。外来系の凹線文系の土器を（A）・近江系の土器を（C）・その他の土器を（D）とし、在来系譜の土器を（B）・在来系のものと外来系のものの折衷的なものをそれぞれ（AB・BC）として各遺跡の発掘調査報告書の挿図から判別した。今回は、比較的各時期にわたり資料数がまとまっている壺類と甕類のみを取り上げることとした。あくまで図上での判断なのでどのくらい正確なのかは若干疑問も残るが、参考までに作業をしてみた。その結果が以下の表である。

第17表　系統別出土土器数（壺&甕）

	A	AB	B	BC	C	D	資料数（壺／甕）
西念１期	0	0	103	1	1	3	108（ 48／ 60）
磯　部	7	12	162	0	1	0	182（ 38／144）
西念２期	6	1	51	0	3	0	61（ 17／ 44）
専光寺	7	9	88	0	0	0	104（ 18／ 86）
戸水B古	10	4	30	1	0	0	45（ 6／ 39）
西念３期	12	1	29	0	5	0	47（ 11／ 36）
戸水B新	56	6	18	0	8	1	89（ 17／ 72）

第18表　系統別出土土器（壺&甕）グラフ



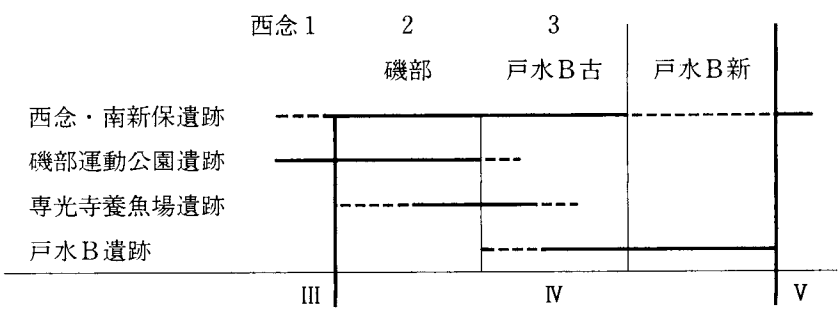
A＝凹線文系　B＝在来系　C＝近江系　D＝その他の外来系　AB・BC＝それぞれの折衷型

西念１期の段階には在来系の土器が９割を超え、凹線文系土器はまだ見られない。外来系の土器は信州系などむしろ東のものがみられる。これに対し、磯部運動公園遺跡からの出土土器を見ると、ほんの数パーセントではあるが、凹線文系土器が入ってきていることが分かる。また、その新しい土器に影響を受け、在来の土器が変容しているものも見受けられるようになっている。楠氏は西念１期をほぼ磯部と並行する時期と捉えておられる[5]が、畿内第Ⅳ様式並行期を凹線文系土器の波及から定着の期間と捉えるならば、出土土器から確実に波及が読み取ることができない以上、磯部の時期と並行すると考えることには抵抗を覚える。そこで、磯部以下戸水Ｂ新までを畿内第Ⅳ様式並行期と捉え、検討を加える。

前にもふれたとおり、この時期の古い様相と新しい様相を区別する一つの指標として、外来・在来の出土量比がある。グラフでみると外来系が７割にも達する戸水Ｂ新はさておき、凹線文系・近江系・折衷型の外来系が２割に満たない磯部・西念２期・専光寺と、外来系が４割前後に膨れる戸水Ｂ古・西念３期とで区別できそうである。これは金沢平野における凹線文系土器を中心とした外来系土器の波及が、いくつかの段階を持っていたことの現れであろう。だとすれば、外来系土器の出土量の傾向が新古関係を表し、磯部と西念２期と専光寺がそれぞれ並行する時期ということになり、同じように戸水Ｂ古と西念３期が並行する時期ということになる。ただし、増山氏も述べておられるように、専光寺養魚場遺跡については、磯部から戸水Ｂをつなぐ過渡的段階と考えられるため、どちらの段階にも足をかけていると理解する方がよいかもしれない。

さて、そこで問題となるのが戸水Ｂ新相である。在来の土器の割合が２割を切るところにまで落込み、６割を超える凹線文系土器を中心に、外来系土器が７割を超えるところにまでなっている。在来土器との折衷品も合わせるとその割合は実に８割にも達している。ここまでくると「ある程度定着」の段階は通り過ぎ、「在来土器を払拭」とまで言えるのではないだろうか。これが時期的に地域全般に当てはまる状況であるかどうかは、畿内第Ⅳ様式並行のまとまった遺跡の例がまだまだ少ないため何とも言えない。ただ、これらの状況を時期差と捉えるならば、各遺跡の並行関係は以下の表のようになる。

第19表　各遺跡並行関係２



県内では磯内第Ⅳ様式並行の遺跡の確認例が少ないため、確定的には言えないが、土器の様相に限らず、戸水B遺跡新相のあり様は特異な例ではないかと感じる面もある。異様なまでの凹線文系土器の出土量、平地式建物の根がらみといった最新の建築技法、平地での環濠集落など同時期の他遺跡ではみられないような要素が満載されている。したがって第19表の並行関係が成立するのかどうかについては、はなはだ疑問を感じているところではあるが(14)、これまでの土器編年の中の戸水B式の理解を忠実に戸水B遺跡で構築すると、このような結果が相対的に導き出されたわけである。

第5節　おわりに

今回は、外からの影響（特に西から）に重きを置き検討を進めてきた。時間的な関係もあり、本来はもっと詳しく検討すべき個々の土器や器種ごとの状況などについてまでは手が回らなかった。おそらく甕以外の器種についても畿内第Ⅳ様式並行期の中で、それぞれ独自の展開をしていると考えられる。特に新しく現れるような器種が、いつの段階で見られるようになり、他のどの器種とどういう関係を持って展開しているのかなど、詰めるべき作業を多く残したままこの報告のまとめとするには、心苦しい思いである。いずれ別の機会に、改めて多角的にこの畿内第Ⅳ様式並行期の検討を試みたい。その折りには、前段階の畿内第Ⅲ様式並行期との間にある大きな画期についても論及できればと考えている。

最後になったが、本稿を成すにあたり、見学会などを通じ多くの方々から有益な御指導・御教示を頂いた。記して深謝の意を表したい。

赤沢徳明、北野博司、楠　正勝、小林正史、栃木英道、久田正弘、深澤芳樹、増山　仁、安英樹、湯尻修平（順不同・敬称略）

註

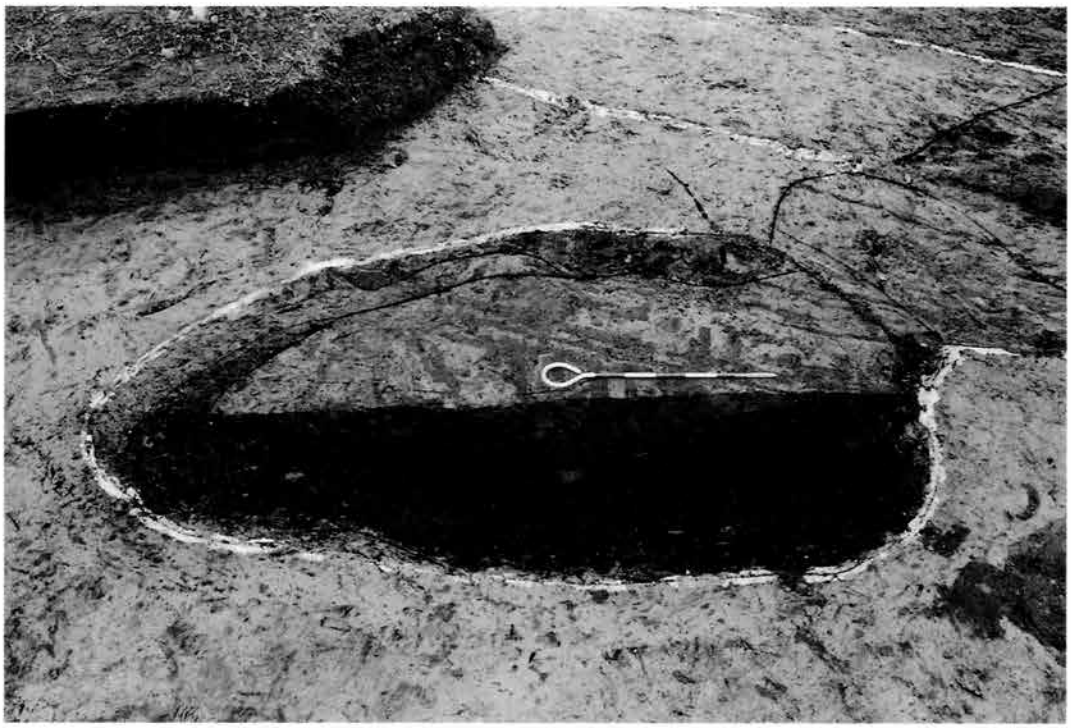
(1) 湯尻修平　『金沢市戸水B遺跡調査報告』　石川県教育委員会　1975年
(2) 中屋克彦　「まとめ」(『金沢市戸水B遺跡－第4・5次調査－』　石川県立埋蔵文化財センター　1992年)
(3) 増山　仁　『金沢市専光寺養魚場遺跡』　金沢市文化財紀要102　金沢市教育委員会　1992年
(4) 増山　仁　『金沢市磯部運動公園遺跡』　金沢市文化財紀要70　金沢市教育委員会　1988年
(5) 楠正勝ほか『金沢市西念・南新保遺跡II』　金沢市文化財紀要77　金沢市教育委員会　1989年
(6) 正岡睦夫　「凹線紋・擬凹線紋」(『弥生文化の研究』3弥生土器I　1986年)
(7) 基本的には畿内系のものと瀬戸内系のものとがあるが、北陸では調整・施文などで両者の折衷的なものも存在している。
(8) この種の甕で煮炊きの熱効率の飛躍的な向上が見られたと考えられる。これに伴う調理法の変化、ひいては食生活の変化がもたらした生活全般の変革は、画期設定の重要な指標の1つとなろう。
(9) 岩崎直也　「邪馬台国出現前夜の近江－弥生土器から－」(『滋賀考古』創刊号　滋賀考古学研究会　1989年)
(10) 小型であることもあってか、外面には口縁にまでススが付着しているものが目立つ。
(11) 畿内系の水平口縁の付く高坏の、水平帯が省略されたものの可能性もある。当遺跡では第1次調査と第7次調査で出土している。
(12) 奈良国立文化財研究所の深澤芳樹氏に、内面ケズリの技法は畿内を囲むドーナツ状の地域に分布し、外面が

ハケ（東）かミガキ（西）かで地域色がみられる。畿内は内面がハケ・ナデ調整され、逆に外面の底部付近が削られる、とのご教示を得た。

(13) 宮本哲朗、楠正勝ほか『金沢市西念・南新保遺跡』金沢市文化財紀要40　金沢市教育委員会　1983年、楠正勝ほか『金沢市西念・南新保遺跡II』金沢市文化財紀要77　金沢市教育委員会　1989年、楠正勝ほか『金沢市西念・南新保遺跡III』金沢市文化財紀要99　金沢市教育委員会　1992年

(14) 新たに加わる要素は、さきに述べた凹線文系土器、根がらみ、環濠などに留まらず、それらに起因する当地にはなかった新しいライフスタイルの全般に及ぶものと理解している。これほどの大変革がみられる遺跡が、現在までのところ当遺跡以外ほとんど確認されていないことが、諸状況を遺跡差で理解することも捨てきれないでいる。

図　　版

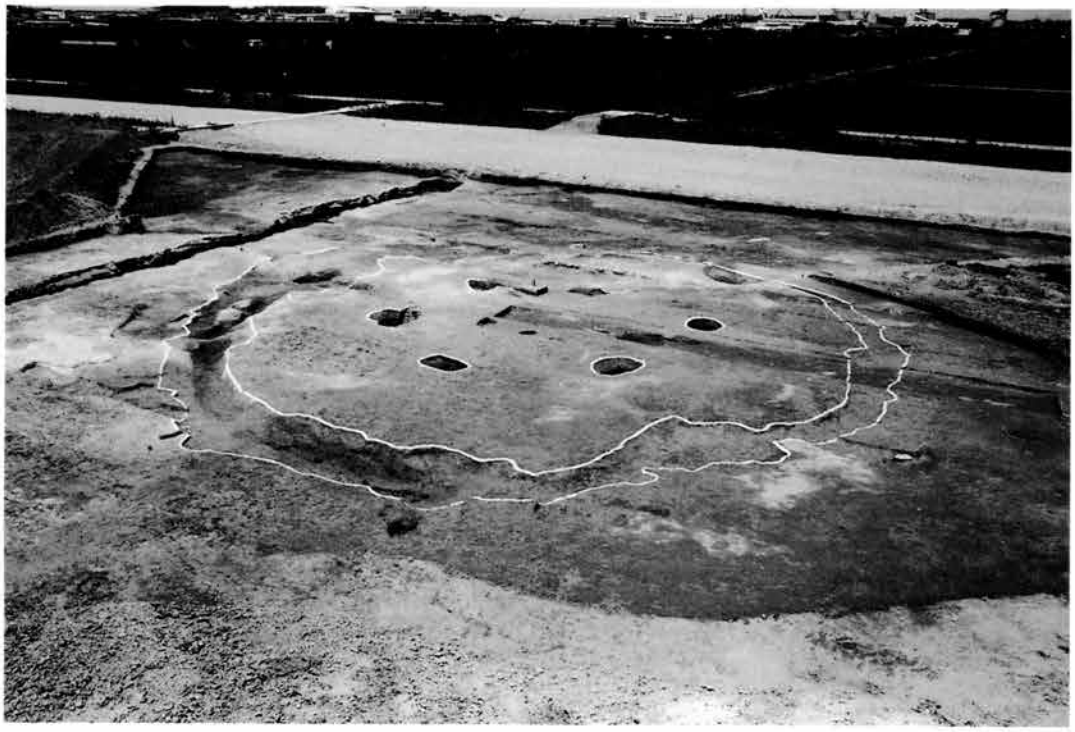


SK－601

SK－601土器（2）出土状況

SK－601完掘状況、

平地式建物跡（北から）



平地式建物跡（南から）

平地式建物柱穴 Pit ― 3 根がらみ木柱根出土状況

平地式建物柱穴 Pit ― 3 根がらみ木柱根

同組み合せ部拡大

平地式建物柱穴 Pit ― 2 根がらみ木柱根

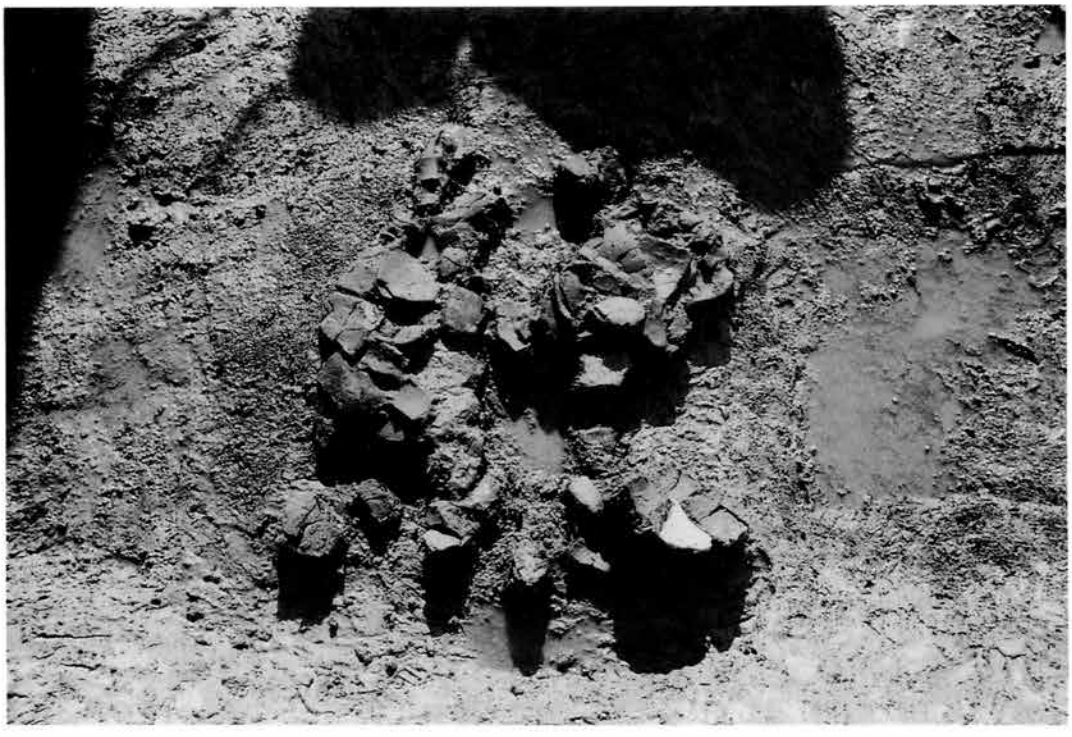
平地式建物柱穴 Pit ― 5 根がらみ木柱根

平地式建物柱穴 Pit ― 6 根がらみ木柱根

同組み合せ部拡大

西14調査区完掘状況

L 6 調査区完掘状況



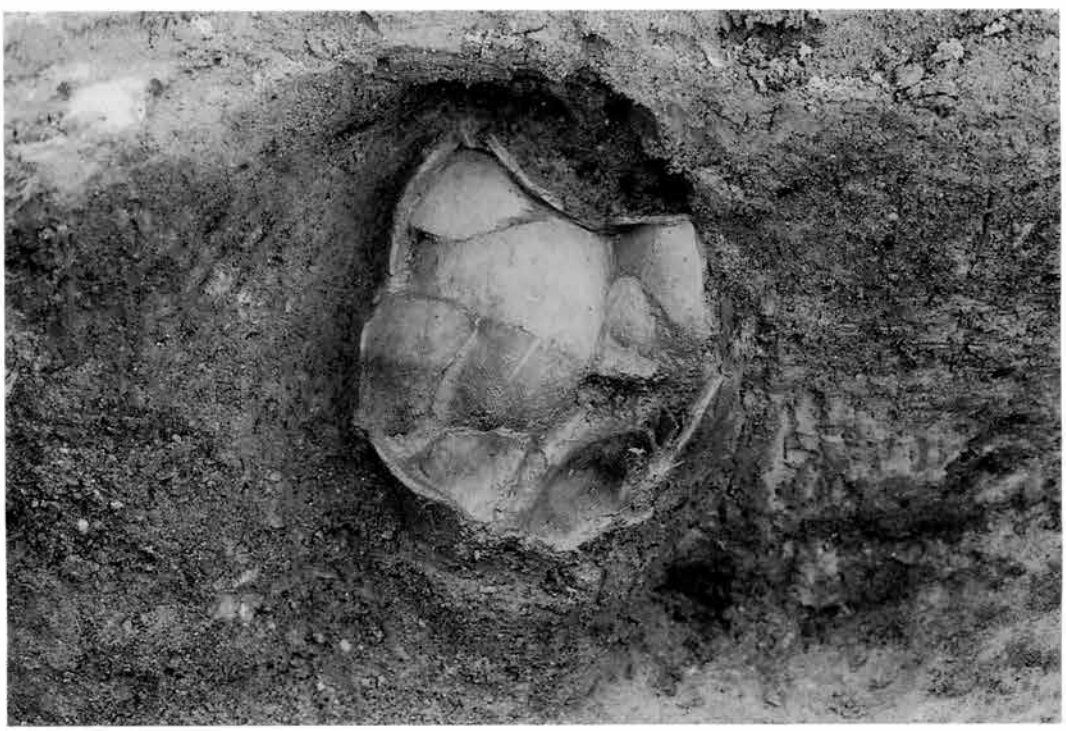
SD－701土器出土状況

SD－701土器（66）出土状況

西調査区発掘作業風景（南から）

南調査区完掘状況（西から）

SK－704土器（3）出土状況



同拡大

SD－708土器（117）出土状況

SK－712

SK - 714

西調査区完掘状況（北から）

調査区遠景

調査区完掘状況（南から）

SK－804土器出土状況

第 7 次調査西調査区・第 8 次調査区・第 9 次調査中トレンチ位置関係

東トレンチ

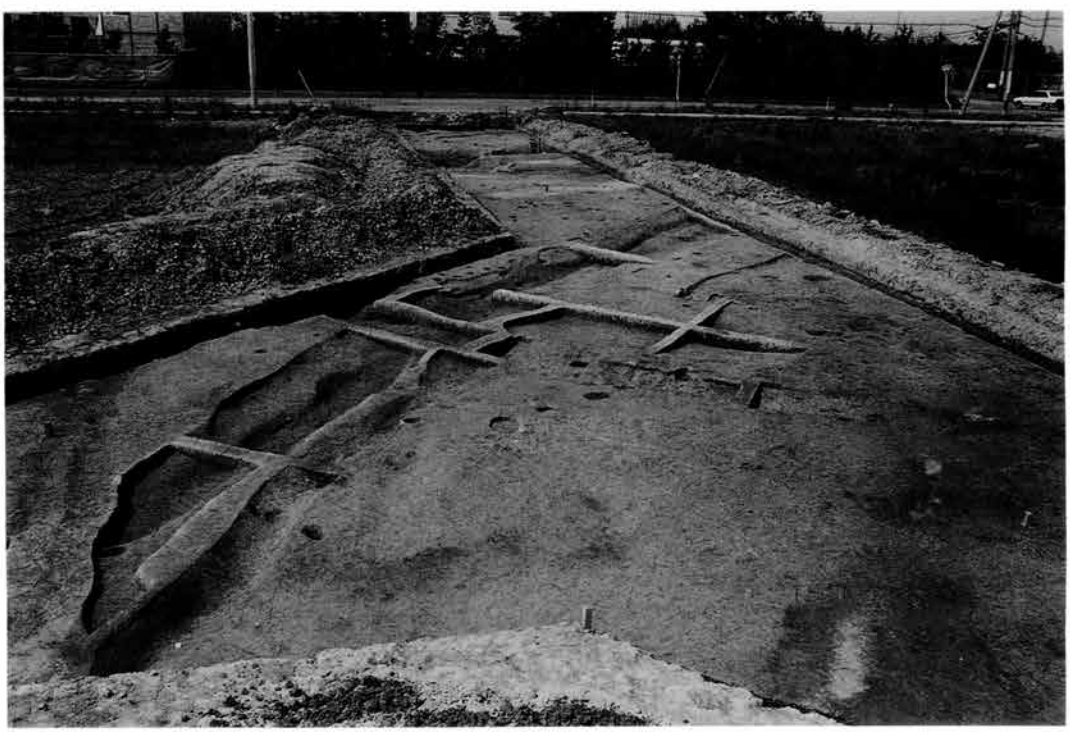
中トレンチ遺構検出状況（北から）

中トレンチ完掘状況（東から）

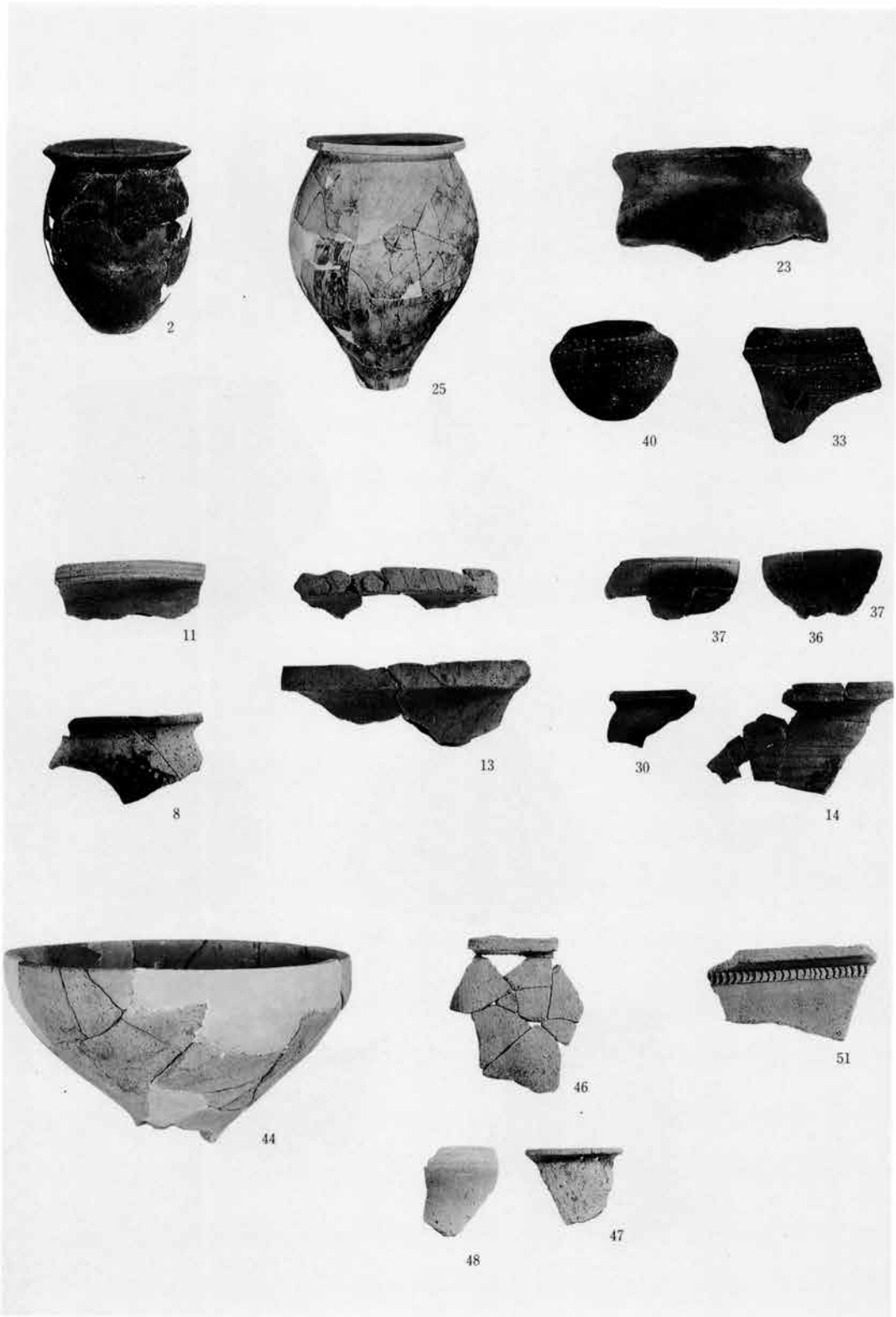
西トレンチ環濠付近（西から）

SX－901木製品出土状況

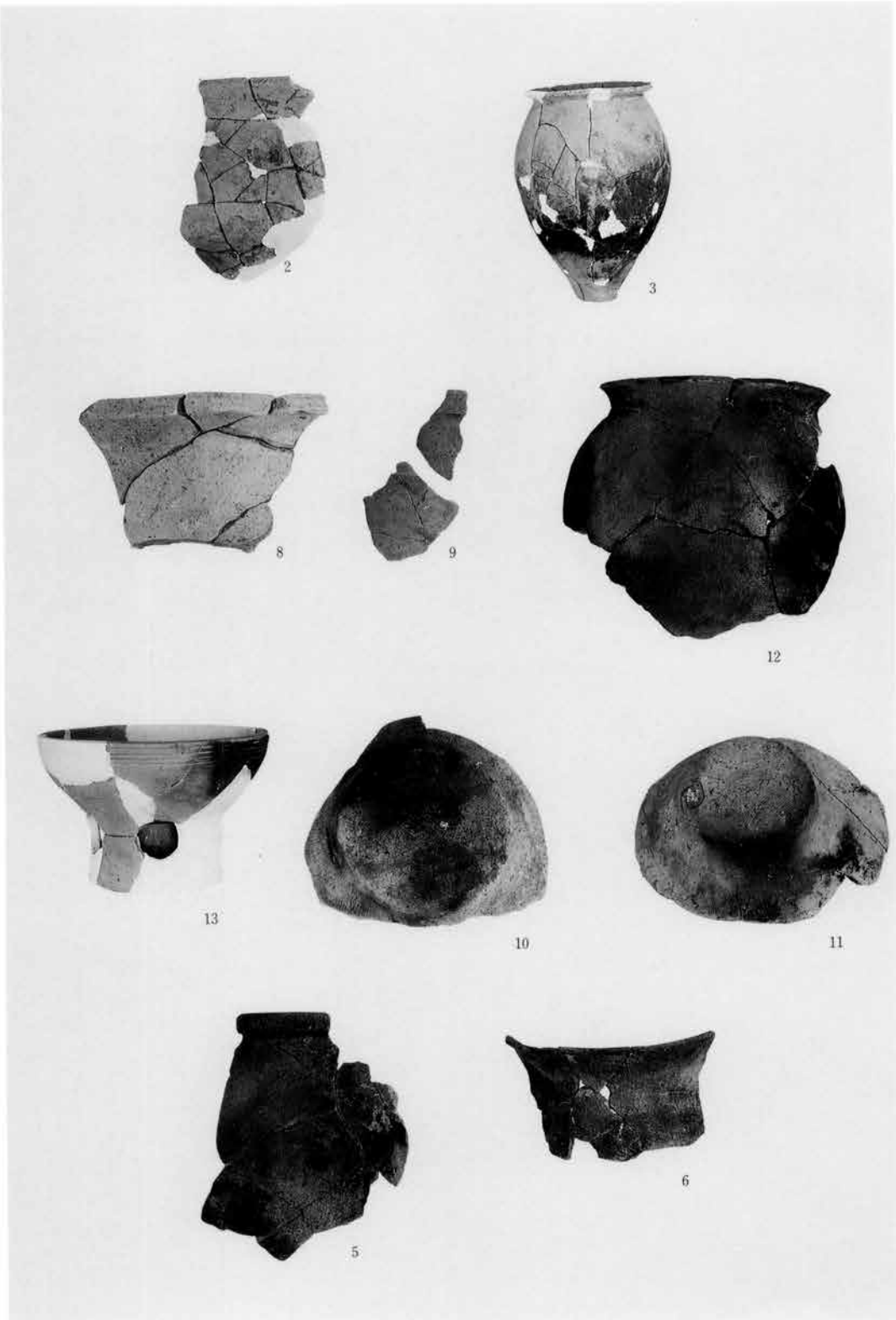
西トレンチ発掘作業風景（北から）



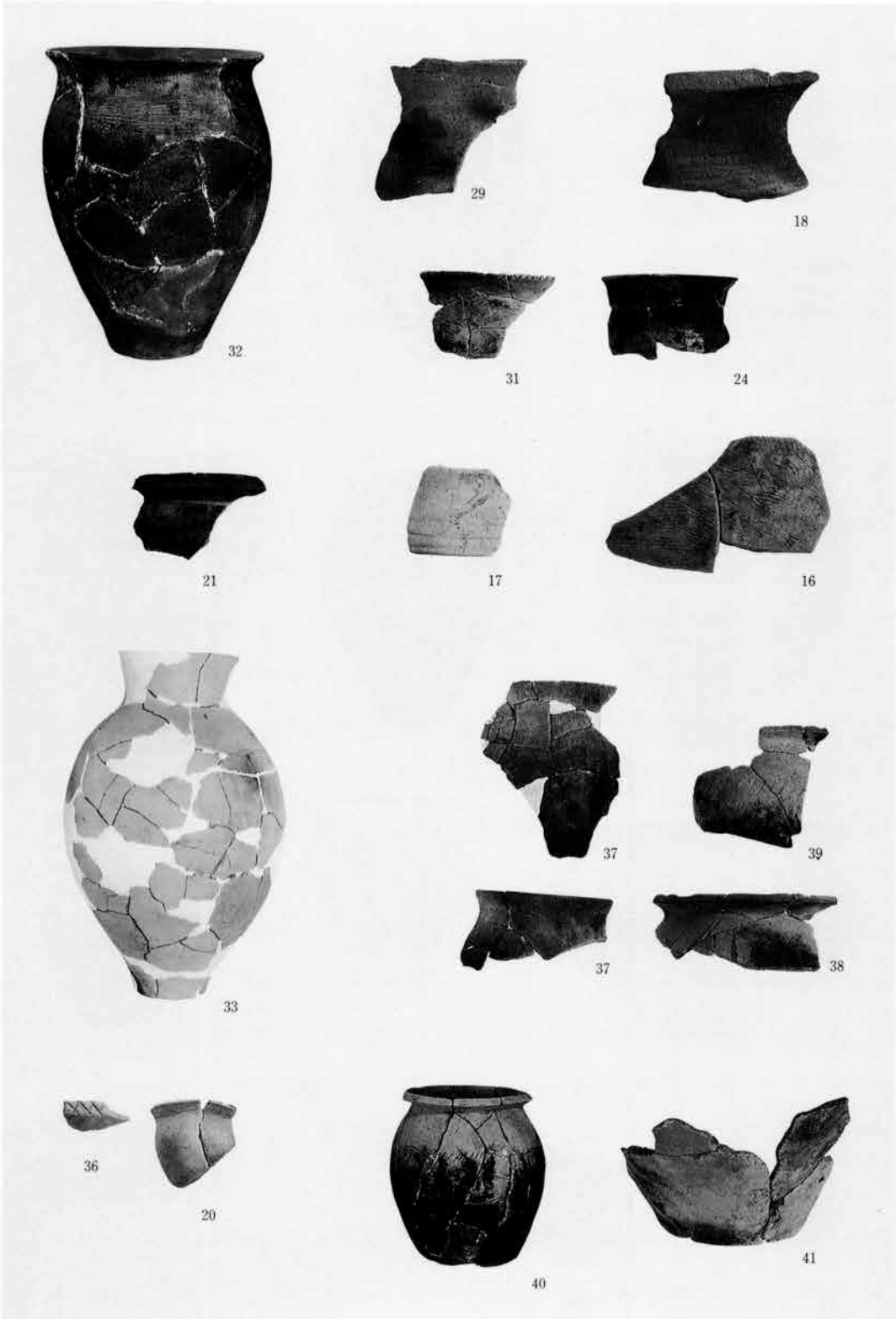
西トレンチ完掘状況（南から）



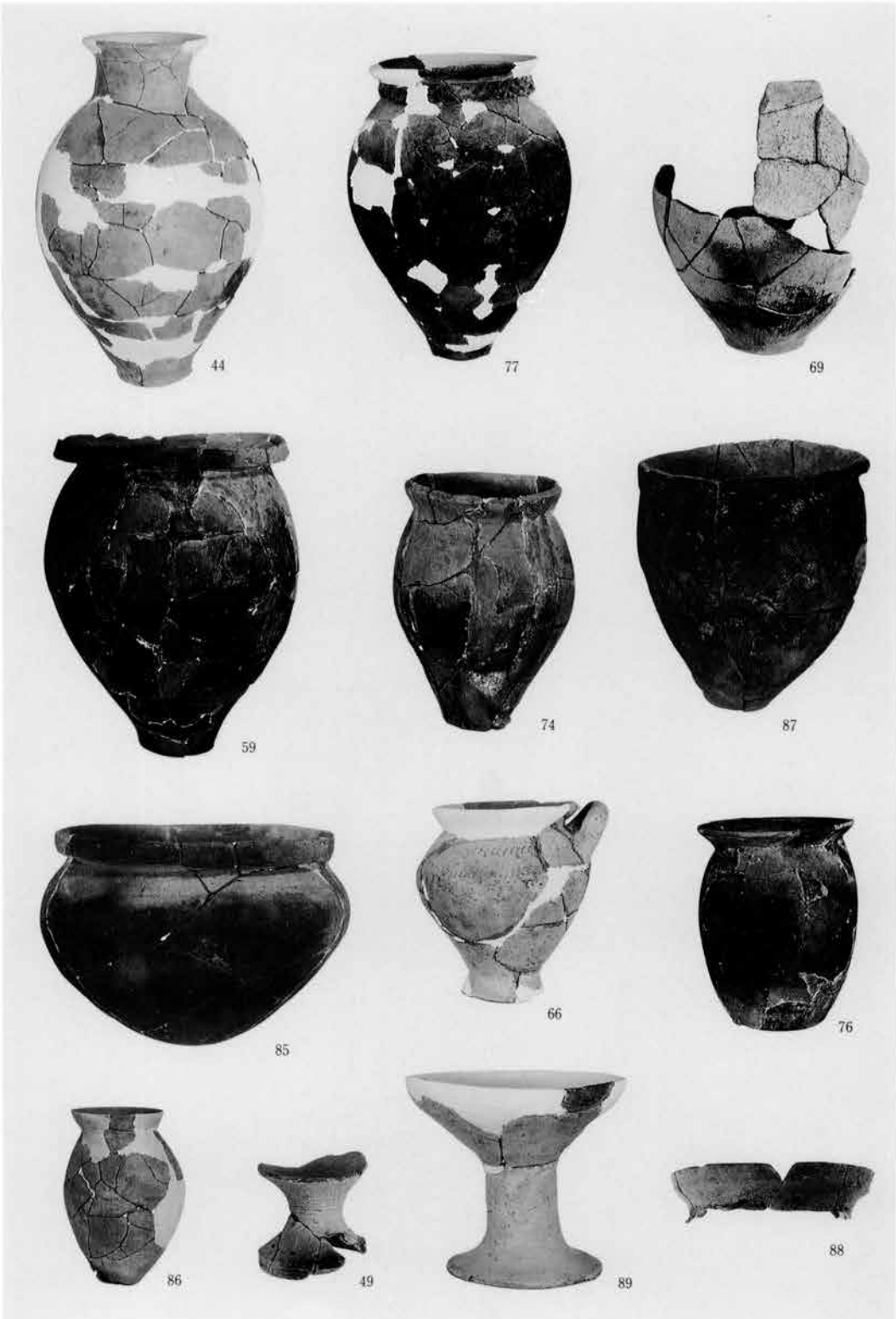
出土土器 1



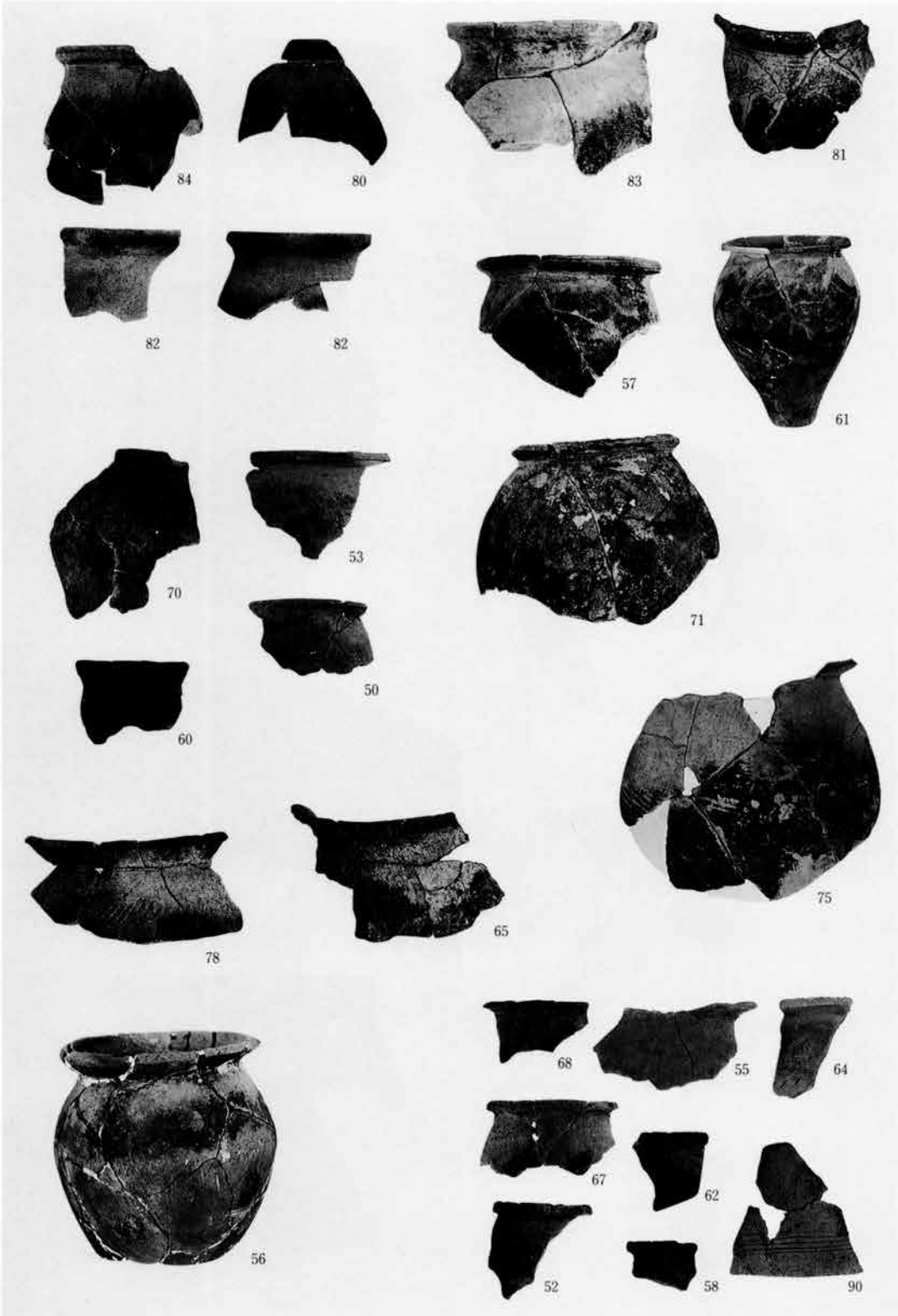
出土土器 2 （土坑）



出土土器 3 （土坑）

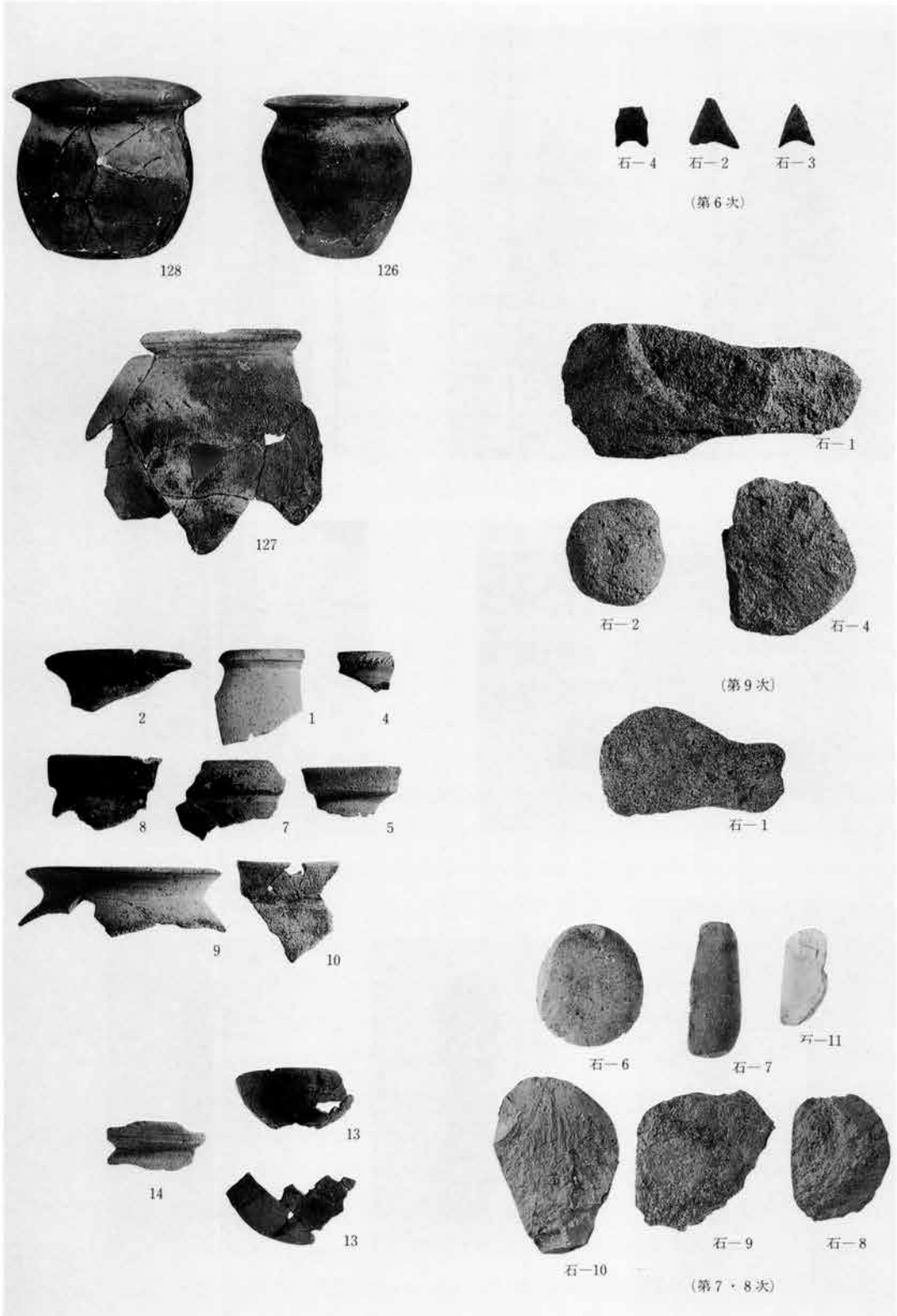


出土土器 4 （SD－701）

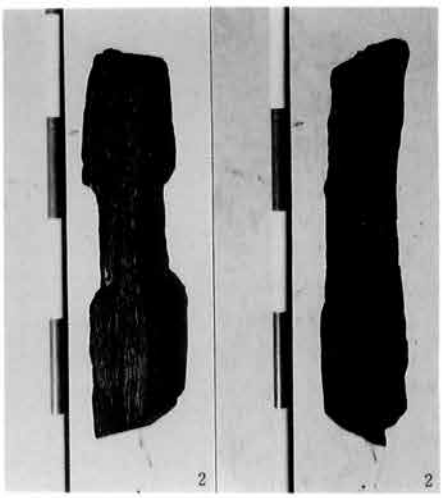

84
80
83
81
82
82
57
61
70
53
71
50
60
75
78
65
68
55
64
67
62
56
52
58
90

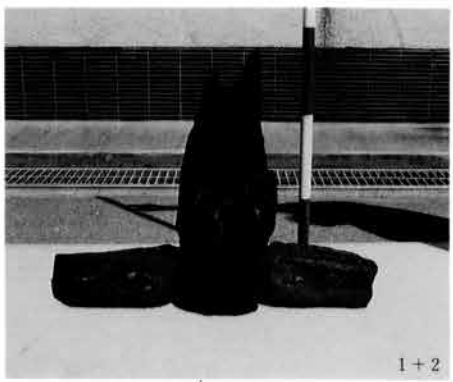
出土土器 5 （SD - 701）

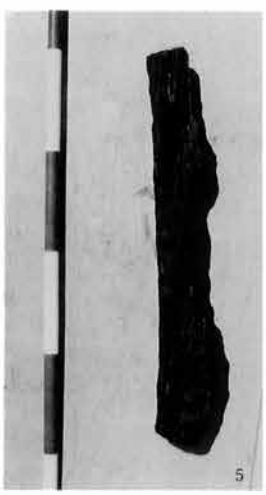
出土土器 6 （溝）



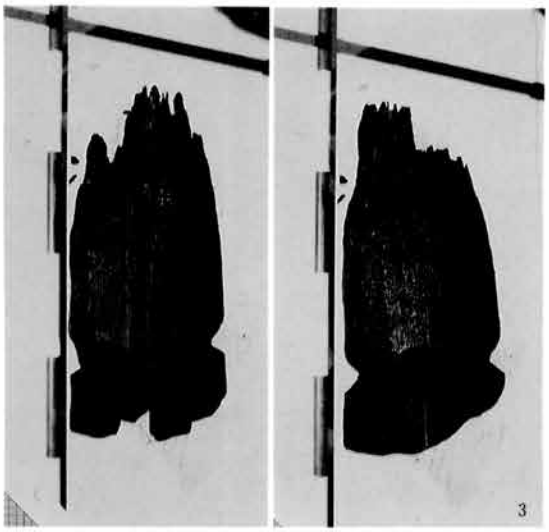
土器：第8・9次　石器：第6～9次

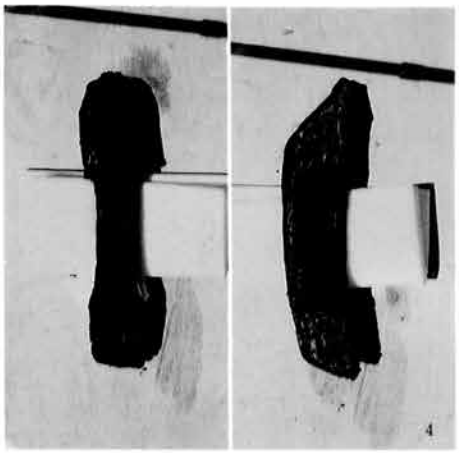


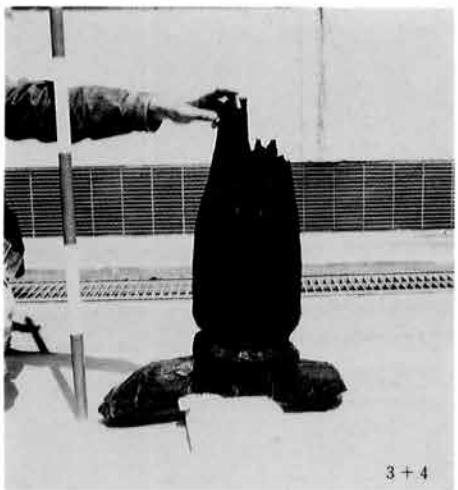




根がらみ木柱根（1）







根がらみ木柱根（2）

注：図版の遺物に付した番号は、挿図版の番号と同じ

金沢市戸水B遺跡

金沢西部地区土地区画整理事業にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書

発　行　日　　平成6年3月25日

編集・発行　　石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉4丁目133番地

〒921　電話（0762）43－7692

印　　刷　　（株）橋本確文堂

石川県金沢市大手町2－35